

きみにとどくまで

4

Adagio

笹竹颯夜

朝でも夜中でも電話する一一。

約束どおり、響からの電話は木曜日の朝と日曜日の夜中に決まってある。

木曜日は響がライブハウスで演奏をする前に（ボストンは水曜日）、日曜日は響が目覚めた後に。昼と夜が逆転し、互いの生活の中で繋がる時間を合わせるのが大変だが、早朝でも夜中でも、響の声が聞けるだけでヒカルは幸せだった。

あと5ヶ月。

12月になれば響は帰って来る。

12月8日一一。

自分の部屋と幼稚園の教室、職員室の卓上のカレンダーに赤い丸印をつけて、その日を指おり数えて待つのが嬉しい。先が見える約束だから。

「あのお方がヒカルの王子さまだったとはね...」

7月の珈琲ショップ『Deja-vu』。

海はアイス珈琲のグラスにある氷をストローでカラカラと鳴らし、そして、

「知ってればもっと気の利いた挨拶もできたのになぁ...」

芸術祭会場のバックヤードで出会った「ヒカルの王子さま」に、自分が声をかけた簡単なひとことを悔やんだ。

「だって、まさか海ちゃんが出る芸術祭にヒビク先輩も出るなんて思わなかったもん。知っていたらあたしだって海ちゃんに言ってたよ」

同じようにクルクルとストローを回して、ヒカルは口を尖らせた。

「オレは知ってたよ。だってあの芸術祭はジャック・ベリーも運営側のひとりだぜ？」

「そんなこと...、」

音楽や芸術関係に疎いヒカルが知るはずがない。

「ジャック・ベリーが事故に遭って、代わりに息子がステージに立つってのはこっちを発つ前から分かってたことなんだぜ？」

世界中で騒がれているジャックの隠し子が日本人、というスキャンダルはもちろん日本でも大きな話題になっていた。だが、その渦中の人物がヒカルのヒビク先輩だとはいくら海でも考えつくはずもない。

「ヒビク先輩がジャックの息子だって知ってればすぐに繋がったのになぁ...。そーゆーこと、ヒカルはちっともオレに言わなかったからさ」

海は本当に悔しそうだ。

「知ってたらオレ、絶対にヒカルをニューヨークに連れて行った。聴かせてやりたかったよ、あのピアノ。ほんと素晴らしかったぜ...」

うう...

と、ヒカルは唸った。

「聴きたかった...」

響が奏でる『Shine』をヒカルはまだ聴いたことがない。響のピアノを聴いたのはたった一度だけ、音楽室でジャックの『スイート・ラブ』を奏でているのを、ドアを隔てた廊下で聴いただけ。

ひざを抱え丸くなって――。

ヒカルは当時の気持ちを思い出し少し胸が苦しくなった。

「前にヒカルが言った曲ってあの曲のことだろ？」

「うん」

「で、ヒカルは弾けるようになったの？」

海はグラスに残った氷を器用にストローですくい出し、口の中に放り込みながら訊いた。ヒカルの音痴はこの数年の付き合いで十分過ぎるほど分かっている。芸術祭で聴いたあの曲をヒカルがマスターしているとは思えない。だが、

「一応ね！」

得意気に答えるヒカルに驚いて、口に入れた氷を丸ごと飲み込んでしまった。

「今、氷がここを通過して行ったよ...。胃が冷たい...」

氷が通った自分の胸をなぞり、海は軽く咳き込んだ。

「海ちゃん...、その反応、あんまりなんだけど...」

「悪い！太陽と月...、ほんと奇跡だな...！ヒカルが言っていた通りじゃないか」

海は笑った。

「うん。まだ、会えてはいないけどね...」

「ここまで来たら同じようなもんだろ！」

太陽のヒカルと月の王子さまは、昼と夜が逆転してたって週に二回の電話のやりとりで互いの心を繋ぎあわせているのだから。

「海ちゃんは会ったんだね、ヒビク先輩に...」

「会ったぜ～。金色に輝く髪が印象的な男前だったなあ！」

うう...

と、ヒカルはまた唸った。

「私も早く会いたい...」

「ヒビク先輩が帰って来たらさ、オレにもちゃーんと紹介してくれよな！」

「もちろんだよ！この間ヒビク先輩、海ちゃんのこと言ってたんだよ？」

「へえ～、なんて？」

海は興味深そうに聞き返した。

—太陽の教師を演じた役者が凄くよかったんだ。舞台の上で輝いてた。

—太陽の...教師？

—『The sun in the rain』って芝居の主人公。

—...それって...

—ん？

—私の友達。

—なんだって?!

—『夢飛行』って劇団でしょ？鮫島センセイの台本。

—あ～、確かそんな名前の劇団長だった...。ヒカルはその劇団長のことよく知ってるのか...

？

—うん。まあね。

—そっか...。だからあの芝居は...

響はそう言って笑っていた。どうしてそんなに笑うのかを聞いても、

『なんでもないさ』

と言うだけで、教えてくれなかったけれど。

「なるほどね...。何となくわかる気がするなあ」

海は、兄、鮫島にはじめて認めてもらえたあの日の自分を振り返った。あの時の演技は...

「何ひとりでニヤニヤしてるのよ、海ちゃん！」

「いや、ヒカルってやっぱ凄いてって思ってさ」

「え？あたしが？なんで？」

なんでもない、と海は笑い、

「あ、ヒカルにこれをやるよ」

バックの中に突っ込んであった一冊の雑誌をテーブルの上に置いた。

「なに？この雑誌」

「ほら、やっぱり知らないんだな...。これは、芸術の総合情報誌。芸術祭のことも載ってるぜ。

こーゆーの見て少しは芸術関係にも明るくなった方がいいんじゃない？」

海は芸術祭の記事が掲載されているページを開いてヒカルに見せた。三日間のフェスティバルのことが紹介されていて、そこには響のことも写真入りで小さく載っていた。

「ヒビク先輩だ...」

グランドピアノを弾く響の姿。

ヒカルは初めて見る、響がピアノを弾く姿。

「その雑誌は毎月出てるから買って読めよ。ヒビク先輩、きっとこれからも載ると思うぜ...」

「え？どうして？」

「ほら、ここ読んでみなって！」

海は記事の一部を指差した。

カザマ・キョウ（22才）

ボストン音楽アカデミーに在籍し、ライブハウスで『水曜日の雨人』として人気を博す。ジャック・ベリーを父に持つ期待の新星。

「期待の新星...か。すごいなあ、ヒビク先輩」

ヒカルは呟いた。

「すごいなあって、呑気だなあ、ヒカルは...。こう書かれるってことは、これからも注目されるってことだよ。全米デビューとかもありえるかもしれないぜ？」

「ええ！？そうなの？！」

ヒカルは驚いて飛び上がった。

そんなこと、響は電話でひとつも言ったことがない。

「...だから、ヒカルものんびりしないでちゃんとチェックしとけよ、って言ってんの！」

「...うん、そうする」

今夜は響から電話がある日。

あとで、色々聞いてみようと思いながら、ヒカルは雑誌を閉じて自分のバックに入れた。

◇

その夜――。

「え――っ？！」

コードレス電話を耳にあて、洗いたての髪をバスタオルで拭いながら、大声で叫んだのはヒカルだ。

「ええ――――？！」

ヒカルはもう一度、叫んだ。そして、

「ええええ――――っ？！」

と、もう一度。

『そ、そんなに驚かないでよ...』

電話の向こうで消え入るような声を出したのはあかねだ。

『恥かしいじゃない...』

「だ、だってだってだって！！本当なの？あかねちゃん！」

『...本当だよ。冗談でこんなこと言うわけないでしょ』

「そりゃそうだけど...」

でも、でも、でも...！

あかねが結婚だなんて！

しかも、半年後には赤ちゃんが生まれるだなんて信じられないっっ！

と、ヒカルは子機を握ったまま放心している。

今月末、友人たちを呼んでささやかなウエディングパーティーをやるから出席して欲しい、というあかねからの電話だった。

『私は今、ちょっとつわりもキツイんだけど、お腹が目立ってきたらドレスも着られないし...、優作さんにドレス姿見てもらいたいし...』

優作さん？！

ついこの間まで田村先輩って言ってたのに！

それに、つわり？！

つわりって、何よー？！

と、ヒカルは変なところでツッコミたくなる。

「あの、あかねちゃん、いったいつの間にそんなことしちゃったの...？」

ヒカルが思わず口に出すと、

『もう、やだ！ヒカルちゃんったらっ！』

電話の向こうであかねは叫んだ。

真っ赤になってるあかねの顔が見えるようだ。そんなあかねの顔を想像してヒカルはふき出した。

「おめでと！あかねちゃん！もちろん出席するよ！どんなことがあったって行く！」

『ありがとう！優作さんがみんなと『ライジングサン』をやりたいて、今、柏木先輩たちにも声をかけてるの』

「ライジングサンかあ...。なつかしいね」

ヒカルは響の歌声を思い出す。

『でも、風間先輩は来られないみたい...』

昨日、田村が響に連絡をしたが、帰国の予定がつけられないから無理だという返事だったそう。

「ヒビク先輩、なんか大変みたい...」

と、ヒカル。

――全米デビューとかもありえるかもしれないぜ！

海の言葉が蘇る。

今、響の周囲はヒカルには想像できないほど慌しく変わろうとしているのかもしれない。

『風間先輩、いろいろあったけどよかったね...』

と、あかね。

「うん...」

答えながら、ヒカルの心に微かな不安がよぎった。それは昔、ジャックの楽屋を訪ねた後に感じた不安に似ている。

——半年したら、俺、必ずヒカルのところに帰るから！

そう、約束してくれた響だけど...。

でも、

響がまた遠い人になってしまいそうな気がする——。

もしもデビューが実現したら、きっとしばらくアメリカを離れられないのではないか。期待の新星って呼ばれるということは、そういうことなのではないか。

——そうになった時は喜ぶべきなんだよね...。

ヒビク先輩の音楽を、堂々と世界中の人に響かせる時が来た、ということなんだから...。

でも...、

何故、響は言ってくれないのだろうか。

期待の新星と呼ばれている今の響の周りのことを、何でも知りたいのに、海からもらった雑誌を見て初めて知るなんて...、

——何だか寂しいよ...。夢のこと、今のこと、未来のこと、先輩が何を考えて何がしたいのか、もっともっと知りたい。今まで知らなかった三年間のことだって全部知りたいよ...。

『ヒカルちゃん？何か考えごとしてる？』

「え？あ、うん。あかねちゃんいいなあ...と思って」

今、感じる。

あかねは田村と結ばれる運命だったということ。

田村と一緒にいる時のあかねは、高校時代から自然な微笑みが溢れていた。田村がいつもあかねを優しく見守っていたから。そして、あかねにもそれが分かっていたから。今、あかねが心から田村を愛し、信頼し、幸せでいるということが知れる。

「優作さん、かあ...」

ヒカルはつぶやいた。

『え？何？』

「ねね、あかねちゃん、私がヒビク先輩のこと、響さん、なんて呼んだらおかしい？」

『うーん...』

あかねは苦しそうに唸った。

『変じゃないけど...、やっぱりヒカルちゃんは風間先輩のことを`ヒビク先輩、って呼ぶのが一番合ってる。ヒカルちゃんにしか呼べない名前だと思う、それ』

「私しか、呼べない名か...」

『うん。私にはヒビク先輩だなんて呼べないし』

「そっか。そうだよな？」

自分しか呼べない名。

他の誰もが入れない、自分と響だけの見えないけれど、ひとつの`カタチ、。

あかねとの電話が終わってすぐにヒカルはいつものように窓を開け、隣の窓にビービー弾を投げた。

すぐに窓が開き、颯土が顔を出す。

真夏の熱帯夜――。

部屋の冷気が瞬く間に失われていき、あっと言う間に汗ばむが、この窓辺の会話はふたりの日課のようなものであり、暑かろうが寒かろうがほとんど毎日のようにおこなわれているのだ。

「そっか...。あかね、結婚するのか...」

缶ビールを手にした颯土が呟いた。颯土もヒカルと同様、風呂上がりの髪をタオルでゴシゴシと拭いている。

「颯土くん、ショック？」

「そんなことないさ。幸せになって欲しいと思うよ...」

嘘じゃない。

今、あかねの幸せを心から祈れる。

「じゃ、颯土くんも行こうよ。あかねちゃんと田村先輩のウェディングパーティー」

「俺？だって、俺は呼ばれてないし...」

颯土は頭を拭う手を一瞬止めた。

「田村先輩の知ってるライブハウスを貸し切りにして、友人だけ呼んだパーティーらしいよ？大久保くんや伊藤くんも誘ってみんなで行こう！やっぱりみんなで祝ってあげたいよ。あかねちゃんと田村先輩の幸せを！」

「...そうだな...。祝ってやりたいな...」

颯土は呟く。

「うん！だから、行こうね！」

ヒカルは笑った。

窓を閉めた部屋のベッドに転がり、颯土は天井を見つめて思った。

神戸での別れから二年が経ち、今、あかねと再会することにためらいは何もない。

高校時代は恋人としてつきあい、その時は愛して抱きしめたあかねが結婚して母になる――。その結婚パーティーに出席しようと思える自分に少しだけ驚いている。会えばきっと、笑って、おめでとう、と言えるだろう。

こんなふうに、人の心は移ろい変わっていくものなのか――。

いつか...

そう遠くない未来に、隣りのおてんば娘もきっとどこか遠くに行ってしまうだろう。その時、自分はどんなことを思い考えるのだろうか。そして、その時に感じるだろう痛みを、いつかは忘れることができるのだろうか...

――矛盾してるよな、俺...

あの笑顔を守りたいと思いながら、心のどこかで手の届かないところに飛びたってしまうことを恐れている。ヒカルのあの笑顔は、響がいるからこそ、のものなのに...

颯土は自分の気持ちがわからなくなって考えるのをやめた。

もう、昔の自分とは違う。

あの、絶望感を恐れていた頃の自分とは違う。

今はまだ、ヒカルはここにいる。

ここで笑っている。

――だから、いいんだ、それで...

部屋の明かりを消し、颯土はベッドに転がったまま隣の窓を見る。

明りはまだ煌々としていた。今日は風間先輩から電話がある日か...、と颯土は何気なく時計を見た。針は午前0時を指そうとしていた。その時、電話が鳴る微かな音が窓の向こうから聞こえ、それは一回鳴ってすぐさま止んだ。

「ヒビクセンパイ...か」

こんな思い、颯土は昔からずっと知っていた。

ヒカルが響と触れ合っている時に感じた心のうずき。ふたりの関係を誰よりも早く知り認めていながら、心の深層の部分で動めていたざわめき。今、再びあの頃の思いが蘇る。

それは、かなり痛い。あの頃は意識しないようにしていた痛みが今は胸を直撃する。

ヒカルの想いは響に届き、ふたりは再び高校時代と同じように、いや、それ以上に深く結ばれた。もうふたりの心が離れることはないだろう。3年もの長い会えない月日を隔てながらも、少しも薄れることがなかったヒカルと響の絆なのだから。そして、自分はこのことをずっと望んできたはずだ。それは、高校時代からずっと――。

颯土は手を伸ばして机の上に投げてある星の形のキーホルダーを手を取った。それをベッドに転がったまま目の前でゆらゆらと揺らしてみると、カーテンの隙間を通り抜けて差し込むほんの微かな月明りの中でそれは鈍い光を放った。

去年の誕生日にヒカルから貰ったプレゼント。

アリガトウと刻まれた文字。

――高校の時から、私達、親友になれるような気がしてた。

去年ヒカルが言った言葉が、あの時に見上げていた星空と共に颯土の脳裏に蘇った。

キーホルダーには家の鍵と車のキーをつけてある。毎日必ず持ち歩く物だ。

そして、蓋を開けたロケットの中に密かに忍ばせている写真は青空のひこうき雲に届いているヒカルの両手。

トドケ、ヒカルノオモイ。

カザマセンパイノモトヘー。

そう願ってシャッターを切った自分を忘れないように、輝く光の影でいようと決めた自分を忘れないために。

――なのに、何で今更こんな想い…。

そりゃないだろ、今更…。

考えないようにしようと思いつつも、自然に思いがそこにいつてしまう。

「親友…か」

颯土は呟いた。

日曜日の昨日は7月7日。颯土の誕生日だった。

「今年は何もなかったなあ……」

ま、今年のヒカルは俺の誕生日どころじゃなかっただろうけどな、と苦笑し、颯土は目を閉じた。

目の前が闇になった時、ゆるやかに抑えつけられる感覚が全身に走った。

週に二回の太陽と月の電話線を使った逢瀬――。

水曜日の夕方はライブハウスでピアノを弾く前に、店の外の電話ボックスからヒカルに電話をする響だった。

その時間、東京は朝の6時半。

ヒカルは出勤前だし、響もライブを控えているので、互いをねぎらいあいさつをする程度の短い会話しかできない。

日曜の朝は目覚めて顔を洗って珈琲を淹れてから受話器を取る、というのが響の毎週のスタイルだ。東京は夜中だが水曜日よりはゆっくり話ができる。

今日もいつもと変わらず、珈琲の入ったマグカップを片手に受話器を耳にあてていた。ワンコールですぐにヒカルが出た。

「あ、ヒカル――」

と、朝のあいさつ（東京は夜中だけれど）をする間もなく、ヒカルの第一声は、『先輩、私に黙ってることありません？』

ややムツとした口調だった。

「黙ってること...？」

響は自分がヒカルに言っていないことがあったかどうか、心で探りながら返した。

「別にないと思うけどな？」

『本当ですかあ？』

ヒカルが疑わしい、といった口調で言うので響はさらに考えた。

この間、通りかかった書店の店先で、

――ピアノ界の新プリンス誕生か！――

という見出しのついた週刊誌を見つけた。B T Mが出版している雑誌だ。

響は思わず皮肉な笑いを浮かべた。

――何がピアノ界の新プリンス誕生だ。

ついこの間までは、ジャック・ベリーの隠し子はアカデミーの落第生でやんちゃでナンパなひとでなして書いてたくせに。

響は店先にあるB T Mの週刊誌を全て裏返しに並べて、なおかつその上に別の雑誌を重ねた。隣にいた小さな子どもがその奇行を呆気にとられたような顔で見つめていた。

...これはヒカルには話してなかったなあ...、と、響が思い当たることはそのことぐらいしかなかった。

響の話を聞いてヒカルは、

『ぶはっ！』

と、吹きだした。

『先輩、それナイスですよ！BTMって、あの憎たらしい記者がいるところでしょ？』

「ああ、そうさ。ヒカルがあの場合にいたらぶっとばすところだった記者の！」

響もアハハと笑う。

『先輩、それです...』

今まで笑っていたヒカルが急に声のトーンを落として言う。

「それ？」

『ピアノ界の新プリンス誕生...。先輩、もしかして今そういうことで凄く忙しいんじゃないですか...？』

——そうか...。そのことか...。

芸術祭を境にジャックや響を悪く書くマスコミはなくなり、あのBTMでさえも今は響の榮譽をたたえた記事を垂れ流している。

ジャック・ベリーの息子である前にピアニスト、カザマ・キョウとして少しずつ世間から注目を浴びるようになったのも事実だ。芸術祭は世界各国のアーティストが集まっていたから情報も各国に送られる。ヒカルもきっとどこかでそんな記事を見たのだろう、と響は察した。

『キミにその気があるなら、私がプロデュースをやってもいい』

.....と、ジャックに言われたのは芸術祭が終わって1ヶ月がたった数日前のこと。

退院後のジャックは、自らの音楽活動の一時休止宣言を出した。しばらくは若いピアニストのプロデュースや国際芸術交流に力を注ぐつもりでいるのだ。芸術祭で自分の名代としてステージに立ち見事に成功をおさめたピアニスト、カザマ・キョウのピアノ界デビューを、自分がバックアップをしてもいい、とジャックは言う。

『俺の、`その気、で決めていいことなのか？』

今、響の周囲は確かに慌しい空気が漂っている。ジャックが所属している事務所は息子キョウを売り出す準備をはじめているし、アルバムに収録する曲目のリストまでがいつの間にか作られていた。レーベルとの契約こそまだしていないが、響がその気になればきっと話は進んでいくだろう。

そんな慌しさを感じながらも現在のところはとりあえず学生をやりながらいつものライブハウスで水曜日と金曜日に『雨人』のピアノを弾いている響だ。

『そうだよ、キョウ。デビューしたからと言ってそれが即成功に結びつくわけじゃないことぐらいキミにもわかっているだろう。キミがここで勝負したいという気持ちがあるのなら私は応援する。だが、予定通り日本に帰るといふのならそれも止めない。ここは自由の国だからね』

勝負、

という言葉が、一瞬響の心を動かした。

ピアニストとして自分がアメリカでどこまでやれるのか、風間響としてのピアノを試してみたい気持ちがないわけじゃない。

けれど....、

『ジャック、俺は日本に帰る...。待っててくれる人がいるから』

響がそう答えるとジャックは優しく微笑んだ。

「ヒカル」

響は手に持っていたマグカップをテーブルに置いて言った。

『はい』

「あと5ヶ月。12月には必ず帰る。ヒカルのところに帰る。だから俺を信じて待ってて欲しい」

そう。

もう、迷ったりはしない。

ろうそくの灯のような儂い粉雪の日の約束を、信じて3年間待ち続けてくれていたヒカルの元へ――。

『もちろん待ってる！でも先輩...』

「でも、なんて言わなくていいよ」

響はヒカルに次の言葉を言わせない。ヒカルが何を言うかわかっているから...。

アカデミーのカリキュラムが終了したら...、と、響は自分の心にもう一度刻んだ。

『...ヒビク先輩』

「ん？」

『...何でも話してくださいね。私、大丈夫だから。先輩が話してくれたらどんなことでも納得するから、だから何でも。先輩のやりたいこととか夢とか、全部』

まったく、ヒカルは....、

と、響は苦笑した。

高校時代と全然変わってない。いつも自分に無理をする。ものわかりが良すぎる。もっと、わ

がママを言ってくれていいんだ。

――俺にだけにはもっと…。

「わかったよ。何でも話すから、だから心配すんな！」

『先輩…』

「俺は絶対にヒカルんところに帰るんだからな！お前が帰ってこなくていいって言ったって帰るからな！」

――今すぐにでも帰りたいさ。そして、思いっきり抱きしめたい。

もう、二度と離せなくなるぐらいに。

俺の宝の箱に閉じ込めて鍵をかけてしまいたいんだ。

もう、誰もお前に触ることができないように、な…。

響はピアノの上の、`魔よけ、のヒカルを見つめた。

『なんか…』

と、ヒカルがつぶやいた。

「ん？」

『なんか今の先輩、昔の先輩みたいだった。高校の時の先輩の言い方だった』

「そうか？」

『私、ちゃんと待ってますよ！だからヒビク先輩、早く…帰って来てね！』

早く帰って来てね――。

ヒカルの、少し控えめ言った言葉を響は自分の心にしみ込ませた。

『あかねちゃんと田村先輩が結婚するんですよ！さっき電話もらってびっくりしちゃった！』

ヒカルが話題を変えた。

「ああ。田村から聞いた。驚いたよ…」

`魔よけ、が同封されていたヒカルからの手紙ではじめて田村とあかねがつきあっていると知った響だったから、その手紙からわずか2ヵ月後に結婚と、そして子どもが生まれることを同時に聞いた時には心底驚いた。

『マジっ?!』

と、叫んだ響に田村は照れたように、

『はい。あかねと子どもを同時にゲットさせていただきます…』

と、答えた。

『た、田村、お、お前、いつの間にかねにそんなこと...』

思わず口に出して呟くと、田村は一瞬、う...、と、つまったあとに、
『自然の成り行きでございます...』
と、咳払いをしていた。

急なことだから来れないよな？という田村には『そうだな...』と答えるしかなかった。ウェディングパーティーは今月末28日の日曜日。水曜と金曜のライブは契約期間が切れるまでは休むわけにはいかず、日本に帰る時間がない。

『みんなで `ライジングサン、をやるみたいです』

「ああ、聞いた。懐かしいな...」

ヒカルが派手にマラカスを振って踊る姿を思い出し響は笑った。

『田村先輩にとって `ライジングサン、は思い出深い一曲なんでしょうね』

「そうかもな...」

高校時代からずっと、静かに誰にも言わずにあかねを見守っていた田村。

『ライジングサン』は演劇部とのコラボレーションで出来た曲。あの『みにくいあひるの子』を制作していたあの頃に、きっと田村の中に何かが生まれ、そんな田村の原点が『ライジングサン』なのかもしれない。

`三人、の新しい未来への出発の日にその原点に返ってから新たな一步を踏み出したい、と考えた田村の気持ちが響には手に取るように分かる...。

「田村も父親になるんだな...」

と、響が呟くと、

『それよりもあかねちゃんがお母さんになる方が不思議』

と、ヒカルは言った。

確かにそうだ、と響は思った。

制服を着ているあどけないあかねしかイメージできない。

「俺の知らない時間がずいぶんと流れたんだな...」

響はぽつりと呟いた。

知らない時間――。

自分がこっちで夢中でピアノを弾いている間に、ヒカルはどんな時間を過ごしていたのか――。

高校時代、颯土とつきあっていたはずのあかねが田村と結ばれる。そこに至るまでは風も波もあっただろうが、それにヒカルはどんな形で関わってきたのだろうか。

響は `魔よけ、を手に取った。

この写真は颯土が撮ったものだ。ヒカルの初出勤の朝に、あの墨田公園で。

このヒカルの笑顔が再びピアノに向かえるきっかけになり、退校を決意していたアカデミーに戻りライブハウスでピアノを弾き続ける今の自分がある。

温かく優しく眩しい、ヒカルの自然な笑顔――。

それを颯土は少しの曇りもなく、ありのままにヒカルから惹き出して、この一瞬にシャッターをきった。

響にはわかる。

ピアノを弾くのも写真を撮るのも、その瞬間の血はきっと同じ。弾き手の想いが聴衆に届くように撮り手の想いも伝わるもの…。

――また、水曜日に。

と、言って受話器を戻す。

テーブルにあった飲みかけの珈琲はすっかり冷めてしまった。

響は冷たい珈琲を飲み干しながら、手にある写真をいつまでも見つめていた。

◇

早く帰って来てね――。

電話を見つめながらヒカルはもう一度心の中で言った。

『心配すんな！』

と、言ってくれた響の声は、高校の時に毎日自分に声をかけてくれていた響きと同じだった。

響の傍にいられるだけで安心できたあの頃。学校という同じ建物の中で同じ空気を吸っているだけでときめいていたあの頃が、さっきの声の響きで痛く苦しくなるぐらいにヒカルの胸に蘇った。

――早く、一日も早く会いたい。触れたい。あの頃と同じヒビク先輩の、明るくて豪快な響きを肌で感じたい。

それから、聴きたい。先輩が弾く『Shine』。

アメリカの多くの聴衆たちを感動させたヒビク先輩のピアノ。

期待の新星とメディアに言わせるほどのピアノ。

――私に贈ってくれた曲…。

机の上には海から手渡された雑誌があった。ヒカルはそれを手に取りハサミで響の写真をまあるく切り取った。ほんの数センチの写真だがこれが今の響の姿。

芸術祭のステージにジャックの名代として上がり、重圧と嘲笑を一蹴したピアニスト、カザマ・キョウ。今、その名が世界に広がろうとしている。あのスキャンダルの報道から一転して、栄

光を背に受けて…。

なのに…。

——心配すんな！

響の声はまだ聞こえた。

「心配しないなんて無理だよ、先輩…」

ヒカルは写真に向かって呟いた。

——ヒカルのところに帰るからな！

「本当に…、それでいいの？」

さっきの電話で言えなかった言葉だ。

言ってしまったら、響の気持ちが変わってしまうのではないかと怖かった。

写真を見つめながらヒカルは想う。

——帰って来て欲しい。今すぐ、帰って来て欲しいよ…。

もう、これまでと同じ不安な想いを抱きながら待つのはつらい。あかねちゃんと田村先輩のように、毎日一緒にいたい。触れていたい。高校生の頃みたく、そばにいるのが当たり前だったあの頃と同じように…。

だから、

もう、無理をしないで生きよう。私が望むことを、望むままに…。私だって少しはわがままになってもいいよね？

ヒカルは誰に問いかけるわけでもなく自分の心に呟いた。

「あ…、『Shine』が弾けるようになったってこと、まだ先輩に言ってなかった…」

1年半かけてようやく弾けるようになった『Shine』。

12月に響が帰って来たら聴かせてあげよう。きっと、驚くだろうな、と、ヒカルは思い、笑みを浮かべたまま部屋の明かりを消した。

「あれ？颯土くんの部屋まだ明かりがついてる…？」

先に暗くなったはずの颯土の部屋が、再び明るくなっているのをヒカルは自分の部屋が闇になった時に気がついた。

時計の針は午前1時を回っている。

今、颯土は去年と同じように忙しい時期を迎えていて、朝早くから夜遅くまで会社にコキ使われている。今夜も颯土の部屋に明りがついたのは午後11時を過ぎてからだった。

「あっ！」

ヒカルは突然思い出した。

颯土の誕生日。おめでとうを言い忘れた。

「さっき、会ったのになあ。あかねちゃんから電話がくるまではちゃんと覚えていたのに...」

あまりにも驚いたあかねの結婚と妊娠の報告で、颯土に用意しておいた言葉が頭の中からすっ飛んでしまったのだ。

別にたいしたことじゃない。

おめでとう、とひとこと言おうとしていただけ。それを言えなかつただけ。なのに無性に悲しい。さっき颯土と話をしているだけに、その時に思い出せずにいた自分が悔しい。

窓辺の壁には去年の誕生日に颯土から贈られた薔薇の花束がドライフラワーになって下がっている。

「ごめんね、颯土くん...。明日必ず言うからね...」

ヒカルはベッドの中から隣の窓を見つめながら呟いた。明りはついているから今からビービー弾を投げてもいいのだが、ヒカルはもう目を開けていられない。

「おやすみなさい、ヒビク先輩...。おやすみ、颯土くん...」

`恋人、と `親友、におやすみを呟いてヒカルは眠りの中に落ちて行った。

◇

ゆるやかに押さえつけられる感覚、それは、昔あの絶望を恐れる時に感じていたものと同じだった。

もう二度と感じることはないだろうと思っていたそれを、今再び体感してしまったことに颯土は大きなショックを受け、跳び起きて明りをつけた。目の前が明るくなった時その感覚は遠のいていった。

「金縛りにでもあったみたいだ...」

あのまま、目を閉じたままにいたらきっと、自分は昔の心を閉ざしていた頃の己の中に引きずり込まれていたかもしれない。

——仲間、友達、それがどうしたっていうんだ？信じあって今は一緒にいても、ずっとそのままとは限らない。どんなに大切に思ってもずっと一緒にいられるわけじゃない。いつかは別れなくてはならない時が必ずやってくる。相手を想う気持ちが大きければ大きいほど、その時の絶望も大きい。そんな思いをするくらいなら最初から人を求めないほうがいい...。一人でいればいい...。——

そう思いながら生きていたあの頃。

それは心の中のどしゃぶりを隠すための精一杯のポーズだった、ということに純平と旅をした沖縄で知り、ただ絶望を恐れているだけという小さな自分を自覚した。

今、こんなにも自分は恐れている。

失う時の絶望。

あの頃は友や仲間がその大切なものだった。だが今はひとりの、自分にとっては恋人ではない、だが決して親友とも言えない大切な人。

ビービー弾が飛んでこなくなる日が、いつか必ずやってくる――。

ざわざわと心が騒ぐ。

風が立つ。

あの日から、

ヒカルの輝く涙を見せられた、あの朝から――。

――一番望んでいる通り、正直になれ。

そうヒカルに言葉を放った時、颯土は自分の本当の望みを隠した。昔のように乾いた風になった。そうやって心のどしゃぶりを隠すことは、もう体で知ってしまった自分の特技だ。

「参ったなあ...」

颯土は隣の窓を見た。

さっきまでついてきた明かりがいつの間にか消えていた。電話が終わってさっさと寝たんだな...、と、颯土は思わず笑う。

「あいつ、夜更かしが苦手だもんなあ...」

午前0時まで起きていられないのがヒカルの体質だ。ヒカルの部屋の明りは、日曜日以外は1時には消える。時計の針は既に午前1時を回っていた。

「明日、寝坊して遅刻するなよな...」

颯土はヘッドホンに耳を当ててから再び部屋の明かりを消した。

また、あの感覚に襲われずに眠りにつけるように。

7月17日水曜日。

月の王子は今日もライブハウスへー。

響がいつものようにヒカルに電話をかけると、ヒカルはどうやら寝坊をしたらしくひどく慌てていた。今日で幼稚園の一学期は終わり、明日から夏休みに入るらしい。昨夜は園児ひとりひとりのおたより帳にメッセージを書き置いて遅かったのだ、とヒカルは言いわけしていた。

「夏休みがあるなんて幼稚園の先生って仕事はいいなあ」

響が呑気に言うと、

『夏休みって言ってもね、やらなきゃならないことは山ほどあるんです！二学期になったらすぐに運動会があるからお遊戯を考えたり衣装を作ったり、玉入れの紅白の玉だって全部作るんですよーっ！』

と、ヒカルは元気に訴えた。電話の向こうで鼻を膨らませている顔が目に見え、昔のようからかいたくなる。

「お遊戯も衣装作りも得意だろ、ヒカルは。なにわ弁喋るロミオとジュリエットに葉っぱの衣装でも着せてやればいいんじゃないのか？ウケるぜ、きっと」

『もお！先輩！想像しちゃったじゃないですかあ！』

怒っているような笑っているようなヒカルの抗議に、響もアハハと声を上げて笑うと今度は、『颯士くんおはよう。今朝も早いね！』

ヒカルは意味の分からないことを言った。

「颯士くんおはよう？なんだ、それ？」

ヒカルは自分の部屋の窓を開けた、らしい。すると隣の窓も同時に開き、そこに颯士が立っていた、らしい。

『おはよう、ヒカル...』

寝ぼけたような颯士の声が微かに聞こえた。

響はヒカルの部屋には入ったことがないが、隣に住む颯士の部屋とは窓が向かい合い3メートルも開いていないことを家の外から確認したことがある。

かなり近かった。

あの距離で互いの部屋の窓越しに毎日こんな言葉を交わしているのか、と思うと少し妬ける。

『じゃ、先輩、ライブ頑張ってくださいね！また、日曜日に電話待ってます！』

「ああ」

『それじゃ、行ってきまーす！』

ヒカルの元気な声を最後にして電話は切れた。

通話が途切れた受話器を見つめながら、遙か海の向こうで今ごろバタバタと家の中を走り回っているヒカルが目に見えるようだった。いったいどんな先生をやっているんだか、一度見てみた

いと思う。

——そう言えば、幼稚園の先生ってのはピアノを弾くよな？国宝級音痴のあいつが、大丈夫なのか...？

響は今更のように心配になった。

ヒカルがピアノに向かっている姿など想像もできないし、歌なんか聴いた日には消化不良を起こしそうだ。

「園児たち、毎日無事なんだろうか...」

と、心配せずにはられない。

だがそんなこととは全く別の、心の隅に引っかかる心配事がもうひとつあるが、それはあえて言葉にはしたくない。言葉にすると、きっと5ヶ月の間ずっと気にし続けなくてはならない。それはあまりにも情けないし格好悪い。

響は受話器を置き、電話ボックスを出た。

夕方5時。

7時からのライブにはまだ時間があるが、この電話が習慣になってからの水曜日はいつもそう。早めに控え室に入り楽譜に音符を書く。テーブルに楽譜を広げ珈琲メーカーから落とした珈琲をすすりながら、響は楽譜の上に懐かしいメロディーを並べた。

『ライジングサン』だ。

5年前の夏、合宿所の談話室で今と同じように楽譜を書いた演劇の挿入曲を、今アレンジしなおした。田村に贈るためだ。

自分のウェディングパーティーで『ライジングサン』を演奏したいという田村だが、この曲は響にとっても自分の原点になった曲だ。本当はパーティーに出席して田村の前で弾きたい。だがそれは叶いそうもないから、楽譜だけを届け演奏はあかねに託そうと思っている。

最後の音符を書き終えてテーブルの上で指をはじめてみた。今夜のライブで弾いてみるつもりだ。楽譜を持って立ち上がったちょうどその時、マネージャーが呼びに来た。

「キョウ、そろそろ頼むよ」

「ああ、今行くところ」

「リクエストが届いてるぜ」

マネージャーはポケットからメモを取り出した。

「やっぱり『Shine』が多いなあ」

と、マネージャーは意味深な目で響を見る。それはどこか媚びるような目つきでもある。

「弾かない」

響は間髪を入れずクールに言った。

芸術祭で聴衆をうならせた曲が『Shine』だという評判はライブハウスの客の間にも広がって

いる。その『Shine』を、是非ライブのエントリーナンバーに加えてほしいという客のリクエストは日に日に数を増して行く。

だが響は芸術祭以来、客の前では絶対に弾かない。

『Shine』は芸術祭のあの一瞬だけ、心に抱いた太陽のためだけに奏でたのだ。

「出し惜しみしなくてもいいじゃないか。一回弾いてくれよ。そうすりゃ客も納得するんだから。頼むって」

マネージャーは懇願する。

「ダメ」

あの曲はヒカルに贈った曲。なのにまだヒカルの前では一度も弾いていない。

――だから、ヒカルがいない場所ではもう弾かない。

「その代わり今日は新曲を一曲披露するよ。できたてのほやほやを」

響は楽譜をひらひらと上に上げた。

「おっ、二人の新曲か！」

マネージャーは、『雨人』のせつない曲をイメージしたらしい。

「いや、これはジャズ...かな？」

「ジャズか！キョウもとうとうその領域に踏み込んだな！」

父ジャックはジャズ界の神様と言われているが、響のピアノはジャズではない。クラシックスタイルに近いが斬新でもあるメロディをしっとりと弾くのがカザマ・キョウだ。

「これには原曲があって、アレンジしたらたまたまジャズっぽくなってしまっただけだよ。まだ弾いてないし、どんな曲に仕上がっているか分からないんだけど」

「まったく...たいした男だよ、キョウは。出来たての曲をはじめて客の前で弾くなんてさ。客は実験台か？」

マネージャーの言葉に響は苦笑した。ヒカルに贈った曲は客の前では決して弾かず、田村に贈る曲は客の前で試しに弾こうとする自分が可笑しい。

――ま、恋人と親友の扱いの違いはそんなもんだろ。

そして――。

水曜日の雨人が初めて弾いたジャズは、水面下にある太陽がいったん顔を出すとぐんぐんスピードを増して空に昇っていくその様が、軽やかで心地いいテンポの中から目に浮かんでくるような明るい曲だった。

今までの雨人のピアノとは対照的。人々の心には雨ではなく陽が注がれた。

バラードを明るいジャズに変えたのは田村とあかねに輝く陽が昇るように、という響の祈りからだ。

親友に心からの祝福を。

客は大きな拍手を、響と『ライジングサン』に送った。

水曜日の雨人は新しい境地を拓いたのだ。

◇

7月24日水曜日――。

田村とあかねの結婚パーティーがいよいよ今週の28日に迫っていた。

ヒカルに電話をすると、昨日は懐かしいバンドのメンバーが集まって『ライジングサン』を皆で合わせた、と言っていた。響が送った楽譜も田村に届いたらしい。

『あかねちゃん、目が点になってましたよ。こんなリズムは難しくて弾けない！なんて言って』と、ヒカル。

ジャズのテンポとリズムと感覚は、誰でも彼でもそれに乗れるかと言ったら…、

「鈍いあかねには無理だったか…」

『でも田村先輩は、ヒビクのヤツめ、とか言って目をうるうるさせてました。すごく嬉しそうでしたよ！』

ヒカルに言われ、うるうるした田村を想像して響は笑った。

出来れば弾いてやりたい。だが、そうは思っても――。

『当日は本城高校元軽音楽部と演劇部が大集合です。小夜子先輩たちも来るみたい。それから元1Fのにぎやか組も！』

「1Fのにぎやか組って言うと、例のヒカルの仲間たちか？」

『そうですよ！大久保くん、伊藤くん、麻耶ちゃん、それから颯土くんも！』

「群竹も…？だって、あいつはあかねとは…」

つきあって別れた相手なのに、普通その結婚パーティーに出席できるか？と響は思った。

『颯土くん、先輩が知っている頃とずいぶん変わったんですよ…』

ヒカルのその言葉の放ち方に颯土に対する深い情を感じて、響は自分のどこかがうずいた。先週聞いた、「おはよう、ヒカル…」という寝ぼけた颯土の声を思い出す。

おはよう、ヒカル。

ヒカル――。

颯土くん――。

呼び方も自分が知る頃と変わっている。

「ヒカルちゃんさあ？」

あんまり颯土さんと仲良くしないでね、と言おうとして響はやめた。カッコ悪すぎる。

『なんですか？』

「...みんなに宜しく言っといてくれよ。む・ら・た・け・く・んにもな！」

響は「群竹くん」と強調した。だが、

「わかりました。颯土くんにも伝えておきますね！」

ヒカルにはちっとも強調した意味が伝わらなかったようだ。

――ま、仕方ないか。俺は3年半もヒカルを放っておいた前科者だし...

そうは思っても、やはりどこか面白くない響である。

その日のライブ終了後――。

「キョウ、また契約の更新を頼むよ」

バックヤードに戻った響にマネージャーが契約書を差し出した。

「もう？だって先月更新したばかりだけど？」

ライブハウスの契約は2ヶ月。去年の11月からここでピアノを弾いている響は先月4回目の契約更新をし、次の更新まではまだ1ヶ月残っている。

「そうなんだけどさあ、今後のことを考えると早めにしとかないとな。今回は2ヶ月じゃなくて半年。今まで通り水曜日と金曜日に加えてできれば土曜日も頼みたい。来月から頼むよ！」

今後の響の人気上昇を予想すると他のライブハウスからのスカウトが来る前に響を確保しておこうというマネージャーの考えなのだ。

「半年ってのは無理...」

響は言った。

「なんでえ?!まさかもう他に決まったところがある？」

マネージャーは叫び声に近い声を上げた。

「俺、アカデミーを修業したら12月には日本に帰るんで...」

「帰る?どーして!今帰ってどーすんの!カザマ・キョウのピアノが世間に認められてきつとこれからキョウが活躍出来る場はたくさん出てくるぜ!」

同じ台詞をついこの間ビリーにも言われた。カザマ・キョウを売り出そうという夢を持っていた事務所に日本に帰る意志を伝えた時だ。

確かにそうかもしれない。

もう少しここで頑張れば、勝負するチャンスがあるのかもしれない。だが...

――俺は約束したんだ。ヒカルのところに帰るって。

それに....

「来月から土曜日に弾くのはオッケー。でも11月までってことで」

「なんだよ、なんだよ～もったいないぜ、キョウ。帰るのはもう少し考えてみた方がいいぜ。チャンスには時があるんだ。同じように二度はやってこないぜ」

――時...か。

「あ、マネージャー...」

響は言いにくそうにしながらもどこか思い切ったように言った。

「あさってのライブ、休ませて欲しいなんて言ったら...」

「ダメダメ！」

響が最後まで言わないうちにマネージャーはピシヤリと斬った。

「...だよな」

月末の週末は一番客の入る時。

響が弾く日は客数が多いためチケット制になっている。そしてそのチケットはもう来月の分まで売られている。キャンセルなんてもってのほか、ということは分かりきっていながら言ってみただの。

「親友の結婚式なんだけど...」

「ダメダメ！」

マネージャーは取り合わないといったように首を振る。

「...だよな」

「キョウ、甘いぜ」

「わかってる。言ってみただけ」

田村には行けないことは伝えてある。だが、今どうしても日本に帰りたと思う響だった。

親友の門出を祝福したい、『ライジングサン』を昔の仲間たちと演奏したいという気持ちはもちろん初めからあるし、曲や楽譜を贈るよりも何よりも、どんなことがあってもどんなことをしても行くべきだと思う、親友田村の結婚パーティーだ。

そして、

ヒカルに会いたい...

5ヶ月後じゃなくて、今会いたいのだ。

それを、さっきの電話のあとに改めて強く思った。

――今、行かないでどうするよ...

これだって、時だろ...？

7月27日土曜日の朝ボストンを発てば、翌日、日本時間の日曜日の夕方に成田に着ける。午後7時からのパーティーにはなんとか間に合うだろう。水曜のライブに間に合うように戻ってく

るためには、日本を火曜の夜の便で発たなければならないが出来ないことじゃない。

—行くか、3年半ぶりの日本へ。

中一日しか滞在できないけれど、

それでも—。

親友の祝福に。

ヒカルに会いに—。

7月28日、日曜日。

あまりの暑さに汗だくになってヒカルは目が覚めた。昨夜はそわそわ落ち着かずになかなか寝つけず熟睡もできていない。枕もとの時計はまだ6時を過ぎたばかり。タイマーが切れていたエアコンのスイッチを再び入れ直してからもう少し寝ようと、ベッドから這い出て机の上にあるリモコンを取ろうとしたとき、窓の下で水がジャージャー流れる音がしているのに気がついた。

そっとカーテンを開き下を覗いてみて、

「うそっ?!」

思わず声に出して言ってしまったヒカルだ。

颯土が車を洗っている。

「寝ぼすけの颯土くんが、日曜日のこんな早朝から?!」

ヒカルは窓をガラッと開けた。

頭の上の窓が開く音に気がついた颯土はホースを持ったまま上を見上げた。

「よお...」

颯土は片手を軽く上げた。

「どうしたの?こんな朝早くから洗車だなんて、どっか行くの?」

今夜はあかねのウェディングパーティーだ。夕方6時に勇斗と駅で待ち合わせをして三人でパーティー会場に行く予定をしている。

「いや?あまりに暑くて寝てられなかったから水浴びの代わりに車洗ってるだけ」

颯土は黒いシビックの屋根に水をかけた。

「水浴びの代わりにかぁ...。確かに涼しそう...」

ホースから勢いよく流れて出る水がキラキラしたしぶきを跳ね上げている。

「私も手伝う!」

ヒカルは一旦カーテンを引き、タンクトップと短パンに着替えてから外に出た。

「別に手伝ってくれなくてもいいよ...」

あまりにも無防備すぎるヒカルの格好に、目のやり場に困った颯土は言う。

「いいじゃない。洗車って一回やってみたかったんだよね~。私にやらせて!」

ヒカルは颯土からホースを奪い面白そうに水を車にかけた。

「颯土くんはあっちで休んでいいよ!」

ヒカルがあまりにも楽しそうにはしゃいでいるから、颯土はその言葉に甘えて道端に座りこみポケットから煙草を出した。

音程の外れた鼻歌を口ずさみながら真っ白な泡だらけのスポンジを黒い車に滑らすヒカルを、颯土はくわえ煙草でじっと見つめる。

早起きしてしまったのは暑かったからじゃない。

何故か心が騒ぎ目が覚めてしまったのだ。それが何なのかどうしてなのか、理由なんてわからない。ただ、ざわざわと気持ちが立っていた。

今日はあかねの結婚式だからだろうか。

たぶん、それもあたっていろいろだろう。だが、それだけなのか？と、颯土は自分に問いかけた。

――しかし、いくら暑いからって中学生の体育の時間じゃあるまいしあの格好はないだろ…。俺だって一応男なんだぜ…。

颯土は短パンから伸びているヒカルの素足を見て思った。

――ヒビクセンパイの前ではあんな格好はしないよな、きっと…。

颯土はさらにヒカルの素足を見つめながら思う。

よからぬ視線を感じたヒカルが洗車の手を休めてふと颯土を振り返った。

「ちょっと、どこ見てるのよ？」

突然声をかけられて颯土はハッと我に返った。

「灰！」

ヒカルは颯土の指の間で今にも落ちそうなほど長くなっている煙草の灰を指差す。

「え？あ、ああ～？」

颯土は灰を道に落とし、目を泳がせて誤魔化した。

「なんか今、や～らしい視線を感じたんだけど…」

ヒカルは視線が刺さっていた足をもぞもぞ動かす。

「…ヒカルちゃんてば、案外たくましい足してるんだなあ、って見とれちゃったよ」

瞬間、颯土の頭上から水が降って来た。

「つめてっ！何すんだよ！」

颯土はヒカルの手からホースを奪い返そうとした。ヒカルはそれに必死に抵抗する。そのやりとりでふたりとも頭からびしょ濡れになった。

「おーい…」

ヒカルの家の玄関前から冷めた声がした。

ヒカルと颯土がびしょ濡れのまま視線を玄関に向けると、久美子が体育座りをしてじいっとふたりを見つめていた。

「久美子、いつからそこにいたの？」

「別にいつからでもいいじゃん…。どーでもいいけど、朝っぱらからじゃれあうのは良くないよ…」

「じゃ、じゃれあってなんかねーぞ！」

久美子の言葉に颯土は可笑しいぐらいにうろたえた。

「そーかなあ？じゃれじゃれしてたじゃん。ヒーねえもさあ、男の前でそーゆー格好はヤバイんじゃない？いくら相手が颯土くんでも」

久美子は単調に言う。

「相手が俺でもってどーゆー意味だよ」

「別にヒーねえの貧相な体見たところでムラムラしないと思うけどさー、ブラ、すけすけだよ」

久美子に言われてヒカルは自分の胸元を見た。頭からかぶった水のおかげでタンクトップの中味がクッキリと映し出されている。そのまま視線を颯土に向けると、颯土の目も同じ場所に行っていた。ギョツとして顔を上げた颯土の目とヒカルの目が空中でぶつかった。

「...この、ドスケベ！」

ヒカルは持っていたスポンジとホースを颯土に投げつけて家の中に駆け込んで行った。

「お、おいっ！」

――ドスケベって俺は別になにも...！

颯土は心で喋りながらヒカルのあとを追うがヒカルは既に家の中。

「ポイントさがったね、颯土くん」

久美子がまたもや冷めた口調で言った。

「お前が余計なこと言うからだろ？いったい俺が何をしたっていうんだよ」

「ヒーねえのことじっと見てた...」

久美子は剣呑な目を颯土に向け家の中に入って行った。

ひとり残された颯土はヒカルが中途半端にやり残して行った洗車の続きをはじめた。どうしようもなくイラついている自分の気持ちを、スポンジの手に力を込めてボディーをこすりながら必死になだめる。

――見てちゃ悪いのか。だって、目の前にいるんだぜ...。あいつの方から視界に飛び込んでくるんだぜ、いつも...。どうすればいいんだよ、俺...。

ひとり心の中で喋る言葉はあまりにも情けなかった。どうすればいいだなんてそんなことはわかりきっている。どうすることも出来ないのだ。

泡で白くなったボディーに水をかけるとシビックは再び黒い姿を現した。水を止めて水滴を乾いたタオルで拭う。太陽はもうキラキラと輝き、黒塗りのボディーがその熱を熱く反射させる。

颯土は汗だくになって洗車の仕上げをしていた。

そこへ白いTシャツとジーンズに着替えたヒカルが再びやってきた。

「まだやってるの？手伝おうか...？」

ヒカルは颯土の後ろに立ち言った。

「いいよ、もう...」

颯土はヒカルを見ず冷たく答える。

「さっきはごめんね。ドスケベなんて言っちゃって...」

ヒカルの言葉を背中で聞き、その言葉、わざわざ復唱しなくてもいいぜ、と、颯土は心で喋った。

せっせと車を拭く颯土の後ろにヒカルはずっと立っている。

「なんだよ？まだなんか用があるのか？」

颯土は振り返った。

ヒカルの目がずっと自分の背中を見つめていたことに颯土はその時に気がついた。

「な、何、見てんだよ？」

「何となく。見たかったから見てただけ」

ヒカルは笑った。

――はいはい。最後はいつもその笑顔ですね....。

颯土は苦いため息をついてから、

「見てんなよドスケベ...！」

と、笑った。

ヒカルは颯土の足元に置いてあるもう一枚の雑巾を手にし、颯土が拭いている反対側の水滴を拭きはじめた。

「洗車って大変なんだね」

「そうでもないさ、ちっこい車だし...。今日は誰かサンのせいで大変だったけど」

「ピカピカに磨かれてこのシビックくんも喜んでるね、きっと」

「シビックくん？」

またヒカルお得意のネーミングか、と颯土は笑う。

「キレイに磨いてもらったら誰かに見せたいって思うのかな、シビックくんも」

「...じゃ、ちょっとドライブにでも行くか？」

颯土が手を止めて少しだけためらいがちに言うと、

「ほんと？行く行く！」

ヒカルは飛び上がった。

そんなヒカルを見ると嬉しくなる颯土だ。

「そんじゃちょっと待ってて。俺、着替えてくるから」

颯土は洗車グッズを手早くかたし、車のエンジンをかけてから着替えに行った。

5分後に白いTシャツとジーンズに着替えて出てきた颯土は、ヒカルを助手席に乗せピカピカのシビックをスタートさせた。



平日はちっとも動いていない首都高が日曜日の今日はスムーズに流れている。

「亮んちの方まで行ってみる？」

颯土が行き先を提案するとヒカルは、行こう行こう、と頷いたので、颯土はそのまま首都高に乗り横浜を目指した。免許を取ってすぐの頃、一度だけヒカルを乗せてたかだか1kmぐらいしかない水月の店まで行ったことがあるが、ふたりで長距離は初めてだ。こんな日にわざわざ横浜までドライブするなんて...と思いながらも、隣りで笑うヒカルを感じ今はこの時間を大事にしたいと思う颯土だった。

途中、多少の渋滞に遭遇はしたが一時間ほどのドライブで横浜に到着。

亮太の家の前に黒いシビックは停まった。

「ここが亮太くんちなんだ。さすが横浜。お洒落な家だね～！」

ヒカルは高台に建つレンガの家を見つめながらうっとりした。

「あいつ、驚くだろうな...」

颯土は車を降りてインターホンを鳴らす。

しばらくして亮太の母の応答があり、そのあとすぐに亮太が玄関を飛び出して来た。

「なんで?! なんで、颯とヒカルちゃんが一緒なわけ?!」

亮太は助手席から降りて手を振るヒカルと颯土を見比べながら真っ赤になって叫んだ。

「しかもペアルックじゃん！」

え?と首を傾げながら颯土とヒカルが互いの姿を確認し合うと、確かにふたりとも同じようなTシャツとジーンズを着ている。

「あはっ! ホントだ! ペアルックになってるよ、あたしと颯土くん」

「ぐ、偶然だよ、偶然！」

間違いなく偶然だ。だが、気づいてしまうと颯土はやたら落ち着かなくなった。全身が痒い。

「今朝ね、颯土くんの洗車を手伝ってそのままなんとなくドライブに来たの」

「そ、そういうこと。何となく来ただけだからすぐ帰る」

と、颯土。

「なんか、それってひどくない? わざわざ俺んちまで来といてさあ、仲がいいの見せつけられただけ? 俺」

「仲いいかよ...」

「朝っぱらから一緒に洗車してペアルック決めちゃってドライブしてくるなんて、普通の恋人同士より仲いいじゃん...」

驚くだろうとは思っていたが、予想以上の亮太のツッコミに颯土は居心地が悪くて仕方がない。後ろでニコニコ笑っているヒカルを何故か振り返れない。

「今日、これからあかねちゃんのウェディングパーティーがあるの。だからあんまりのんびりもしてられないんだ」

「あかねちゃん?! 結婚すんのか?!」

亮太は颯土を見ながらさっき以上の叫び声をあげた。

「ああ、子どもも生まれるらしい…」

「え～～～っ？あの、あかねちゃんだろ？！」

亮太の知るあかねは修学旅行のあの土産物屋でマグカップを大事そうに抱えた少女の印象しかない。颯土の後ろに控えめに立ち、優しく可愛い微笑みを携えていたあかねの顔しか浮かんで来ない。

「女ってのはわかんないもんだな…」

「え？」

亮太の呟きに颯土は思わず聞き返していた。

「止まってないっていうか切り替えが早いというか…。いや～、驚いた！」

「……………っ」

亮太の言葉は颯土も意識の下で感じていたことをストレートに代弁していた。だが、ふたりの会話を外側で聞いていたヒカルは、

「そうじゃないよ。あかねちゃんが田村先輩と結婚するのもお母さんになるのも切り替えが早かったからじゃなくて、それがあかねちゃんの運命だったからだって私は思ってる」

と、亮太の言葉に異を唱えた。

「そりゃそうだ。変なこと言って悪かった…。でも、颯は内心複雑だろ？」

「…複雑といえば複雑だけど…」

それはあかねが結婚するとか子どもが生まれるとか、そういうことに対しての複雑な思いではない。

「ど？」

「どお？」

亮太とヒカルが同時に颯土に詰め寄る。

「…なんだよ、ふたりとも…」

「いやいや？颯の心境を取材したいかなーと思って！」

「取材かよ…」

「いつもはする方なのにねー」

あかねに限らず、そして自分も含めて移ろい変わっていく人の心に対して、説明できない気持ちの動揺のようなものを感じている。

ざわざわと近づいてくる何かに怯えている――。

「颯土くん…、どうしたの？」

颯土にどこか思い詰めたような眼差しで見つめられていたヒカルが、やや戸惑いの声で訊いた。

颯土は、なんでもない、と首を振り、

「今はあかねのことは素直に祝福できるさ。幸せになって欲しいと願ってる」

と、結んだ。

せっかく来たのだからと亮太の家の前で記念撮影をしてから、朝食がまだだった颯土とヒカルは亮太を車に乗せて近くのファミリーレストランと一緒にモーニングをし昼には横浜を出た。

帰り道の首都高は混んでいた。『渋滞7km』などと掲示板には表示されている。

「はまっちゃったね〜」

と、ヒカルがその掲示板を見つめながら言った。

「覚悟はしてたけどな」

と、颯土。

「7kmの渋滞を抜けるのってどれぐらいの時間がかかるのかな？」

「一時間ぐらいじゃないか？」

「なーんだ、たいしたことないじゃん！喋ってたらあつと言う間だね！」

――喋ってたらあつと言う間か…。

いつもはイライラする首都高の渋滞も、ヒカルと一緒にならたいくつしないな…。

颯土はカーステレオのスイッチを消した。音楽なんかいない。

「今日はきっとあかねちゃんキレイだろうね〜」

「そうだな」

「田村先輩のために一生懸命磨いて…」

「磨いて、か…」

ヒカルの言葉のあとを颯土は何気なく繰り返した。

真っ直ぐ前を見つめハンドルを握る颯土の横顔をヒカルは見つめた。颯土は今夜どんな思いであかねのウェディングドレス姿を見るのだろう…。今、どんな思いでいるのだろう。素直に祝えると亮太に言った言葉に嘘はないと思うけれど…。

あかねは高校時代も一生懸命自分を磨いていた。恋するというのにいつも真剣だった。あの頃は颯土のために、そして今田村に身も心も全てあずけ、今夜から新しい時代にふたりで一歩を踏み出す。

身も心もあずけて…。

「どうした？黙っちゃって」

颯土はヒカルを見た。

「昨夜はなんだかそわそわしちゃって眠れなかったんだ。いろんなこと考えちゃって」

「わかるよ、俺もなんとなくそうだったから…」

「やっぱり颯土くんもそうかぁ！もしかして、おんなじようなこと思ってたのかな？」

「たぶん、な...」

「...あかねちゃん、お嫁さんと同時にお母さんにもなっちゃうんだもんね...」

「ヒカル.....」

ヒカルの言った意味はおそらく颯土が思ったとおりの意味だろう。だが眠れないほどの思考の先はたぶん違う。

わけもなく颯土の心臓は逸る。

もしもヒカルが...

――ヒカルがあかねのように.....。

「今日は私もめいっばいお洒落しちゃおう～！ピカピカに磨きをかけて颯土くんに見せてあげるよ、とびっきりのヒカルちゃんを！」

頬をピンク色に輝かせて明るく笑うヒカルを見て、颯土の考えていたことは霧散した。

今はまだヒカルはここにいる。

――俺の、となりに....。

「とびっきりのヒカルを俺に見せてくれるんだ？じゃあ、楽しみにしてるよ」

「うん。久しぶりにみんなにも会えるし楽しみだね」

「ああ、そうだな！」

夕方、颯土の家に迎えに来たヒカルはパステルイエローのワンピースに身を包み、ストレートの髪に少しふわふわとカールをつけ、明るいピンク色のルージュを輝かせた唇で、

「颯土くん、早くーっ！大久保くんが待ちくたびれてるよ～！」

と、わめいた。

颯土も慣れないスーツを着て慌てたように玄関を飛び出して来た。

「悪い！財布が見当たらず探してたんだ！」

「急ごう！」

お洒落着を纏ったふたりはバタバタと駅に向かって走る。

スカートの裾と巻き毛を翻しながら自分の前を走るヒカルに、

「ちょっと待て、ヒカル」

と、颯土は声をかけた。

「なに？」

「とびっきりのヒカルが台無しになるぜ。俺も駅に着く前に汗ででろでろになりそうだ」

「だって時間が...」

「成人式以来のスーツなんだぜ、俺」

「私だってこんなお洒落着初めてだよっ〜」

「じゃ、ちょっとは優雅に行こうぜ！そのオシャレは俺に見せてくれたんだろ？大久保は待たせておいても大丈夫だよ」

颯土はいたずらに笑う。

「そうだね〜！大久保くんには悪いけど私たちのお洒落着の方が大事だ！」

うふふ、とわざとらしくとしとやかにヒカルは笑った。そしてふたりは並んで優雅に歩きだした。

午後6時――。

上空を飛行機が音を立てて飛んでいく。

ヒカルは心と空を見上げその飛行機の行く先を目で追った。

午後6時半。
東京国際空港――。

約20時間のフライトを経て響は3年半ぶりに日本の土を踏んだ。陽は翳りはじめているというのに空気はじっとりと湿り一気に汗が溢れた。さすがは日本の夏だ。だが、肌に容赦なく絡みつくその湿った空気ですえも懐かしく感じる。

たった2日しかない帰省だから荷物も手荷物だけ。響はそのまま地下の空港駅に向かった。パーティー会場がある上野までは乗り継ぎを入れて約1時間半。7時からのパーティーには少し遅れてしまう。

今、ヒカルもこの同じ空の下を会場に向かっている頃だろう。たぶん颯土や他の仲間たちと一緒に…。

体内時計がだいぶ狂っている。睡眠は全然取れていない。だがそんなことはどうでもいい。

1時間後にはヒカルに会える――。
心が逸る。

成田エクスプレスが東京駅に到着。
響は東京に下ろす一步をゆっくりと踏みしめた。

◇

ヒカルは颯土と勇斗と共にパーティー会場のライブハウスの扉を開けた。会場は広くゆったりとしたフロアで明るい照明が灯っている。丸いテーブルが点在しそのひとつひとつに真っ白なテーブルクロスが敷かれ、可愛らしいテーブルフラワーがセッティングされていた。今夜はウェディングパーティーのために貸し切りだ。

田村の友人たち、あかねの大学の友人たちは、それぞれのテーブルに既につき談話をしていた。田村とあかねの姿はまだ見えず、黒服を着たライブハウスの従業員が訪れる客を座席に案内している。

「ヒカルちゃん！こっちこっち！」

ステージ前のテーブルについていた柏木が扉の前に立ってフロアを見渡しているヒカルたちに手を上げた。その横には松山太郎次郎兄弟や元演劇部の小夜子たち、そして綾瀬が着席している。

「ヒカルせんぱーい！」

綾瀬が立ち上がって叫んだ。

「綾瀬くん！」

ヒカルは颯土と勇斗を伴い綾瀬のいるテーブルに向かった。

「ヒカル先輩、お久しぶりです！」

ヒカルの脇に立つ綾瀬をヒカルは見上げた。

「驚いた…。随分背が伸びたね…」

「ええ！高3の時に一気に30センチも伸びたんです。まだ伸びてます！」

「へえ～、うそみたい！」

「風間先輩が言った通り、今はきっと風間先輩を追い越してるかも！」

小夜子たち、そしてバンドの仲間たちと挨拶を交わし、ヒカルと颯土、勇斗は、自分たちに用意された隣のテーブルについた。

「伊藤と結野はまだみたいだな？」

一緒にテーブルにつくはずの祐輔と麻耶はまだ姿が見えない。

「結野先輩なら先に来ていて、今控え室にいますよ。あかね先輩のところに」

綾瀬が教えてくれた。

「そうなの？じゃあ、私も行って来る！」

ヒカルは立ち上がり、ステージ横の扉から控え室に向かった。

バックヤードの小さな控え室のドアに『田村優作・あかねさま』という貼り紙がしてあった。

軽くノックをすると、

「どうぞ」

と、田村の声で返事があった。

「お邪魔しまーす！」

「ヒカルちゃん！」

麻耶が一番最初に声をあげた。

「麻耶ちゃん、久しぶり～！1年ぶりぐらい？」

ヒカルは麻耶に駆け寄り手を取り合った。

「そうだね！そのくらい会ってなかったね～！」

椅子に座っていたあかねが立ち上がった。マーメイドのような真っ白なレースのドレスが、ほっそりとしたあかねの体にピッタリとフィットしよく似合っていた。お腹のふくらみはほとんど見えない。このドレス姿を田村に見せたかったのか、とヒカルは思った。

「あかねちゃん、凄く素敵…」

「ありがとう、ヒカルちゃん」

そういうあかねの顔は少し蒼白い。

「無理しないで座ってて！」

ヒカルはあかねを椅子に座らせた。

「田村先輩、あかねちゃん平気なの？ライジングサンの演奏だって、かなりキツイんじゃないですか？」

田村は横で呆けたように立っている。

「うん...、腹減らなきゃ大丈夫だって本人が言うんだけど...」

「そうなの。おなかですくと `うっ、となるんだけど食べてれば平気」

と、あかねは笑った。

そう言われてもヒカルには実感できるはずもない。お腹がすくと `う、っとなるってどういう感じなのかな？と、蒼いあかねの顔を見つめながら思う。

「ヒビクから届いたジャズバージョンもあかねは弾くって...」

「だってあれは...」

難しく弾けないと、この間あかねは言っていた。

「風間先輩のイメージ通りに弾くのは無理だと思うけど...ね。でも、せっかく先輩がわたしと優作さんにアレンジしなおして贈ってくれた曲だから演奏したいもん...。みんなにも聴いて欲しい」

「無理しちゃダメだよ？大事な体なんだからね」

「大丈夫」

と、あかねは笑うがやはり顔色はよくない。

「...まあ、俺が様子を見てその時の調子で決めるよ。そろそろ時間だからちょっとあっちをのぞいてくる。ふたりともあかねを頼む」

田村は控え室を出て行った。

「あかねを頼む、って...、田村先輩、相変わらず優しいね。いいなあ～、あかねは幸せで」
あたしも幸せになりたい～、と麻耶はややむくれ気味に言う。

「ふふ。じゃあ、ブーケは麻耶ちゃんに投げてあげる」

あかねの顔に少しだけ赤味がさした。

その顔色を見て、ヒカルはあかねの耳元でそっと囁いた。

「颯土くん来ているよ」

「群竹くん、本当に来てくれたんだ...」

あかねは呟いた。

準備が整ったからそろそろはじめよう、と田村があかねを迎えに来たのでヒカルと麻耶はフロアに戻った。祐輔も到着していて、テーブルは懐かしい5人のメンバーの顔が揃った。丸いテーブルにヒカル、颯土、勇斗、麻耶、祐輔と並んで座っている。

「今夜はさあ、この後久しぶりにみんなで飲みに行こうよ！」

と、勇斗が提案すると、

「いいね！行こう行こう！」

と、ヒカルが賛成する。

「あかねと田村先輩も一緒に行ければいいけどね」

と、麻耶が言えば、

「それは無理だろ…。あかねを無理させちゃいけないし」

と、颯土は呟いた。

「群竹くん優しくなったね」

麻耶に言われて颯土ははにかんだように笑った。

そしていきなり照明が落とされ、司会役の田村の友人が皆にクラッカーを持ってと言う。

「クラッカー鳴らすのか？水沢、大丈夫か？」

祐輔が思わず口に出したと同時に司会の号令がかかり、田村とあかねがスポットを浴びながらフロアに入って来る中を、クラッカーがパンパンと音を鳴り響かせながら飛んだ。

田村に寄り添いあかねはゆっくりとフロアを歩く。その姿ははかなく淡く、美しかった。

「あかねちゃん、キレイだあ～！」

勇斗が立ち上がって叫んだ。まるで芸能人に対してファンが掛け声をかけるようだ。

あかねが勇斗を見、その視線は自然に隣に座る颯土に行った。

颯土はじっとあかねを見つめている。

あかねが颯土に向かい微笑んだ。

颯土も微笑み返す。

そんな颯土の横顔を隣で見つめ、ヒカルは込み上げる何かを感じた。

乾杯が終わったあとは、席を立ち田村とあかねを囲んで談話をしたり、テーブルで会食をしたりとラフにパーティーは進行していった。

あかねは懐かしい仲間のテーブルに入り、田村はバンドの仲間の中に入りそれぞれの友人たちとの時間を過ごす。

「群竹くん、来てくれてありがとう…」

あかねは颯土の隣に座り、小さな声で言った。

「神戸以来だね…」

「ああ、そうだったな」

「…こんな風にこんな席で再会できるなんて思ってもみなかったよ」

ヒカルからパーティーに颯土を誘ったと聞いた時も、半信半疑で本当に来てくれるとは思えなかった。昔のままの颯土ならきっと来なかつただろう。神戸での別れから東京に戻ってきた2年の間に颯土はまた変わった、とあかねは思った。こんなに優しい顔をする颯土を感じたのははじめてだ。颯土の隣に座るヒカルの存在を改めて大きく感じる。ふたりを並べて見た時に見えない何かで繋がっているものを感じる。

――だけど、ヒカルちゃんはずっと風間先輩を……。

響を想うヒカルをまるごと愛している颯土なのだろうか。

昔、颯土を想う自分を田村がまるごと愛してくれていたように――。

「あかね、幸せにな」

「あ、ありがとう...」

仲間たちは笑みを浮かべながらあかねと颯土を見守り、ヒカルは思わず涙がこぼれた。

颯土とはいつか何年かしたあとに昔の懐かしい友人として再会したい、と言っていたあかね。今その言葉どおりに再会をし、微笑みながら言葉を交わすふたり。

時が流れている――。

あかねは大人になった。

もう自分の後ろに怯えながら隠れていた頃のあかねじゃない。自分が腕を引っ張っていた頃のあかねじゃない。妻になり母になり女になってずっとずっと先に行ってしまった――。

田村は自分の友人たちと話しながらも身重の新妻を気遣い何度もあかねを振り返って見守っている。いつも体中のアンテナがあかねに向いている。そんな田村にあかねは身も心も全てあずけて...

昨夜ずっと考えていた。

身も心もあずける時って、どんな時なのだろう。

あかねはどうして田村に自分の全てをあずけることができたのだろう...。どういうふうに、どんな気持ちで...

「それでは、ここでバンド有志による演奏をはじめたいと思います！」

司会の声があがりバンドの仲間たちは立ち上がった。田村があかねを支えピアノの前まで送った。

「ヒカルちゃんのマラカスダンス、懐かしいな〜！」

勇斗の言葉に送られてヒカルもステージへと向かう。

『ライジングサン』。

響が作った曲。

5年前の合宿の湖で――。

先日、4年ぶりにみんなが集まり音を合わせた。4年のブランクがあったとは思えないほど田村とバンドたちの息はピッタリと合っていた。あかねがピアノを弾き田村がギターを持ちながら歌うその前で自分はマラカスを振る。

だが、自分だけがどこかみんなと合わせられない、というズレを感じた。音痴だからということももちろんあるが、それだけじゃない。

響が歌っていないからー。

あの頃、響の歌うリズムと響きに融合する感覚でヒカルはマラカスを振っていた。響の声だけを聴いていた。

だから…。

田村からマラカスを受け取り、ヒカルはステージの自分のポジションに立った。

「新郎新婦が夫婦となって初めて共に行うケーキカット！しかし刻むのはケーキではなくリズムです！演奏するのはライジングサン！太陽が昇っていくようにふたりの未来も…」

と、悦に入って演説をする司会から田村はマイクを取り、

「ありがとう。ここからはもう司会はいいから、テーブルでゆっくりしてください」

と、友人の肩をたたいた。

「えっと…、今から演奏をする『ライジングサン』は、今アメリカでピアニストを目指して頑張ってる親友が高校時代に作った曲で、これは、俺とあかねにとって忘れられない曲なんで、今日は昔の仲間と4年ぶりに演奏するんだけど…」

と、田村は一旦言葉を切りひとつの深呼吸をし、

「本来ならその親友が歌ってこそ『ライジングサン』なんだけど、今日は俺が…」

と、自信なさげに言った。実際田村は歌はあまり得意ではないのだ。ヒカルが合わせられない理由のひとつでもある。

「…ということで、みんな用意はいい？」

田村はバンドのメンバー達を振り返り確認する。

「OKだよ！」

「バッチリだぜ」

柏木や松山兄弟がそれぞれGOサインを田村に送る。

「じゃ…、」

ドラムのスティックが演奏開始の拍子を刻み田村が今、ギターの弦をなでようとしたその時、

「俺が歌うよ、田村っ！」

腹の底から発せられた低い声がフロアに響いた。

バンドは出鼻をくじかれた格好で唐突にその動きを止めた。そして、全員目が注目する一点。

入り口の扉の前に声のあるじは立っていた。

金色の長い髪を背中で結び、じっとステージを見つめている長身の人ー。

ヒカルはマラカスを床に落とした。

田村は凍結した。

颯土は息を呑んだ――。

「ヒビク...先輩...？」

足がガクガクと震える。

「ヒビク...？」

目をパチパチとしばたく。

「風間先輩...」

胸が騒ぐ――。

スポットライトの中に立つパステルイエローが存在感を放ち輝いていた。

持っていたマラカスが床に転がり、それを拾おうともせずじっと自分を見つめている。

「ヒカル――」

響は呟いた。

そして大股でフロアをステージに向かって真っ直ぐ歩く――。

「風間先輩だ！」

綾瀬が言った。

「風間先輩だよ～！」

と、勇斗。

「風間くん！」

と、小夜子たち。

声をかけて立ち上がる友人たちの横を通り過ぎながら、熱く突き刺さる視線に痛みを覚えて目を向けると、そこで颯土と目と目がぶつかった。

「.....」

「.....」

だがすぐに響の視線はステージのヒカルに真っ直ぐに向けられた。

ステージにたどりついた響の目とヒカルの目が重なり合った。

「ヒビク先輩...」

微かに震えながらヒカルは呟く。

響はじっとヒカルを見つめ、

「よお、ヒカル！」

と、右手を上げた。

その高校時代の日常が再現された瞬間、田村とあかね、松山たちが響の周りにどっと集まった

。

「ヒビクっ！来てくれたんだな～っ！」

田村が響の首に抱きつき、叫ぶ。

「ああ！田村の結婚パーティーだもんなっ！」

ヒカルに背を向けた格好で響は田村と抱き合う。

背中に垂れる響の金色の髪は昔と変わらない長さだった。ヒカルは呆然としたままその髪を見つめ立ちすくんでいた。

「さ、ライジングサン、はじめようぜ！」

響の号令で皆は自分のポジションに戻りスタンバイをする。

「ほら、ヒカルもマラカス拾って！」

呆然と立ったままのヒカルに響は言った。

「あ、はい…」

それは高校時代に毎日のようにかけられていた言葉の響きとまったく同じ。

ヒカルは足元のマラカスを拾った。

頭の中がぼうっとしている。夢を見ているようだった。目の前に響がいる。マイクを握っている。あの頃とおんなじシチュエーションがここにある。時間の壁がなくなりつい昨日までのことのような錯覚に襲われたまま『ライジングサン』の演奏が始まった。

響の歌声が響いた。

体中にいのちの奥までも浸透してヒカルのいのちと共鳴する響き。自分がどんなふうにマラカスを振っているかわからない。ただ響の声に導かれ、抱き合っているような感覚。

響の声しか聞こえない――。

響は歌いながら時々ヒカルを見つめた。

その瞳は熱く、深く、真っ直ぐにヒカルの瞳を捕まえている。

――あの、文化祭の時と同じだ…。

颯土はステージのヒカルを見つめて思った。

自分が夢中でシャッターをきったあの文化祭と同じ。

ヒカルと響の視線が空中で絡み合い、重なり合い、不思議なオーラを発散させ輝き美しい…。

今、ステージの上で見事に融合しているふたりの視線と空気を知り、颯土は思わず顔を背けていた。

――もう、ヒカルを見てられない。

今は、あの頃のようにシャッターをきろうとは思えない――。

演奏が終わった時、フロアからはまたクラッカーの嵐が飛んできた。

「あめでとう、田村！」

「おめでとう、あかね！」

友人たちがステージに向かって叫び、バンドの仲間たちに向かって指笛が鳴る。

「田村、あかね、おめでとう！」

響はマイクを田村に返した。

「あかね、いい女になったなあ！」

「やだ、風間先輩！」

「来られないって言ってたのにどうしたんだよ！驚いたぜ、ほんと！」

「あのジャズ、あかねじゃ無理だって聞いたから弾いてやりに来たんだよ」

「そんなこと言って、本当はヒカルちゃんに会いに来たんでしょ？」

と、あかねが鋭く突っ込みを入れると、

「...ああ、そうさ...。バレバレだな」

響はアハハと笑い、まだステージの上に立ったままのヒカルの元に歩きだした。

響が目の前に来た時、ヒカルは突然体の力が抜けヘナヘナと座りこんだ。鼓動が激しくて胃がキリキリ痛くてめまいがして、自分がどうなってしまったのかわからない。

「大丈夫か？ヒカル」

響は力なくダラリと下がったヒカルの両手のひらを掴んで言った。

ひんやりとした響の手。

大きな響の手。

ずっと、触れたかった手――。

「だ、大丈夫じゃないよ...。こんなに突然...」

声にも力が入らずヒカルは響を見上げる。

「ごめん。電話する暇がなかったんだ...」

「でも...」

ヒカルは響の手に支えられゆっくりと立ち上がり、

「でも、会えて嬉しい...！」

と、笑った。

この笑顔。

生の笑顔。

変わらない、太陽の笑顔――。

「ああ…。会いたかったぜ…っ」

そう心の底からの言葉を呟いて、響も笑った。

抱きしめたい――。

両手を繋ぎ、目の前に立つヒカルを見つめながら響は思う。

パステルイエローのワンピースと笑うヒカルが自然な輝きを発し太陽のように眩しい。

思わず腕に力が入る。

けれど、一応田村とあかねのウェディングパーティー。まさかここで抱きしめるわけにはいかないよな、と響は心の中で笑った。

「先輩...？」

ヒカルは首をかしげた。

「いや...」

響は苦笑いを浮かべ、

「...田村とあかねに『ライジングサン』をプレゼントしてくる。ヒカルも聴いてくれよな、俺のピアノ」

「はい...」

名残惜しそうに繋いでいる手を放しピアノに向かった。

「よかった、風間先輩が来てくれて。私じゃ弾けないって思ってたから」

あかねは響にピアノの椅子を譲った。響はゆっくりと椅子を引き軽くひとつ深呼吸をしてから言った。

「田村、あかね、そして生まれてくるふたりの宝に祝福のメロディを！」

高音から始まる軽やかなメロディーがフロアを漂うと、皆は一瞬息を呑みそのあとは感嘆のため息があちこちで漏れた。

スポットを浴びて身体を揺らしながら軽やかなジャズの音楽と一体になってピアノを弾く響を、ヒカルは目を見開いたままじっと見つめていた。

週に二回電話で話すようになって音信不通だった3年半の空白が埋まった気がしていたが、今、突然再会して分かった。やっぱり会えなかった3年半は確かに存在し、その間に互いの時間が確実に流れ、今ここで力強くピアノを弾く響はヒカルの知らない響だった。さっきまで手を繋いでくれていた人とは別人のような気がする。いや、それさえもが本当のことじゃないのではないだろうか？やっぱり夢を見ているだけじゃないだろうか？まばたきをした一瞬に夢は覚め、ここにいる響もピアノの音色も消えてしまうかもしれない...。だとしたらこのまま、まばたきをしないでずっと見つめていたい。ずっと夢を見続けていたい――。

「やっぱカッコイイなあ、風間先輩...！」

勇斗がため息を漏らした。

その言葉を聞いた時、ヒカルはがくがくと震え出した。

――これは私だけが知っている夢じゃないんだ。

本当に本当のことなんだ…。

本当に、ヒビク先輩なんだ…！

こんな登場の仕方、風間先輩にしかできないだろうな…、と、颯土は思った。

響の弾くジャズが颯土の心にも染み渡る。明るく軽やかなそのリズムが、重く痛く――。

今、響の登場に思いっきり揺さぶられている自分…。

そうじゃない、そんなことはない、と己の心を否定したかった。

だが、これが現実…。

これが、己の真実――。

ピアノの明るいテンポに、手拍子を取りながら思わず立ち上がったひとりがいた。

それに続き次々と友人たちは立ち上がり踊りだす。ウェディングパーティー会場はダンスパーティー会場と化した。

「風間先輩を囲むと、いつもこういう展開になるなあ！」

祐輔が言った。

「体育祭や文化祭を思い出すね」

と、麻耶。

「なんか、行きたくなっちゃうな、あそこ！」

ステージを指差す勇斗。

生き活きと輝く仲間たちの顔は昔のまま。

これがあかねの結婚パーティーじゃなかったら、きっと勇斗などは昔のようにステージに自分を引っ張り出して踊っているのだろう、と颯土は思う。さっきまでの雰囲気とは一転し、今パーティーに集まった人たちは響の奏でるピアノでひとつになっている。フロアの空気がピアノのメロディーと一緒に流れている。

――やっぱり凄い人だ、風間響って人は。

圧倒される…。

その存在感に、押しつぶされそうになる……。

隣にいるヒカルは小刻みに震えながら、まばたきもしないで響を見つめている。勇斗や祐輔たちは立ち上がりリズムを取りながら盛り上がっているがヒカルはずっと座ったまま。もう響以外

の周りが見えていないようだ。

自分とヒカルだけがこの場所で浮いている――。

だが、ヒカルの線はステージの響に繋がり、自分の線は隣のヒカルには繋がっていない…。

重い。

明るい周囲に相反してどこまでも重く沈んでいきそうになっている自分を颯土は自覚した。

ヒカルが自分と向き合い笑っていたのはついさっきだというのに。

黒いシビック。

泡のついたスポンジ。

白いTシャツにジーンズ。

さっきまで見ていたものがイメージになって颯土の脳裏を駆け抜けて行く――。

――なにを考えてるんだ、俺は…っ。

颯土はヒカルの肩をたたいた。

「…え？」

ヒカルはハッとして颯土を見た。

「何、ぼおっとしてるんだよ。演奏が終わっちゃうぜ」

颯土はヒカルの腕を取り一緒に立ち上がった。

「…あ、うん」

ヒカルは初めて周りの状況が見えたかのようにフロアで踊る人々を見渡してから、自分もその空気に同化した。そして颯土も余計な思念を振り切るかのように音楽の波に乗る。響の横で田村と共にいたあかねが、そんな颯土をずっと見つめていた。

演奏が終わったあとは、響は田村や柏木たちの輪に入ったまま時間は過ぎて行った。ヒカルのいる席とは少し離れたステージに一番近い場所に響はいる。響の顔は高校時代の顔に戻り、気の合う仲間たちとの再会を喜び合っているように見えた。さっきピアノを弾いていた響とは違う、ヒカルのよく知っている響の顔だった。

「ヒカルちゃん、風間先輩のここに行かないの？」

離れた位置で響を見つめるヒカルに麻耶は言った。

「だって、ヒビク先輩と田村先輩たち久しぶりに会ったんだし、ヒビク先輩は田村先輩のお祝いに駆けつけたんだし…」

いつになく控えめに言うヒカルだ。

「何言ってるの！ヒカルちゃんと風間先輩だって久しぶりなんじゃない」

「そうだけど...、でも...」

今日の主演はあかねと田村。

今、こんな状態で響のそばに行ったらきっと自分が響を独り占めしてしまいそう、とヒカルは思った。

「風間先輩、僕、見てくださいよ！」

聡が響の側まで行き、先輩たちの間に割って入った。

「おお！綾瀬！随分伸びたなあ！」

響は聡の横に並んで立った。

「どうです？もう僕の方が...、あれ？」

「残念だったな、綾瀬。まだ俺の方が少しデカイみたいだ！」

うう〜っと悔しげな声を上げる聡に、もう少し頑張らって牛乳を飲めと笑う響。

「風間先輩すげえ〜！ピアニストみたいだった！」

次に響に駆け寄ったのは勇斗だ。

「ピアニストなんだったば...」

祐輔が呆れたように言うと、

「相変わらずだな、お前たち」

響はアハハと笑い、そのままヒカルや麻耶がいる席まで歩いてきた。

「元1年F組の賑やか組、伊藤に麻耶ちゃんに...」

と、響はひとりひとりの顔を見ながら名前を言い、ヒカルの隣に座る颯土を見た。颯土も響を見返す。

「群竹...」

「...お久しぶりです」

颯土は小さく呟いた。

響は颯土を真っ直ぐ見るが、颯土は視線を微妙にそらして目を合わせない。

「群竹がくれたコレ...」

響は胸元から鎖をひっぱり出した。先に8分音符がぶら下がったペンダントだ。

「あ、それ...」

ヒカルは自分の胸元から同じペンダントを引っ張り出した。

「それは...」

颯土が沖縄で買ってきたおそろいのペンダントだ。

あれはもう、4年も前のこと――。

まだふたりはこれを胸に...、

と、颯土は響の手の中で揺れるペンダントを見つめた。

「これはずっと俺の支えになってくれたぜ」

「そうですか...。よかった...」

「お前が撮ったこいつの写真も...な」

颯土がゆっくり顔を響に向け、ふたりの目と目が合った。

一瞬。

結婚パーティーに相応しくない緊迫した空気がふたりの周りを覆った。

こんな空気を纏いふたりが対峙したことが過去にある。その時の張り詰めたものを覚えているのはあかねだ。

「.....群竹くん」

あかねは響とヒカルの胸元で揺れるペンダントを見つめる――。

「ふたりともな――に怖い顔して突っ立ってんだあ？」

松山太郎の呑気な声がかかり、鋭く刺されるような一瞬の空気が一気に弛緩した。

「とにかくサンキュ！あの写真がなかったら俺はここには来てなかったぜ...」

――あの写真がなかったら...。

この笑顔をずっと守りたい。

ヒカルの想いを叶えたい。

そう願いながら撮った写真だったはずなのに――。

――ヒカル...。

颯土はヒカルを見た。

真っ直ぐに自分を見た颯土の目の中にたくさんの言葉がある気がした。

「颯土...くん...？」

ヒカルは思わず呟いた。

だが、颯土は次の瞬間にはヒカルから目をそらしていた。

――なに？今の颯土くんの目...。

いつもと違う人のようだったよ...？

なんだか、すごく痛かったよ...。

ヒカルは、もう既に自分から目を放し勇斗と喋る颯土を見つめた。

そんなヒカルを響は見つめていた。

◇

午後10時。

扉の前で新郎新婦に見送られて友人たちは帰り始めた。さすがにあかねは疲れているようで笑顔も少しひきつり気味。気を利かせた友人たちもその場で長居をしないように帰っていく。柏木たちも小夜子や綾瀬たちも去り麻耶や勇斗たちも順に出て、会場には響とヒカル、そして颯土が残った。

「ヒビク、いつまでこっちにいるんだ？」

「あさっての夜の便で帰る」

隣で響の言葉を聞いたヒカルは、

「あさって...？そんなに早く帰っちゃうんですか...？」

と、呟いた。

——あさってだなんて、もうすぐじゃない。

いま、やっと会えたばかりなのに...

「ライブを休むわけにはいかないんだ。水曜の夜にはボストンに戻ってないといけないから...」

響はヒカルを見下ろしながら申し訳なさそうに言った。

「ライブ...、そうですね。ヒビク先輩を待ってる人たちがたくさんいるんですね」

そう言いながら、ヒカルの心に寂しさが募った。

「どんぼ返りか...。すまないな、無理させちゃって」

「いや、全然...！」

無理なんかじゃないさ、ちっとも...、と、響はそっとヒカルの髪を撫でる。

「徐々に一杯...、といきたいところだけど、そんなに時間がないんじゃ野暮はやめておくよ」

田村はそんな響とヒカルを見比べながらニヤリと笑った。あのヒビクがね...、と心の中で呟きながら。

「12月には帰ってくるからその時はゆっくりな！あかねは身体大事にしろよ」

響は最後にあかねの肩に手を乗せてから扉をまたいだ。ヒカルもそのあとに続く。そして、

「それじゃ...」

颯土がそのあとに続こうとした時、

「あ、群竹くん...」

あかねが颯土の腕を取って呟いた。

「ん？」

颯土はあかねを振り返った。

「...いいの？」

あかねはひとこと呟いた。

颯土は一瞬、返答につまった。

「...これで、いいの？」

あかねはもう一度言った。

颯土の本当の心を、颯土が自分で気づく前からあかねは知っている。ずっとヒカルを想ってきたのは響だけじゃない。恋人でいた時間があったからこそ、あかねは今の颯土を悲しく思う。このまま、想いを伝えないまま長いひとつの恋が終わってしまうことをせつなく思う。ヒカルと響を否定したいわけじゃない。でも颯土の想いが叶うことを願わずにはいられない。それがどんな形であったとしても――。

言葉を躊躇していた颯土は、扉の向こうで並んで歩く響とヒカルを見つめ、

「...ああ」

ひとことだけ返して会場をあとにした。

背筋を伸ばし堂々とゆっくりと歩く颯土の後ろ姿。けれど、それが余計にせつなくてあかねの瞳が潤む。

「あかね？ 疲れただろ？」

田村があかねの肩を抱いて言った。

「うん...」

――傷つかないでいられる恋なんてないよ。

だから、もうこれ以上自分に嘘はつかないでね、群竹くん――。

あかねは田村に寄り添いながら心の中で呟いた。

◇

「これからどこ行く？」

最後に颯土がライブハウスから出て来た時、勇斗が言った。みんなで飲みに行こうと、さっき話がまとまっていたからだ。

ヒカルは響を見た。その視線に気がついた祐輔が、

「これから同窓会もどきをする予定なんですけど風間先輩も一緒にどうですか？」

響とヒカルを見比べて言うと、麻耶がすかさず祐輔の足を踏んづけた。

「痛て！ 何だよ、結野」

「風間先輩とヒカルちゃんは来ちゃダメ！」

麻耶は離れて立つヒカルと響をくっつけた。

「3年ぶりだもんね！ ふたりっきりがいいでしょ？」

「そりゃ、なあ...」

響はヒカルと目を合わせ鼻をかきながら笑った。

「え～？ ヒカルちゃんたちも一緒に行こうよお！ みんなでわいわいやろうぜえ～」

勇斗がさらに言うと今度は勇斗の足を思いっきり踏んづける麻耶。

「行ってえ！ 思いっきりヒールじゃん！」

「鈍感すぎ、あんたたちっ！」

「麻耶ちゃん、サンキュ！じゃ、厚意に甘えて今夜はヒカルを貸しきりにさせてもらうよ！」
響はアハハと笑う。

「ヒカルを貸しきり、かぁ。言ってみてえ～、そんな台詞！」

勇斗は半分涙目になりながら踏まれた足を持ち上げてさする。

「風間先輩が言うからキマルんでしょ。あんたが言ってもやらしいだけ！」

麻耶はピシャリと言った。

「やらしいってひどくない？みよ～に厳しいなあ、麻耶ちゃん...」

颯土はうつむいたまま皆の会話の外側にいる。ヒカルを見るとまだ呆然としたようにうつろな顔をして響の隣に立っていた。

——ヒカルを貸しきり...、か...。

「じゃ、ヒカル」

響がヒカルを促がした。

「...うん。じゃあね、みんな！また会おうね」

ちょうど青に変わった信号をヒカルは響に引っ張られるようにして走って渡り、ふたりはそのまま街の中に消えて行った。

「あ～あ、行っちゃったよ...」

勇斗がふたりの後ろ姿を見送りながら言った。

「やだぜえ、半年後ぐらいになって今度はヒカルちゃんが、結婚します赤ちゃんが生まれます、なんてことになったら...」

颯土の中に一本の激しい電流が走った。

「お、おい！なんてこと言うんだよ！」

「だって、ありえないことじゃないでしょ～？愛し合ってる男女だぜ？」

勇斗はマジメな顔をして言う。

「それならそれでもいいんじゃない？友達が幸せになっていくのって嬉しいじゃない。特にヒカルちゃんは3年間もずっと風間先輩を待ち続けてやっと再会できたんだから！」

麻耶の言葉が追い討ちをかけるように颯土の心にグサグサと刺さる。

ヒカルが...

ヒカルが風間先輩と...

——昨夜はなんだかそわそわしちゃって眠れなかったんだあ。いろんなこと考えちゃって。

——あかねちゃん、お嫁さんと同時にお母さんにもなっちゃうんだもんね。

昼間、ヒカルが何気なく言っていた言葉が大きな意味を持って蘇った。

——ピカピカに磨きをかけて颯土くんに見せてあげるよ、とびっきりのヒカルちゃんを！
——俺に見せてくれるんだ？じゃあ、楽しみにしてるよ…。

ヒカルが磨く時——。

手の届かないところに飛び立ってしまう日が、今夜なのか——？

——……。俺がうろたえたって仕方がない…。

ヒカルと風間先輩は愛し合う恋人同士。ふたりに何が起ころうと俺には関係ない。

——カンケイ、ナインダ…。

「俺は…、帰るよ」

どこの居酒屋に行こう、何食べようと話す麻耶たちは話を止め、

「なんでー？群竹ちゃんまで！」

勇斗は叫び、

「やっぱり相変わらずなんだね、群竹くん。付き合い悪すぎ」

麻耶はシビアに言い放つ。

——もう、今は飲んで騒ぐ気持ちにはなれない。

相変わらずの俺かもしれないけど、やっぱり俺は…。

「すまん、付き合い悪くて…」

颯土は手を上げて駅に向かって歩きだした。

「群竹…、急にどうしたんだ？」

祐輔が呟くと、

「さあ…」

麻耶は首を振った。

勇斗はしばらく颯土の背中を見守っていたが、

「…じゃ、今日はボクも帰るわ！ゆうちゃんと麻耶ちゃんはゆっくりして行ってよ！」

と、後を追いかけた。

「うそだろ?! 大久保！」

「麻耶ちゃん、またね！おーい、群竹ちゃん、待てよ！」

勇斗は颯土に追いつきその肩を叩いて一緒に歩きだした。

残された祐輔と麻耶は気まずそうに顔を見合わせた。

湿った風が一陣、夜の横断歩道を渡る人々の間を縫い何処へともなく飛んで行った。

皆とライブハウスの前で別れたあとの響とヒカルは、黙ったまま並んで夜の歩道を歩いていた。

ヒカルの位置は昔と変わらない。
見上げる響の場所も変わらない。

ずっと、こんなふうにして歩くのが当たり前だったあの頃がやっと再び戻ってきた、ということを実感するには、まだ突然の再会の驚きが遠ざかっていないヒカルだった。

ふわふわと浮いているような気持ち。
足が地についていない。

ヒカルは少しだけ前を歩く響の、後ろで束ねた金色の髪をぼんやりと見つめながらこっそりと自分の頬をつねってみた。それが案外力が入りすぎて、

「痛い！」

ヒカルは立ち止まった。

「何やってんだ、お前...？」

「なんか...、夢をみているようで、ヒビク先輩とこうやって一緒にいるのが信じられなくて...」

ヒカルはつねった頬を撫でながら、

「...でも本当に夢じゃないみたい」

と、微笑んだ。

響はニヤッと笑い、ヒカルの手を取り自分の頬にあてた。

「俺にもやって。思いっきり！」

ヒカルと並んで歩く今現在をしっかりと現実のこととしてとらえたい。寝不足と時差ボケを自分の中から取り払ったとしても、やっぱりふわふわと地に足が着いていない気がしているのは響も同じ。

「いいんですか？いきますよ？」

ヒカルは響の頬をぎゅっつつねった。

「いてててっ！」

「あ、すみません！思いっきりやっていって言うから...」

ヒカルは慌てて赤くなった響の頬を撫でる。

歩道の真ん中に立ち止まり頬をつねる変なカップルを、道行く人々は不思議な顔をして振り返る。

ふたりは顔を見合わせて笑った。

「...夢じゃないってことだ。俺はここにいるヒカルもここにいる、一緒に歩いているのさ、確か

にな！」

「うんっ！」

「ヒカルはこれからどうしたい？」

「先輩はどうしたいですか？」

「俺は…」

——決まってるだろ…。

「こう、したいかな…」

響はヒカルの右腕を取り、その腕を自分の左腕に絡ませ笑った。

「次、ヒカルはどうしたい？」

「私…、先輩と歩きたい」

「歩く？」

「うん。なんにもしなくていいから、こうやって並んで…、腕を組んで歩いていたい」

高校時代は恋人同士ではなかった自分と響。あかねが颯士の腕に自分の腕を回して歩く姿や、校庭の花壇の前に座りながら部活のランニングをしている颯士を待つ姿を見るたびに、自分と響をそれに置き換えて夢を見ていたあの頃の自分。3年半前の雪の日、学校の脇の歩道で抱き合っ
て別れてから今日の今まで、響とは恋人としての時間を一緒に過ごしていない。

——だから、

ずっと一緒にいたい。

ヒビク先輩がアメリカに帰る日まで、恋人としてずっと一緒にいたい。

会いたくて、触れたくて待っていた3年半だから…。

「…そうか。じゃあ、このまま歩こう」

響は再びゆっくりと歩きだした。

「うん！」

ヒカルは響の腕に寄り添いながら響の歩調に合わせて歩く。

5ヶ月後だと思っていた再会が、こんなにも早く実現できたことを何に感謝したらいいのかわからない。今日は朝からずっとそわそわ落ち着かなくて何かが起こるような予感がしていた。どこかで何かを意識しながらいつもよりも少しだけ丁寧にお化粧をした。ワンピースなんて着てみた。パンプスもはいた。あかねが田村のために素敵に磨くように、今日は自分も誰かのために磨いてみたかったのだ。

——今日は私もめいっぱいお洒落しちゃおう～！ピカピカに磨きをかけて颯士くんに見せてあげるよ、とびっきりのヒカルちゃんを！

颯土にはあんなふうには言ったけど、

でも、

この再会をどこかで期待していたのかもしれない。

親友田村のウェディングパーティーには、どんなことをしても来るはずの響だと、心のどこかで信じていたのかもしれない――。

ヒカルは存在を確かめるかのように響を見上げた。

「ん？どうした？」

「いえ...」

ヒカルは首をふり、響の腕にぎゅっと力を込めてしがみついた。

左側で腕を取り寄り添い歩くヒカルの髪の良い香りが、湿った風と溶け合って時々響の鼻をくすぐる。

並んで歩くのはあの頃も当たり前だった。いつも自分の左側。そしてヒカルの位置は自分の肩。同じように見下ろして笑ってふざけて喋って...

ヒカルを独り占めしたい。

みんなに愛されているヒカルを自分が縛ってしまいたい。何処へも行かないように宝の箱に閉じ込めて鍵をかけてしまいたい。

そう、心の中では満たされない己の想いに苦しみながら。

でも、今ヒカルはこんなにも強く自分にしがみついている。自分を見上げ自分にだけ微笑んでいる。

――だからもう、

ただ、愛しい――。

この想いだけでいいんだ。

満たされない想いに自分を縛る必要はないんだな....。

「ヒビク先輩」

ヒカルが響を見上げて言った。

「ん？」

「私、さっきからずっと高校時代の私たちのことばかりが浮かんできちゃって。全然ムードがなかったなあって」

響は、はっ！と笑った。

「確かに、毎日毎日ドタバタしてたな。俺もさっきから高校の頃を思い出していたよ」

「やっぱり先輩も？」

「あの頃のヒカルちゃんは、生意気で俺に手を上げてばっかだったなあ、ってね！」

「それは、先輩が意地悪だったからですっ！」

「意地悪？したかなあ...？」

響は星空を見上げながら、とぼけたように言う。

だが、わかっている。

想いを隠そうとする時に心のない態度をとらなくてはならなかったあの頃の自分。今はそんな自分さえもが愛しく想う。あの頃の苦悩も痛みも全て抱きしめることができる。今日は懐かしい連中たちと再会したから余計にそんな気持ちになるのかもしれない。

田村は相変わらずだった。何年会っていなくても中学の頃からの自分と田村のフィーリングはそのままだ。

ただ、あかねが田村の横に寄り添っているのは少しだけ不思議な気がした。響の中ではまだ、いつも颯土と仲睦まじくいるあかねの印象が強い。校庭でも昇降口でも廊下でも、あかねはあたりまえのように颯土と一緒にいた。

その颯土は...

目と目が合った一瞬で、響は颯土の想いを確信した。

だから、あんなことを言ってしまった。

——あの写真がなかったら俺はここには来てなかったぜ...

颯土はきっと別の意味に取っただろう。

だが、あれは言葉のままの意味で言った。

あの写真に写し出された颯土の想いに焦り逸る気持ちを抑えられなくて。

ヒカルを見た颯土の目の中には、想いに蓋をしようとして必死になっていたあの頃の自分と同じものがあつた。それがあのパーティー会場ではダイレクトに伝わってきた。

——けれど、群竹は変わっていない。

昔からあんな目でヒカルを見ていたし、ヒカルの側にいる俺を睨んでいた。あの頃はその奥にある想いに気がつかなかっただけだ。

自分も、そして颯土も——。

響はヒカルを見下ろした。

ヒカルは気がついているのだろうか、颯土の想い。

昔から変わらない、颯土の想い——。

「なあ、ヒカル」

「はい？」

「群竹さあ...」

「颯土くん？」

響の口から颯土の名が出たことに対してヒカルは不思議な顔をする。

「颯土くんがどうかしました？」

「いや...、」

——わかってないな、ヒカルは。

そういうところは、ほんと鈍いよなあ、昔から...。

響は苦い笑いをかみしめる。

「——群竹にとっちゃ、あかねの花嫁姿は複雑だっただろうな...」

過去の恋人は別の男と結ばれ本当に愛しい相手は...、

響はヒカルを見る。

「あかねちゃんと颯土くん、あの席で色々話していました。颯土くんはずっと優しい顔をしてた。そんな颯土くんには私は感動しちゃった...。それに...、」

ヒカルはふと言葉をとめた。

「ん？どうした？」

「私にとっても、あかねちゃんのウェディングドレス姿はなんだかとても複雑だった...」

一番近くにいた親友のあかねが大人になってしまったことが、嬉しくもあって寂しくもあって羨ましくもあって...。

「あかね、あれで半年後は母親だからなあ...」

響は意味深に空を見上げて言った。

「やること早すぎ...、って感じがどうもぬぐえない。変な妄想に走ってしまう俺...」

「やだ、先輩っ！」

冗談交じりの響の言葉にヒカルは可笑しいくらいに反応し、唐突に立ち止まった。そのヒカルの反応に戸惑い、響は、

「だ、だって、俺にしてみればあっという間の展開なんだよ、あのふたりはっ！」

と、自分の前言を言い訳した。

真っ赤になって下を向きながら再び歩き出したヒカル——。

今ここで、抱きしめてキスしたら...。

——先輩はどうしたいですか？

さっきの問いかけの本当の答えはこれだった。

ずっと想っていた。

ヒカルに会ったら息もつかないうちに抱きしめてキスしたい。心の中にいっぱいになって溢れそうになっている想いを、ヒカルの唇に伝えたかった。

ただ、愛しいだけ。

他にはなにもない。

それは響の真実だ。

けれど――。

群竹...か...、と響は心の中で独り呟いた。

上野のパーティー会場からずいぶん歩き、いつの間にか言問橋を渡っているふたりだった。橋のもと、道路を挟んだ向こう側の水月の珈琲ショップはまだ明りが中に灯っているが既に看板がしまわれている。

ヒカルは足を止めた。

「あそこが水月さんのお店」

「群竹の写真があるっていう...」

「うん。今夜はもう閉店しちゃったけど、今度ヒビク先輩を水月さんに紹介したいな」

「.....」

小さな格子の窓の向こうに微かに映る人の影を、響はぼんやりと見つめながら思う。

ここは自分の知らない時間が流れた場所。

3年前には存在していなかった珈琲ショップ。

ここでヒカルと颯土は何を語り何を想い、どんな夢を見ていたのか――。

「先輩？ どうしたの？」

「いや...」

響は首をふり再び歩きだした。

橋を渡ってからは川沿いの道を真っ直ぐ歩いた。相変わらず湿った風が隅田川の水の匂いを運んでくる。その匂いは響を過去へと誘（いざな）った。あの頃は意識していなかった空気。毎日何気なく吸い込んでいた匂い――。

「...やっぱり、ここに来ちゃったね」

たどり着いた場所に立ち止まってヒカルは言った。

「ああ...」

響は門が閉まった中の校舎を見つめた。

「何となく歩いてきて、たどり着いたのがここか」

本城高校。

ふたりが出会った場所。

そして、毎日一緒にいた場所――。

「あの歩道だったな」

響は門の先の歩道を指差した。

「うん」

「あそこで俺はヒカルに約束したんだよな」

「うん...」

――ヒビク先輩、だいすきっ！

ヒカルは自分の声が聞こえた気がした。

「あの時、ヒビク先輩に会いに来てよかった...。私、本当はもう諦めていたから来ないつもりでいたんです...」

響はヒカルを見つめた。

「でも、あかねちゃんが来てくれて...、卒業式に行かなきゃ絶交するよ！って...」

「あかね、そんなこと言ったのか...」

自分が渡した『Shine』の楽譜を見て、粉雪の中をヒカルの家に走ったあかねを響は想像した。

「あかねちゃん、音楽室で『Shine』を弾いてくれた。ヒカルちゃんの心は風間先輩に伝えてあげないの？って、必死になって泣きながら...」

「そうだったのか...。じゃあ、ヒカルの気持ちを聞けたのはあかねのおかげなんだな」

「あかねちゃんが来てくれなかったら先輩にも会えずに別れて、あとで『Shine』を見て泣いていた。ずっと今も泣いてたかもしれない...」

「そっか...」

あの粉雪の日から知り得なかった互いの時間をもどかしいと思う。あの時から、`ふたりの時間、は進んでいない。ぽっかりあいている互いの3年半を埋め尽くしたい――。

響は再び校舎に視線を戻した。

もちろん明りなどついていない。昇降口にもしっかりと鍵がかけられている。部舎の横に建つ用務員の部屋も静まり返っていた。

「ポッターも今夜は留守かな？」

と、響は言った。

「ポッター？懐かしいっ！」

用務員のことをヒカルたちはポッターとあだ名をつけて呼んでいた。

生徒の行動を監視し少しでも挙動不審な生徒を見つけると、ピーッと笛を吹きながら太った体を揺すりどこからでも飛んで来て箒で尻を打つ本城高校の名物用務員だ。

「もう寝ちゃったんじゃない？こんな時間だし」

ヒカルは腕時計を響の目の前にかざした。

「11時半か...」

「先輩、疲れてないですか？時差ボケとかないの？」

「おもいっきりあるさ！もう丸一日以上眠ってないし」

――でも疲れてなんかいるわけない。

ヒカルがここにいて俺に触れていて...疲れたりするわけがない。

「なあ、ヒカル」

響は門の中を見つめてニヤッと笑った。

「えへ」

と、ヒカルも頷いて笑う。

そして履いてるパンプスを脱ぎ、門の中へと投げた。

「先に行きますよ！」

「ああ！」

ヒカルは胸の高さの門に手をかけ、よっ！と掛け声をかけながらよじ登った。そして、ストンと向こう側に飛び下りてパンプスを手にした時、響が同じようにして向こう側からやってきた。

「相変わらずおてんばだな、ヒカル。パンツが見えたぜ！」

「嘘でしょう！？」

ヒカルは今更スカートを気にする。

響は、冗談！と笑ってヒカルの手を引いた。

「あの頃はポッターの目を盗んで抜け出すことを考えてたけど、今は忍び込んでるんだから面白いよなあ」

響はそう言いながら、用務員室の前を忍び足で通過し部舎の横を通り、校舎の前の花壇を過ぎ校庭の端の梅の木の下へ向かった。ここからは校舎も部舎も学校全体が見渡せる。

見渡す学校は真っ暗で静まり返っていた。明りはひとつもついていない。

梅の木の下に立ったまま響は音楽室の窓を見上げた。卒業する前、最後に音楽室に行った日のことが蘇る。

ヒカルは響の視線をたどり同じように音楽室を見上げた。あの部舎の二階から斜めに見た音楽室の窓の向こうで、背中を向けてピアノに向かう3年半前の響の姿が目には浮かぶ。

「『Shine』はあの音楽室で出来上がった曲なんだぜ」

呟く響をヒカルは見つめた。

「ヒカルが部舎の二階から落ちたあの日に、な」

「え...？」

響の弾くピアノをはじめて聴いたあの日。

音楽室の扉の前で廊下に座りこんで、声を殺して泣いたあの日に...？

「...あの日、先輩がジャックさんの曲を弾いてるのを聴いた」

今度はヒカルが呟いた。

「え...？」

「雪乃先輩からヒビク先輩がアメリカに行っちゃうって聞いて私は先輩を探し回ったの。そして音楽室で...」

あの時のヒカルの涙の跡は、そのためだったのか、と、響は今更心が痛んだ。

思い合っていないながら伝えることができなくて、すれ違ってしまったあの時の自分たち。

「先輩、私たちって可愛かったですね！」

ヒカルは笑った。月明りの下でその太陽の笑顔が輝く。

響はヒカルを見つめる。昔と変わらないこの笑顔を改めて心に上書きしたいと思う。

「先輩が3年生の時に使っていた机、私一年間使ったんですよ」

「俺の机...、って、まさか?!」

「ふふ。素敵な文字が刻まれた机！」

「わっ！な、なんでヒカルが...?!」

響はうろたえた。

確かに自分は机に文字を刻んだ。ヒカルが表現する`素敵な文字、を。翌年、同じ机を誰かが使うなんてことを考えもせずに。

「先輩、可愛いことするんだなあって感動しちゃった」

「ま、参ったなあ...」

——確かに可愛かったな。

伝えられない想いをせめて机に刻んでおこうだなんて、あまりにも可愛すぎるぜ、あの頃の俺...。

「先輩が卒業して3年半が過ぎたけど、私たちの思い出ってまだあの頃のことだけ...」

響はヒカルを見つめた。

「私、これからヒビク先輩と同じ時間を生きたい。先輩と同じ夢を見たいんです。だから...、私になんでも話してくださいね」

少しだけ寂しそうに笑うヒカルを響はじっと見つめた。

音楽室、教室、部舎...。

ここにはたくさんの思い出がある。ヒカルと自分が紡いできた思い出たち。

ここで出会い、ここで別れ、今また再びここから——。

「ピーッ！そこのふたりっ！」

突然の声に驚いて、ヒカルは きゃっ！と叫んで響に抱きついた。

「騙されてやんの！やっぱヒカルだよなあ！」

ヒカルを抱きとめながら響はアハハと笑った。

「もう！ポッターかと思った！」

文句を言い手をあげて離れようとしたヒカルを、響はそのまま力いっぱい抱きしめた。

――やっと、やっとヒカルを抱きしめることができた。

本物のヒカル。

長い長い俺の3年半だったけど、今――。

ヒカルの匂い――。

体育祭の夜、ビリヤード場で眠るヒカルを抱きしめた時と同じ、粉雪の歩道で抱きしめた時と同じ匂い。

柔らかくて清らかな匂い――。

こんなにもヒカルは華奢だっただろうか？

こんなにも儂かっただろうか？

いや、違う…。

あの頃の俺たちには見えない壁が存在していた。プライドだったり意地だったり、それは俺が勝手に作っていた壁だった。その壁に邪魔されて本当の俺で本当のヒカルを抱きしめていなかった。

今、俺に自分の全てを委ねてくれているヒカル。俺を信じて、俺だけを見て。

だから、こんなにも小さくて儂い――。

抱く腕に、よりいっそうの力を込める響。

響の匂い――。

熱を出して自転車で送ってくれた時に着せてくれた制服のブレザーと同じ匂いが、ヒカルをまるごと包み込んだ。

甘くて優しくて、すこしだけせつない匂い。

あさってになったら響は再び機上の人。

ピアノ界の新プリンス。

響のピアノを待つ人達がたくさんいるアメリカ――。

ずっと心のどこかで消えない塊がある。

こんなに強く抱きしめてもらっていてもぬぐえない不安がある。

もう、一瞬だって離れていたくないよ――。

このままアメリカに帰らないで欲しいよ...！

ヒカルは響の胸に顔を押し当てて、もっともっと近くにいかうとくっついた。

――ずっと、こんなふたりを夢見ていた。

これが、私が望んでいた未来――。

「ヒカル」

抱きしめたまま響はヒカルの名を呼んだ。

今夜はここで、この梅の木の下で3年半分の話をし合おう。

そして互いの知らない時間を消して満たそう。

一日じゃきっと足りないだろうけど、校舎を眺めながらヒカルの肩を抱いて、ふたりの過去と未来の全部を同じものにしよう――。

響はヒカルの顔を両手で包んだ。月の微かな明りの下で潤むヒカルの瞳に自分の顔が映りキラキラと輝く。

やがて、校庭に伸びたふたつの長い影がゆっくりと重なった。

溢れるほどの想いを、その唇に伝え合うために。

「...どうして、伊藤たちと行かなかったんだ？」

冷房の効いたフロアで熱い珈琲カップを手にしたまま、颯土は勇斗を見もせずに行った。
いつもの席。

ヒカルが笑っている窓辺のテーブル一。

今夜はひとりになりたかった颯土だ。

はじめてのフロアをぐるりと見回していた勇斗は、やっと口を開いた颯土を見つめ、
「群竹ちゃん、ひとりになりたいてって思ってただろ？だからだよ」

と、アイス珈琲の入ったグラスを持ち上げ、氷をカラカラと鳴らした。

――わかってるんなら、ひとりにしておいて欲しかったぜ...

颯土は心で呟きながら、口では、

「...べつに、俺はなんでもないぜ。ただ、なんとなく今夜はみんなと飲む気になれなかっただけだ」

と、言う。

「それがおかしいって思ったの。普通、なんかしっくりいかないことがあったら飲んで忘れちゃおう！って思うだろ？なのに、さ」

何でもない顔をしながら勇斗は核心をつく。

それが颯土には痛かった。

「...知らないぜ？伊藤と結野がいい雰囲気になっちまってもさ」

「大丈夫さ」

勇斗は笑った。

――相変わらず脳天気だな...

何があるかわからないんだぜ、恋愛ってやつは....

でも、そういう性格が羨ましいって思う。

特に、今夜みたいな日は...

颯土は手の中の珈琲カップを意味もなくただ見つめる。

「群竹ちゃんさ、無理すんなよな...」

勇斗のアイス珈琲は既になくなり、グラスでわずかに残った琥珀色の液体のしずくが氷の山を滑っている。

視線をアイス珈琲のグラスに移し、流れる雫をぼんやりと見ていた颯土は、

「俺が何を無理してるんだよ...」

と、呟いた。

勇斗はそれ以上何も言わず再びフロアを見渡し、飾ってある写真を眺めている。

カウンターの中では水月が閉店後のかたづけをしながら時々颯土を見つめていた。

その水月の視線を、颯土はさっきからずっと感じていた。

何となくここに足が向いてしまったのは、水月の温かいまなざしに会いたかったからかもしれない。何も喋らずとも、ただ同じ空間に一緒にいるだけで心を落ち着かせてくれるのが水月だ。

水月はちょうど看板をしまおうとしていたところだった。

だが、颯土を見た水月はいつものように微笑んで、『さあ、どうぞ』と案内してくれた。もう店の中には誰もなく、珈琲の残り香が優しく漂っていた。

突然胸を締め付けられ、思ってもいなかったその感覚に颯土はうろたえた。

珈琲の薫りに条件反射して浮かんできたのは、はじめてここにヒカルと共に写真のパネルを持って来た春の日のことだ。

涙でぐちゃぐちゃになりながら、自分にガッツポーズをくれたあの時のヒカルの笑顔は、今そのままこの店全体に染みこんでいる。店の中の何処を見てもヒカルがいる。颯土くん、と呼ぶ声が聞こえる。

別にヒカルと今生の別れをしたわけでもないのに、どうしてこんな...

と、颯土は混乱した。

苦しくて、痛くて、勇斗がいなかったらカウンターにすぐさま突っ伏していたかもしれない。

「あのモノクロの写真、3年C組？」

勇斗は奥に飾ってある『モノクロの教室』を指差して言った。

「ああ...」

颯土は顔をフロアの奥に向け、卒業式の日みんなと校庭で写真を撮ったあと、思い立ってひとり教室に戻ったことを思い出した。

仲間、友達、そんな言葉を聞くのも嫌だった自分が仲間と共に卒業の記念写真を撮り、かけがえない宝物を手にして学び舎を去ろうとしている時に、心ともう一度教室を見たくなった2年半前の卒業式の夕暮れ――。

黒板にはクラスメートがそれぞれ残したメッセージがいっぱいに書かれ、あるじたちが去った机は余韻を残したままそこに並んでいた。そのひとつひとつに手を触れながら教室を歩き、自分が使っていた一番うしろの机の位置から何となくファインダーを覗いたとき、アングルにおさまったのは真ん中のヒカルの席だった。

――あの机には確か、特別な文字が刻まれていたんだっけ...。

はじめてヒカルがその文字を颯土に見せたのは、3年になってすぐの4月だった。

『群竹くん、見て見て！これ、ヒビク先輩が使ってた机なんだ～。F組にあったのを伊藤くんが引きずって持ってきてくれたの！』

ヒカルは嬉しそうにはしゃいで颯土に訴えた。

『伊藤が？わざわざそんなことしなくても...』

廊下の端のF組から机と椅子を引きずりながらやってくる祐輔の姿を想像し、颯土は呆れて言った。

『ここにね、素敵な文字が刻まれてるんだよ～』

ヒカルはしまりのない笑みを浮かべながら、颯土の頭を机に押し付けるようにして顔を近くに寄せた。

LOVE HIKARU

右上の端に小さく刻まれた文字。

『あほらし…。風間先輩ってすげーや……。こんなことやっちゃう人だったんだ』

颯土は半分冗談に、けれど半分は本気で言った。自分だったら絶対にこんなことしないし出来ないだろうと何故か赤面しながら。

『ひっどーい！群竹くんはいいよ、あかねちゃんといつもらぶらぶだもんね！でも、私はね、この机が私のとこにやってきてくれたことだけでも凄く感動してるんだよ！運命を感じてるのに！』

当然ヒカルは膨れた。

『運命ねえ...』

そういうもんか？と、顔に書いた言葉をヒカルは読んだらしい。

『あんた少し、デリカシーってやつを勉強した方がいいよ！女の子っていうのはね、ちょっとしたことで浮くし、ちょっとしたことで沈むの！まったくもう！』

『はいはい…。浅倉と風間先輩は運命の糸で結ばれてます...』

面倒くさそうに言った言葉に、気持ちが全然こもってないっ！とヒカルは怒り、そのあとは膨れたまま一日中口をきいてくれなかった。

そんなことを思い出しながら、颯土はヒカルの机の横に立ち顔を近づけて文字を確認すると、

『LOVE HIKARU』

『LOVE HIBIKU』

いつの間にか文字はふたつ仲良く並んでいた。

あのヒカルが、なんて可愛いことをしてるんだらうと、思った。

自分でも分けのわからない愛情のようなものが込み上げてきて心が温かくなった。並んだ文字じゃなく、ふたりの想いが愛しくて。

この小さなヒカルの想い、いや、ヒカルと響の想いをさりげなく残しておこう。いつになっても褪せることがないように最初から色なんか無いモノクロで。

フィルムを入れ替え、ヒカルの机に焦点をあわせてシャッターをきった一枚がああ『モノクロの教室』だ。

あの頃はそんなふうに思っていた。ヒカルと響ふたりの想い、輝き、歴史を、ふたりが自分に与えてくれたさまざまな光を、美しいまま己の中にも刻んでおきたいと思っていた。いや、つい最近までそう思う心に偽りはなかったはずだ。

トドケ、ヒカルノオモイー。

ーあのひこうき雲の写真を撮った時だって…。

颯土はポケットにある星のロケットを握り締めた。それがひんやりとした感触を手のひらに伝えた。

「……」

思わずため息をついて、颯土はテーブルに頭をつけていた。

ものすごい脱力感と速すぎる心臓の鼓動。

ーどうしてなんだ？どうして、こんなにも俺は…。

颯土は目を閉じた。溢れてくるものを外に出さないように堅く。

「群竹ちゃん、眠くなったのかい？」

写真を見回していた勇斗は目の前でテーブルに伏せた颯土を見て呆けた言い方をした。

「…ちょっと、疲れた」

大嘘だ。

でも、そう言うしかなかった。

「群竹ちゃん、今日はいろいろあったもんなあ」

勇斗はわかったような、わかっていないような言葉を出してから席を立った。壁にある颯土の写真の間近でひとつひとつ見ることにしたようだ。

「この影ぼうし、いいねえ。優しいよ…。恋人同士の影、かなあ…？」

勇斗は、まだテーブルに頭をつけたままの颯土を振り返る。

—写真を撮ったのは俺だけ…。

一緒に写っている影が恋人じゃないなんてこと、わかるだろう…。

勇斗の言葉に心の中で反論する颯土。

ヒカルと一緒に墨田公園で`ぶらぶら撮り、をした日のことを思い出す。何でもない日常を愛しく思ったあの時。ただそばにいてだけで、自分の中の全てが満たされた。

—恋人なんかじゃない…。

そんなの最初からわかっていたことだろう？

あいつは、最初からずっとヒビクセンパイオンリーで、俺はそんなあいつをずっと見てきたじゃないか。粉雪の卒業式に歩道で抱き合っけキスしたふたりを見たじゃないか。

あんなにもキレイで温かい光景を—。

—もうひとつの粉雪の夜、あいつがしまいかけていた風間先輩への想いを呼び戻させたのは俺自身だけ…？自分の望み通りありのままに生きろ、なんて言ってさ…。

そして1年前の夏は、俺はここで水月さんに言い切ったよな？あいつの笑顔を見ていたいから影のままでいいんだ、って…。

今までの、その時その時に思ってきたことは嘘なんかじゃない。

—なのに、なんなんだよ、今の俺。なんでこんなに苦しいんだよ…。

あいつが待ち望んでいたヒビクセンパイが帰ってきたことに、どうして喜んでやれないんだよ。あいつが望んでいた未来が現実になったのに。それが俺の望む未来だったのに。あの笑顔を守りたかったんだろ…？あいつの笑顔だけを俺は見ていたかったんだろ…？俺は、ずっと…。

ブーン、ブーン、とフロアの大きな時計が午前0時の鐘を鳴らした。

—…今ごろ、ヒカルは何処にいるのだろう。

つい今朝までのヒカルとの時間が、もう遠い昔のように思えた。

このままもう、二度と手を触れてはいけない人になってしまうのか—。

真夜中の闇と共に絶望感が押し寄せてくる。

ありふれた時間があまりにも満たされ輝いていたから、失われていく現実を見つめることが出来ない…。

——こんなにも、俺は弱い…。

「群竹さん、ずいぶん辛そうですね…」

水月が颯土の元にサンドイッチを届けに来た。

「残り物のパンでこしらえたものですけど、よかったですらどうぞ」

「ありがとうございます！」

嬉しそうに返事をしたのは勇斗だ。

颯土は顔を上げることもできずにいた。今顔を上げたら濡れた顔を勇斗に見られ、あとで何を言われるかわからない。

「人は感情に支配される生き物ですからね。辛い時は逆らわずその中に埋もれるのもいいかもしれませんが。決して無駄にはならないことだと思いますから…」

水月は静かにそう言ってカウンターに戻っていく。

——…そんなこと、今は言わないでください。

今、俺は必死になってこのどうしようもなくやっかいな闇を追い払おうとしているのだから——。

颯土はテーブルに顔を付けたまま心の中で呟いた。

涙が溢れて止まらない。弱い自分が悔しい。二度と闇は来ない、といつか水月に言ったはずなのに、絶望と闇を恐れる自分が情けない——。

「群竹ちゃんも食えば？うまいぜ！」

勇斗はががつとサンドイッチをほおぼる。

「…お前、全部食っていいよ」

颯土はやっとそれだけと言った。

声が震えていたかもしれない。

それを、勇斗に悟られたかもしれない——。

「そう？じゃ、遠慮なく！」

勇斗はいつもと変わらない調子で言う。だが、向こうを向いている颯土の肩が、さっきから小刻みに震えていることを勇斗は知っていた。

「…今夜はさ、オレんちに泊まれよ、な」

勇斗はサンドイッチを口に入れたまま、もごもごと言った。

「……」

あるじのいない隣の部屋を感じたくない…。

ひとりで眠れぬ夜を明かし、何時になっても明かりのつかない、朝になってもカーテンの開かない隣りの部屋を気にしたくない。

だから勇斗の言葉に少しだけ救われる思いがした。

——今夜、大久保がいてくれてよかったのかもしれない…。

今、颯土はそう思えた。

「男同士、朝まで語り明かそうぜ！」

勇斗は颯土の肩をポンとたたく。

顔をつけたままのテーブルの木の薫りを全身で感じながら、颯土は微かにうなづいてみせた。

月明かりの下で長い間ひとつになっていた影がふたつに分かれた時、星がひとつ流れて落ちて行った。ヒカルと響は同時に空を見上げ、その流星を見た。

「...流れ星ってロマンチックだと思っていたけれど、少しせつないですね...」

「せつない...?」

流星を見てせつない、と表現するヒカルに響は少し不思議な感じを抱いた。

「この間、子どもたちに『星の涙』という絵本を読んであげたんです。蛙の親子が流れ星を見るんですけど、お母さん蛙が子どもに、『星がひとつ流れる時はどこかで誰かが哀しい思いをしていて、その哀しみが星の涙になって流れるのよ』と言う場面があったんです」

ヒカルは空を見上げて言った。

「その時に、『哀しんでる人は星の涙と一緒に消えちゃうの?』って、ひとりの園児が言った言葉が妙にせつなくて...」

響も空を見上げた。

——どこかで誰かが、か.....。

『風間先輩も...早くっ!』

叫ぶ声とあの時の颯土の顔が蘇った。

ヒカルが部舎の二階から手すりごと転落したあの日、駆けつけた自分を救急車の中から見つけた颯土がとっさに叫び、手を差し出した——。

あの時の颯土の真剣な目。

『群竹がいてくれてよかったな...。あいつを追いかけてくれてよかったよ...』

追いかけたのは颯土だった。

ヒカルの涙を捨てておけずに、必死に追いかけたのは颯土だった。

それが、あの時は悔しかった。

だが、その涙の原因を作ったのは自分....。

『俺、間に合わなかったから...』

うなだれた颯土。

自分に全ての責任があるように、自分を責めてうつむいて。

『風間先輩、あいつと何かありました？』

あの時はどうしてそんなことを訊くのかと思ったが、ヒカルの心を誰よりもわかっていた颯士だからとっさにあんな言葉が出たのだろう。それだけ、ずっと颯士は心のどこかでヒカルを想っていた。

――あいつの想い。あの頃からずっと、変わらない想い。
今夜、涙を流しているのはあいつなのかもしれない。
あいつの想いが星の涙になったのかもしれない……。

「先輩？どうしたの？」

星空を見上げながら、黙って思いを巡らしている響にヒカルは言った。

「いや…」

ヒカルを抱きたい。いのちといのちでふれあい結ばれたい――。

……と、

長いキスの間に込み上げていた衝動が静かに沈んでいった。

響はヒカルを見つめ、そしてもう一度抱きしめた。無意識に腕に力がこもる。

「今日が私たちの新しい思い出のはじまり…ですよ？」

響の大きな腕に包まれながらヒカルは確認をするように呟いた。

「…ああそうだ。俺とヒカルの、な」

響は、`俺とヒカル、ということばに力を込めた。

今はただ、ヒカルを抱きしめていよう。やっと触れ合えたふたりだから、これからはじまる俺とヒカルの未来だから…。

そして――。

共にいた過去が蘇り、同じ現在を呼吸し、肩を寄せ合い、語り合った夜が明けた。校舎の背中がぼんやりと白く霞んでいる。

「朝になっちゃった…」

ヒカルは呟いた。

梅の木の下に座り、懐かしい校舎の匂いを感じながら互いの3年間をあますことなく語り合うつもりでいた。響に会ったら、ヒカルに会ったら、あれもこれも話そうと思っていたことは結局何も話せなかったふたりだ。

「もっともっと話したいことがいっぱいあったはずなのに...」

ヒカルは明るくなった空を見上げて言った。

明日には響はアメリカに戻ってしまう。一緒にいられるのはもう一日しかない...

夏の朝日はぐんぐんと昇り、もうどこにも暗い空は見えない。さっきまで真っ暗だった校舎にも光が射し、懐かしの学校は昔のままの姿を現した。

「そろそろポッターが得意の箒を持ち出して掃き掃除をはじめるとは思えないな」

と、響は笑う。

「部活の子たちもやって来ますね」

「それこそ、挙動不審な俺たちになっちゃう...。ヒカルは帰らなきゃ、だな。家の人でも心配してるだろうし...」

「あ...」

無断外泊をしてしまったことにヒカルは今始めて気がつき、心配していないはずがないだろうなと思った。

「夜明けは好きだけど、この夜は明けて欲しくなかったな...」

と、ヒカルはため息をつく。

「朝からため息をつくとき幸せが逃げてくんじゃないか?」

響は、昔、湖畔でヒカルに教えてもらった方法の深呼吸をする。

「先輩の顔、とっても素敵なお顔になってますよ?」

「素敵なお顔...?」

響は自分の顔に手を当てて撫でる。寝不足のために目は落ちくぼみ、口元と顎に金色の点々が短く散らばっている。

「いい男が台無しだなあ...」

と、響は笑った。

「先輩も一度家に帰った方がいいと思います。お母さんにも会ってあげなくちゃ...。それに少し眠らなきゃダメだし」

響は何時間眠っていないのだろう?顔にはさすがに疲れの色が滲んでいる。

「おふくろさんには帰ってくることは言ってないんだ」

たった2日しか滞在できない日本での時間の全部をヒカルと過ごすつもりでいた響は、自分の帰国を母親には伝えないうつもりでいた。

「...でも、3年半ぶりに帰って来ているのに全然家に帰らないのはやっぱり...。きっとヒビク先輩のお母さん、ずっと心配していたと思うから...」

スキャンダルの渦中に響がいる間、きっと母親は気が気ではなかったはずだ。本当は一瞬だって離れていたくないけれど、響をひとりじめしていたいけれど、響の母に対しての良心が痛むヒカルだった。

「ああ、そうだな...。とにかくヒカルは一旦帰らなきゃいけないし、正直言ってさすがに体もきつくなってきたから俺も帰って少し寝る」

「うん」

太陽はみるみるうちに昇っていき、校舎の時計の針も瞬く間に進んでいく。

明日の別れが近づいてくる――。

「ヒカルを連れて、な！」

「え？私も...？」

「ヒカルは一度家に戻って、それから一緒に行こう！おふくろの顔見ながら眠ってもちっとも面白くないしなあ。俺はヒカルを抱きしめながら眠りたい」

そう言って、響はヒカルにウィンクを投げる。

「それって...」

ヒカルは戸惑いを隠せない様子で訊き返した。

「言葉のままさ。ヒカル式抱き枕！いい夢見られそうだな～！」

空に向かって両手を上げ大きな伸びをする響をヒカルは複雑な想いで見つめる。

「だけどその前に俺、ヒカルと一緒に珈琲が飲みたいな！昨日のあの珈琲ショップに連れて行ってくれないか？」

「水月さんのところですね。分かりました。開いたら行きましょう」

無邪気に笑うヒカルの横顔を響は複雑な想いで見つめた。

一緒にいられる時間はあとたったの一日だけ――。

◇

「おやヒカルさん、今朝はずいぶんお早いですね」

看板を出したばかりの店の扉を開けたヒカルに、カウンターの中で火を熾していた水月はやや目を丸くした。そしてヒカルと共に入って来た響を遠慮なく見つめる。

「はじめまして。風間といいます」

響は吟味するように自分を見つめる水月に軽く挨拶をした。

「いらっしゃいませ。水月です」

水月もにこやかに会釈を返す。

珈琲をふたつお願いします、と水月にオーダーするヒカルをそのままにして、響は店内をぐるりと見回した。

格子の窓からは明るい朝の光が柔らかな輝きを連れて射し込み、まだ誰もいない店内に静かに流れているBGMは優しいピアノのクラシックだ。

その明るい光と共に全身に迫ってきたのは『ヒカル』だった。フロアの何処を見てもそこにヒカルのイメージがある。光や輝きや笑顔があり声や匂いまでもがそこにある。圧倒的なその存在感に響は眩暈がする思いだった。

あとから気がついたのは、点在して飾られている写真たちだ。窓際の写真だけではない。全部がヒカル色を発している。

これは全て颯土が撮影したもの――。

隅田川のボートも、赤い自転車も、ひまわりや木漏れ陽も、そしてモノクロの教室も、被写体の背景にはヒカルがいる…。ヒカルが笑っている――。

――こんなにも群竹は…。

颯士の想いの深さを実感してしまい響は愕然とした。

颯士がヒカルを想う気持ちは自分と同じ。

自分がピアノを弾く時にヒカルを思い描くように、颯士もヒカルを心に抱きしめながらシャッターを切っている。それが苦しいほどに伝わって来る。

「お席はどこにしますか？」

水月が呆然と立ったままの響に声をかけた。

「…あ、じゃあ、あそこに…」

響が向かったのはフロアの奥、『モノクロの教室』の席だった。

壁にかかるその写真を響は立ったままじっと見つめる。

覚悟はしていた。

颯士が撮影した `魔よけ、のヒカルを見た時から、そこに自分の想いと同じ `血、を感じた時から、ヒカルと颯士の間には自分さえもが入り込めない何かがある、ということ。この店の中にはきっとその何かが存在しているということ。

それがどんなものなのかを確かめたいと思ったから自分はここにきた。だが、それがこんなにも強烈なものだったとは…。

「参ったな…」

響は思わず呟いた。

「何がですか？」

ヒカルは首をかしげる。

「いや、……この写真、さ…」

響はとっさに目の前の『モノクロの教室』を指した。

「懐かしい風景だな…と思って」

「これ、私の机なんです。ヒビク先輩が使っていた」

「…そうか。じゃあ、このあたりにあの文字もあるんだな」

響は机の端を指差して言う。

「小さすぎて見えないけど、確かにあります」

ヒカルは無邪気に笑う。

――ヒカル、何故気がつかない？

群竹の想い――。

こんなにもあいつはお前を、お前だけを見つめているというのに…。

ヒカルの笑顔を見つめながら響は心で呟く。

颯士の想いは柔らかい。

どの写真を見ても、ヒカルと過ごした時間の満たされていた生命が柔らかかに優しく輝いている。ふたりの笑顔が目浮かぶ――。

「群竹…」

響は思わずつぶやいた。

颯士の想いが哀しい。

あまりにもわかりすぎるから、あの頃の自分の想いと同じだから。

同じ人を愛するひとりの男としてその深い想いが痛い――。

――だが…。

「いい写真たちでしょう？」

珈琲を運んできた水月がテーブルにカップを並べながら言った。

「群竹さんの、この写真があってこそ私の店なんですよ」

「……」

響は言葉が出なかった。

水月の言う通り、この写真とヒカルのイメージがこの店の生命になっているのがわかる。

満たされた時間がここに確かに流れ息づき存在している――。

「先輩、じゃあ、私はちょっと家に戻ってきますけど…」

珈琲を飲み終わったヒカルは、壁にもたれ目を閉じている響に言った。

「あ、ああ。待ってるから」

「すぐに…、戻って来ますね」

ヒカルは水月にひとことふたこと言うと、響を残して店を出た。その姿を見送り、響の視線はそのまま扉とその横の格子窓の間に飾られている写真に行った。

陽だまりの中で笑っているヒカルと二匹の寄り添う猫。ありふれた日常の温かな情景と被写体への底知れぬ深い愛情が映し出された写真――。

「…あの写真はポストカードも一番売れるんですよ。ヒカルさんの笑顔がステキですからね」

響の視線をたどりながら水月が言った。

「…俺も一枚買おうかな」

響は椅子から立ち上がりカウンターに席を移した。

「ヒカルさんがいつも話しているヒビク先輩にお会いできて嬉しいですよ」

にこやかに言う水月の言葉に、響は照れ臭そうに笑った。

「また、アメリカに戻られるんですか？」

「明日戻ります。でも12月には帰ってきますが」

「そうですか。ヒカルさんも、ようやく、ですね。まあ、12月まではまた寂しい思いをされるのでしょうか...」

初めての場所で初対面の水月であるはずなのに、ずっと前から知っているような気がする不思議な錯覚を響は感じた。

店の中に染みこんでいるヒカルのイメージからくる錯覚なのか水月が持つものなのか、それはわからないが、珈琲の薫りが漂うこの空間は響を複雑に癒した。

心の真ん中では何かがざわざわと騒いでいる。だが紙一重のところまで癒されている、なんとも言えない感覚――。

ふと、メロディーが頭に浮かんだ。

「Deja-vu...か」

眩く響を水月は見つめた。

「今、メロディが浮かびました...」

この空間で活きている呼吸や眼差しの音色が。

「ほんとですか？素晴らしいですね。ヒビクさんにしても群竹さんにしても、何かを生み出す人というのはやはりどこか違いますね」

「水月さんは何故、群竹の写真をこんなに...？」

水月は響の前に珈琲のおかわりをいれたカップを差し出し、

「群竹さんの写真の中に溢れている光への憧れが、私の求めていたものと同じだったんですよ」と、微笑んだ。

「光への憧れか...」

響はフロアを見渡した。

確かに溢れている光。

「たったひとつの光...、なんですよ...」

「ヒビクさん、わかってらっしゃるんですか？」

水月は少し驚いたように言う。

「わかりたくなかったですけど、ね...」

響は深いため息をつき、それでも顔は苦しい笑顔を浮かばせる。

「群竹さんはずっとヒカルさんを応援していましたよ。ヒカルさんの想いをずっと影ながら支えて。とても純粹に、ね」

「あいつが...」

ヒカルが颯土の想いに気がつかないのは、それがあたりまえだからなのか...、と、響はわかったような気がした。

一緒にいてあたりまえ。一番傍にいてあたりまえ。それがふたりの自然な日常だからヒカルには颯土の想いが見えない。

光があってこそその影。だが、光の真ん中からは影は見えない...。

当たり前を満たされた時間とふたりの間にある見えない絆に途方もないジェラシーを感じる。
ヒカルの想いに疑いがあるわけじゃない。

己の想いは決して実らないとわかっていながら、その苦しみさえも抱きしめこれほどまでにヒカルを愛する颯土の魂に妬けるのだ。

颯土はこの3年半の間にヒカルへの自分の想いを叶えようとは思わなかったのだろうか。

自分が意地の塊になってヒカルに便りもせずひたすらピアノに向かっていた3年半と、颯土がヒカルと過ごした3年半…。

もしも颯土が己の想いに忠実にいたら、今ごろヒカルは自分とはいなかったかもしれない。3年半という月日は、それだけ人の心を変えるのには十分な時間だし、心変わりをされていては仕方がない自分のこの3年半だった。

――なのに、群竹は……。

次々と溢れるメロディ。

押し寄せる波に飲み込まれてしまいそうなほど、この空間は清らかなメロディに満ちている。

――…もしも、ヒカルが見えたとしたら？

群竹の熱いまなざしに、気がついたとしたら…？

窓辺のヒカルの笑顔が響の心を締め付ける。

この笑顔が颯土はずっと間近で見つめてきたのだ。そしてそんな颯土のまなざしを当たり前を受け入れ、ヒカルも同じまなざしを颯土に向けていたはずだ。

絆――。

いっぱい満たされていたヒカルと颯土の時間…。

「…でも、昨夜はさすがにお辛そうでした。そこにずっと突っ伏しておられた」

水月は窓辺のテーブルを指差した。

響はそんな颯土の姿が見えるような気がした。

「今日、ヒカルさんとあなたがここに来てそのわけがわかりました」

――昨夜、俺がヒカルを貸しきりにしたから…か。

颯土の絶望が窓辺のヒカルの笑顔の下で突っ伏すイメージと共に痛いほどに伝わってくる。

響は昨夜ヒカルと見た流星を思い出した。あの時のヒカルの言葉、そして浮かんだ颯土の想い。やはりあの流星は颯土の想いが流した星の涙だったのか。

星が落ちなければ、きっと昨夜――。

――でも、

これほどまでに分かってしまっても、あいつの想いが3年半前の俺と同じだったとしても、そしてあいつが己の想いに蓋をしてヒカルを支え続けてくれたからこそ今の俺とヒカルだったとしても....

「...群竹がどんな想いをしてたとしても...」

――悪いが俺は退けない。

響は鳴り続けるメロディを吹き飛ばすかのように自身の意を決した。

言葉を飲み込み固く口を結んだ響を、水月は珈琲を沸かしながら柔らかな眼差しで見つめていた。

家の前にたたずみヒカルはひとつ深呼吸をした。

無断外泊をしたのは生まれて初めてのことだ。父は既に家を出ている時間だが母には何て言われるだろう…。

扉を開け、そうっと中を覗いてみる。TVアニメのオープニング曲がリビングから聞こえた。哲平がいつも見ている夏休みの特別番組だ。

特に変わった様子もなく、いつもと変わらない朝を迎えているらしい浅倉家一一。

ヒカルは心を決めてリビングのドアを開けた。

「ただいま…」

「ヒーねえ、おかえり。どこに行ってたの？」

お菓子をつまみながらアニメを見ていた哲平が振り返った。

「うん…、お母さんは？」

「二階で洗濯干してるよ」

「お母さん何か言ってた…？」

「べつに？何も言っていなかったよ」

哲平は再びアニメに目を戻した。

何も言ってないの一一？

娘が無断外泊してるのに一一？

かえって不気味な気持ちが出てヒカルはそのまま二階に上がり、ベランダで後ろを向いている母の背中に向かい、

「お母さん、ただいま…」

と、声をかけた。

母は洗濯を干す手を止め振り返り、

「おかえり。帰らないなら連絡ぐらいしなさいよ」

と、ひとこと言った。

「…ごめんなさい」

「颯土くんと一緒にあったんでしょ？今朝、颯土くんのお母さんも心配してたのよ」

母は再び洗濯物を手にしながらいつもの調子で言う。

「え…？」

一一颯土くん…？なんで？

「颯土がヒカルちゃんに何かしたら、責任取ってお嫁にもらうから！だって」

母はテキパキと衣服をハンガーにかけながらくすくすと笑う。

「颯士くんに限ってそんなことは絶対はないわよねえ？」

ヒカルは答えあぐねて、ただ母の背中を見守った。

「あかねちゃんの結婚式だったし、久しぶりにみんなが集まるんだし、若い子たちが朝まではしゃいじゃう気持ちもわからないでもないけどね。まあ、颯士くんが一緒だからそんなに心配はしてなかったけど連絡は入れて欲しかったな」

ヒカルはベランダから顔をのぞかせ颯士の部屋を見た。見慣れたカーテンがまだ閉まっている。

——颯士くんも昨夜は帰ってないの...？

「一緒に帰って来たんでしょ？颯士くん」

母の言葉にヒカルは答えずに階下に下りて行った。

『颯士くんが一緒だからそんなに心配はしてなかったけど』

熱いシャワーを浴びながらヒカルは母が言った言葉を考えていた。

昨夜の無断外泊を突っ込んで訊かないでくれる母にほっとしたのは確かだが、とんでもない勘違いを母にさせたまま、それを訂正しない自分に良心が痛む。

——けれど、颯士くんと一緒になら心配はしないって、なんかちょっと変じゃない？じゃあ、颯士くん以外の人と一緒にしたら、ヒビク先輩と一緒にだったと言ったらお母さんは何て言ったのだろう...。

ヒカルは手の中の泡のついたスポンジを見つめた。

ハタチの女の子が家族に無断で外泊をするということが普通なら許されるべきことではない、ということぐらいヒカルにもわかっている。それでも、『颯士と一緒に』であれば母の許容範囲であり安心なのだろうか？

『颯士がヒカルちゃんに何かしたら責任取ってお嫁にもらうから！』

——これって、かなりキワドイ発言だよな？普通、年頃の娘に親が言うこと？第一、そんな話をしているお母さんとおばちゃんっていったい...？お母さんは、私が颯士くんになら責任を取ってもらわないとならない何かをされてもいいのかな？

ヒビク先輩だったら...、どうなんだろう...？

頭に？マークがたくさんついているのに考えが働かない。どこかで何かがつくりいってない

気持ちを抱きながらも、ぼんやりしている自分をヒカルは感じていた。頭の中は昨夜からずっとふわふわとしたままだ。それに寝不足も加わり思考力が欠けているのが自分でもわかる。

だが、颯土はどうしたのだろうか？

昨夜、麻耶たちと飲み明かしてそのまま勇斗の家にでも泊まりこんでいるのかな...、とは思ったが、自分が知る颯土がそれほど羽目を外す人間だとも思えない。

パーティー会場で感じた颯土の目。自分を真っ直ぐ見つめた目の中にたくさんの言葉があった気がしたあの時。颯土が今までの颯土じゃなく、別の人のように思えてしまったあの一瞬がとてつもなくせつなかった。

だから、少し気になる。

颯土の外泊の理由一一。

シャワーを止め、鏡に映った自分の顔をヒカルは見つめた。

「やだあ...。3才ぐらい年とった感じ...」

徹夜、というものをヒカルは今までしたことがない。

夜は12時以降は起きていられない体質だし、8時間の睡眠時間を取らないと翌日の頭は使い物にならないぐらいだ。

今朝の響の顔も素敵だったけれど、自分も同じぐらい素敵な顔をしている。

「可愛いヒカルちゃんが台無し...」

さっきの響の台詞を真似てひとりで呟いてみた。

気持ちが落ち着きなく逸る自分を、どうにかしたいと思いつつもどうしてもならないことに少しイライラする。

響はもう2日ぐらいまともに寝てないはずだ。なのに一緒に家に行ってもいいのだろうか？響の母のことを考えるとふたりきりの水入らずにしてあげないといけないとも思う。3年半ぶりの我が子を、響の母は母の想いで抱きしめたいはずだから。

ずっと引っかかっている。

自分が響の家に行く理由一一。

ずっと一緒にいたいから。

もう1日しかない時間を一緒に過ごしていたいから。

ただ、それだけのことで一緒について行っていいのだろうか。

『ヒカルを抱きしめて眠りたい』

一一本当にただそれだけなの？ヒビク先輩が求めていることは、それだけ？

鏡の中の自分に向かって問いかけてみるが答えは出て来ない。心の動きに頭がついていかない。考えなきゃいけないことがたくさんある気がするのに、考えられない。

――とにかく、Deja-vuに急がなきゃ。

急いで着替えを済ませ、化粧を直し、ヒカルは再び家を出ようとした。

「ヒカル？何処に行くの？」

洗濯干しを終わらせた母がちょうど階段を下りてきた。

無断外泊からたった今帰ったばかりなのに、すっかり身支度を済ませ再び出かけようとしている娘に対してややとがめるような口調だった。

ヒカルはドアに手をかけた状態で立ち止まった。

「今帰ったばかりなのに、また何処に行くの？」

母は、もう一度訊く。

――どうしよう？お母さんは颯土さんと一緒だったって思ってるのに本当のことを言う？それとも麻耶ちゃんと約束してるって言う...？

「...ヒビク先輩の家に行ってくる」

ヒカルはくるっと振り返って言った。やっぱり嘘は言いたくない。いつも自分の味方でいてくれる母に嘘はつきたくなかった。

「ヒビクさん...？だって彼はアメリカじゃ...」

「...昨夜、あかねちゃんの結婚式に出席するために帰ってきたの」

「ヒカルまさか、昨夜はヒビクさんと...？」

母の顔色が変わった。

「うん...」

「ヒカル...」

哀しそうな顔で自分を見つめる母にヒカルは心が痛んだ。

さっき、母の勘違いを訂正しなかったのは悪かったと思う。だが響と一緒にいた、ということに対しての母の反応がヒカルは辛かった。颯土ならよくて響ではいけないのだろうか...

「昨夜、ヒビク先輩とはずっと一緒だったけど、話をしていただけだから」

「でも...」

母もヒカルを見つめ次の言葉を探している。

そんな母にもどかしさをヒカルは感じた。母の心配はわかる。けれど放っておいて欲しいとも思う。自分の中でもふたりのヒカルが対峙している。早く行かなきゃ、と焦るヒカルと、躊躇しているヒカル。

「...行ってくるね」

「ヒカル！」

玄関を出るまで母がずっと見守っている視線を背中に感じ、一歩家の外に出た途端あまりの暑さと陽射しの強さに、ヒカルは一瞬眩暈を感じた。

母とちゃんと話したいと思った。全部話したいと思った。けれど何をちゃんと話せばいいのかもわからない。

片手を額の上にかざし、響が待つDeja-vuに向かいながら心のどこかでためらいを感じている。それは昨夜までは全くなかった気持ちだ。

颯土と一緒にいるから心配してなかったという母の言葉。

別の人のように感じた颯土。

ヒカルを抱きしめて眠りたいと言った響…。

気持ちがもやもやして晴れない。

どうしてこんな気持ちになってしまったのか、その理由が分からない。

自分の気持ちが分からない――。

思うように進んでいかない足を無理やり前に出すようにしてヒカルが通りの角を曲がった時、駅の方から歩いてくる颯土の姿が見えた。昨日と同じスーツのまま。うつむきながらゆっくりと、照りつける太陽の陽射しを避けることもなく颯土は歩いてくる。

ヒカルは思わず立ち止まった。

人の気配を感じ颯土は顔を上げた。

パステルイエローのワンピースを脱ぎ、Tシャツとジーンズという普段着のヒカルが通りの角に立っていた。

「ヒカル…？」

颯土も立ち止まった。

「お帰り、颯土くん。昨夜はどうしたの？」

いつもと変わらないヒカルがいつもと変わらない笑顔で言う。

「…お前こそどうしたんだよ」

――帰ってきてたのか…？

「…風間先輩は…？」

Deja-vuで待ってる。

これから、一緒にヒビク先輩の家に行くの――。

今までの自分ならきっとためらうことなく言えたはずなのに、言葉が鉛になったように喉が重くて開かない。ただ、今ここで颯土に出会って真っ先に思ったことは、昨夜感じたことを忘れたい、いつもの自分と颯土であることを確かめたい、ということ。

「同窓会もどきは楽しかった？」

颯土の言葉にはあえて答えずヒカルは言った。

「...ああ、まあな」

ヒカルから目をそらして颯土は言った。

昨夜Deja-vuを出たあとは勇斗の部屋に行き、ただ夜を明かしたただけだった。心の隅どころかほとんど全部にヒカルがいたけれど...、気になって仕方なかったけれど...、潰れそうなほど苦しかったけれど...

今、普段着のヒカルを見て、いつもと何も変わっていないヒカルに心の底から安堵している。

——今まで通りのヒカルだ。昨日までのヒカルと同じ。

颯土は笑った。

「颯土...くん？」

前髪が少しだけ目の前にかぶっている、その隙間から見えた颯土の優しい瞳。

それは、いつも当たり前のようにして見ていた颯土のまなざしだったが今はこんなにも新鮮に感じる。

——よかった。昨夜のあの感じは思い過ごしたんだ...

ヒカルも笑った。

颯土のこんな顔を見るとほっとする。

ビービー弾を飛ばして、毎日くだらない話をして、そして、

『よかったな、ヒカル』

響とのあれこれをちゃんと聞いてくれて応援してくれた颯土との、高校時代からの時間の数々を大切に思う。

——颯土くんとのこんな時間が好き…。

「な、なんだよ？」

自分を見つめて微笑むヒカルに颯土は戸惑った。

——普段着のヒカル。

俺とヒカルの日常はまだここにあるのか？まだ、失っちゃいないのか——？

けれど…、

「ヒカル！」

自分の背後から聞こえた声が、颯土の安らぎを一瞬のうちに遠ざけた。

「ヒビク先輩」

「風間、先輩…」

颯土が振り返った先に、昨夜と同じままの響が立っていた。

「ヒカル…」

颯土の目に力が失われ、自分の名を呼んだ声は低く絶望を連れてくる響きでヒカルを覆った。

「颯土くん…？」

颯土は何かを言いかけようとしたが、そのすぐ後にヒカルから目を外し、

「…じゃあな」

と、一言だけ言って歩き出した。

二度とヒカルと響を振り返らずに角を曲がって行く颯土。陽射しが眩しすぎてその後ろ姿もよく見えない。

——なんで？どうしてなの、颯土くん…。

颯土が去った道を見つめたままヒカルは呆然と立ちつくした。

言葉に出来ない寂しさが突き上げて来る。

颯土のあんな後姿は見たくないと、心の奥にある意識が訴えてくるのにそれを受け止めきれない。

自分のどこかで何かが騒いでいる。こんな感覚は今までに感じたことがない。それがなんなのか、どうしてなのか、考えようとするとぼやけてしまう。まるで眩しい光の中で、その部分だけが真っ黒に暗んで見えない場所のように。

こんなスッキリしない気持ちはいやだ。颯土ともっと話がしたい…。

——何を、話すの…？

「...群竹も朝帰りだったのか...」

響がヒカルの横に立ち、同じように颯土の去った道を眺めながら呟いた。

「颯土くん...」

「...え？」

「今までの颯土くんじゃないみたいで...」

——今までの颯土くん、か.....。

道の先をじっと見つめながら言うヒカルの横顔を響は見つめた。

そして、

「ヒカル、どうでもいいけど俺もそろそろ限界かも」

ふらふらっと大げさによろけた。

「そうですよ！先輩、早く帰らなきゃあ！」

「ヒカルが遅いから、おふくろさんに袋叩きにされてんのかと思って心配したぜ」

「すみません...。何かぼんやりしちゃって...。でも...」

「ん？」

「もしも袋叩きにされてて家を出してもらえなかったら、先輩どうしました？」

ヒカルの言葉に響はニヤッと笑った。

「はい？」

「ヒカルんちに乗り込んでかっ攫った！」

「本当にい？」

「このまま...、今、このままかっ攫ってもいいんだぜ」

響はヒカルの腕をぐとつかんで自分の胸の中に引き寄せた。

目が真剣だ。

...昔もこんなことあった。

『かけ落ちしようぜ！』

夕暮れの墨田公園で響が言った言葉とあの時の目。

吸い込まれていきそうなほどに真剣だった目。

けれど、そのすぐ後に...

「ぶはっ！何だよ、ヒカルのその顔！チャウチャウみたいだぜ～！」

響は吹きだした。

「...やっぱり」

と、ヒカル。

「え？やっぱり？」

「先輩のその手には免疫ができてるんです、私」

いつも冗談ばかり...、とヒカルは膨れる。

「...冗談なんかじゃないぜ。俺はいつだって...」

響は小さく呟く。

——俺の全て。

俺の想い。

5ヶ月先じゃなく今すぐ...今ヒカルに...。

「さあ、行こうぜ」

響はヒカルの手を引いて歩き出す。

「先輩、待って！」

ヒカルは立ち止まった。

「どうした？」

「本当に私が行ってもいいんですか...？」

迷子の仔犬のような不安な目をして言うヒカルに、響は、

「ヒカルが来なきゃ意味ないんだ...」

と、呟いて再び歩き出した。

「このあたりだと思うんだけどなあ……」

響はまるで初めて来る場所のように辺りを見回した。だが、

「先輩、もしかして自分の家を忘れちゃったとか…？」

と言いながら、ヒカルは今自分たちが立っている場所が、以前響の消息を追って住所を頼りに来た土地ではない、ということにたった今気がついた。

「おふくろさん、先月引越したんだ」

響は手帳にある住所と現在地を確認する。

「そうなんですか…？」

ジャックの隠し子騒動の間、響の母の元にも海外からのマスコミたちが押しかけ大変な騒ぎになっていた。それでも母は響にひとことも愚痴はもらさず、かえって響の心配ばかりをしていた。出歩くこともままならない毎日を強いられている母を気遣いながらも、響は自分のことで精一杯で母に対して何ひとつできなかった。芸術祭のあとも違った意味でマスコミの攻勢は続き、日本でひとりで暮らすかつての恋人を気遣ったジャックが、

「…おふくろが静かに暮らせる部屋を手配して、先月引越したんだよ」

と、ヒカルに説明してから響は、

「え？ここか?!」

目の前のマンションを見た。

「す、すごい…っ」

ヒカルは思わず呟いた。

真新しい高層マンション。バブルの頃流行った億ションといった外装。住んでいる人は皆社長か芸能人なんじゃないだろうか？と思うくらい駐車場に停まっている車は外車ばかりだ。

「しかし…、ジャックも派手だなあ……。余計に目立つんじゃないかあ？」

響も半分呆れている。

ふたりはきらびやかなエントランスをくぐった。重厚な扉に守られた入り口は外部からの侵入に対して万全の管理が成され、セキュリティーの面では心配がない。ジャックがここを選んだ一番の理由はこれだなと響は納得しながらオートロックのインターホンを鳴らした。

「はい？」

スピーカーから聞こえた声は透き通った優しい声だった。

「あ、俺だけど…」

一瞬、スピーカーは沈黙した。それから、

「はい？」

と、再び。

「俺。響」

響はぶっきらぼうに言った。

「…響？本当なの？」

「本当。早く開けて？お客さん連れてるんだ」

ロックが外れる音がして自動ドアが開く。

響はヒカルを先にドアの向こうに歩かせて、続いて自分もエレベーターホールに足を踏み入れた。

エレベーターが13階に到着し、扉が開くとそこに響の母が立っていた。母はのんびりと開くエレベーターのドアがもどかしいらしく、足踏みをしていた。

「響？本当に?!」

半開きの扉に手を入れて、母は息子の顔を確認して少女のように叫んだ。

「ただいま...」

響は照れ臭そうに笑った。

母、ユリは、響の隣に立つヒカルに気がつき、

「あ、お客さんが一緒だったのよね。私ったらみっともない...」

と、頬を赤く染めて笑う。

はじめて会う響の母は栗色の艶やかな長い髪に軽くウェーブをあて、目元が響にそっくりな美しい人だった。とても22才の息子がいる母親には見えない。響と並んで恋人同士と言ってもおかしくないほど若々しい。

「はじめまして。浅倉ヒカルです」

「あなたが浅倉ヒカルさん。はじめまして。響の母です」

ヒカルとユリはエレベーターの中と外で呑気にお辞儀をし合う。

「どうしてもいいけど、早く家の中に入れてくれよ...」

呆れた響の言葉にユリはまた顔を赤らめて、

「あ、そうよね！ヒカルさんもどうぞこちらに！」

と、新しい部屋に二人を案内した。

◇

新築の匂いが残る部屋の中はシンプルに片付いていた。

家具もあまりなく広さが目立つ。殺風景、といってもいいくらいだった。

「帰って来るなら電話ぐらいちょうだいよ。いつも何でもいきなりなんだから、響は...」

ユリは響とヒカルに珈琲を淹れながら文句を呟いた。

「ほんとですよね」

と、ヒカルも相槌を打つ。

何でもいきなり決断して行動するのは響の特技だ。

「いつもひとりだから何も無いのよ。帰ってくるってわかっていればケーキとかアイスを買っておいたのになぁ」

珈琲の入ったカップだけをテーブルに置き、ユリはうらめしそうに響を見た。

「ケーキやアイスって、子供じゃあるまいし...。そんなもんなくたっていいよ」

「響はよくてもヒカルさんは食べたいでしょ？ケーキ」

「はい。ケーキもアイスも大好きですからっ！」

「そうよね〜？」

意気投合している母とヒカルを見て響はふっとため息をつき、

「ケーキよりも、俺のピアノは...？」

と、部屋を見回した。とりあえずリビングにピアノは見当たらない。

「あ、ピアノねえ.....」

ユリは少し困ったような顔をして響を見た。

「.....なに？」

「前のマンションの隣に住んでた夏樹くん覚えてる？」

「ああ。小学生だろ？」

「そう。今はもう中校生だけど、あの子がね...」

母の顔と言葉を聞きながら響の胸に嫌な予感が広がる。

「響さんみたいにカッコよくピアノを弾きたい、なーんて嬉しいこと言ってくれちゃってね...」

「まさか、あげたなんて言うんじゃ...」

「ピンポン！引越しの時にあげてきちゃったの」

ユリはそう言って、子どものように舌を出す。

「おいおいっ、おふくろ?!」

響はソファから立ち上がって叫んだ。

「ピアノをあげるってどういうことだよ?!」

「だって響が憧れ、だなんて言うのよ夏樹くん。私は弾かないし響は帰って来ないと思っていたし...」

「帰ってくるよ！」

響は可笑しいくらいに怒鳴ってそのまま眩暈がしたように大げさにソファに沈んだ。

「ないのかよ、ピアノ...」

「先輩...？」

ヒカルはソファに沈み込んで半ば放心状態の響の顔をのぞきこんだ。

「ここで弾きたかったんだ...。『Shine』...」

響は大きなため息をつく。

「ヒカルの為に弾きたかった...」

「...あ...」

――ヒビク先輩が私をここに連れてきた理由は『Shine』だったんだ...。『Shine』を私に聴かせてくれようとして...

「ヒカルに贈った曲なのにヒカルの前では一度も弾いてないだろ？だから...」

颯士の写真を見てから、響はずっと考えていた。

純粹にヒカルだけを心に描いてシャッターを切る颯土。

そんな姿を見たわけでもないのに伝わって来た颯土の想い。

自分がピアノを弾く理由も同じはずだ。それは決して間違いじゃない。

なのに心のどこかに何かがある。純粹じゃない自分がある…。その不純な何かは時々顔を出そうともがいている。

それを打ち消したかった。

どうしてもこの滞在中に自分の全てを注いだ『Shine』を、自分の全霊を込めてヒカルの前で弾きたかった。弾かねばならないと思った。

「いつも『Shine』は聴こえていた。先輩を想う時、心の中にいつも『Shine』が流れている。だから12月まで待っています」

12月まで――。

あと5ヶ月…。

「そうか…」

響は苦笑した。

「私も弾けるようになったんですよ、『Shine』…」

呟くようにヒカルは打ち明けた。

「ヒカルが?!」

「『Shine』が弾けるようになったら先輩に会えるって信じて、先輩が書いた楽譜を見ながら毎日練習したんです。1日も早く先輩に会いたかったから」

恥ずかしそうに笑うヒカルに響は愛しさが混み上げる。

『Shine』は決して易しい曲ではない。ヒカルには意味不明であろう音楽記号もたくさん書いた記憶がある。指使いも単純ではないし、ヒカルが本当に弾けるようになったのだとしたら、それは間違いなく奇跡だ。

「俺に会いたかったから…、か」

響は呟いた。

――何を焦ってるんだろうな、俺。

ヒカルはいつだってこんなにも俺を想っているのに。奇跡を起こすほどに俺を――。

「…おふくろのせいでヒカルのピアノを聴きのがした…。どーしてくれるんだあああ！」

「ううう、ごめんなさい。今からピアノ買ってくる？」

「買ってこないっ！」

ヒカルはくすくすと笑った。

なんて素敵なお母さんだろう。涙が出るくらいに微笑ましい。

「ケーキとアイスを買に行きついでに買ってくるわよ？」

「ついでに買えるもんじゃないだろ、ピアノってのは！それに俺、明日にはまたボストンに戻らないといけないから今すぐ買っても間に合わない」

「え？明日帰るの？」

ユリは目を大きく見開いた。

「ライブがあるからね。これでも穴をあけるわけにはいかないんだ」

そう言う響は母を見つめながら笑う。

「もう…。ほんっと、急なのね…」

寂しそうに笑うユリの顔にヒカルのは心は痛んだ。

たった今、3年半ぶりに会えたばかりの息子が明日にはまたボストンへとんぼ返り。

寂しいに決まっている。

一瞬だけのつかの間の喜びは、その後はそれ以前よりもせつなくなる。

「ライブかあ…。響を待ってくれてるお客さんがいるのね」

響のピアノを…、と母はせつなさを押し込めて嬉しそうに呟いた。

「…まあね。ボストンの人にはよくしてもらっている」

何気なく言った響の言葉に、ヒカルはどこかで寂しさを感じずにはいられなかった。自分の知らない響がボストンには居て、ボストンの人たちはそんな響を待っているのだ。

——ここにいる、ヒビク先輩じゃなく…。

「…じゃあ、やっぱりおつかいに行ってくるわ！今夜はご馳走を作らなきゃね。ヒカルさんも一緒に食べて行ってね！」

ユリはそそくさと身支度をして慌てて出て行ってしまった。

「相変わらずのおふくろだな…」

響は母が出て行った先を見つめたため息をついた。だが目は優しく笑っている。

「すごく素敵なお母さんですね。ジャックさんも素敵だし、いいなあ先輩は！」

「あれで天然が入ってなければ最高のおふくろかもしれないけどな。まさかピアノを隣ちのガキにくれちゃうなんてさあ……」

「自慢の息子を褒められて嬉しかったんですよ！何となくわかります、ヒビク先輩のお母さんの気持ち」

「おふくろの気持ち、か…」

響はソファから立ち上がって他の部屋の扉を開け、はじめての家の中を見て回った。

広いリビングを中心にドアが三つある。ひとつはユリの寝室になっているが、あとの部屋はがらんとしていて何もなかった。

「参ったね…。おふくろ、俺の荷物何も持ってきてないぜ。机もベッドもな一んにもない。みんな隣ちのガキにくれちゃったのか？」

ヒカルは響の後ろから部屋の中を覗きこんだ。

ブラインドだけが下がっている、だだっ広い部屋――。

「お母さんの覚悟、じゃないのかな...」

何もない部屋を眺めながらヒカルは呟いた。

「おふくろの、覚悟...?」

「私にはそう感じる。この、何もない部屋が...」

響を待たない、と決めていたあの頃の自分の気持ちが、この何もない部屋に映し出されているような気がした。

『響は帰って来ないと思っていたし――』

あの言葉は自分で決めてアメリカに行った息子が夢を手にするまで、ただ見守ろうと決めていた母の覚悟だったのかもしれない。

心配でも、寂しくても、何も言わず、待たず――。

響の母だから。

決めたら後ろを省みずに真っ直ぐ前につき進んでいく息子を、よくわかっている響の母だから...。

響の母の想いが自分の想いのようにわかるヒカルだった。本当の想いを心の底に沈めて愛する者をあえて自分の中から遠ざける気持ち...。

ヒカルはじっとたたずみ、何もない部屋を見つめる。

「ヒカル...」

口を結び、部屋の一点を見つめているヒカルに響は呟いた。

覚悟――。

たったひとつのピアノしか置いてないボストンの自分の部屋と同じ。ピアニストになることだけを夢見て、それだけを目指してアメリカに行った3年半前の自分。余計なものに心を向けたりしないように、どこまでもシンプルにピアノだけを追いつけた。

ヒカルのことさえもかえりみず――。

母の想いは、そんな自分と同じなのか。だからひとりで暮らすこの部屋は、こんなにも殺風景なのか――。

「きっと、先輩と同じ夢を見ているんですね、お母さん...」

ヒカルは寂しそうに笑った。

「同じ夢を見るって...こういうことなんですね...」

「ヒカル――」

ピアノ。

ヒカル。

心の中でもがく不純な想い。

アメリカで勝負したい――。

『Shine』をライブで弾かないのはヒカルのためだけじゃなく、自分のはじけていくことに無意識に抵抗を感じていたからだ。`不純、が膨らんでいくことを恐れていたからだ。

日本に帰る。

ヒカルの元に帰る。

そう約束し決めた純粋な想いを、『勝負したい』という`不純、に覆われたくなかった。

だが、自分が追いつけたピアノはまだ遠いところにあるままだ。

ピアニスト、カザマ・キョウの音楽はまだ響かせていない…。

けれど…！

「ヒカル」

響はヒカルをきつく抱きしめた。

「せ、先輩?!」

「俺は明日ボストンに帰る。でも…」

――何を言おうとしているんだ、俺？

言葉の代わりに口付ける。

見つめ合って何度も何度も。

――ヒカルが欲しい。

このままもう、二度と離したくない。

誰にも…群竹にも触れさせないように、俺だけの宝の箱に閉じ込めて鍵をかけていいだろ？

今、いのちといのちで触れ合って、俺とヒカルの絆を確かめ合って、それから――。

想いのまま、ヒカルを抱きしめたまま膝をつき、やがてふたりはフローリングの床に崩れる。

――ヒビク、先輩…。

響と心と身体を触れ合わせる時をずっと待っていたから...、
身も心もあずける時が今――。

『よかったな、ヒカル』

声が聞こえたような気がしてヒカルは閉じていた瞳を開いた。

閉められたブラインドの隙間からわずかに漏れてくる光が、何もない部屋の床に幾筋もの線を引っ張っているその上で、自分と響の体が重なる。光は響の長い金色の髪を照らし揺れる髪の隙間からチラチラと漏れる。

ついさっき、こんな光景を見た。

眩しい陽射しの中で、髪の隙間から覗いた優しい瞳――。

『ヒカル...』

呟いたせつない声――。

――颯土くん...？

どうして今、颯土の顔が浮かぶのかヒカルにはわからなかった。

だが、突然浮かんだそのビジュアルに心が締め付けられる。『じゃあな』とひとこと呟いて振り向かずに行った後ろ姿が焼き付く。

どうして――？

今、激しく想いを重ねてくる響の体温を感じ、響の想いの全てを受け入れようとしているはずなのに、哀しくせつなく溢れる涙を止められない。

同じ夢を見たい。

響の想いと溶け合いたい。

なのに今、心の中で『Shine』が聴こえない。

「ヒカル――」

自分の押さえられない衝動を、全て受け入れようとしているヒカルが一粒の涙をこぼしたとき、響は理性にかえった。

「ごめん、ヒカル...」

ヒカルは首を振る。

「俺は、わがままだな...」

ヒカルは唇をかみしめ、激しく首を振る。

「ヒビク先輩のこと...好き...っ！なのにつ！」

「...今はその言葉だけで十分だ...。俺たち、まだはじまったばかりだから...な」

ヒカルは響に抱きついた。

響を愛する心は絶対に嘘じゃない。

――なのに、どうして...！

「ヒビク先輩...」

ヒカルは響に抱きついたままその腕の中で呟いた。

「ん...？」

「...ボストンに帰らないでっ！」

一気に叫んで、ヒカルはそのまま再び響の胸に顔を押し当てた。

決して言うてはいけない言葉だとわかっていた。ライブに穴をあけるなんて出来ないこともわかっている。けれど今、このまま響と別れることなんて出来ない。こんな気持ちのままあと5ヶ月も待ってられない。一瞬でも離れてしまったら、もうわからなくなる。

「ヒカル...」

響は、痛いくらいに胸に顔を押し付け涙をこらえるヒカルの髪を見下ろす。

「...帰らないで。ずっと日本にいて。このままずっと、ここにいて...！一緒にいて！」

――このままずっと、ここに...

ヒカルのそばに...

ライブもアカデミーも関係ない。

ヒカルさえいれば――。

震えるヒカルの肩の振動が想いとともにはじめて言ったわがま
まが愛しくてたまらない。

「ごめんなさい、先輩！わたしの方が百倍も千倍もわがまま...！」

「百倍も千倍もわがままなヒカルでいいさ...」

もう一度抱きしめてキスをして、その唇を離す時に響は呟いた。

「ボストンに來いよ...」

「...え？」

ヒカルは目を見開いて訊き返した。

「私がボストンに...？」

響は頷いた。

「時間がなさすぎたよな、こんな再会...。3年半を、たった2日で埋めようなんて...。不完全燃

焼だけが残る再会になっちゃったよな...」

「.....ごめんなさい！私...、先輩を困らせてる！」

「いいんだ。俺は困ってなんかない。ヒカルがそう言ってくれるのをきっとどこかで待っていた。でも、今は帰らなきゃ...」

うん、うん、とヒカルは頷く。

「航空券を送る。ヒカルは急いで渡航の手続きをしろよな。パスポートだって、どうせ持ってないだろ？」

響は笑った。

「うん...」

「秋になるまで、ボストンで一緒に暮らそう」

「秋に...なるまで...？」

「ああ。ヒカルの夏休みが終わるまで」

目を見開いたままヒカルは響の目を見つめた。響は真っ直ぐに自分を見つめ、その中に吸い込まれていきそうな真剣な目をしている。

いつもだったらこんな時、

なんだよ、ヒカルのその顔！チャウチャウみたいだぜ～！

と、笑う響だけど....、

「今はヒカルのわがままをこんなふうにしかな叶えてやれないけど...、それでいいか？」

響はヒカルの髪を撫でながら優しく言った。

「...うん！うんっ！」

ヒカルは何度も頷いた。

ボストンに行く。

秋になるまでヒビク先輩と一緒に暮らす。

考えることがたくさんあるけれど、今はそうしたい。

そうしなきゃいけない。

そうしなきゃー。

◇

空港のデッキに風が激しく立ち、轟音を響かせながら響を乗せた飛行機が夜の空を再びボストンへ向かって飛び立った。

「来週、待ってるからな！」

手を上げてゲートをくぐって行った響の後ろ姿となびく金色の髪がまだ臉に焼きついている。

飛行機は尾翼に灯りを点滅させながら、だんだん小さく見えなくなっていく。

ヒカルはいつまでも彼方の響を見送りながら、一瞬のその風と響きを全身で受け止めた。

しょちゅうおみまいもうしあげます。

まいにち あついひがつづいてますがげんきですか？

ヒカルせんせいは げんきいっぱいです。

まっくろにひやけしたのぶくんの げんきなおかおが みられるのを ヒカルせんせいはたのしみにしています！

9がつからはうんどうかいのれんしゅうもはじまりますよ。

たのしいなつやすみをすごしてくださいね。

20人の園児ひとりひとりに送る手書きの暑中見舞いの最後の一枚を今書き終えた。運動会に使う玉入れの玉は昨夜作り終えたし、お遊戯の振り付けもだいたい考えた。園長先生にはさっき電話を入れ8月末まで不在になることを告げ了承を得たし、仕事のことでの心配はとりあえずなくなった。

ボストンの響からエアメールが届いたのは昨日の朝。明後日成田を出発する便の航空券と、『Shine』の楽譜に綴られた詞と同じ、流れるような走り書きはお世辞にも読みやすいとは言えない響の文字で、ワシントン経由でボストン空港に到着してからゲートを出るまでの手順と道順がこと細かく書かれている手紙が一枚同封されていた。

「先輩、完全に私を子ども扱い...」

1から10まで、まるでマニュアルのように書いてあるその内容にヒカルは思わず苦笑した。けれど海外に行くのも飛行機に乗ることさえも初めてのヒカルにとって、そのマニュアルがありがたいものであることは確かだった。

――ゲートの前で待っているからとにかく気をつけて来いよ。

手紙の最後にはそう書かれ結ばれていた。

パスポートも手に入れ、あとは明後日の夜、このチケットを持って空港に行き飛行機に乗ればそれでいい。そうすれば新学期が始まるまでの約3週間、ボストンの響のアパートで一緒に暮らせる。

だがその前に、母にボストン行きを話さなければならない、という大きな難関をくぐりぬけなくてはならない。

これは心が重い。

母がすんなりとボストン行きを承諾してくれるとは思えない。あの朝帰りの日、一緒にいたのが颯土じゃなくて響だった、と知った時の母の哀しそうな顔は今でもヒカルの心を曇らせている。

12月なんてすぐ。

ただ待っていれば響は帰ってくる。

そんなことはわかっている。

でも、この間までの気持ちと今の気持ちでは明らかに違う。

『ボストンに帰らないで！ずっと一緒にいて！』

今まで生きてきた中で一番大きなわがまを口に出してしまったあの時に、自分の求めるありのままが全て溢れ出た。今はもう、12月まで待てない。

あの日、響の前で涙を流してしまったことがつらくて。あの時、触れ合えなかった自分が悲しくて。

――迷いたくない。

だから今、一緒にいたい…。

「颯土くん…」

ヒカルは隣の颯土の部屋をカーテン越しに覗いて見た。今夜も明かりは消えている。あの日から颯土とは会えてない。仕事が忙しく、帰って来たり来なかったりで生活のリズムがヒカルと合っていないからだ。

あの日、浮かんだ颯土の面影の意味は今でもわからない。でもあの時、体の底からつき上げてきたせつない想いは今も颯土を思う時に感じる。母が言った言葉と態度がずっと頭の片隅に引っかかっているからなのだろうか。

――秋になれば…、少し時間をおけば、きっと颯土くんとも元通りになっているよね…？

明後日の出発までに颯土と会えなかったら、もう9月になるまで話をすることはできない。でも、その方がいいのかもしれない。あかねの結婚パーティーの日から微妙に変わってしまった自分と颯土の関係も、時間を置いたあとに自然に元に戻っていれば、またビービー弾の飛ばし合いができるふたりに戻っていればいい…。

「さーてと…。じゃあ、超難関をクリアしてこようかな…！」

ヒカルは自分に気合を入れ階下に降りた。

◇

「お母さん、ちょっと話があるんだけど...」

母は台所で夕食の後片付けをしていた。哲平は既に寝たあとで、リビングでは今仕事から帰ったばかりの兄の剛だけが遅い夕食を摂っていた。父は2日前から出張に出かけている。

「なに？」

母は手を休めずに言った。

——タイミングが悪いなあ、兄貴がいるなんて...。

TVのニュースを見ながら夕食をせっせと口に運んでいる剛を横目で見、
「それが終わってからでいいから、ちょっと私の部屋まで来て欲しいんだけど...」

と、ヒカルは言った。

「なんだよ？俺が聞いてちゃマズイ話なのか？」

剛は顔をヒカルに向け慚然とした。

「お母さんにだけ話したいの」

「ふーん。例の金髪の彼氏の話？お前、朝帰りしたんだってな？」

——なんでこんな時にそんなこと言うかなあ、兄貴は！

ヒカルは剛を睨んだ。

「ヒカルそうなの？ヒビクさんの話なの？」

母は、あからさまに顔を強張らせた。母のそんな表情に、ヒカルは少なからず傷ついた。

「.....うん、まあ。いいからあとで来て」

「ここで言いなさい」

早口で言う母の言い方がとても冷たい。

「お母さん...」

「剛に聞かれてマズイような話なら、お母さんは聞かないわよ」

「なんで？女同士で話したいことだってあるじゃない！」

母はヒカルをチラリと見たがそれ以上は何も言わない。こんな母は初めてだ。今までずっと自分の味方でいてくれた母なのに、とても遠い人になってしまった気がした。

——何なのよ...。

ヒカルは母の背中を見つめ、込み上げる悲しい思いと憤りが混ざり合う自分の感情を何とか沈めた。そして、

「...あさってから今月一杯、新学期が始まるまで...、私、ボストンに行って来るから」

涙声になりそうなのを必死で隠しながら極力さり気なく言った。

茄子焼きを口に入れようとしていた剛は箸を持ったまま凍結し、コップを洗っていた母はシン

クにそれをおもむろに落とした。

「ボストン?!」

随分してから剛が叫んだ。

「もう航空券もパスポートも準備したの。明後日の夜の便で行く」

「どういうこと？」

呆然とヒカルの顔を見つめていた母がようやく言葉を出した。

「...ヒビク先輩のところに行く」

「ヒカル！」

「...ヒカルもいつの間にか大人になったんだねえ...」

呑気に、半ば放心したように呟く剛に、

「剛は黙ってなさい!!」

と、母は怒鳴り、

「許さないわよ、ヒカル」

ヒカルに向き直って冷たく言い放った。

そう言われることは覚悟していたが退く気はない。

母はちゃんと話せば分かってくれるはずだと、ヒカルはまた感情の行方をコントロールして言った。

「私の話を聞いてよ。この間のことからお母さんにはちゃんと話がしたいの」

「聞いたとしてもボストンへは行かせないわよ。それだけじゃない。もう、ヒビクさんとはお付き合いをしないで欲しいわ」

「お母さん？」

ボストン行きを反対されることは覚悟していた。だが響との付き合いまでを反対されるなんて思ってもいなかった。

「...どうして? どうしてヒビク先輩とつきあっちゃダメなの？」

母は何も言わない。じっと厳しい顔でヒカルを見つめている。

「おふくろさあ...」

剛が言いかけると、それを遮るようにして、

「とにかく...、ボストンに行くなんて絶対にダメ。ヒビクさんのことはもう諦めて」

母は言い放ち、再び洗い物に戻った。

ヒカルは唇をかみしめて母の背中をじっと見つめた。話せばきっとわかってくれると信じていた。だが話を聞こうともしない母のこの様子では、今は何を言ってもダメだということを理解せざるを得なかった。

昔、響とバイクで日光に行った時には、自分と響を信じて許してくれたし、いつも響を想っている自分を応援してくれていた母なのに...

『お母さんもヒビクさんが一番カッコイイと思うなあ!』

少女のように、自分と張り合いながら響に対する憧れを快活に喋っていた母が、何故急に反対の鬼に変わってしまったのだろう…。

「…お母さんがなんて言っても、私は行くから…」

出す声が自分のものではないように低く震えていた。

「ヒカル！」

「…黙って行っちゃえばよかった…。嘘ついて行っちゃえばよかったよ！」

ヒカルは叫んで二階に駆け上がった。

――麻耶ちゃんとかける、海ちゃんとかける、嘘なんていくらだってつけたけど、お母さんにはちゃんと話して理解して送り出してもらいたかった。いつだってお母さんには何でも話してきたのに…。いつだって、何でも聞いてくれたのに…。

「ヒカル、入るぞ」

ノックの音と声が同時に聞こえ、返事をする間もなく剛が入ってきた。

ヒカルはこぼれそうになっていた涙を慌てて飲み込み、

「なによ？」

ムツとした顔を兄に向けた。

また何かチャカすようなことを言いに来たに決まっている。剛は昔からいつもそうだ。何も状況がわかっていないくせに余計なことを言ってその場を混乱させる名人。さっきだって剛の「朝帰り」の一言がなかったら、母もあんなに頑なにならなかったのかもしれない。

「勝手に人の部屋に入って来ないでよ」

母との諍いを兄のせいにしてしまいたくて必然的に対応はそっけなくなる。

が、剛はそんなことには構わないのか気づかないのか、とにかくズカズカとヒカルの部屋に入り込み真ん中に座り込んだ。

「ありゃ、まずかったんじゃないか？」

剛はいきなり言った。

「だから、なによ？」

「嘘ついて行っちゃえばよかったよ、発言。あれでおふくろ思いっきり警戒するぜ？お前、明後日の夜まで外出禁止になっちまうかもよ？」

「……」

「めずらしいよな。ヒカルがおふくろにたてつくなんて」

「…たてついたらつもりはないよ…。正直な自分の想いを言っただけ…」

剛はそうか、と呟き、

「おふくろが何言っても行くつもりなんだろう？」

と、言った。

「うん…」

言葉では言ったものの、母に反対され止められたままそれを振り切って行くのは辛い。母の応

援が欲しい。ずっと友達のように何でも話してきた母だから。

「いつまでも子どもじゃないのにな。手しおにかけて育てた娘を、その金髪の彼氏にとられちまう、って焦ってんだろーな、おふくろさん」

「だって...、ヒビク先輩と私が付き合ってることはお母さんだってわかってたし、今までは反対しなかったのに...」

「そりゃそうだろう。今まではそいつはアメリカに行ったままだったんだろ？電話でいくら話してたってアメリカは遠いじゃないか。けど、もうそうじゃない。おふくろにとってみたらお前を遠くに連れてかれるようで心配でしょうがないんだよ」

「そうなのかな...？」

「お前の恋愛をどーのこーの言ってるんじゃないと思うぜ。遠くに行って欲しくない、ただそれだけなんじゃないかな、おふくろは」

剛の言うことはわかる。でも、ただそれだけのことであんな反対の仕方をするだろうか？母らしくない、とヒカルは思っていた。

「おふくろにとっちゃ、彼方アメリカのヒビクさんよりも隣んちのソージくんとでも一緒になってくれたら、なーんて思ってるんじゃないのかなあ？」

剛はポケットからタバコを取り出して火を点けた。

「ここは禁煙だよ、兄貴！それに、その言い方は颯土くんに対して失礼！」

「かたいこと言うんじゃないの。そのソージくんが来た時だってここでタバコ吸ってるじゃないか」

剛は構わずフーッと煙を吐く。

「あのさ、ヒカル。お前は少し男女のことについて考えが浅すぎるよところあるぜ？」

「どーゆーことよ？」

「例えばソージくん。あいつだって男だぜ？なのにお前は平気で奴を部屋に入れるだろ？お前があいつの部屋に入り込んでる時もあるしさ。俺はいつも気が気じゃないんだ、実際」

剛はカーテンの向こうの颯土の部屋に顔を向けた。

「なんでよ」

「妹の部屋に男がいてみる？気になるだろが」

「だから、なんで？」

「言わせるのか？.....押し倒されやしないかって思うんだよ」

ヒカルは豆鉄砲を食らった鳩のような顔で剛を見た。

「...何言ってるのよ、兄貴...」

「だから考えが浅いって言うの。男ってのはそうゆう生き物なんだよ」

まったくヒカルは...、と剛はややバツが悪そうに自分の頭をかく。

「だって、颯土くんでしょ？颯土くんだよ？」

と、言った時、ヒカルは先日の母の言葉を思い出した。

『颯土くんと一緒だからそんなに心配はしてなかったけれどー』

あの時は、どうして？と思った。
けれど自分も今、剛に同じことを言った。

「お前が思っていることと、ソージくんが思っていることが必ずしも同じとは限らないんだぜ？」

ヒカルは黙り込んだ。

何かが心の中に押し上がってくる。またあの時のせつない想い。言葉にならないのがもどかしい。

「ま、ソージくんのはいいとして、ボストンに行くって話、はっきり言って俺もあんまり賛成したくない」

「...いいよ。兄貴に賛成してもらおうなんて思ってないから」

うつむくヒカルを剛はじっと見つめる。

「...それでも行くんだよな？おふくろや俺やみんなが反対しても」

「...うん」

「なんでそんなに行きたいんだ？」

「何でって...っ」

咄嗟にヒカルは返答に詰まった。

響が好きだから。

一緒にいたいから。

それは当たり前理由だけどー。

「...行かなきゃダメなの」

ヒカルはポツリと呟いた。

そんな妹の様子が剛にはどこか追い詰められているように見えた。

「.....しょうがない。じゃあ、俺がおふくろに話してやっからちょっと待ってろ」

——え？

兄貴が？

ヒカルはポカンとして剛を見つめた。

「なんだよ、その顔！」

「...だって兄貴、お母さんの信用ないし...」

「あのねえ！俺だっていつまでも昔の俺じゃないんだぜ？」

剛は無然としながら再び階下に降りて行った。

——大丈夫かな、兄貴で...？

余計にこじれたりしないだろうか...

と、ヒカルは危惧する。

だが、確かにさっきの剛は今までの無責任な剛とは少し違っていた。剛なりに心配してくれているのがよく分かる。

自分の恋愛がこんなにも家族に影響を与えることになるなどとは、ヒカルは思ってもいなかった。響を愛していることで浅倉家に今まではなかった波乱が起こっている。

ただ愛しているだけなのに。

ただ、一緒にいたいだけなのに――。

剛と母はずいぶん遅くまでリビングで話をしているようだった。さっきのように母の怒鳴る声は聞こえない。その代わりに剛が一生懸命母を説得しているように、な？だろ？という言葉の語尾が時々聞こえた。

――お母さん、ごめん。

兄貴、ありがとう。

でも、私はボストンに行く。

今、どうしても行きたいの…。

行かなくちゃ、ダメなんだよ…。

心の中に徐々に膨らんでくる罪悪感を押し込めてヒカルは航空券を抱きしめた。

翌朝、ヒカルが階下に降りていくとリビングには誰もいなかった。昨夜はなかなか寝つけなかったのだから今朝はいつもより少し遅い朝だった。

剛は既に出勤してしまったようだし久美子はゼミ。哲平の姿もなく母もいない。まだ9時前だというのに母と哲平は何処に行ったのだろう。昨夜のこともあるし剛と母の話はどうなったのかも気になった。

誰もいない朝のダイニング。

いつもドタバタと大騒ぎだった我が家の朝が急に懐かしく思ってしまうヒカルだった。

トースターに食パンを入れ珈琲を沸かし、ひとりで朝食を食べる。

狭い家が広く感じる。

ぽろぽろと涙がこぼれた。誰もいないからこぼすことができた涙だった。

ここ最近の自分の行動言動が無理を押し通していることは百も承知している。母や兄の言うことが間違っていないこともわかっている。なのに自分でどうすることもできない。ボストンへ飛んで行きたいという気持ちを抑えることが出来ない。

パンは半分も喉を通らなかった。

珈琲も飲みきることが出来なかった。

胸が痛くて、苦しくて――。

朝食の後片付けをしてからヒカルは昨夜書いた暑中見舞いを投函しに郵便局へ向かった。

――ヒカルせんせいはげんきいっぱいです。

ポストに投函する直前に、自分で書いた文字に笑われたような気がした。

いつも元気いっぱいのヒカル先生のくせに！と、言葉と文字がそう言っていた。

ポストの前でぼんやりと佇んでいると、

「あら、ヒカルちゃん！」

後ろから声をかけてきたのは颯土の母だった。

「どうしたの？ぼうっとしちゃって。暑さにやられた？」

颯土の母は持っていた日傘をヒカルにそっと差し出した。

「おばちゃん...」

いつもと同じ颯土の母の声と笑顔が嬉しくて、思わず込み上げる涙をヒカルはぐっと飲み込んだ。

「毎日毎日暑いわねえ。おばちゃんも年だから夏はキツイわあ」

「なーに言ってんだか！うちのお母さんより若いくせにい～」

「ヒカルちゃんちのお母さんはまだ哲平ちゃんを追いかけてるから全然若いよ。私なんかあとは孫の顔を見れば人生おしまいって感じ」

颯土の母はそう言いながらくすくすと笑う。

「人生おしまいだなんて言わないでよ～。おばちゃんはいつもキレイにしてて素敵だよ！これからまだまだ恋が出来そうって感じ！」

「あら～、ヒカルちゃんってほんっといい子ね！ねえ、アイス珈琲でも飲みに行かない？素敵な褒め言葉のお礼におごっちゃう！そうだ！颯土の写真があるっていう珈琲ショップに連れて行ってくれないかなあ」

颯土の母は照れ臭そうに笑った。

「あれ？おばちゃん、行ったことないの？」

「何だか恥かしくてね…。颯土にも絶対に行くなかって言われてるし。でも、あの子がどんな写真を撮ってるのか見てみたいじゃない？そーっとでいいから、ね？颯土にはナイショ」

唇の前に人差し指を立てて笑う颯土の母が可愛くて、ヒカルは笑顔で頷いた。

◇

午前中の『Deja-vu』は柔らかなピアノ曲のBGMが流れ、カウンターと奥のテーブルに婦人の客がいるだけで外の暑さが嘘のように涼やかだった。

「わ～、素敵なお店ね～」

フロアに一步足を踏み入れた颯土の母は日傘を閉じながら店内を見回した。

「いらっしゃいませ、ヒカルさん」

いつものように水月がにこやかに迎えてくれる。

「あ、マスターの水月さんです。水月さん、こちらは颯土くんのお母さんです」

ヒカルは互いを紹介した。

「これはこれは、ようこそいらっしゃいました。水月です」

水月は少し緊張したような面持ちで颯土の母に頭を下げる。

「こちらこそ、颯土がいつもお世話になっています」

颯土の母もお辞儀を返す。

「水月さん、お母さんを連れてきたことは颯土くんにはナイショにしてね」

「お忍びなんです」

颯土の母は笑い、もう一度フロアをぐるっと見回してから座りたい椅子を窓辺に決めた。

「どう？颯土くんの写真たち」

落ち着いた様子で周囲を見回している颯土の母にヒカルは言う。

「うーん...どうなのか、私にはわかんないなあ…。これ、全部颯土が撮った写真なの？」

「そうだよ！ポストカードもたくさん売れてるんだよ」

ヒカルは自分のことのように胸を張る。

「なんかやっぱり照れちゃうわね。くすぐったい感じよ…。でも、」

颯土の母は目の前のヒカルと猫の写真を見つめ、

「わかりやすい子ね、颯土」

と、笑った。

「わかりやすい？」

「あの子、ほんと、ヒカルちゃんが好きなのね」

颯土の母のひとつでヒカルは目の前が真っ暗になった。まるで空が割れて頭の上に降って来たような衝撃。

——颯土くんが、私を好き——？

「や、やだおばちゃん…。何言ってるんだか、もう…」

深呼吸をして落ち着いてから、ヒカルはテーブルのグラスを手に取った。

颯土が自分を好きだなんて、そんなこと意識したことがない。なのに今の颯土の母の言葉で心の奥に手を突っ込まれ、心臓をつかまれたような痛くて苦しい気持ちが走った。

「あれ？颯土とヒカルちゃんって、そういうんじゃないの…？」

颯土の母はそんなヒカルの態度と言葉に啞然としたように言う。

「全然違うよ！そんなこと言ったら、颯土くんきっと怒るよ…」

「なあ～んだ…。そうだったのか……」

颯土の母は、おもむろにガッカリして呟いた。

「…勝手に勘違いして勝手に夢みちゃってたおバカなおばちゃんね」

ため息をついて笑う颯土の母に、ヒカルは何て答えたらいいのか言葉を探した。以前、颯土の母に『ヒカルちゃんみたいな子が颯土のお嫁さんになってくれたらいい』と言われたことがある。あれはもう何年も前の、まだ高校1年生ぐらいの時。あの時も同じように言葉に詰まったのを覚えている。

困惑しているヒカルから窓辺で微笑んでいるヒカルに視線を移した颯土の母は、ふうと小さく息を吐いてから口を開いた。

「ヒカルちゃんが隣に引っ越してくるまでね、颯土はずっと私にも口をきいてくれない子だったのよ」

「…うん。知ってる」

「昔はとっても明るくてやんちゃな子だったのに、ある時から突然変わっちゃって、友達も作らなければ喋りもしない、何を言っても反応が返って来ない子になっちゃって、私、自分の育て方が悪かったのかなって凄く悩んだの」

ヒカルは黙って颯土の母を見つめた。

颯土の過去は本人からも聞いたし亮太からも聞いて分かっている。無口で無愛想で他人と関わることを極端に拒絶していた、出会った頃の颯土。そんな息子を一番側で見ていた母の気持ちはさぞかしせつなかつただろう。昔の颯土が明るくやんちゃな子どもだったとしたらそれは尚更だ

「専門機関にも通ってカウンセリングを受けたりしてみたけれど、颯土は心の病気というわけじゃなくたぶん性格だって言われたの。兄弟でもいたらまた違うのかなって...、考えてね、颯土が四年生の時に妊娠したのよ」

「え...?」

「でも、その子は生まれてこなかった。このことは颯土にはナイショね。話してないから」

明るく話す颯土の母。

それが余計にせつない。

「もう黙って見守るしかないんだって、やっと心に決めることができた頃ヒカルちゃん一家が隣に越してきた」

颯土の母は再び目の前の写真に目をやった。

「あの子、変わった。ヒカルちゃんに出会ったおかげだって思っているの」

「そんなことないよ、おばちゃん。私のおかげなんかじゃないよ」

颯土の母はゆっくりと首をふった。

「母親だからわかるのよ。ヒカルちゃんと一緒にいる時の颯土、昔のね、小さかった頃の颯土の顔なの。哲平ちゃんみたいだったのよ、颯土が小さい頃って」

颯土の母はくすくす笑う。

「だからね、ヒカルちゃんがずっと颯土と一緒にいてくれれば嬉しいなって思ってたのよ！颯土が神戸から帰ってきてからその夢が叶ったような気がしていたの」

「おばちゃん、そんな話をうちのお母さんにもした？」

「ええ。いつもしてるわよ。ヒカルちゃんのお母さんもね、ヒカルちゃんがお嫁に行く先が隣の家だったらいいなあ、なーんて言ってる。私たちの密かな夢だったりしてたの。馬鹿な親たちねえ」

——おばちゃんの想いとお母さんの想い。

そして、颯土くんの想い...

私の想いは——？

「...私も颯土くんが大好きだよ、おばちゃん。颯土くんに傍にいてもらいたい」

ヒカルは呟いた。

今のようにじっくりいかないまま何日も会えないのは哀しくてつらい。今までのように窓を開けたらそこに立っていてくれる、ずっと、そんなふたりでいたい...

「じゃあ...、」

「でも、ごめんね、おばちゃん...。私も颯土くんもおばちゃんとお母さんの夢は叶えられない」

そう言いながら、颯土の母に会ってから我慢していた涙がぽろぽろとこぼれ落ちた。

「好きな人がいるんだもん...。その人と一緒にいたい...んだもん...」

「ヒカルちゃん...」

ヒカルの涙に颯土の母は戸惑いを隠せずうろたえた。

「颯土くんのこと大好きで、とても大切な人だけど...」

自分と颯土。

ふたりはいつも、自然に当たり前が一番近くにいただけだ。隣に住んでいて部屋が向かい合っていて窓を開けたらそこにいて、同じ屋根の下ではないけれどまるで家族のような存在。たぶんそれは颯土も同じはずだと、ヒカルは思っていた。颯土が自分を好きだとかそういうことではなくて、そばにいて当たり前のかげがえのない存在。いつからそんなふたりだったろう？確かに出会った頃はこんなじゃなかった。颯土はいつも面倒くさそうだったし、自分はいつも颯土に突っかかっていた。自然に、当たり前にならなくなってしまった自分と颯土。

同じようにまた、自然に当たり前にならなくなってしまおうのだろうか...

ひとつの時代が終わり、別の時代に――。

パーティー会場で感じた颯土は、別の時代に変化していくふたりを示唆していた姿だったのだろうか...

『お前が思っていることと、ソージくんが思っていることが必ずしも同じとは限らないんだぜ？』

昨夜の兄の言葉が蘇る。

自分が思っているから颯土もそうだとはい限らない。

でも信じていたい。

ふたりは、恋愛を越えたもっともっと深いもので繋がっている関係だと...

変わらないままでいたい、自分と颯土の関係。

そして、颯土の母や自分の家族たちとの関係。

でも、人は変化しないではいけない。

いつまでも同じままではいけない――。

変わっていく。

ひとつの時代が終わる――。

涙はとめどなく溢れる。

「ヒカルちゃん、ごめんね！私、勝手なこと言っちゃったね」

ヒカルは首をふった。

いろいろな母の思いがある。その思いをも越えて行かなければいけない時が必ずやってくる。今が自分にとってのその時なのかもしれない。

「明日からボストンに行くんです」

ヒカルは言った。

「旅行？」

「ううん。好きな人がボストンに住んでいるから...」

颯土の母は目を見開き、そのままその視線はヒカルと猫の写真に移動した。

「そう...」

颯土の母の視線をたどり、ヒカルは言った。

「颯土くんにはあかねちゃんの結婚式の日から会えなくて、もしかしたら9月まで会えないかも...」

「颯土、おとといから会社の取材旅行とかでシンガポールに行ってるのよ」

今度はヒカルが目を見開いた。

「え...？シンガポールへ...？」

「あかねちゃんの結婚式のあと急に決まって慌しく出て行っちゃったの。急に行けなくなった誰だかの代わりだったみたい」

今までも颯土は時々会社の取材旅行に同行し何日も家をあけることがあった。だが、そういう時はいつだって行く前に話してくれた。たとえそれが急な話だったとしても、窓にビービー弾が必ず当たった。

「ヒカルちゃんには言って出かけたのかと思ってた...」

颯土の母はポツリと呟き目を伏せた。

少しずつ変わっている自分と颯土。

もう、戻れないのかもしれない――。

もう.....。

◇

家に戻ると玄関には母と哲平の靴があった。

「ただいま...」

重い気持ちを引きずりリビングのドアを開けると、冷房の効いた隣の和室に布団が敷かれ哲平が寝ていた。おでこに濡れたタオルを当てている。

「哲平どうしたの?!風邪?」

ヒカルは眠る哲平に駆け寄っておでこに手を当てた。

「今、やっと眠ったとこなのよ。起こさないでやって」

「あ、ごめん。いつも元気な哲平だから驚いちゃって...」

ヒカルは真っ赤な顔をして眠っている哲平の頭を撫でながら言った。

「お医者様には夏バテだって言われたわ。この子、この暑い中毎日プールだサッカーだって外で跳び回ってるから...」

と、母はため息をつく。

「そっか。でも変な風邪じゃなくてよかったよ...」

小さい頃の颯土は哲平のようだった、と言っていた颯土の母の言葉を思い出し、何故かいつもよりもこの小さな弟が愛しく思え、また涙が溢れた。

――もう、なんなのよ今日の私。泣いてばかり...

緩くなってしまっている涙腺がいまいまして仕方がない。いつも元気いっぱいのはるか先生のくせに。

「ヒカル...」

母がヒカルの背後に立ち、そっと肩に手を置いた。

「お母さん...？」

母の優しい手の上に自分の手を重ねてヒカルは母を見上げた。

「こんな時でも、あんたは真っ先に哲平に駆け寄ってくれる優しいお姉ちゃん」

母はもうひとつの手をヒカルの手の上に重ねた。

「あんたの気持ちがわからないわけじゃないのよ。お母さんだって恋愛をしてお父さんと結婚したんだからね」

「うん...」

ヒカルはうつむいた。

「でも、親だからもしかしたら娘が傷つくんじゃないかって思うと、そんな自分の恋愛も忘れちゃって...」

「傷...つく？」

ヒカルは母の言葉を繰り返した。

昨夜のこと。

二階に上がったはずの剛が再び降りてきて言った。

『行かせてやれば？あいつだってもう子どもじゃないんだ。自分の行動の責任ぐらい自分でとれるだろ？』

『.....』

『おふくろの気持ちもわかるぜ。自慢の可愛い娘がもしかしたら遠くにいつちまうかもしれないんだ。相手はアメリカで活躍してる男だしな！でも...』

『その話はもういいわよ、剛』

『話も聞かないで許さない、なんてさ、ヒカルが可哀想だ』

『.....』

『俺だって本当は穏やかじゃないぜ？あんなガサツな妹でも可愛いし。男のところに行くってことがどーゆーことなのか、考えただけでも金髪野郎を殴ってやりたいって思うぜ。だけどさ、これ

はヒカルの恋愛だ。ヒカルの気持ちが一番大事だろ？』

『...ヒカルの気持ちか』

そんなことは母にはちゃんと分かっていた。

ヒカルが高校生の頃から響を想っていたことも、会えない3年半を耐えたことも、これが本気の恋愛であるということも。

だからこそ、本気だからこそ、もう以前のように手放しで認めてあげるわけにはいかない。

そう考えてヒカルにはあんな冷たいことを言ってしまったけれど――。

『おふくろ？』

『...ヒビクさんはピアニストとして前途有望な人。ジャック・ベリーがお父さんなんですよ？世界的に有名なピアニストよ。今はふたりとも若いから、好きだ、一緒にいたいって気持ちだけあればいいって思っていると思う。ヒビクさんが日本にいたらそれでもいいかもしれない。私は彼を否定してるわけじゃないのよ...。ヒビクさんは男らしいし素敵な人だって、ヒカルにはもったいないくらいの人だって思ってる』

『だったらいいじゃないか。この先、12月になったらそいつは日本に帰ってくるんだろ？だったら...、』

でも、と母は剛の言葉の続きを遮った。

『ヒビクさんはもう世界中の人の注目を浴びている存在よ。大きすぎるのよ。この先何がどうなるか分からないわ。想像もつかないのよ。そういう処で生きている人なのよ、もう...。傷つくのはたぶんヒカル。ヒビクさんを愛する気持ちが最大の時にもしも想像もつかない何かが起こったらヒカルはどうすればいいの？今ならまだ諦められるかもしれないのよ。でも、ここでボストンに行ってしまったらもう取り返しがつかなくなっちゃう...』

母は一気に喋って剛を見た。

『これが私が反対をする一番の理由。あの子の気持ちが大事なのはよくわかってる。でも親として、傷つくかもしれない恋愛をさせたくはないの。傷ついて欲しくないの。心も身体も...。だからもう、ヒビクさんはダメなのよ...』

『それでも俺は、あいつの思うままに行かせてやりたいって思う』

剛はきっぱりと言い切った。

『剛...』

『このままあいつがおふくろの言いつけ通りヒビクサンを諦めなきゃなんないってことになっても傷つくのは同じだと思うぜ。傷つかない恋愛なんてこの世の中にはないんだ。そんなことあいつだって知ってるさ』

『.....』

『傷ついても傷つけても思ったことをやってみなきゃいけない時もあるんだよ。傷つくのを恐れて今を抑えつけるよりも、傷ついた時にそれを癒してやるのが家族ってもんだ。今はあいつの思うがまま行かせてやった方がいい』

『...あんた、いつの間にそんなに懐が大きくなったの？』

『俺だって伊達に年を重ねちゃいないぜ...、まったくウチの家族ときたら、ほんと俺のこと何だ

と思ってるんだ...』

『だって...』

『ま、俺のことはいいよ...。それに、まだヒカルが傷つくって決まってるわけじゃないんだぜ？

こういうのって大体が親の取り越し苦労なんだ』

親の取り越し苦労であればどんなにいいだろう...。

『剛もまだわかってないよ...。やっぱり親にならないとわからないよね、きっと。これも、親としても通らなきゃいけない道なのかな...』

小さく呟きながら、母は複雑なため息をもらした――。

「ヒカルの気持ちが一番大事なんだよね...」

母は言った。

「本当は行かせたくない...。ボストンなんて外国に大事な娘をひとりで行かせるなんて考えたくない...」

ヒカルは母の顔を見つめた。

「お母さん...？許してくれるの...？」

「許さなくても行くんでしょ？ヒカルは...」

ヒカルは頷いた。

「まったく...、一途な子よね。誰に似たのかな...」

母は諦めたように呟いてそのまま台所に戻って行った。

母の後ろ姿がせつなかった。自分の一途なわがママをきっと身を切る思いで許してくれた母。

身近な人達のたくさんの色々な思いを踏み台にして明日自分はボストンに向かう。それを深くかみしめなくてはいけない...。

「お母さん、ありがとう...」

また、涙がこぼれた。

◇

翌日の20時。

ヒカルを空港まで送ってくれたのは兄の剛だった。

1週間前、響がくぐったゲートの前に、今自分が立っている。

「3週間後はまた迎えに来るから...」

剛は変にカッコつけてポケットに手を突っ込みながら言う。こんなに蒸し暑い夏の夜だというのに...。

「うん...。兄貴、色々ありがとう...」

「なに言ってるの...」

剛は裏返った声で言い、ヒカルの頭をポンと撫でた。

「とにかく気をつけて。迷子になるんじゃないぞ」

「うん。行ってくるね！」

「ああ…」

ヒカルは剛に手を振り長いゲートをくぐった。しばらくして振り返ると兄はまだそこでポケットに手を入れたまま見送ってくれていた。

ヒカルを乗せた飛行機が離陸の準備をはじめた頃、ひとつの飛行機が着陸して滑走路を走って来た。遠くの方に見えるその飛行機をヒカルは窓からぼんやりと見つめ、考えていた。

この旅立ちが新しい時代への兆しになる。

家族、颯土、そして自分と響の未来への兆し――。

飛行機が滑走路を勢い良く走り出し、やがて激しい重圧と共に空に舞い上がった。全身に重くのしかかる圧力をかみしめながら、ヒカルは小さくなっていく地上の灯りを見下ろした。

トラップに足を一步踏み入れたと同時に、今地上から飛び立った飛行機の轟音が夜の飛行場に響き渡った。

颯土はその行く先をしばらくじっと見つめた。

「群竹くん、何してるの？後ろがつかえてるよ？」

背後の瑠璃に諭され、颯土は ああ...、とつぶやきその階段を下った。

5日前に急に決まったシンガポール取材旅行を終え、今帰国した。

光創社大阪支社で見習いアルバイトをしていた頃、時々一緒に仕事をしていた記者の日向瑠璃がこの春から東京本社にきている。今回、シンガポールに移住しシンガポリアンと共にその地域の中で日本料理屋を営んで20年、という老夫婦を取材してきたのだが、これは瑠璃が2年間温め練ってようやく通った雑誌の企画で、世界で活躍する日本人をとりあげ取材を行い雑誌上で紹介するシリーズの二回目だった。瑠璃と組んでいるカメラマンが突然の体調不良で取材旅行に参加できず、瑠璃のたつての希望もありピンチヒッターとして颯土が急遽同行したのだ。

「やっぱり気心知れた人とが気が楽だし！」

と、言う瑠璃に、

.....気心はあんまり知れてないけど....。

と、心の中で反論しつつ、そして相変わらずの瑠璃の自己中にふりまわされながらの仕事を終え、心身ともにくたくたになっての帰国だった。

「これからどうする？まだ時間も早いし飲みにも行く？」

空港のロビーを歩きながら瑠璃が言った。

——冗談じゃない...。これ以上、女王さまのお守りは勘弁願いたい。

アルコールを摂取した瑠璃は素面時以上に自己中を發揮する。シンガポールでの3日間で懲り懲りというのが颯土の率直な思いだった。

「俺はこのまま会社に帰ってフィルムを整理します」

「相変わらず、ドがつく堅気な子ねえ...。少しは柔軟になってるかと思ったら、そういうところとも変わってないし、つまんない」

瑠璃はぶうぶう文句を言った。

——はいはい、その言葉はシンガポールでも耳にタコができました。

と、颯土は心で喋り、

「じゃ、俺はこのまま電車で行きますから、ここで」

リムジンバスに向かう瑠璃に颯土は手を上げた。

「ちょっとお、本当に会社に行く気？」

「お疲れさまでした！」

颯土はさっさと締め言葉を吐き、空港駅へと足早に歩きだした。

「いい男なんだけどなあ…。ガードが堅いというかなんて言うか、そーゆー冷たさは今時流行らないよ」

という瑠璃の呟きは颯土の耳にしっかりと届いていた。

――なんとでもおっしゃってください…。

颯土は振り返らずに歩き続ける。

2年前の大阪でさんざんな目に合わされている颯土にとって、日向瑠璃にはある意味トラウマがある。雨に濡れながら一本の電話のために走り回ったあの夏の夜――。

――もしもあの時…、

あかねとの電話が繋がっていて、1日早く神戸に到着していたあかねと何事もなく無事に会えていたら今現在はどうなっていたのだろうか。今もあかねを抱きしめ、神戸に留まり、まだ学生をやりながら見習いカメラマンをしていたのだろうか。今のこんなに苦しい想いをかみしめずにするのだろうか…。

颯土はポケットの星のキーホルダーを握り締めた。

――いや。

同じだったな…。

何、逃げてるんだよ、俺…。

どんなに遠回りしたところで、結局自分の気持ちヒカルにたどりついたらろうということは、もうとっくにわかっている颯土だった。そして、たどりついたところでその先はない、ということも。

成田エクスプレスは既にホームに停車していて、颯土が乗り込んだと同時に発車のチャイムが鳴った。デッキから車両を覗くと満席。颯土は仕方なくそのままドアの前に立つ。ふと反対側のドアを見ると、そこには見覚えのある顔があった。

――剛さん？

剛は颯土にはまったく気がついていない様子だ。壁にもたれた格好で視線は広げた雑誌に注が

れている。

空港駅から発車した成田エクスプレス。空港を利用する人間しか乗らないはずの列車だ。剛が海外から帰国したという様子でもない。

瞬時考えたくないことが脳裏に浮かんだが、頭を振りそれが形になる前に打ち消し、剛が自分に気がつく前に車両のドアを開けた。

ひとつ前の喫煙デッキに移動をしポケットから出した煙草に火を点けた時、

——颯土くん！

ヒカルが呼ぶ声が聞こえたような気がしてハッと辺りを見回した。周囲に人影はなくドアの窓に自分の姿が映っているだけだった。真っ黒なガラスに赤い点が揺れている。いつだったか、同じように窓に映った赤い点をぼんやり眺めていたことがあった。

『颯土くんたらさあ、いつから煙草吸ってんのぉ？』

ヒカルが幼稚園の教諭試験を受ける前日のこと。

ヒカルの部屋で無理やりピアノを聴かされた夜、消化不良とまでは言わなくても決して聴き心地が良いとも言えないピアノを延々と聴きながら、思わず煙草に手が伸びてしまった。

『え？あ～、いつからだろうなあ……？高校の時…ってことはさすがにないか…？』

『おいおいっ！』

『神戸にいる頃から習慣になったような気がするな。よく覚えてない』

『やめなさい、なんて言わないけどね、別に。吸いすぎは身体によくないよ！』

ヒカルは隣の剛の部屋から灰皿を持ってきて自分に差し出した。

『今日は付き合ってもらってるから特別に許可しますが、ここは禁煙ですからね！』

『はいはい…』

窓に映った自分と赤い点を通り越した向こうで、必死にキーボードに向かうヒカルの顔をじっと見つめていたあの日。

あんなふうに自分とヒカルの日常がずっと続くと思っていた。たとえヒカルが響を愛していたとしても、響を待ち続けていたとしても、そして響が帰って来たとしても、己のポジションを見失わないでいられる自分である、と思っていた。

『ここは禁煙！』

そう言いながら、それから灰皿を差し出してくれたヒカル。それはヒカルの部屋に当たり前のようによく用意されていた自分専用の灰皿だった。そんなに頻繁に出入りするわけでもないのに、それが嬉しくて禁煙のはずのヒカルの部屋で当たり前のようによく灰皿を汚していた。

『でもさ、煙草を吸ってる颯土くんって大人っぽいね！』

『はあ？』

『なかなかキマってるよ！』

『そ、そおかあ...？』

『だけど吸いすぎはダメ！1日10本以内にしときなね！』

『う...、10本ですかあ...？うまいなあ、ヒカルちゃんてば...。キマってるとか言って持ち上げといて...』

『なにぶつぶつ言ってるの？文句ある？』

『はい。わかりました...』

あの声もあの笑顔もあの姿も全部を振り払いたいと思った。

あかねの結婚パーティー、水月の珈琲ショップ、そして翌朝のヒカルに出会って以降、もう今までと同じようにはいられない自分を知った。

あのままヒカルの傍にいたら、自分が男であるということをおそらくはヒカルに見せつけてしまっていたかもしれない。ヒカルの想いが何処にあらうと、抱きしめてしまっていたかもしれない。

高まる想いに潰れそうだった。

口に出す言葉とは裏腹に求める想いが膨らんでいた。

あの朝、ヒカルの名を呼んだ響を見た時、普段着のヒカルがよそいきのヒカルに変わってしまうことを知った時、その想いは強く、強く...

それが怖くて、急だった取材旅行を引き受けた。少しでも別の環境に逃げたかったからだ。

だが、逃げたとしてもそれは一時的なことだ。現実がなんら変わるわけじゃない。

自分の中からヒカルが消えない限り――。

◇

会社に戻り、フィルムを整理し、喫煙所でぼうっと煙草をくゆらせる。

窓の下は首都高速道路。相変わらずの大渋滞で赤いテールランプが列を作っている。

この道をヒカルを乗せて横浜まで走ったのはつい1週間前のことだ。なのに、あれからずいぶんの時間が流れた気がするだけでなく、何もかもが変わってしまった。

こうやっていつまでも考えてもしょうがないことに想いを巡らせている自分に、どうしようもないくらいに腹が立つ。情けないくらいに女々しい。

「群竹、今夜付き合わないか？」

同僚のカメラマンがやってきて煙草を出しながら言った。

「飲み？」

「アンド プラスアルファ。かわい子ちゃんがいっぱいのいい店見つけたんだよ」

自分で自分を抱きしめる格好をし、唇をちゅ〜っと尖らせて同僚は言う。

颯土は、

「じゃ、遠慮しとく」

と、苦笑した。

「かわい子ちゃんは苦手だし...」

飲んで騒いで女と遊んで今を忘れることが出来ればこんなに楽なことはない。それが出来ればきつととっくにそうしていた。だが今、自分がやらなきゃいけないことはそんなことではなく...

「ちえっ、不健康な奴！」

素早く吸殻を灰皿の中に投げ入れ、同僚は別の同行者を探しに行った。

もう、逃げられないー。

下の赤い河を見つめ颯土は心で呟く。

いつの間にか煙草の火はフィルターの手前まで達し灰は全て床に落ちていた。

◇

水月の店、『Deja-vu』にはまだ灯りがともっていた。

橋の向こうに目をやると、東武鉄道の最終電車がゆっくりと隅田川を渡ってくる。今夜はずいぶん遅くまで客がはけなかったらしい。

一瞬、扉の取っ手に手をかけてから颯土はとどまった。ここで扉を開ければ水月はいつものように優しく微笑んでくれるだろう。何もかもわかっているようなまなざしで、けれど何も言わず珈琲を差し出してくれるだろう。

格子の窓から中を覗くと、水月がひとり、壁に飾った写真のパネルを磨いていた。ひとつひとつ壁から外しテーブルに置いて丁寧に。これは客がはけたあとの水月の日課だということを颯土は知っていた。

ここで水月に甘えたら今までと同じだ。フロアに染み込んでいるヒカルの面影を抱きしめて、想いの螺旋から抜けることなくまた戻ってしまうだろう。

颯土は扉の取っ手から手を離し、そっとその場を離れた。

自宅の明かりは玄関を残して消えていた。

日付が変わって30分以上がたっている。見上げたヒカルの部屋も真っ暗だった。

ポケットから星のキーホルダーを取り出し、しばらくじっと見つめてから手のひらでぎゅっと握り締めた。

――ヒカル...

思わず心の中で名前を呼んでしまい、握った手に力を込めた。だがすぐにその手を開き、キーホルダーには本来の役目を果たさせた。

眠っているであろう母を起こさないように音を立てず二階の自室に向かう。たった12段の階段を上るだけなのに足は鉛のように重かった。

真っ暗な部屋に明かりを灯し、締め切って蒸し風呂のようになっている空気を外の空気と入れ替えた。窓辺に下げてある風鈴が「ちりん」と涼しげな音を立てたがそれは音だけ。外気も蒸しているのに変わりはない。

窓枠に座り下から持って来た缶ビールを開け煙草に火を点ける。

ここ数日、煙草を吸う本数もずいぶん増えてしまった。ヒカルと約束した1日10本以内をあかねの結婚式の日までは守っていた。

だが、さっき成田に着いてから今までの間でさえも、もう一箱近く吸ってしまっている。

――ヒカル…。

また、心の中で名前を呟いた。

目の前の窓は閉ざされその向こうにヒカルの気配も感じない。確実に遠い存在になって行く愛しい人。失われていく日常――。

剛が空港にいた理由をあの時に直感できてしまった。急いで振り払った考えだったがそれは確信といってもいいほどの直感。

ヒカルはもう、ここにはいない――。

空いたビールの缶をおもいきり手のひらで潰し颯土は机の引き出しを開けた。

深い灰皿の中に入れてある数十個の小さな玉が灰皿ごとしまわれてあった。毎日どちらからともなく投げ合っていたビービー弾だ。

軒下に落ちるそれを気が付いた時には拾い集め、時には新しい弾を哲平の目を盗んで失敬し、ふたりの日課を遂行するために使用されるそれらは、つい1週間前までは減ったり増えたりを繰り返していた。

颯土は右手でつかめるだけのビービー弾を掴んだ。

その時、部屋のドアをノックする音が響き、

「颯土、帰ったの？」

母の声が聞こえた。

「入るよ？」

「ああ…」

「…うわっ、暑い。エアコンつけたらいいのに…」

母は部屋に入ってくるなり言った。

「起きてたのか？それとも俺が起こしたか？」

颯土は窓枠から立ち上がり、握りつぶした缶をゴミ箱に投げた。

「眠れなかったんだ。颯土が今夜帰ってくるってわかっていたら明かりを点けて待ってたのに」

母は笑った。

「別に子どもじゃないんだから、そんなに気を使わなくていいよ」

「親にしてみたら大きくなってもいつまでも子どもなのよ」

母の言葉に颯土は笑った。

——いつまでも子ども、か…。

子どものように欲しいものが手に入るまで寝転んで泣き叫ぶことが出来たら、な…。

「ヒカルちゃん、ボストンに行っちゃった…」

母が呟いた。

一瞬の心に突き刺さる痛みを感じながらも、

「……そうか」

と、颯土は極力冷静に応えた。

もう、すでにわかっていたことだ。

けれど……。

「9月まで帰って来ないって…。本当の娘じゃないのになんだかせつなくてね…」

母は開いた窓からヒカルの部屋を見つめる。

「私にとってヒカルちゃんは希望を運んで来てくれた女の子だったから」

「……希望？」

「そうよ。颯土にはわかんないと思うけど、ね」

母の顔は微笑んではいても、その奥には絶望と諦めが同座している。今までに見たことがないほどの愁いの顔だ。

「……それほど可愛いと思ってるなら、あいつの幸せを喜んでやったらいいじゃないか」

心にもない言葉が口から飛び出す。

「うん。そうだね…。それはわかっているんだけど複雑なのよ、色々」

「それで眠れなかったわけ…？」

「…そう」

「別に…」

眠れなくなるほどのことでもないだろ…、という言葉は、喉に詰まって出てこなかった。

そんな強がり言っても仕方がない。今はもう…。

冷静に受け止めよう、現実を受け入れよう、としていた衣がはがれそうだった。

「颯土…？」

颯土は母に背中を向けた。

――いつまでも子ども...、だな。

今、大声で叫びたい。ダダをこねたい。あがきたい。

どこにも行かないで欲しい。

ずっと、いつまでも俺の傍にいて欲しい。

俺を見て笑っていて欲しい。

笑顔を守りたい。光に沿う影でいい。

それは、裏を返せば俺の希望に繋がっていたんだ.....。

ここに、いて欲しい

俺の、ヒカルでいて欲しい――。

足元から崩れていきそうな自分を颯土は必死で支えた。

「...じゃあ、寝るね。明日はまた早いのか？」

「ああ...」

「じゃ、颯土も早くお風呂に入って寝なさいね」

「わかってる」

おやすみ、と言って母は部屋を出て行った。

ドアが完全に閉まり階段を下りる母の足音が消えるのを確認してから、颯土は くっ！と嗚咽を漏らし、膝間づいた。

とうとう、本当にこの時が来てしまった。

もう、どんなに手を伸ばしても決して届かない。

心の中で激しい雨が降る。

どしゃぶり、いや、それ以上の雨。

隠して乾いた風になんてなれやしない。

そんな、薄っぺらい想いなんかじゃない。

手に握ったままのビービー弾を見つめるその上に、ポタポタと本当の雨が降り注いだ。

――これが最後。

もう、投げることはないだろう。

これから俺がすることは、この現実をどうやって消化するかを考えること。ヒカルを俺の中から消し去ること。

もう、逃げることはできないのだから...！

窓辺に飛びつき、一瞬だけ止まり、それから握ったビービー弾をヒカルの部屋の窓に投げつけた。

——ヒカル、ヒカル、ヒカル！！

ありったけの想いを込めて心の中で叫ぶ。

ビービー弾はパラパラと音を立てながら次々と暗闇の中に吸い込まれて行った。

都会の真ん中、首都高速道路の脇に建つビルの11階。

壁いっぱい広がる大きな窓から見えるのは、ビル、ビル、ビル。

冷房が効きすぎている編集室のテーブルにはシンガポールで撮影してきた写真が投げ出され、それをひとつひとつ手にとって吟味しているのは日向瑠璃だ。

「この写真、ここの部分をカットして、それからこっちはここを使えばレイアウトにおさまるかな？」

瑠璃はレイアウト紙を広げ選んだ写真をパッパと並べてイメージを作っている。

「ねえ、群竹くん、聞ってる？」

少し離れたところで椅子に座り、ぼんやりと一点を見つめているだけの颯土に瑠璃は顔を向けて言った。

「...聞いてますよ」

カメラマンは現場で写真を撮るのが仕事だが、颯土の扱いはカメラマンでもあり会社の雑用でもありで、雑誌掲載のレイアウトや編集作業も手伝わされる。それは大阪支社にいた頃からで、アルバイトから契約社員になったものの東京本社に来ても実働の扱いは同じままだ。普段は写真を撮るよりもこっちの仕事の方が多いくらいだ。今回は瑠璃の抜擢のおかげでチーフカメラマンを務めたが、だからといってなんら扱いが変わるわけではない。相変わらずこき使われる身の颯土である。

「昨夜ちゃんと睡眠とったの？なんか目が腫れてるみたいよ？」

「...そうですか？」

と答え、颯土はレイアウト紙に目を移したが、ただの平面が見えるだけで何も頭に入っていない。

——どこをカットしてどれを使うって？

今さっき、瑠璃が言ったばかりのことが思い出せなかった。

「この写真いいじゃない？いつかどこかで見た風景——うん、記事のタイトルはこれにしよう」

颯土が撮った写真を一枚一枚眺めレイアウトを考えながら記事の内容をひとりぶつぶつ呟く瑠璃だが、颯土にはそのどれもが空ろだ。

「ちょっと、一服してきます...」

颯土は立ち上がって編集室を出た。

「心、ここにあらず、ねえ...」

瑠璃は颯土の背中に向かって呟き、再びレイアウト紙に視線を戻した。

上はビル、ビル、ビル、と狭い空。

下は車、車、車、の大蛇のうねり――。

ポケットから煙草を取り出し喫煙所の窓に寄りかかりながら、そんないつもの景色をぼんやりと見つめる。

立ちのぼる煙草の煙が目にしみて涙が出た。煙だけじゃない、ガラスで遮断されているはずの外気までもが目に痛い。

颯土は人差し指の関節で目をこすった。

乾ききっていない下瞼にこすった涙がしみてピリッとした痛みが走った。その痛みは心の中で消えていない大きな塊を伴い、昨夜の自分をイヤでも思い起こさせた。

投げたビービー弾はヒカルの部屋の窓に当たり、次々と地面に落ちて行った。

ガラガラッと窓が開く音も、「颯土くん、なに？」という声も、闇の中で輝く笑顔もない現実を思い知った瞬間だった。

いつか、そう遠くない未来にやってくるだろうと知っていた瞬間だった。

その時に自分は何を思いどうするのか、心のどこかでいつも意識していながら考えたくなかった瞬間だった。

その瞬間を目の前にした時に溢れた想いは――、

ここに、いて欲しい。

俺の、ヒカルでいて欲しい――。

ずっと前からわかっていたのに意識しないようにしていた望み。

もう、どうにもならなくなってから自分の中で繋げられた真実の望みを言葉にしてしまった時、自分が止まらなくなった。爆発してしまった想いを抑えられなかった。

乱暴に窓を閉め、声を殺し泣いた。

涙と一緒に想いまでも流してしまえたら、このまま自分の中からヒカルを消してしまえたらと、勝手に流れてくる涙を止めようともせずに、再び勝手に止まるまで流し続けた。

暗闇の中で雫の形をした水泡がいくつも見え、その中にヒカルとの時間がひとつひとつ写真のように収まり、次々と割れては消えていった。

忘れていたような、些細なことまでがひとつひとつ…。

――全部消えてなくなってしまえ。

そしてもう、二度と蘇るな。

なにもかも、このまま…。

あんなに泣いたのはきっと生まれて初めてのことだろう。

気が付くと空が明るくなっていた。

涙は止まっていた。だが絶望はよりいっそう重くのしかかってきた。それはもう、忘れかけていた感覚だった。

9才の時、ひとりでたどった横浜からの帰り道はどこをどう歩いてきたのかまったくわからないくらいに、出口のない暗闇の中の道だった。血が滲むほど強く唇をかみしめていた、ということだけを昨日のこのように覚えている。毎日行き来していた隣の家を見た途端、自分の中のどこかがひとつ壊れた。どうすることも出来ない思いが爆発した。

亮のばかやろっ！

大声で叫んで部屋の中の手当たりしだいのもを投げつけてわめいた、あれが自分の感情をあらわにした最後だった。昨夜、ビービー弾を投げ、心の中でヒカルの名を叫び流れるままの涙を流すまで……。

9才のあの時は心を閉ざしてしまえば苦しみから逃れることが出来た。現実を何かのせいにしてしまえばよかった。殻にこもってしまえば安全だった。これ以上傷つかないように、何も求めなければ失うことも傷つくこともなかったわけだから…。

もう9才の頃と同じやり方で何かのせいにして逃れるわけにはいかない。この痛みを自分で乗り越えてゆくしかない――。

いつかヒカルを想い、今の自分のように苦しむ亮太に、`自分で乗り越えろ、と、突き上げる想いから逃れたい亮太が選択した方法を非難して無理難題を押し付けたように、今自分自身もこの無理難題を受け止めて越えるしか…。

――どうすれば消せる？

どうすれば忘れられる？

どうすれば……。

喫煙所の窓ガラスに頭を押し付けて颯土は目を閉じた。

疲労した身体はその一瞬の暗闇を浅い眠りに誘った。時間にしたらほんの2、3秒だろうが、颯土の意識は現実を離れて飛んだ。

『辛いから忘れようとか、忘れたいとは思わへん』

ずっと前に聞いたことのある声が心のどこかで聴こえたような気がして颯土は覚醒した。

『別れることを悲しむよりも、一緒にいたこと、その時間があつたことをこれからも大切にしていこうと決めたんよ』

そう言って寂し気な微笑みを向けてくれたのは……、

「麻希...さん...」

4年前、17の夏に沖縄で出会ったバイク乗りの久保田麻希。一緒にキャンプをしたのはほんの数日だったが、あの時自分が抱えこんでいた心の土砂降りに気づかせてくれた大人の女性だ。

『サトルってやつはもういないんだろ？いないやつへの想いにずっと縛られて行くのか？』

死んでしまった `サトル、への想いを大切に抱きしめている麻希に、自分はそんな言葉を投げかけた。もうどうにもならないものに心を縛られ、がんじがらめになる哀しみと絶望。颯土がもっとも恐れていた地獄だった。どんなに大切だと思ってもずっと一緒にいられるわけじゃない。求める心が大きければ大きいほど、失った時の傷と痛みも果てしない。そんな心の痛みを知っているから人と関わったり、人を愛したりすることに一步を踏み出すことが出来なかったあの頃の自分。なのに麻希はその痛みさえも抱きしめて大切にしたいと言った。麻希に投げた言葉は自分に答えが欲しかったからだ。

そして今、恐れていたことがそのまま現実になり、絶望を抱えそれをどうすることもできない。このままでは、もう傍にいない人、手の届かない人への想いに縛られていくだろう...、今も、そして未来までも...。

――どうすれば消せる？どうすれば忘れられる？

颯土はまた同じ問いかけを自分にした。

消したい。忘りたい。暗闇から逃れたい――。

『サトルへの想いは、うちの大切な時間の思い出や。一生忘れへんけど、縛られはせえへんよ。ただ...、』

沖縄の秘密の海岸で麻希と語り合った昼下がりが、次々と昨日のこのように蘇る。

グリーンの海がキラキラと輝き、麻希の瞳も同じ色を映して輝いていた。寂しそうにそれでも優しく微笑みながら、亡き人へ想いを馳せ――。

ただ...、と、言った後の麻希の一瞬伏せた瞳を覚えている。あとに続いた言葉はなんだったろう...？

...なんでもいい。

確かなのは、あの時の麻希の顔は絶望ではなく希望だったということ。

大切な時間の思い出。

忘れたくない、忘れることなんてできるはずのない時間の思い出。

別れることを哀しむことよりも、出会えたこと一緒にいられた時をずっと大切にしたい、そ

う言った麻希の言葉が闇の中でどしゃぶりを隠し、乾いた風になろうと必死にポーズを取っていた自分を目覚めさせた。

――そんなことわかっている。

ヒカルを忘れるなんて、ヒカルと過ごしてきた時間を忘れることなんてできやしない。出来るはずがない…。

だけど、一緒にいた時を大切にしまえるほど今の俺は大人でも強くもない。この胸の痛みに潰れてしまいそうなんだ…。

もしも今、あの頃の麻希に会うことができたならそこからなにかが見いだせるのだろうか？あの時のように、少しでも…。

――情けない…。今の俺はひとりで立ち上がり乗り越えるすべを持たない。

忘れない…。

消してしまいたいんだ、何もかも…。

箱からもう一本の煙草を取り出した時、

「まだ一服終わらないの？」

背後から瑠璃に声をかけられ颯土は振り返った。

「…やだ。この世の終わり、みたいな顔をしてる…」

うつむいた前髪の間隙から覗く、颯土の伏せた瞳を見つめて瑠璃は驚いた声を上げた。

「なんかあった？シンガポールの時から変だな、って思っていたけど…」

「…いや、べつに…」

颯土は再び窓の外を見る。

「そう？じゃあ、仕事しよう？レイアウト早く終わらせたいし」

「そうですね…。俺も今日は早く帰りたい…」

そう言って颯土はため息をついた。

――疲れた…。寝てないし、心の疲れが全身を蝕んでいる気がする。

瑠璃は颯土の隣りに立ち同じように窓の外を眺めながら言った。

「あのさ、人間だからしんどいことを抱えてる時に引きずっちゃうのは当たり前だって思うんだよね。無理をすると身体のどっかがおかしくなっちゃうんだ」

は？と、颯土は瑠璃を見た。

「自分じゃ大丈夫だって思っても、自覚しないところで変になっちゃうんだよ。頭痛がしたり眩暈がしたり、ひどい時は円形脱毛症になっちゃうたり」

そう言いながら、瑠璃は自分の頭のとっぺんをくりくりとなでる。

「なんでそんなこと言うんですか...？」

「経験者だから」

と、瑠璃は笑う。

「前に群竹くんに話したよね？私の付き合ってた彼のこと」

「ああ...、結婚がどーたら言ってた...」

「そ。結局別れたの。仕事やり続けたかったしね。その決断を下すまでの間、自分じゃそうでもないって思っていたけどかなり精神的にきていたみたいで...」

瑠璃は脳天をさして笑った。

「もしかして、円形脱毛症...？」

「そ！もう治ったけど、そういうもんなんだよ、人間って。だから群竹くんも気をつけてね。ひとりで色々抱えこんじゃダメ」

ひとりで....

と、颯土は心の中で呟いた。

「ま、群竹くんは人に頼ったりベタベタしたりするのは性に合わないんだろーけどねえ。さ、とにかく仕事を片付けよう！」

瑠璃は先に編集室に戻って行った。

――確かに、人に頼るのもベタベタするのも好きじゃない。でも.....。

茅ヶ崎の国道沿いで喫茶店をやっている、と麻希は言っていた。

4年振りに行ったところで麻希が自分を覚えているかもわからないし、会ったところでどうなるものでもないだろう。だが今、たどりついたひとつの場所へ足を踏み出そうと颯土は思った。今はこの唐突な思いつきにすぎるしか、思い巡る螺旋から抜け出す方法が考えつかないから。

二本目の煙草を灰皿に投げ入れ、三本目を取り出そうとしてやめた。編集室に戻る前に自動販売機でカップの珈琲を二杯買って、颯土は喫煙所を後にした。

海岸沿いの国道を渋滞に巻き込まれながら車を走らせ、ようやく喫茶店『海風』の駐車場に滑りこめたのは午後2時を過ぎていた。

あってないようなものの有給休暇をはじめて使い朝早く都内を出発してきたのに、真夏の道路はどこもかしこも車で溢れここまで来るのにずいぶん時間がかかった。それでも茅ヶ崎の国道沿いの海風、という情報だけを頼りにしてやって来たわりには、この場所には迷うことなくたどりつけた。昼時も過ぎ駐車場にも余裕があるし調度よかったのかもしれない、と颯土はエンジンを止めた。

広がる海を目の前にしたロケーション。

クリーム色のコテージ風の建物。

『海風』とロゴが刻まれたヨーロピアン風のオートバイが店先に看板代わりにディスプレイされている。

扉の前に立ち、颯土はひとつ呼吸をした。

とりつかれたように真っ直ぐに来てしまったけれど、麻希に会って何をどうするつもりなのか、ここまで来てはわからなかった。取っ手を握ろうとする手がその直前でためらいを繰り返す。背中から照りつける真夏の太陽に押される思いを感じた時、道路で鳴ったクラクションの音に弾かれて颯土は扉を開けた。

からんからん

水月の店を開けた時と同じカウベルの音が頭の上から聴こえ、少しだけ安堵を感じたと同時に

、

「いらっしゃいませっ！」

明るい男女の声が同時に響いた。ひとりカウンターの中にいる髭の男。そしてもうひとはフロアで空いたテーブルの上を片付けている…、

「あれ…？」

麻希は手を休め扉の前に立つ颯土を見て言った。

「こんにちは…。お久しぶりです…」

颯土は眼を細めて自分を見つめている麻希に軽く会釈をして呟いた。

「そのぼそぼそした喋り方！颯土やんかあ！よう来てくれはったなあ！懐かしいわあ！」

フロア中に響くほどの大声で叫び、麻希はふきんをテーブルの上に放り投げて颯土の元に駆け寄った。

変わっていない麻希のイントネーションとテンポ。

颯土の緊張が一気にほぐれた。

「ひとりなの？お師匠さんは？ちょっと、何年ぶりやあ？今、何してはるん？」

麻希の機関銃に颯土は黙って苦笑する。

「そんなに一気に喋ったって何から答えていいのかわからないじゃないか…。さ、こちらにどうぞ」

穏やかな言葉をかけてくれた髭の男がカウンターの前の椅子を指差した。

「そうやね…」

麻希は首をすくめ颯土を椅子まで案内する。

突然の嵐がおさまったかのように、フロアのあちこちで颯土と麻希に注目していた客たちもほっと息をつき、それぞれ自分たちの時間に戻った。

壁にバイクの写真とバイクのパーツ。

『海風』という名からして、海や風やサーフィンなどというイメージを持っていた颯土だったが、それを見事に裏切られた店内の雰囲気。ぐるりと見回すと客のほとんどがジャンプスーツを着ていたり、ヘルメットをテーブルに置いていたり、バイク乗りらしき人間ばかりだった。

「マニアックな店やろ？」

麻希は啞然としたように見回している颯土に言った。

「いや、そんなことは……」

と、言いながらも心では頷く颯土。

「もともとここはサーファーが集まるお店やったんけど、この人がやるようになってからこんな店になってしもたんよ」

麻希はカウンターの髭の男を指す。

「おかげで普通のお客さんが来られんようになってしもて、生活苦しくてかなわへん」

「すみませんね。苦勞をかけます…」

髭の男はぼそっと呟く。

「あの……」

颯土は男と麻希を見比べた。

「このマスター。うちの旦那さんや」

「高杉です」

「あ…、群竹です」

肩までの髪を後ろでひとつに結び口髭をたくわえた顔は穏やかに微笑んでいる高杉に、颯土はぎこちなく会釈をした。

「それじゃ、さっきの質問にひとつひとつ答えてなあ！」

麻希は颯土の横の椅子を引いた。

高杉がカウンターからフロアに出てきて、麻希がやりっぱなしにしていたテーブルの片付けを無言ではじめた。

「あ、ごめん。うちがやる」

と、立ち上がりかけた麻希だが、

「いいよ。お客さんと話してな。久しぶりなんだろ？」

と、いう高杉の言葉に、

「そお？ほな遠慮せえへん」

再び椅子に腰を落ち着けて笑った。

穏やかな日常。

どこかで見たことがあるような風景――。

颯土は腰をかがめてテーブルを拭く高杉の背中を見つめた。

「颯土？」

「え？あ、純平さんは会社を辞めて自分の写真を撮りに世界中のあちこちに行ってます。今はネパールにいるらしい」

「そおかあ。ほな今、颯土はひとりで頑張ってるん？」

「俺は...」

と、言ったまま颯土はうつむいた。

「写真、撮り続けてるんやろ？」

「まあ...」

「颯土も夢まっしぐらかあ！」

夢――。

俺の夢は.....。

見えていた写真への夢。

それはヒカルが傍にいるからこそそのものだった。水月の店に飾られてる写真も今まで撮ってきた写真も、全てヒカルがここにいたから、溢れるものを言葉にすることができないから、自然にそれらを写真に託すようにシャッターを押してきた。

今、自分はその存在を忘れたいと思っている。消したいと思っている。だからもう、今までのような写真は撮れない。撮りたいと思えない。

「俺の夢はもう写真じゃないっす...」

颯土は呟いた。

「もう？」

麻希は颯土の顔を見つめて繰り返した。

「俺は純平さんのように個展やりたいとか哲学を写真にしたいとか、そういう自分の目的を持っていたわけじゃないから...」

光への憧れ――。

ただ、それだけだった。

その憧れはとどかないまま。

言葉を切ってうつむく颯土を、高杉が振り返って見る。

「なんや...、どしゃぶり...やね」

麻希は颯土の肩をポンとたたいた。

「どしゃぶり.....ですね」

「この世の終わり...やな？」

「終わって...ます...」

麻希はくすっと笑った。

「颯土、あんたいい男になったなあ」

「え...？」

颯土は顔を上げて麻希を見た。

——いい男か？これが？

久しぶりに会って、笑顔も見せられずにどしゃぶりだのこの世の終わりだの言ってるだけの、ただただ、女々しくて情けない男だ。

「海岸行こか！マスター、ええか？」

「暇になってきたし、夕方までに帰って来てくれればいいよ」

「ありがとう！」

高杉は静かに頷く。

颯土は、どこかで見たことのある風景をまた感じた。

◇

「車で来たの？」

「そうですよ」

「高校生やったのにねえ！颯土も車を運転できる年になったんやねえ。颯土の車、あれやね？」

麻希は数台のバイクの横に一台だけ停まっている黒い車を指した。颯土はシビックのドアを開け、助手席に置いてあった大きめの茶封筒を手にした。その後ろでは麻希が車の中をじろじろと見回している。

「あんまり見ないでくださいよ...。キレイにしてないし...」

「ほんま、汚すぎ。もう少し整理せんとあかんねえ...」

助手席はカセットテープ、煙草、ガムなどが散乱し物置代わりになっている。

「普段、ここに乗せる子はおらんって証拠やね」

と、麻希は笑った。

「それ...、笑えないです...」

颯土は麻希を睨む。

「あ、ごめんごめん。あ、カメラがあるやん！それ持って行こう！」

カセットテープの下に小型のカメラが埋もれていた。もちろん仕事で使っているカメラではなく、車に積んであるオートフォーカスカメラだ。ヒカルを乗せて横浜へドライブした日にコンビニで買ったフィルムが入ったままだ。24枚のうちの7枚が撮影されている。

——亮んちの前で撮ったんだった。すっかり忘れてた…。

『一颯とヒカルちゃん、ペアールックじゃん！』

『あはっ！ホントだ！ペアールックになってるよ、あたしと颯土くん』

『ぐ、偶然だよ、偶然！』

——顔見合わせて互いの服装を見て笑ったな。

白いTシャツとジーンズ。いつも、そんな格好をしてた俺とヒカル…。

「どないした？行こ？」

麻希はカメラを手にしたまま呆けている颯土の背中をちょんちょんとつつく。

颯土は心の映像を振り払うかのように車のドアを強く閉め、先に歩きだした麻希の後を追って海岸へ向かった。

陽射しは強いが風がある。

左右に広がる海の色が体感する気温と湿度の高さを和らげた。海水浴場からはずいぶん離れた海岸に砂浜はなく、代わりにコンクリートの道が繋がっている。腰の高さの堤防に座り語り合っているカップルや犬を連れて散歩をしている人がチラホラといるだけで静かな海だ。

「毎日見ているはずの海やったけど、こないして颯土と一緒に見ると沖縄の海を思い出すわぁ」

「色が全然違いますけどね…」

「そやな」

と、麻希は笑った。

「あ、麻希さんこれ…」

颯土は車から持って来た茶封筒を麻希に手渡した。

「なんや、これ？」

「今更だけど、4年前に沖縄で写した写真…」

「え～～っ！ほんまに～？！」

麻希はがさごそと封を開け、中にある数枚の写真をひっぱりだした。

「わぁ！秘密の海岸やぁ！嬉しいなぁ！ほんまに嬉しいわぁ！ここで撮った写真、一枚もあらへんのよ。俊作…、あ、うちの旦那の名前だけど、俊作にこの海岸を見せてあげたいって思ってたんやわぁ！ありがとう、颯土！」

「い、いえ……」

まさかこれほどまでに喜んでもらえるとは思ってもいなかった颯土は、どんなリアクションを返したらいいのか戸惑った。

「でも、颯土」

「はい？」

「この写真を届けてくれるためだけでここに来てくれたんと違うよね？うちのことを思い出してくれる何かがあったんやろ？」

麻希は写真を次々と見ながらさり気なく言う。

颯土は麻希の手元をじっと見つめながら、

「まあ...」

と、呟いた。

「また何かに悩んでる？」

「.....」

「仕事？恋？」

「...両方、かな...」

ただ、`仕事、とか`恋、というように違うような気がした。けれど言葉にしてしまえば、きっとそんな簡単なことなのだ。今の自分の苦しみは、そうやってひとことで片付いてしまうようなちっぽけなものなのだ。

「ほんま、懐かしい写真やわあ...。あの時颯土はうちの写真をいっぱい撮ってくれたもんねえ」

夢中で撮りまくった麻希の写真。

麻希が笑った時、海ではしゃいでいる時、物想いにふけている時、いつでもカメラを手放さずにシャッターチャンスを狙っていた当時の自分。何故あの時、あんなにも麻希を撮影したかったのか今になればわかる理由...

光への憧れ、即ち麻希を通して見えるヒカルに憧れを抱き、それを自分の中で無意識に形にしたかったからだ。あの頃はそんな気持ちに気がつきもしなかったけれど...

あの頃のまままでいられたらどんなに楽だったろう...

気がついてしまったから消さねばならない。気がつかないままでいれば消すこともなかった想い一一。

麻希の手の写真は次々とめくられ、白い薔薇の花束を海に投げ入れる瞬間写真が現れた。

「そうや...。このためにうちはこの時石垣に行ったんやもんなあ...」

写真に見入りながら懐かしそうに呟く麻希。

サトルへの手向けとして海に投げ入れた白い薔薇の花束が、ゆらゆらと寄せては返す波にさらわれていく様子は今でも颯土の瞼の裏に焼きついていた。

「あれ？このポストカードはなに？」

最後の写真のあとから現れたポストカードを見て麻希は言った。颯土は、え？と麻希の手を覗きこみ、

「あ...、それはフリーマーケットに出したあまりなんですけど...、封筒の中に残ってたんだな、きっと...」

と呟いた。

「颯士の写真？あ、そうや！名前が入ってる。すごいやん！ピュア企画？颯士の会社なんか？」

「会社っていうか...」

『写真家群竹颯士を知ってもらおうプロジェクト！』

――俺とヒカルのプロジェクトチーム...。

颯士の胸がまたぎゅっと痛む。

「ふーん...。ええ写真撮ってるやないの、颯士...。優しいね...」

隅田川のボートや影ぼうし、木漏れ陽、笑顔と猫のポストカードを次々と見ながら麻希は感嘆のため息をもらす。

「こんなにええ写真を撮るのに、夢はもう写真やないなんて言うんやね」

麻希は`もう、を強調して言った。

「俺はもう...、そういう写真は撮れないから」

颯士も、`もう、を強調した。

「昔のうちの旦那さんみたいや、颯士。もうバイクには乗れない乗らないって落ち込んで落ち込んで大変やったのよ、俊作」

あ...、と、颯士は気がついた。

サトルと高杉は親友だった、と以前麻希から聞いていた。

「けど今はこんなマニアックな店をやってる」

麻希は道の向こうの店を指差して笑った。店の中にいた数人のライダーたちがそれぞれヘルメットを被りながらバイクのエンジンを轟かせていた。俊作もそこにいてバイクを眺めたり指差したりしながら、ライダーたちと何かを話している。

「あんなふうにもたバイクを身近に置けるようになるまでずいぶんかかったわ、あの人」

「...忘れたいと思わなかったって、昔、麻希さんは言いましたよね？別れを哀しむよりも出会えたことを大切にしたいって。言葉では言えるし頭ではわかります。でも実際は苦しくてたまらない...。忘れたい、消してしまいたい、記憶の全てをなくしてしまえたらって...」

麻希はうつむきながら喋る颯士をじっと見ている。穴があくほど見つめられている視線を暑い陽射しと共に受けながらも、颯士は言葉を続けた。

「...俺の中にあっただものが全てあいつだった。ありふれた俺の日常全てがあいつだった。あいつが誰を想っていようが俺はずっとあいつの傍であいつの笑顔を見ていたい、笑ってるあいつを守りたいって思った。それが出来ると思ってた。けどそうじゃなかった。俺が傍にいるんじゃないって、俺の、傍にいて欲しかったんだ。俺のあいつでいて欲しかったんだ。それが俺の本当の望

みだった。こんな望み消してしまいたい。あいつへの想い、あいつとの記憶、全てなくしてしまいたい…。出会えたことを大切にしたいなんて言ってられないんだ。苦しくて、痛くて…」

麻希は颯土を見つめていた視線を、まだ手にある写真たちに移した。それをまたゆっくりと一枚一枚繰り返しながら、

「この写真も全部その子だった…ってことなんやね」

と、呟いた。

「だから、もう写真は夢にならないってことなんやね」

「……」

颯土は答えずにうつむいた。

「今は苦しむしかないね、颯土」

麻希は颯土の肩にそっと手を置いた。

「人間は機械やあらへんのやから一瞬で思い出を消したり記憶をなくしたりなんてでけへん。そんなことは颯土だってわかってるやろ？」

——わかってる…。

「うちらかてずいぶんな時間がかかったよ。サトルを諦めるまでね」

「諦める…？」

颯土は麻希の言葉の語尾を繰り返して顔を上げた。

「忘れるということと諦めるということは違うと思わへん？どんなに願ってもどんなに会いたくても死んだ人は帰って来ない。けどうちも俊作もサトルを諦める覚悟がでけへんかったのよ。サトルに似た少年を見た時、サトルが乗っていたバイクと同じバイクを見た時、サトルが言ってた言葉と同じ言葉を耳にした時、サトルが好きだった歌を聴いた時、日常の中でのちょっとしたことで、もういない人を思い出していつまでも思い出にふけてぼうっとしてしまったり、そんな時は胸がぎゅっと痛くなって苦しくなって涙が出て、どうしてこんなに辛いんやろって思った」

日常の中でのちょっとしたことでもう手が届かない人を思い出し、胸が苦しくなってぼうっとして——。

あの日からその繰り返しだ。

それが、とてつもなく苦しい。

「…俺はずっと、そうやってどうしようもないことに縛られて身動きがとれなくなってしまうのが怖かった。そういう絶望の中にいる自分をイメージするだけで足がすくんで前に出ない…」

「そうやったなあ…。高校生の時の颯土の目は鋭い中に怯えがあったもんなあ。怯えを隠す精一杯のハツタリ、って感じやった」

と、麻希は笑った。

「…そうです。今だって…、」

「でも、だからって忘れたい？一緒にいた時間をなくしてしまいたい？うちは否やった。けど俊作は颯土と同じこと言ってたよ。サトルって存在が俊作の中で腫れ物になって、それがずーっと」

「親友...だったんですよね？」

「そう。幼馴染。互いに互いの存在を大事に思いそれを伝え合っていたふたり。でもうちはそうやってなりふりかまわず落ち込んで悲しんで泣ける俊作がちょっと羨ましかった」

「羨ましい...？」

「4年前、うちが石垣に行ったのは自分の中で叶えられなかったものを消化するためだったのよ。あの頃はサトルが逝って4年が過ぎていたからもう気持ちの中ではうちも俊作も整理つけられていたし、うちと俊作の結婚も決まっていたけど、うちはサトルに対してできなかったことがあったから。それが唯一の心残りだったからね」

心残り...、と颯土は呟いた。

「サトルと出会ったあの場所で、幻想のサトルにでもいいから言いたかったこと...。言ってさよならして諦めて、そうしないと次の一歩に進めんかった。あの時にようやく区切りがつけられたのよ。自分の中でね」

――区切り...。

「悦びも苦しみも受け入れながら生きていかなきゃいけないのが人やろ？だから今の颯土は、やっぱり苦しみの中でもがいていくしかないと思うよ」

颯土は目を閉じてうつむいた。そんな颯土の肩をぽーんと叩いて麻希は、

「めっちゃめっちゃカッコ悪いわ、颯土」

と、笑った。

沈む。もう、底がないほど...。

「けど、4年前に会った時とは比べものにならんほど、あんたはいい男になったよ！」

「全然っ...」

「いや？」

麻希は颯土の頬に自分の両手を当て、伏せた颯土の目をじっと覗き込んだ。

「逃げんと向きおうてるやないの。自分に対して、ね」

颯土は拗ねた子どものように顔を背け、麻希は手を放して笑った。

「うちは今の颯土が好きや。押しつぶされてへろへろになって迷子になってるけど、見栄もなく取り繕ってもない真っ正直な心をうちに見せてくれている。あんたの心はひとりぼっちやないもん。出会いを大事にしてるよね」

「別にしてないですよ...」

「もう...、この自分で写した写真を見てみい」

麻希はポストカードをうつむく颯土の目の前に差し出した。

「この川の流れ、木漏れ陽の光、この一瞬に出会った瞬間をあんたは大事にしたはずや。うちを思い出してここに来てくれたのも、出会ったことを大切にしてくれてたからやろ？そして、今そんなに苦しんでいるのもその子との出会いが大事だったからや」

「.....」

「サトルとの出会いがうちに俊作と出会うきっかけを作ってくれた。俊作と暮らす毎日は平凡で優しくてうちは今幸せや。颯土もその子と出会い、その子を愛することが出来てよかったと思える時が来るまで、とことん苦しんで落ち込んでなさい」

「それしか...、ないのか、やっぱ...」

「何言うてんの！あんたには写真があるやろ？」

「だから、もうそれは...」

「全部が無くなった今の颯土はどんな写真を撮るんかな？それを知ってみるのもええのと違う？別の出会いを見つけられるかもしれへんよ」

——別の出会い...

そんなことを考えられない。それが欲しいとも思わない。

「そんなもん、いらん...て思ってるやろ？」

麻希は颯土の目を覗く。

「そうやねえ。あんたは区切りをつけなあかんかもしれんね」

「区切り...って？」

「颯土の区切り。諦めるための区切り。別の出会いに足を踏み出していく区切り。誰かのためじゃない颯土のための区切りや。それは颯土にしかわからへん」

——俺の区切り...

『颯土くんと出会えて、颯土くんと友達になれて、すごく嬉しいの』

突然ヒカルの声が聞こえ、また颯土の胸は締め付けられ、今度はそれがズシリと重く、思わず胸を押さえうずくまった。

「どないした？大丈夫か？」

麻希が颯土の肩を抱く。

『ずっと、言いたかったんだ。高校の時から私達、親友になれるって思ってた』

反射的に、手がズボンのポケットから星のキーホルダーを取り出していた。微かに震える手を

持ち上げ蓋に刻まれた文字を見る。

Dear SOUJI

Happy Birthday 20th

「アリガトウ...」

From HIKARU

1995 7 7

『だから、ありがとう』

「ヒカル.....」

颯土はキーホルダーを握りしめた。

——俺は...、伝えてない。

想いも望みもなにひとつ。

俺たちは `親友、` だったから——。

——ただ...、自分の気持ちをサトルにはひとことも伝えられなかった。それが心残り...。だからサトルに会いに来たの。

思い出せなかった4年前の麻希の言葉。

ずっと避けていた、伝える、ということ...

——忘れられはしない。忘れたくなんか...、ない。

伝えることが俺の区切りか...

伝えて、そして諦める——。

「麻希さん」

「ん？」

「写真、撮らせてくれませんか？」

「うちの？」

「そうです」

「ええけど、うちなんか撮ってどないするん？」

理由は自分でも分からない。

でも今、麻希を撮りたいと思った。4年前の沖縄でレンズ越しに麻希を追いかけたように。

颯土はカメラを麻希に向けてファインダーを覗いた。

憧れだった光はもう無くなってしまった。違う光を探したいとも思わない。でも区切りをつけるために、諦める覚悟をするために写真を撮り続けていくしかない。

――それが今の俺の精一杯。

今度こそ、諦める覚悟を決めよう。

だから、伝えようヒカルに。

俺の精一杯を。

俺の、コトバ、で――。

8月6日の夜日本を発ち、ワシントンで飛行機を乗り継いでボストン空港に到着したのは現地時間で7日の午後2時。

生まれて初めての渡航に緊張の連続。途中で飛行機が乱気流に遭遇したり、隣りに座っていたアメリカ人壮年がひっきりなしに話し掛けてきたり、やっと就寝タイムに入れたと思えばいびきが煩かったりで、飛行機の中では眠れぬ時間を過ごしたヒカルだった。

ボストン空港に着いてからは響が書いてくれたマニュアル手紙に助けられ、やっとの思いでロビーまで来た時、

「ヒカルッ！」

大きな声で呼ばれ、ヒカルはピタリと立ち止まった。

――ヒビク先輩、どこ？！

ロビーは広く人も多く、声がどこからしたのか一瞬ではわからなかった。立ち止まったまま辺りを見回していると、いきなり後ろからぎゅっと抱きすくめられ、ヒカルは、きゃっ！ と、小さな叫び声を上げた。

「きゃっ、て...、俺だよ...」

振り向いて見上げたところに、響の呆れたような照れたような顔があった。

「ヒビク先輩...！」

「来たな...！」

「うん...！」

たった1日旅をしてきただけなのに、ボストンはなんて遠かったんだろう...

響の顔を見てヒカルは思わずぐすっと涙ぐむ。

互いに言葉を探すけれどうまく見つからない。見つめ合っていた瞳をヒカルからそらして、

「...なんか、照れるな」

と、響は笑った。

地下鉄に乗ってボストン市内へ――。

駅を出た通りは賑わい、道の北側には大きな河が流れていた。ヨットがたくさん浮かんでいる。河のすぐ脇の遊歩道ではジョギングをする人、ローラーブレードをする人、ウォーキングの人が街の空気に馴染んでいた。

「アパートはこのすぐ先。もうすぐ見えるよ」

響は大通りの向こう側から繋がっている石畳の坂道を指差した。これまで歩いて来たビルの街

が途切れ、煉瓦造りの家が立ち並んでいる。信号機のない交差点を小走りで横切ったところは古い匂いのする静かな住宅街。

「なんか...、ボストンって突然雰囲気が変わる街なんですね...」

ヒカルは今歩いてきたばかりの道を振り返って言った。

「ああ。新しいものと古いものが調和してる街さ」

「新しいものと古いもの...」

「建国の頃からの古いものを大切にしながら近代要素もどんどん取り入れてる。止まってないって言うのかな？時代は流れつつ懐かしさも失わない。歩いてると面白いぜ？ほんと、街の表情がコロコロ変わるから」

明るく生き活きと話す響の横顔をヒカルはじっと見つめた。

古いものと新しいものの調和がとれた街ボストン。

まるで、古風な面と現代的な個性を持ち合わせた響のようだ。

「あれが俺が住んでるアパート」

石畳の坂道を上りきったところで響は立ち止まった。

「わあ...、素敵...」

ヒカルは思わずため息をもらした。

緑々と茂る木立ちの間に建つ煉瓦造りの建物。都内でも最近よく目にするテラスハウスのように、横に長いひとつの建物に同じドアがいくつも並んでいる。

「ここはアカデミーの下宿になってるんだ。いろんな国の奴が住んでるぜ。俺の部屋は左から三番目だから覚えろよ？」

いち、に、さん、と、ヒカルは左の端から目で追う。

「何もない部屋だけど...」

と、言いながら響はオークのドアを開けた。

八帖間をふたつ繋げたような、奥に長いワンルームにグランドピアノがひとつ。

ドアの前に立ちつくし、ピアノを見つめるヒカルに、

「どうした？入れよ？」

と、響は言った。

「あ、うん...」

響の部屋――。

真っ白な壁と真っ白なレースのカーテンの間で、その存在を主張している真っ黒なグランドピアノ。部屋を飾っているものはその上に置かれたふたつの写真立てだけだ。広く白い壁には何もない。あまりにもシンプルで、それでいて流れる空気はどこか激しい。ヒカルは、新築の匂いが残る、広く殺風景な響の母のマンションを思い出した。

――ヒビク先輩とお母さんの想いはやっぱり同じ…。
ピアノだけを、ピアニストになることだけを夢見て……。

「スーツケースはここのクロゼットにしまっておくぜ？」

響の声に、ヒカルはやや呆然としたまま壁際のクロゼットに顔を向けた。

「あ、はい…」

「疲れたろ？今、珈琲淹れるからそこに座ってろよ」

響がピアノの後ろの真新しいソファを指差して言うので、ヒカルは言われた通りに座った。
が、

「…先輩、なんかこの配置、変じゃないですか？」

と、くすくす笑った。

ピアノを背にして窓に向いてるソファ。レースのカーテンが下がった窓側にはベッドがあり、ソファはベッドと向き合うように配置されている。座った時に目の前に見えるのがベッドで、しかも少し斜めになっているその配置は、無頓着、という印象がして可笑しかったのだ。

「昨日までそのソファはなかったんだ。ヒカルが来るから慌てて買ったの。この部屋には落ち着いて座る場所がないからさ…」

珈琲のマグカップを両手に持ち、ひとつをヒカルに渡しながらかは響は苦笑いをした。そして自分はベッドに座り、ソファのヒカルと向かい合う。

「じゃあ私のために、ですか？」

「まあな。まさかヒカルをコンクリートの床に座らせるわけにもいかないだろ？けどさ、買ったのはいいけど、どう置きゃいいんだかわかんなくてとりあえずそこに。やっぱ変だったな」

「変…ですね。ピアノを少しだけ向こうにずらして、ソファはこっちの壁につけるようにしたら…」

身振り手振りでヒカルが説明をすると、

「そっか、そうすればいいんだな…」

と、響も顎に手を当てて考える。

「あとで、一緒にやりましょう！」

「一緒に、か…。いいな、そうゆうの！」

響は嬉しそうに笑う。

そんな響の笑顔が嬉しくもあり少しだけせつなくもあるヒカルだった。

昨日までピアノと眠るための場所だけしかなかった響の部屋。それは決して広さが無いからじゃなく、響がピアノに込めている想いと覚悟からだ。

この3年半の響はこの部屋でくつろぐことなど考えずに、ただただピアノを弾き、眠り、またピアノを弾き…、と、ピアノのことだけを考えて暮らしていたということが部屋に流れる空気から感じ取れる。

——痛いくらいに……。

「このソファー、とっても座り心地がいいですね。このまま眠っちゃいそう…」

ふわっとしていて柔らかくて、自分のためにここにくつろぎのスペースを用意してくれた響の想いが温かく伝わって来るようだった。

「ヒカル、時差ボケすごいだろ？」

「はい。半日分長い感じ…。いつになったら夜になるの…？いつになったら眠れるの…？って」

ヒカルはソファーに沈みこんでふっと目を閉じた。このまま寝ていいよ、と言われたら1秒の間に眠れそうだ。

「寝ちゃだめだよ、ヒカル。今眠ると時差ボケがいつまでたっても治らないんだ。ここは辛いだろうけど我慢してあと半日頑張れ！」

響がヒカルの肩をポンと叩く。

「う…、半日も…」

「街に買出しに出かけよう。今夜は俺が晩メシ作るから」

「ヒビク先輩が?! 本当ですか?!」

買出し、と、俺が作る、の言葉に、今までソファーに埋もれていたヒカルはパッと体を起こした。

「こう見えても3年以上ひとり暮らしやってんだ。メシぐらい作れるさ」

「一気に目が覚めました! 買出し、行きましょう！」

ソファーから立ち上がってヒカルは笑った。

◇

人で賑わう街のショッピングモール。

だだっ広いフロアに食料品から日用品、衣類や雑貨類まで何でもある。

響が押すカートの横を歩く自分——。

一緒に野菜や生鮮食品を選んだり、こっちは高いとかあっちの方が新鮮に見えるとか言い合いながら、響とこんな時間を過ごしている自分が夢のように思えるヒカルだった。

「先輩、これ買っていい？」

少し顔を赤らめてヒカルが指差した品物を見て、

「え……っ」

目を丸くしてフリーズした響。

「あ、やなんだあ〜? じゃあいいですよお！」

ヒカルはプーンと膨れた。

「や、やじゃないって！」

「先輩の顔が困ってます...」

「困ってないさ！ただ、今一瞬、田村とあかねを連想して.....」

「やっぱり？ちょっとあかねちゃんっぽいなって自分でも思ったんです」

ムフツと笑ってヒカルがカートに入れたものは、ピンクとブルーでペアになった縞模様のパジャマだった。

「パジャマなんて...、もう何年も着て寝てないぜ、俺...」

「うそ？じゃあ、何着て寝てるんですか？」

「ハ・ダ・カ！」

そう言って、響はヒカルにウィンクを飛ばす。

ヒカルは一瞬すみ、

「.....絶対にダメ！私がいる間はこれ着て寝てくださいっ！」

と、真っ赤になって叫んだ。

「どーすっかなあ？」

「どーすっかなあ、じゃなくて！」

「...じゃあ、これも買っていい？そしたらハダカはやめる」

響が手に取ったのは、やっぱりピンクとブルーのマグカップだった。

「うわあ...、またまたあかねちゃんと田村先輩っぽい！」

「奴らのはAとかYとかイニシャル入ってそうだよな？」

「絶対に入ってる！」

ふたりはケラケラと笑った。

パジャマもマグカップもしっかりおさめ、カートがいっぱいになるくらいの品物を買込んだふたりは、両手に荷物を持って街の北側に流れる大きな河、チャイルズ河のほとりの遊歩道を歩いた。

少し遠回り。

両手に持った荷物も重たい。

でも、そんなことは気にしない。

夕暮れの河にゆらゆらと浮かぶヨットたちと夕日が反射してキラキラ光る水面。水はゆるやかにゆるやかに流れている。

「あっちはビル、こっちは煉瓦の家並...。ここから見ると、本当に古いものと新しいものの調和が素敵ですね」

向こうから走って来たジョギングマンがふたりに向かってにこやかに、ハイ！と手を上げた。手がふさがってる響は、ハイ！と言葉だけを返した。

「知ってる人ですか？」

「いや？」

走り去ったジョギングマンを振り返って眺めると、行き交う人達全てに同じようにして声をか

けている。

「...同じ川でも隅田川とは大違い」

ヒカルは笑った。

「あっちはこの時間、浮かんでるのはヨットじゃなくて屋形船だし」

「それはそれで美しい」

そう言って響も笑う。

「先輩？」

ふと立ち止まり、ヒカルは後ろのビルと前の煉瓦を見比べた。

「ん？」

「先輩は...、ボストンがとてもよく似合いますね」

古いものと新しいものの調和。

ゆるやかな風景の中での強い強い覚悟。

そんな響を象徴しているようなボストンの街一一。

「似合うか？ボストンは好きだけどな、俺」

「私も好きになりました」

ふと視線を河にむけた時、ローラーブレードを履いた足をぶらぶらさせながらフェンスに寄りかかっていた金髪の少年と目が合った。

ヒカルは片手に荷物をまとめてから、さっきのジョギングマンの真似をしてハイ！とあいた手を上げた。

少年はきょとんとした顔をヒカルに向け、辺りをキョロキョロと見回してから恥ずかしそうに小さく手を上げ返してくれた。その仕草が可愛らしくて思わずクスッと笑い声が漏れると、

「ん？」

先を歩く響が振り返る。

「腹も減ってきたことだし、散歩はこれくらいにして帰ろう」

「そうですね、帰りましょう！」

「帰る、という言葉の響きがとても嬉しい。

自分をじっと見つめている少年に、

「バイ」

と、再び手を上げてヒカルは響の後を追いかけた。

◇

魚介類をたっぷり入れたシーフードサラダに、クラムチャウダー、白身魚のワイン蒸し、と、今夜のメニューは魚介づくしだ。小さなキッチンにふたりで並んで作った夕食がキッチンカウ

ンターの上に並んだ時、

「しまった！テーブルがないぞっ！」

突然響は叫んで頭をかかえた。

「やっぱり？どこで食べるんだろうと思ってたんですけど...」

「俺はいつもここで食ってるから...」

キッチンカウンターは皿を数枚置けばいっぱいになってしまうぐらいの簡単なものだ。響はいつもこのカウンターをテーブルの代わり、天井の収納ハッチを開けるための脚立を椅子代わりにしてひとりきりの食事を摂っている。

「じゃあ、ここで食べましょうよ！」

「うう...、ごめんヒカルう」

作ったばかりのメニューを見ながら響はうなだれた。

「せっかくのご馳走なのに、ここじゃ落ち着かないよなあ...。テーブルのことまで頭がまわんなかったぜ...」

「いいですよ！落ち着かないのには慣れてます。うちはいつもそうだから。それに立食パーティーみたいでかえってお洒落！」

満面の笑みを浮かべ、瞳を輝かせているヒカル。

響はピアノの上にある二枚の写真に視線を向けた。

——不思議...だな。

ついこの間まで俺はあの写真だけを支えにしていたのに、今ここに、目の前に本物がいるんだからな...

楽譜やテキストが積まれてる中で、それらと調和するようにナチュラルに置かれている写真たち。

あの写真にヒカルは気がついたらろうか——？

「いっただっきまーす。.....あれ？先輩、早く食べないと先輩の分食べちゃいますよ！」

「ダメ！」

響はシーフードサラダにフォークを刺す。

——その笑顔だけで腹いっぱいだな。

ヒカルがいるだけで、この殺風景な部屋はこんなにも明るくなる...

このままずっと、ここでずっと...

「先輩、さっきからどうしたの？ちっとも進んでないですよ？」

響のフォークはずっと同じ海老を刺したまま動いていない。

「え？あ、ああ...。時差ボケしてるみたいだ」

「それは私の方じゃないですか……。ふ、わ…っ」

思い出したらいきなり眠気が…、とヒカルはあくびを堪えた。

響は、食事しながら寝るんじゃないぞ、と笑う。

「いやな、ヒカルがいなかった今朝までとヒカルがいる今とじゃ、アメリカと日本をぶっ続けに三往復ぐらいした時差程の差があつてさ、頭がぼーとしちまって」

それってどれぐらいの時差だろう…、とヒカルは真面目に頭の中で計算しようとした。

「あはは！頭が爆発しちゃうからやめておけ！」

「先輩ヒドイ！あたしのこと、バカだと思っているでしょう？」

「じゃ、計算してみてもいいぜ？」

「……やめておきます。自分の時差ボケが悪化しそうだから…」

むうっと膨れてヒカルはトマトにフォークをぷすっと刺した。

——ここでずっと…？

ここで？

何考えてんだ、俺…。

ふとよぎった思いを、響は慌てて打ち消した。

夕食の片付けは響にまかせ、ソファーにもたれながらヒカルはうとうとしていた。

「先にシャワーを使っていいぜ」

「うん…」

もう、返事もそぞろだ。

「眠いの？」

「うん…」

「限界？」

「うん…」

「食べてすぐ寝るとブタさんになっちゃうよ？」

「うん…」

「頭、ちっとも回ってねえだろ…」

「うん…」

はあ、と響はため息をつくが、ヒカルはソファーに沈み込んでコックリコックリしている。

「…じゃあ、一緒にシャワー室いく？」

響はヒカルを抱き寄せ耳元で囁いた。

「うん…」

「あれ、ほんとに？」

「うん………、え?!」

突如ヒカルは飛び上がった。

「ダメです、ダメ！」

「やっとヒカルちゃん覚醒。でも、そんなに強く拒否しなくてもいいだろが…」

「あ…、うん…、それはあ…、お、お先にシャワー借りますね！」

「はい、これ。パジャマね！」

響はヒカルの手の中に、さっき買ってきたピンク縞のパジャマを投げた。

夢うつつ――。

しっかりと意識を保っていたいところだが眠気がピークに達しているヒカルだ。気を緩めるとシャワーを浴びたままでも眠ってしまいそうだった。

――えっと…、ここはボストンで、
ヒビク先輩の部屋で、
これからあたしとヒビク先輩で何かをするってさっき…。

何をするのだろう――？

もう、心は決めてある。
あの日から…。

――あの日……？

ヒカルの膝がガクッと折れた。

「ヒカル、起きてるか？！」

同時に外で響が叫ぶ声がしてヒカルはハッとした。一瞬眠っていたような気がする。

「お、起きてますう……」

返事を返してシャワーを止め、

「今私、何を考えてた…？」

と、鏡に映った自分の顔を見つめて呟いた。

◇

ヒカルのあとからシャワーを使った響が部屋に戻ると、
「あらら…、完全沈没だな、こりゃ…」

ソファーに座ったまま、肘あてに突っ伏してヒカルはもう寝息を立てていた。アメリカ人サイズのピンクのパジャマは、ヒカルにはかなりぶかぶかで長い袖の中にヒカルの手は完全に隠れてしまっている。まるで小さな子どもが睡魔に勝てずにそこで眠ってしまった、というようだった。

「ヒカルちゃん？」

響はタオルで髪を拭いながらヒカルの隣りに座って声をかけてみた。

「あとで一緒にソファーの配置を替えようって言ったじゃないかあ...」

耳元で囁いても、すうすうと小さな寝息が返ってくるだけで、ヒカルの意識はもう戻って来ないようだ。

顔にかかったヒカルの髪をかき上げて、その無邪気な寝顔を見つめて響は笑った。

「昔もこんなことがあったな...」

文化祭の打ち上げで行ったビリヤード場。

フロアの角にもたれて眠ってしまったヒカルの隣に座り...、

「こーやって肩に手を回して抱き寄せて、あの時ひとりごとのように呟いたこと、今でも全部覚えてるぜ」

・
・

——文化祭が終わったらお前に好きだって宣言して、そしてお前も俺でOKならいつでもそばにいられる特別な関係になろうって決めていた...。

自分がこれほどヒカルを欲しがっていたとは思わなかった。

これほど独占したいと思っていたと気づかなかった。

ヒカルを誰にも渡したくないと、

誰にも触れさせたくないと、

自分の横でその笑顔は自分にだけ向けて欲しいと、

無意識にストイックに思い詰めていた...。

お前に一言好きだって言っちゃったら俺はきっと自分が止められなくなっちゃう...。

ヒカルを自分のそばに縛り付けて壊してしまうかもしれない...。

そうになったら最悪だもんな...。だから言わない。ここにしまっておくことに決めた——

・
・

「あの時、あんなふうにした俺だったのにな。今、ここにいるんだよな、ヒカル...」

——誰にも渡したくない。

俺の横で、俺の為だけに笑って欲しい。

この願いは今も変わらない。いや、あの頃よりも強く思ってる。

もう、離さない...ぜー。

あの時は諦めるために眠るお前を抱きしめたけどー。

響はヒカルに回した手をぐっと寄せて、小さな身体を腕の中にすっぽりと包んだ。

ん...、とひとこと声を出してヒカルは目をこすった。

「ヒカル？」

だが瞼は開かない。枕が肘あてから響の胸に変わり、安心したように安らかに、夢の国で遊んでいる子どものような寝顔を見せている。

「ヒカルだよな...」

思わず笑みがこぼれ、響はそのままヒカルを抱き上げて窓辺のベッドに移した。

ー隣で一緒に眠りたいけど、そうすると俺、自信ないから...、

「おやすみ、ヒカル」

額にキスをして明かりを消して、響は向かい合ったソファーの上に転がった。

レースのカーテンを通して微かな月の明かりがゆるやかに部屋の中に射し込みヒカルの寝顔を照らす。

8月いっぱいたった3週間の同棲ー。

ー3週間後、俺はこいつを帰すことができるだろうか...。

響は、柔らかな笑みを浮かべたヒカルの寝顔をいつまでも見つめていた。

パラパラという微かな音と重たい空気の匂いを感じてヒカルは目を覚ました。
レースのカーテンの向こうは灰色に霞み、窓にかかる枝の葉から雫が地面へと落ちている。

――雨...？

まだぼんやりとした頭のまま何となく心でつぶやいた時、今自分が目覚めた場所が響のアパートの窓際のベッドだということに気がついて、ヒカルは響の姿を探した。

――昨夜は私...？

ゆっくりと起き上がり周りを見回すと、まだ部屋の空気も目覚めていない。静まり返った部屋の中でカチカチと時計が時間を刻む音だけが聞こえてくる。

――ヒビク先輩...

昨日買ったペアーのパジャマをちゃんと着た響が、向かい合ったソファの上でうつ伏せに長くなって眠っていた。ケットと片方の腕がソファから落ち、半身が今にも床につきそう。このまま寝返りをうったら絶対に落ちる。

ヒカルはベッドの上に正座をして響の寝相を見つめて笑った。

――先輩、ごめんね。

昨夜は私が先輩のベッドを取っちゃったんだね。

でも...、`ヒカル式抱き枕、なんて過激なことを言うわりに、ベッドを私に貸してくれて先輩はこんなところで落ちそうになって...

昨夜、シャワーを使った時からの記憶がほとんどないヒカルだった。

響に何度も起きてるか？と声をかけられ、その度にハッと覚醒して、きっと水をずいぶん無駄に使ってしまっただろう。

どうやって着替えたのかもどうやって部屋に戻ったのかも、そしてどうして響のベッドを占領してたのかもまったくわからない。

――あたし、昨夜は何処で寝ちゃったのかな？ヒビク先輩はいつ寝たのかな？

正座をしたままヒカルは思い出そうと考える。

だが、まったく記憶になかった。時差ボケというものがこれほど強烈なものだったとは...

響が日本に帰って来た時も同じように辛かったはずなのに、2日近くも眠らずに一緒に起きていてくれた。あの感覚の中でさぞかし眠かっただろうな...、と、ヒカルは今更ながらに思った。

ベッドサイドの時計を見るとまだ6時を過ぎたばかり。熟睡ができたおかげでその時差ボケも治ったようだ。

まだ眠っている響を起こさないように、ヒカルはそっとベッドから降りた。

「うわ、なに？このパジャマ...」

立ち上がって思わず声に出してしまった。

ズボンは引きずっているし、シャツもぶかぶかで袖の丈が手先より10センチも長い。

「これじゃまるで`殿中`でござる、だ...」

珈琲をわかしにキッチンに行く前にクロゼットから着替えを取り出そうとしたが、ふと考えてやめた。

お揃いのパジャマを着たままお揃いのマグカップで珈琲を飲むのもいいかしれない。それこそ、あかねと田村のようだけど、でもこれはずっと憧れていたこと。響と一緒に迎える朝。同じ夢を見て同じ時を生きて...。

ソファの響を振り返ってヒカルはその水色のパジャマをじっと見つめた。

――昨日は夕食の後に一緒にソファを動かそうって言ってたのにね...

今日は水曜日。

今夜の響はライブがある。明日からは普通に学校にも行かなくてはならない響だ。ヒカルは響の日常の中に、ポンと飛び込んだ3週間の居候。これから3週間の間は響のために毎朝朝食を用意してあげたい。響が目覚める頃には珈琲の香りが漂っている部屋にしたい。殺風景で何もない部屋だけど、3週間の間だけは.....。

ケトルを火にかけマグカップをカウンターに用意してから、ヒカルは部屋を見回しながら昨夜できなかった模様替えの配置を考えた。

――このピアノをもうちょっとこっちに動かせば....、

ピアノの上の写真立てに目をやった時、昨日は時差ボケのせいもあってあまり注意して見なかったそれが自分の写真だったということに気がついた。

ひとつは文化祭の後のビリヤード場で一緒に写した写真。

そして、もうひとつは手紙と一緒に送った`魔よけ`の写真。社会人初日の日に桜が満開の墨田公園で颯土が撮ってくれたものだ。

ヒカルはふたつめの写真を手に取った。

春色の写真。

墨田公園と春の匂い。

春の一一。

何の前触れもなく突然心に小さな痛みが浮かび上がってきた。意識の下でずっと引っかかっている何かが一一。

「……………」

それが、形になろうとした時、

「おはよう…？」

という声に、ヒカルの小さな痛みはまたどこかに沈んで行った。

「先輩…？」

響は床の上にあぐらをかいて、ぼうつとした顔をヒカルに向けている。

「なんか俺、落ちたみたいだ…」

響はボサボサの髪をさらにくしゃくしゃとかきむした。

こんな響の姿をヒカルはもちろん初めて見る。いつもどこかの貴公子のように涼しげな身なりをしているのに、目の前にいる人は金色の髪を方々に散らかし、颯土の寝癖よりも大変なことになっている。

「ん？どうした？」

「いえ…、先輩の髪、歌舞伎みたいだなーって……」

ヒカルはプツと吹き出した。

「か、歌舞伎っ?!」

響は慌ててとっ散らかった自分の髪をまとめて押さえた。

「颯土くんの寝癖は一ヶ所がピョコンってなるだけなのに、先輩のは全部が花開いちゃってていっそ芸術的ですね」

「群竹の寝癖はネクラ仕様、俺の寝癖は芸術家仕様なの！」

颯土の名がヒカルの口から出て、響はややムキになって言い返した。

「先輩昨夜はごめんなさい。私、いつの間にか先輩のベッドを占領しちゃったんですね。だから先輩はソファで…」

「そうさあ！ヒカルを抱っこして一緒に寝ようとしたら殴られたんだぜ？だから俺はひとり寂しくこんなとこで…」

挙句の果てに落ちて寝癖が歌舞伎だとか笑われて…ううう…、と響はうなだれた。

「やだっ?!すみませんっ！」

口に手を当てて呆然としているヒカルを見て、今度は響がプツとふきだした。

「冗談に決まってるだろ？ヒカルはここでスヤスヤ寝ちゃっただけ。時差ボケはキツイもんなあ」

ソファを肘でつついて響は笑った。

ヒカルはほっと息を撫で下ろした。ベッドを占領してしまったのは自分の意志じゃなかったということだ。

「でも...、案外本当に殴られてたかもな」

「そんなことしませんよお！」

「...どれ、本当？」

響に腕をグッと掴まれ、あっという間にヒカルは抱き上げられ天井を見つめたと思ったら、突然それは響の顔で遮られた。

「せんぱい...?!」

息もできないくらいにぎゅっと抱きしめられて、柔らかなベッドがきしむ音が聞こえた。

「せんぱい、また冗談でしょ？」

「ヒカル」

名を呼んだ響の目は優しくヒカルを見つめていた。

こんなに間近でこんなにしっかりと響の瞳を見たのは初めてだった。夜の校庭で抱き合った時も響の母のマンションで抱きしめられた時も気がつかなかった響の瞳。

吸い込まれていきそうな深い緑色をした瞳――。

「...ほんとだ。殴らないや」

ゆっくりゆっくり響の顔が近づいてくる。

「...当たり前です」

目を閉じて響を待つヒカル。

今にも触れ合おうとしている響の唇が、

「...なんか、さっきからカチャカチャした音が聞こえない？」

と、言った。

「カチャカチャ...？」

同じ言葉を繰り返してからヒカルは、

「あっ！火っ！」

と、叫んだ。

「火?!」

「珈琲を淹れようと思ってお湯を沸かしてたんです！」

ふたりはキッチンに飛んで行き蓋が踊っているケトルの火を止めた。

「ピーッて鳴らないんですね、このケトル.....」

「あの音キライなんだ。昔はあの笛が目覚まし代わりにでさ。毎朝ムカついてしょーがなかったぜ...」

「あ、わかる！うちもそうだった！」

「...っていうかさあ、ヒカルちゃん。せっかくいい雰囲気だったのになあ...」

「え？あ、はは...。まあいいじゃないですか。珈琲飲みましょう！」

「まあ、いいじゃないですかって...。でも、いいか。ヒカルに殴られないってことがわかっただけでも」

もう...、と呟きながらペアーのカップに珈琲を注ぐヒカルを、カウンターに肘をついて響はじっと見つめている。

「ヒカル」

「はい？」

「ヒ、カ、ル」

と、響はもう一度名を呼んだ。

「何ですか？」

ヒカルがカップから視線を響に移すと、

「ヒカル」

と、もう一度。

「なあに？」

とうとう手を止めてヒカルは言った。

「...うん。それがいい」

響は満足したように頷く。

「え？」

「俺に、ですます言葉はもう使わなくていいよ」

「先輩？」

「それもヤメ。ヒカルにとって、田村や他の奴らと同じ `先輩、って枠にいるみたいでヤだ」

好きな人リストの中の一人ってのはもう勘弁、と響はどこか拗ねた口調で言う。

「じゃあなんて呼べば...。響...さん？」

言って、全身が痒くなって、ヒカルは自分でも可笑しいくらいに赤面した。

「ヒビクだけでいい。そう呼んで欲しい」

肘をついたまま響は笑いながら言う。

「ヒビク...さん」

「 `さん、はいらないって。ヒビク。ほら、呼んで」

「ヒビク...センパイ...。うううう...、呼べない...」

混乱してるヒカルの頭をくしゅっと撫でて、響は、

「俺の名を呼ぶ練習をして。もう俺とヒカルは先輩と後輩じゃないだろ？」

と、照れたように、それでいてどこか切なげな目で言った。

「—え？」

「俺とヒカルは恋人だから」

—恋人...

「ヒビク...センパ...」

「先輩じゃない。恋人」

響の目が力を持った輝きを放ちヒカルを真っ直ぐに見つめる。

ヒカルは深海の中に吸い込まれそうになり、

「...うん」

と、小さく頷いた。

「よし。これで心置きなくヒカルを抱きしめられるぞお！」

響はいつものように、あははと笑った。

「先輩...じゃなくて、ヒビク...さんったらそんなことばかり言って。昔からそんな人でしたっけ...？」

「俺？昔からこんな人だぜ？」

「そおかなあ...？」

「だから言っただろ？今までは俺、`先輩、だったから。ヒカルにずっとそう呼ばれててどっかで先輩ぶってたんじゃないか？でもこれが偽りのない俺。ヒカルに触りたくて触りたくてしょーがない、ただのえっちな男」

響はまた、あはは、と笑う。

高校時代からずっと見て来た笑い方。明るくて豪快で頼もしくて。苦しそうにうつむいていた、いつかの映像の影は何処にもない。

ふと、ヒカルはピアノの上の魔よけに目を向けた。

「...そう言えばジャックさんは...お元気...？怪我の方はもう大丈夫な...んですか？」

いきなりですますを使うなどと言われてもなかなか難しい。考えながら喋っているヒカルの言葉はどこか滑稽だ。

「ああ。お元気」

響はヒカルの言い真似で応えた。

「今はリハビリも兼ねて新人ピアニストの育成とプロデュースに力を入れてる」

「ヒビクせ...んは、会ったりしてるん...の？」

響はぶはっ！とふきだしてから、

「ジャックの自宅はボストンの郊外にあるんだ。今まではジャックも忙しかったからあまりボストンにいることはなかったけど、今は俺も週に一度は顔を出している。ヒカルも今度連れていくよ」

と、ジャックの近況をヒカルに話して聞かせた。

「ほんと?! ジャックさんに会えるんですね?! うれしいなあっ！」

「ジャックもヒカルに会いたがってた」

「ええ？私のこと、覚えていてくれてたんですか？世界のジャックさんが？」

うわあ、どうしよう...っ、とおろおろするやら感激に目を潤ませるやらのヒカルに、

「...忘れるわけがないぜ」

と、響は小さく呟いて笑った。

珈琲のこおぼしい香りが部屋中に漂い、ふたりはキッチンからソファーに移動した。お揃いの

パジャマは脱がないままソファに並んで座り、お揃いのマグカップに口をつける。

「やっぱりテーブルが必要か...」

左手にカップを持ったまま置く場所を探して響は言った。

「ヒビク...んは、今までこのスタイルでずっと暮らしていたんでしょう？今まで通りでいいですよ。ずっと...、」

ここで暮らすわけじゃないし...、と言いかけてヒカルは口をつぐんだ。3週間という期間限定の響との暮らしが終わり、再び響と離れて日本に帰る日のことを考えると、昨日再会したばかりだということにもうせつなくなる。

「ずっと...、なに？」

唐突に止まった言葉の続きを響は促がした。

「ずっと...、ヒビク、さんが暮らしてきたままの形でいいです。テーブルはいらないし、他も...」

――何もいらないよ。ずっと、一緒にいられば...。

ヒカルはそっと響に寄り添った。

「そっか。そうだな」

響はカップを右手に持ち変えて左側に寄り添うヒカルの肩を抱いた。

◇

ベッドに向かい合っていたソファを二人で動かして壁にピッタリとつけると部屋も少し広くなった。テーブルはいらない、と話していたけれど、

「こうなるとさ、やっぱりここにテーブルがいるな。そんで、正面の壁には絵か写真を飾ればバッチリじゃないか？」

と、響が言い出したのでふたりは夕方から街に出かけた。昨日のショッピングモールで買い物をしてそれから響はライブに向かう。今夜はヒカルも響に招待されて初めて生の演奏を聴かせてもらうことになっている。

しとしとと降り続く雨。

少し肌寒い。ボストンの8月はもう秋が近い。

昨日と同じチャイルズ河のほとりを傘を並べて歩いていた足をふと止めて、ヒカルは霞んだ遠くの景色を眺めた。

「今はこうやってなだらかに流れるこの河も、真冬になると凍るんだぜ？」

「そうなんですか？ボストンって寒いんだ...」

いくら寒い真冬でも隅田川が凍ったのは見たことがないヒカルには、河が凍るほどの寒さが想像できなかった。

「寒いってもんじゃないぜ…。凍える、っていうか…。ボストンは好きだけどこれだけはさすがの俺も参った」

無数の雨の粒を踊らせゆるやかに流れる河が、氷の姿に着替えた時のこの街はどんな色をしているのだろうか。ヒカルはふと、そんなことを考えた。昨日は鮮やかだったこの景色も雨の今日はグレイに曇っている。

「…でも、今年はこの河が凍るのも見なくていいんだな…」

響は呟いてヒカルの前を歩きだした。

「あれ？あの男の子…」

ローラーブレードを履いた少年が昨日と同じ場所にいた。同じように足をぶらぶらさせながらフェンスにもたれている。今日は青いウィンドブレーカーを着込み、何をするわけでもなくただそこにいる。

前を通り過ぎる時、ヒカルは思わず顔をのぞきこんだ。

うつむいていた少年も、ふと顔を上げてヒカルを見た。

青いフードの中に隠れていた金色の髪からポタポタと雫が垂れている。前髪の間から覗くブルーの瞳はどこか寂しそうだった。

年頃にしたら10才前後の少年。雨の中、何をしているのだろうか？

ヒカルがニッコリと微笑みかけると、少年も昨日と同じように恥ずかしそうに微笑んだ。

「またね」

すれ違いざまに言葉に出してから、日本語で言ってもねえ…、と気がついてヒカルは苦笑した。振り返って見ると少年はヒカルに向けていた顔を慌てて戻してうつむいた。その仕草がまた可愛かった。

「また会えるといいね」

ヒカルは小さな声で呟き微笑んだ。

「ヒカル？どうした？」

先を歩いていた響が立ち止まって振り向いたので、ヒカルは首を横に振って小走りで響に追いついた。

◇

ショッピングを終えてライブハウスに到着したのは午後6時半。響から聞くライブハウスという言葉でヒカルが想像していた店は、田村とあかねの結婚パーティーがあったような、若者が集まる煩いところというイメージだったが、今日の前のそれは、ホテルの最上階にあるような落ち着いたラウンジバーのような店だった。しかもちょっとしたホールぐらいの大きさだ。

開店は7時。

水曜日と金曜日、そして土曜日の3日は完全予約チケット制で本当は今夜も満席のはずだが、響がある条件と引き換えに特別にマネージャーに頼んでヒカルの席を確保してもらったのだ。

「まだ開店前だから入り口はこっち」

響に腕を引かれ、ヒカルは裏口から店の中に入った。

バックヤードの中は小さな劇場の楽屋のようになっていて短い廊下の両側にドアがいくつがある。響が入ったのはピアニスト専用の控え室だ。30分のライブを午後11時まで数回に分けて行うため、控え室にはソファーやテーブルやTVが置かれ居心地がよさそうだった。

「先輩...ヒビクさん...んの部屋よりも豪華...」

思わず呟いたヒカルの頭を、響はパンツとはたいた。

「いったーい。だって本当なんだもん。ぶつことないじゃないですかあ〜」

「先輩、ヒビクさん、それに敬語」

響に単調に言われてヒカルはうう...、と唸った。

やはりどうしてもいきなりヒビクなんて呼べないし、敬語で喋るのにも馴染みすぎてしまっている。

「すぐには無理ですう...、じゃなくて、無理。意識すると変な日本語になっちゃいます...、なっちゃう」

「もともとヒカルの日本語は変だから気にしなくていいよ。例えば、ヒカルは俺が『ヒカルさん、今日はとても可愛いですね』なんて話し方してたらどうだよ？」

響はロッカーからピアニストの衣装を取り出しながら言った。

「うわ、そのブラウス、ひらひら...」

いいからあっちを向いてて、と響は着ていたシャツを脱ぎ始める。

ヒカルは慌てて響に背を向け、

「.....イヤではないけれど、ちょっと距離を感じてしまうかも...」

と、さっきの質問に答えた。

「だろ？俺も同じ。ヒカルとの距離を遠く感じるのは寂しいし、ヒビクって名はヒカルしか呼ばない特別な名前だから...、そう呼んで欲しいんだ」

響に背を向けたまま、ヒカルはこくりと頷いた。

その時、ノックと同時にドアが開き、マネージャーが入って来た。

『約束は守ってくれよ、キョウ！』

『わかってる』

会話は英語で交わされているのでヒカルにはチンプンカンプン。目と目が合ったマネージャーに、ニッコリと微笑むのが精一杯だった。

『この子がキョウの恋人かあ』

マネージャーはヒカルを遠慮なくじろじろと見回す。

『俺の大事なヒカルを怯えさせないでくれよな。それより席は？』

着替えが終わった響は、舐め回すように見つめられておどおどしているヒカルを自分の側に引き寄せた。

『ちゃんとご希望通りのVIP席を確保したぜ』

『サンキュ』

『今日のお客さんはラッキーだぜ。けど、なあ、キョウ、しつこいようだけど考え直さない？契約さあ……』

『それは悪いけど……ノー』

『やっぱりダメか…。ほんと残念だよなあ…。じゃ、そろそろ頼むよ』

控え室を出る前に、マネージャーはヒカルを一瞥した。

その目が鋭く冷たく感じ、ヒカルの心に小さな棘が刺さった。

「11時まで長いけど、休憩の時はここに一緒にいて大丈夫だからな」

「うん…」

「じゃ、ヒカルは客席に行ってて。席はピアノの前に用意されているはずだから」

響に客席に通じるドアまで送ってもらい、ヒカルはフロアに足を踏み入れた。

いくつものテーブルが並び、もうほとんどの客が席についている。皆落ち着いた雰囲気の上品な客ばかりだ。恋人同士、友達同士、学生のような若者からロマンスグレーの壮年、婦人までその客層は幅広い。場違いなところにいる自分をヒカルは感じずにはいられなかった。

『ヘイツ』

さっきのマネージャーに肩をたたかれ振り向くと、

『あんたの席はこっちだよ』

マネージャーは怒ったように言う。言葉がわからないヒカルは、大きなアメリカ人のキツイ口調と厳しい眼差しに体がすくんだ。

――ヒビク先輩。早く来てよ…。

ピアノの前に用意された特別席（と、一般客にはわからないが）に座り、ヒカルはただうつむいて響の登場を待った。フロア係の青年がドリンクの注文をとりに来たが言葉がわからないしメニューも読めない。もっと英語をマジメに勉強していればよかったと心の底から思った。

しばらくすると、フロアの照明はほどよく落とされ、それを合図にして今までそれぞれの時間を過ごして雑談をしていた客たちが一瞬で静まり返った。みな片隅に置かれたグランドピアノに注目している。

ここにいる人達全てが響のファンでその登場を心待ちにしているということを空気から感じるヒカルだった。

やがて、さっきヒカルがフロアに入ったドアからピアニストの正装をした響がゆっくりピアノに向かって歩いてくると、客たちは一斉に拍手をして歓迎した。

ピアノの前で姿勢を正した響が一礼をする。

顔は真っ直ぐフロアを見つめ、目は真剣に鋭く光っている。さっきまでえっちなことを言って笑っていた響とは違う、ヒカルの全く知らない響の顔だった。

一曲、二曲、三曲と、ステージの響は `水曜日の雨人、のピアノ曲を弾き綴る。

物悲しく、せつない旋律――。

胸の鼓動がトクトクと逸る。

体のどこかがさわさわと鳴く。

言葉にはとても言い表すことが出来ないせつなさが込み上げてくる――。

――水曜日の雨人。

今日は水曜日で雨――。

だが、たとえ雨が降っていなくても心がしとしとと濡らされるような旋律だ。

人々が漏らすため息がヒカルの耳には重い。

ここにいるのは、まぎれもなくピアニスト、カザマ・キョウ。ボストンの人達に愛されている、ピアニスト、カザマ・キョウ……。

――どうしてヒビク先輩はこんなにせつない曲ばかり弾くの？

まるで、朝から降り続けている雨のようだよ。

さっき見た、グレイの河のようだよ。

せつなくて、悲しくて、そして……どこまでも優しく心が締め付けられるよ。

涙が出てくるよ――。

四曲目が終わり、次はこのステージの最後の曲だ。これが終わると次のステージまで休憩があり客も入れ替わる。

いつもなら続けて最後の曲を演奏する響だが、今夜はフーッとひとつの息を吐き、目の前でじっと自分を見つめているヒカルに向かって微笑んだ。

それからしばしの間をとり、そり後ゆっくりと始まったメロディーは…。

――え…？

聴き覚えのある前奏――。

――ヒビク先輩…。

1年半、毎日練習した曲――。

初めて聴く、響が弾く『Shine』だった。

甘くて、せつなくて、優しい旋律。

詞にして贈ってくれたひとつひとつの言葉が音符になってヒカルの心に届く。

あかねが弾いた『Shine』とも、自分が弾く『Shine』とも違う、響の想いの欠片たち。
まるで、深い深い海の中で抱かれているような感覚。
優しく、温かくて、懐かしくて――。

空よりも星よりも光輝く僕のShine...

I love you...

――ヒカル、愛してる…。

電話で聞いた言葉が鮮やかに蘇った時、大きな拍手と歓声が沸いた。

――ヒビク…センパイ…。

じっと自分を見つめている響の深い緑色の瞳は優しかった。

◇

雨も上がった道を言葉も少なく家路へたどり、アパートのドアを開けた瞬間の響の背中にヒカルは抱きついた。

「ヒカル？」

立ったままの姿勢で背中のヒカルを振り返り響は名を呼んだ。

「……ヒビク、好き」

響の背中に顔をうずめたままヒカルは呟いた。

――もう、先輩とは呼ばない。

先輩と後輩じゃない。

愛しいただひとりの人――。

「ヒカル…」

自分をヒビクと呼び、微かに震えているヒカルがたまらなく愛しい。

――俺のヒカル。

もう、先輩と後輩じゃない。

愛しいただひとりの人――。

深い海の中で抱きたい。抱かれたい。

唇と唇、いのちといのちで触れ合って、互いの体温を確かめ合いたい。

もう、離したくない。離れたくない。

何処へも行かないで……！

響が奏でた『Shine』と同じ、甘くせつなく優しい調べがヒカルの全部を包む。

ゆるやかにゆるやかに…、時を刻むと共に互いの身体といのちに決して消えない刻印を残す。

雨が上がり雲が晴れたレースのカーテンを越えた向こう側で、霞む月がふたりの奏でる甘いメロディーにじっと耳を傾けていた。

柔らかな石鹼の香りに鼻の奥をくすぐられて響は目をあけた。隣で眠るヒカルの前髪がその犯人だ。ずっとヒカル式抱き枕を抱きしめていた自分の両腕は血行が鈍ってしびれ、しばらくの間動かすことができなかった。

腕の感覚が戻るまでの間、レースのカーテンから射し込んでくる朝の柔らかな光の下で真っ白なシーツのドレスを纏っている眠り姫の顔を見つめる。

昨日までのヒカルとは違って見える。

ヒビク先輩、と自分を呼び続けていた頃のヒカルの顔じゃない。ヒカルちゃん、と声をかけてしまいたくなるようなあどけない顔はもうしていない。

ヒカル――。

ヒビク――。

何度も互いの名を呼び合った。

一番高い、一番鮮やかな光の場所に届くまで、時に優しく時に激しくクレッシェンドとデクレッシェンドを幾度となく繰り返しながらふたりの音楽を奏で続けた。今まで弾いたどんな曲よりも長く、甘く、せつない旋律をヒカルと共に。

音楽が鳴り止んだ時、自分以外は誰にも開けられない宝の箱にその大切なメロディーを閉じ込めた。

鍵のかかった宝箱の中で真っ白なドレスを纏う眠り姫。

もう、何処へも行かせない。

もう、離さない。

うっすらと目をあげようとしたヒカルの瞼に響はそっとくちづけた。

ずっと自分を包んでいた響の腕が動く気配を感じた時、ヒカルは眠りから覚めた。目を閉じたままでも昨日の朝同じベッドで目覚めた時とは違う光がカーテンの向こうから注がれているのがわかる。

一日降り続いた雨が上がり、今日は晴れ。

昨夜からずっと鳴り響いている『Shine』のメロディーが、今もまだ耳の奥で優しく流れている。

甘く優しくせつない旋律の中で、空よりも星よりも高い場所に昇り空よりも星よりも光輝く光

景に出会ったのはほんの数時間前。

ずっと触れ合ったままの素肌から、とくとくと響いて聞こえてくる響のいのちの鼓動の音。

今、目をあけたらきっと朝の柔らかな光と金色の髪をブレンドさせた響が、優しい深い緑の瞳で自分を見つめている。さっきからそのまなざしを感じている。

でも、目を開けてしまったら朝が始まってしまう。

目と目を合わせて笑って起き上がって珈琲を淹れて、そして響は音楽学校へ――。

やっと心と身体を繋ぎ合わせることができた自分と響だから、もう、先輩と後輩じゃないのだから、もう少しだけ、ここにいて欲しい。

響のいのちの音を肌を感じていたい。

優しく見つめていて欲しい。

知らない響になって欲しくない――。

そっと目を開けようとしたとき、響のくちびるが瞼に触れた。

◇

「本当は一日中、ヒカルを抱きしめていたいんだ」

昨日の朝と同じようにソファーにもたれ、右手に珈琲カップ左手はヒカルの肩を抱いた響が呟いた。昨日、ショッピングモールで買ったテーブルと写真の額縁は今日の夕方に届く予定だ。

「じゃあ、そうして」

ヒカルは少し意地悪な目で響を見上げた。

「ヒカルがそんなことを言ってくれるなんて、ね」

肩に回していた手に力を込めてヒカルを抱き寄せ、響は笑った。

「困る？」

「いや、全然。本当にそうしちゃうかと思うくらい」

唇を尖らせて顔を近づけてくる響に、ヒカルはプツとふきだして、

「うそ。ヒビクは早く支度して学校に行かなくちゃダメ」

と、今にもものしかかってきそうな響の顔を手で遮った。

時計の針はもうすぐ9時を指そうとしている。

「...だな。早くカリキュラムを消化しないと12月に日本に帰れないからな」

「そ。1日も早く消化して1日も早く帰ってきて欲しいから」

はあ...、とため息をついた響はソファーから立ち上がり、

「アカデミーにも夏休みがあったらなあ...」

と、ぶつぶつ言いながらシャワー室に入って行った。

ピアノの上に響が置いていったマグカップと自分のカップを、水をはったキッチンシンクの中

に沈め、さっき簡単に摂った朝食の食器と一緒に洗う。

これから毎日こんな朝。

朝食を摂ったら響は学校に行き、夕方まで自分はひとり。水曜日と金曜日、土曜日は夜中までひとり。

隣の部屋からTVを借りてくる？と、響は言ったが、TVを見ても言葉がわからないし、いいと断った。

響がいない時間を埋めるために、スーツケースに入れて日本から持ってきたものは新学期の新しい歌『たのしい運動会』と『げんき』の楽譜、そして園児たちのおたより帳だ。新しい歌は全然練習もしていないし絶対にすぐに弾けはしないから響のピアノを借りて練習し、おたより帳には来月の行事予定と園児たちへのメッセージを書くつもりで持って来た。

キッチンの片付けを終わらせ、ヒカルがスーツケースの中からそれらをごそごと取り出しているのと、

「何してるの？」

支度が終わった響がヒカルの後ろからスーツケースを覗き込んだ。

「楽譜？」

「そう。来月子どもたちと一緒に歌う歌なの」

「へえ...」

響はヒカルの手から楽譜を取り、音符を見つめて笑った。

「弾けるの？」

「ぜーんぜん。だからここで練習をさせてもらおうと思って持って来たの」

響はニヤッと笑うとピアノをあげ、『げんき』の前奏を弾き始めた。

「ゝそらとたいよう みあげれば ほら げんき〜、こんな感じ？」

ヒカルは、そうそうそんな感じ、と手を叩き、

「はあ... 私にもそうやって楽譜を見たらすぐにそれが指先に繋がる才能が欲しい...」

と、ため息と一緒に呟いた。

「才能も大事だけど人間はやっぱり努力だと思うぜ？ヒカルが一生懸命練習したピアノに合わせて歌を歌う園児たちは幸せだよ」

「嬉しいお言葉ですが、天才ピアニストに言われてもね...」

ヒカルが呟くと響は、あはは、と笑い、

「俺がいない時間、つまらない思いをさせちゃうな」

と、ヒカルの髪に手を置いた。

「大丈夫。これ、練習しなきゃいけないから。難しい曲だから努力しなきゃ弾けないよ、私」

響は、頑張れよ、と、ヒカルの髪をくしゅっと撫で、部屋にいる時は必ず鍵をかけ誰かがやってきても出なくていいからと、まるで留守番をする子どもに親がいいつけるようなことを言い置いて出かけて行った。

レースのカーテンを開き、木立ちの間を歩いて行く響を、見えなくなるまで見送ってからヒカ

ルはひとりきりになった部屋で枕を抱きしめベッドにころんと横たわった。

ヒビク――。

ヒカル――。

何度名前を呼び合っただろう。

響の一番近くにいる悦びと未知の領域を拓く不安を抱きしめながら。

グランドピアノ以外、何もなかった部屋。

響を求める多くの聴衆たちの前でのピアニスト、カザマ・キョウ。

華麗に鮮やかにピアノを奏でる『水曜日の雨人』――。

はじめて聴かせてもらった『Shine』は優しくて甘くてせつなくて、響の想いが痛いくらいに伝わって来た。この曲を作った時の、会えなかった3年半の、そして今現在の、自分をいのちの底から愛してくれている響の想い――。

でも、

その『Shine』でさえも、今はもう独り占めできないもの。

――ヒカルに贈った曲だから、ヒカルがいない場所では弾かない。

そう決めて昨夜まではどんなに求められても弾かなかった、と響は言っていた。

自分のために特別席を用意してくれ、今の響がピアニストとして一番輝いているあの場所で初めて聴かせてくれた『Shine』は、周りが何も見えなくなるくらいにその優しいメロディーだけが透き通った響の言葉になって心の底まで浸透した。

会えなかった3年半は深い深い知らない海。

長い間ひとりで漂い、やっと出会えた愛しい人の胸の中に飛び込んで抱かれようとした瞬間に、その愛しい人には多くの手が差し伸べられ埋もれて見えなくなってしまう。

ふと気がついた時、愛しい人は自分がよく知っている人とは別人のように誰だかわからなくなっている。微笑んでくれた優しいまなざしも自分だけのものじゃない――。

ライブハウスで『Shine』の演奏が終わった時、そんな寂しさとせつなさに襲われた。

聴衆に求められる響があまりにも遠く感じ、愛されていることに嘘はないはずなのに不安でたまらなかった。

――ヒビク、好き。

自然に発した想いと言葉。

自らの全てを差し出して響の海の中に飛び込みたかった。不安も痛みもどこかに追いやって、甘くて優しいメロディーの中をふたりだけで泳ぎたかった。

ヒビクー。

自分しか呼べないこの名を呼ぶ時、響が一番近くにいる。

誰の響でもない、自分だけが知っている `ヒビク、。

「ずっと、どこへもいかないで...」

昨日から繰り返し心で呟いている言葉を、ヒカルは声に出して呟いた。今、この時は幸せなはずなのにせつなくて仕方がない。こんな不安を感じてしまう自分がイヤだ。

枕を抱きかかえ目を閉じていると、そのまま再び眠りの中に吸い込まれていきそうだった。

「ダメダメ。これから3週間は毎日こんな生活なんだから、ゴロゴロしてるだけじゃ太っちゃう」

抱いていた枕を投げてヒカルは起き上がった。

「さて。旦那さまが家を出たあとの奥さんはいったい何をするのでしょうか？」

あかねは毎日何からはじめるのかな？掃除？洗濯？と、考えながらヒカルは部屋の中をぐるっと見回した。

「キレイなんだな、これが.....」

何も無い部屋は片付きすぎているほどに片付いている。洗濯物はあるが洗濯機がない。響はいつもショッピングモールの中のコインランドリーを使っているからだ。後で街に出かけてみようと思いながら、とりあえず掃除の出来る場所を探しながら動いて、ひとりきりの退屈な午前中をどうにか過ごしたヒカルだった。

午後からの時間はあっという間に過ぎた。『げんき』が予想通りに難解で最後まで通して弾くだけで時間がかかったし、それに疲れてソファで休憩していたらしっかり1時間眠ってしまったし。

響が帰って来るまでに街で買い物を済ませておきたかったヒカルは洗濯物をバックの中に詰め込んだ。ひとりで街に行くのは少し不安だったが、あの河の遊歩道は好きだ。どこか懐かしい気がして安心できる。隅田川とは景色も雰囲気も違うけれど、ゆるやかに流れる水が同じだからかもしれない。

時計を見ると午後3時。

響が帰って来るのは4時半。そしてテーブルと額縁の写真は5時に配達される予定だ。ランドリーを使う時間を考えると少し急がないと間に合わない。

ヒカルは慌てて部屋を出た。



買い物とランドリーを済ませ、左右の街並みを眺めながら大通りを遊歩道に向かって歩いていると、ふと懐かしい文字を見たような気がしてヒカルは立ち止まった。キョロキョロと辺りを見回して今見たはずの文字が何だったのかを探してみたが、一瞬視界に入っただけのそれが何処にあるものだったのかを思い出せない。身体は前を向いたまま、後ろに下がってゆっくりと歩いてきた道をビデオの巻き戻しのように戻ってみてようやくそれを見つけた。

「あった！」

通りの向こう側の大きなビルとビルの上に挟まれた細く狭い路地の一角に、

『ボストン案内所』

日本語で書かれた小さな看板があった。

車の往来が途切れるのを待って向こう側に渡ってみると、看板には矢印があり路地の向こうを指している。

ボストンの真ん中で見つけた日本の文字が妙に嬉しくてヒカルは路地の奥に進んでみた。響のアパートの周囲と同じように古い煉瓦の建物が並んでいる路地。だが、アパートの周りのように整備はされていないようでどこか薄暗い雰囲気漂っているその道を十字路までやってくると、右の角に小さな建物があつた。ここがどうやら『ボストン案内所』のようだ。

「こんな路地の奥に建ってるこれって、怪しいところなのかなあ…」

ぶつぶつと呟きながら扉の横の窓から中を覗いてみたが薄暗くてよく見えない。でも人の気配はしている。

ドアを開けて出てきた日本人の青年が、こそこそと窓から中を覗いているヒカルをじろりと見た。

「あ、こんにちは」

ヒカルは青年に頭を下げ、

「あの、ここって…」

と、言葉を続けようとした時、その青年はかけていた銀縁のメガネをクイツと上に持ち上げ、失礼、と冷めた声を放ちそのまま去って行った。

「なによ。感じ悪い。同じ日本人だっていうのにさ！」

ヒカルはその青年の後ろ姿に向かってしっかりあっかんべーをしてから、思い切ってドアを開けてみた。

畳十帖ほどの狭いフロアに三人の若い日本人男女がいた。フロアの周囲にはボストン各地の地図やパンフレットが旅行会社に陳列されているそれらのように置かれ、若者たちはそれを手に取りながら自分が求める資料を探している様子だった。

奥にはカウンターがあり、ひとりの女性が日本人青年に何かを説明している。どうやら今ここ

にはこの女性しかスタッフがないようで、フロアの若者たちは彼女があくのを待っているらしい。

「あの、すみません」

ヒカルは側で地図を見ている青年に声をかけた。

「ここは、どんな案内所なんですか？」

青年は地図からヒカルに目を移し、

「日本人の留学生がボストンを知るために利用する案内所ですよ」

と、親切に教えてくれた。

「留学生しか利用できないんですか？」

「...いや、そんなことはないと思いますけど。キミは留学生じゃないの？」

「違います」

青年はヒカルが手に持っているマーケットの袋をチラッと見た。

「ボストンのことで不安なことがあったらここに来るといいと思いますよ。あの人が親切に教えてくれるから」

青年はカウンターの女性を目でさした。

「ありがとうございます」

ずいぶん親切な案内所があるもんだ、とヒカルは思った。

遠い異国に留学しにきた学生にとって、こういった日本人専用のガイドはさぞかし心強いことだろう。もしかしたら響もボストンに来た当時にここを利用したことがあるかもしれない。

にこやかに学生に対応しているカウンターの女性と話がしてみたかったが、今日はもう時間がないからまた来てみよう、と、ヒカルは地図とパンフレットを手にして案内所を出た。

チャイルズ河の遊歩道では今日もジョギングマンやウォーキングをする人々が夕暮れのひとときを愉しんでいる。

ボストンに来て3日、そういえば毎日同じ時間帯にここを歩いている。初日はショッピングの帰り道。昨日は雨の中を。

――あの男の子がいた場所は確かこの辺り...

ヒカルは昨日と一昨日にローラーブレードの少年がいた数メートル先の場所に顔を向けてみた。だが今日はその姿が見えなかった。

――毎日いるわけじゃないんだ...

少年の少し恥ずかしそうに笑う顔をもう一度見たいな、と思っていたヒカルは少し寂しい気がした。

腕の時計を見ると、もう4時を過ぎている。

のんびりと散歩するように歩いていた歩調を少し速めて歩き出したとき、後ろからスッと通り過ぎた風があった。

「あ」

ヒカルは思わず声に出していた。

ヒカルの真横を通り過ぎたのは、赤いリュックを背中に背負った金髪のローラーブレード少年。顔は見えなかったがきっとあの少年だ。

ヒカルは小走りにローラーブレード少年を追いかけた。

少年はいつもの場所を少し通り過ぎてから、クルッとターンをして止まった。

「ハイッ！」

ヒカルが声をかけると、突然声をかけられた少年はビクッとした顔を声の主のヒカルに向けた。

「また会えたね！って英語で何ていうのかな...」

少年はきょとんとしてヒカルを見つめる。

「えっと...、My name is Hikaru. (私の名前はヒカルっていうの) What's your name? (キミの名前を教えて?)」

少年は、うーん...と考え込んでいる。ヒカルの英語が理解できないようだ。

「うううう...。発音悪いんだな...。マイ ネーム イズ ヒカル。私はヒ・カ・ル」

ヒカルは自分を指してヒカルと強調した。

「Your name is Hikaru」

少年は言った。可愛い声だ。

「そうそう！ヒカル！ワッツ ユア ネーム？」

今度は少年を指差してヒカルは言う。

「My name is Joey. (僕はジョーイ)」

「ジョーイくんっていうんだ！何才？えーっと...、How old are you? ...でいいんだっけ？それともYearだっけ...？あーん、英語おお！」

頭をかかえるヒカルを見てジョーイは恥ずかしそうにクスクス笑う。

「9 years old. (9才だよ)」

「わっ！通じた！嬉しいなあ！ベリーベリーハッピー！」

飛び上がって喜ぶヒカルにジョーイはまたきょとんとする。

「ジョーイと友達になれて嬉しいの！なんて英語はわかんないや。えっとね？」

ヒカルはジョーイの両手を握った。

「フレンズ！ジョーイ&アイ。わかるかなあ？」

首を少し斜めにかしげながらもジョーイは頷いて笑った。

金色の髪と青い瞳。肌は透けるように白い少年ジョーイ。ヒカルがじっと見つめるとジョーイは恥ずかしそうにうつむく。その仕草も可愛い。思わず哲平を思い出した。9才と言ったら年も同じだ。でも、やっぱりアメリカ人のジョーイの方がずいぶん大人に見える。

「ジョーイはいつもこの時間にここに来るの?...って言ってもわかんないよね。ううう、いっぱいお話がしたいのに！」

言葉が通じない相手とはどうやってコミュニケーションをとったらいいのだろう？

「ジョーイ」

ヒカルはジョーイを指差した。するとジョーイは自分を指して『Me?』と言った。

「そうそう！イエス！ジョーイは、この時間に」

と、ヒカルは腕時計を指す。4時20分だった。

「4:20 p.m、ここ、ヒアー」

一生懸命に言葉を伝えようとしているヒカルを、ジョーイは時々首を傾げたり頷いたりしながら真剣なまなざしで見つめている。

「カム ヒアー？エブリディ？」

ジョーイはヒカルのとぎれとぎれの言葉を自分の中で繋げることに成功したようだ。ニッコリ笑って、

「ノー」

と、答えた。

「I always come here at 3:30. (いつもは3時半にここに来るんだ)」

「うーんと、ジョーイ。もっとゆっくり言って？スローリー、プリーズ」

ジョーイはOKと呟き、ゆっくりと同じ言葉を言った。

「オールウエイズ...いつもだよ？いつもは3時半に来るってことかな？」

ジョーイはヒカルが理解したかどうか心配そうな顔をして見つめる。

ヒカルがOK、とニッコリ笑うとジョーイも笑った。

「Today I got here late, because I came home from school late. (今日は学校から帰って来るのが遅かったから...)」

ジョーイはゆっくりと喋った。けれどヒカルにはさっぱり理解できない。

「えっと...、ちょっと待ってね。スクールって言ったよね？スクール？」

「イエス」

「レイトってなんだろう？遅くなった？学校が遅くなった...。そっか、いつもは3時半に来るけれど今日は学校帰りが遅くなったってことなんだね？OK！わかったよ。オールライト！」

ヒカルがウィンクをするとジョーイはパチパチと拍手をした。

「明日も来る？カム ヒアー トゥモロー？」

ジョーイは自分の腕時計を見つめて、ふう...と小さなため息をついた。そして、

「イエス...」

と、うつむいて言った。

「ジョーイ...？」

ヒカルがジョーイの顔をのぞき込むとジョーイは首を振って笑った。

「じゃ、私も明日来る。またここで会おうね！カム ヒアー トゥモロー ミートゥ...で通じるかな？」

「You too？」

「イエス！レッツ ミート ヒアー！」

ジョーイはしばらくヒカルをじっと見つめてから恥ずかしそうに顔を赤くして、コクンと大きく頷いた。

「すごいっ！話が通じたよお！やっぱり人間ハートだね！」

ヒカルはジョーイにVサインを送った。

ジョーイに手を振って別れ、坂の道を上りアパートが見える木立の前まで来た時、

「ヒカル！」

後ろから自分を呼ぶ響の声がして振り向いた。響は坂の下からヒカルを目がけて走って来る。

「ヒビク」

ヒカルの目の前まで来た響は乱れた息を整えながらヒカルを見つめ、そしていきなり抱きしめた。

「...どこに行ってたんだ？探したぜ...」

「ごめんなさい。街に買い物に行ってちょっと寄り道してきちゃった...」

ヒカルを抱きしめて響は肩で息をする。

「そっか...」

「うん。ごめんなさい」

しばらく沈黙したあとに、

「――どこにも行くなよ。ずっと...俺の傍にいろよ...」

響はヒカルを抱く腕に力を込めた。

「私は...、どこにも行かないよ...」

ヒビクこそ、どこにも行かないで...、

という言葉はごくんと飲み込んで、ヒカルは響の胸に顔をうずめる。

プップーッ

車のクラクションをすぐ後ろで鳴らされふたりが抱き合ったまま振り向くと、それはショッピングモールの配送車だった。チューイングガムをくちゃくちゃとかんでいる運転手がニヤニヤしながら自分達を見つめている。助手席の助手はわざと両手を顔に当て、開いた指の間から自分達を見ていた。

ヒカルと響は真っ赤になって離れ車をアパートの前まで誘導した。

「今日は暑いねえ！」

運転手はトラックの荷台を開けながら大声で言う。

新しいテーブルと額縁の写真が運び込まれる様子を、響は頭をかき苦笑いをしながら、ヒカルはそんな響を見つめて微笑みながら見守った。

真っ白な壁に飾られた額縁の写真は薄紫色に広がるラベンダー畑でヒカルが選んだ。

新しいテーブルと新しい額縁――。

白木のテーブルは優しくなじんでいるし、目の前のラベンダー畑からは癒しの香りが漂ってきそうさ。

空の青と花の紫。

シンプルの中に溶けこんでいた激しい空気と堅い覚悟は影をひそめ、色のなかった殺風景な空間に彩りと柔らかさが持たれた響の部屋は居心地のいい滑らかな空間に変身した。もうキッチンカウンターをテーブル代わりにして立ったままの食事をしなくてもいい。

テーブルを置いたのはただそのため。自分のために、ここに自分がいるたった3週間のために響がしてくれたこと。それはヒカルにもわかっていた。

でも....

今、見違えるようなこの部屋を見回してヒカルの不安はまた大きく膨らんだ。

たった3週間。

その後の響も12月までしか住まない部屋。

なのに――。

帰って...来ないんじゃないだろうか。

アメリカがボストンが響を離しはしないのではないだろうか――。

整っていく空間が不安でたまらない。響がこのままボストンに留まる決意をしてしまうのではないかと不安でたまらない。そんなことはありえない、それはわかっている。12月には日本に帰ることを決めて毎日過ごしている響だということも、だからこそライブハウスの契約は11月まで、学校のカリキュラムも同じ11月に修了の予定。それ以降、ボストンに響が留まる理由は何もない。凍ったチャイルズ河を今年は見なくていいんだ、と響は言った。それでも風船のようにどんどん大きく膨らむ不安は今にもバチンと割れてしまいそうさ。

――もう、いやだよ....

会えない寂しさに心を締め付けられながら待ち続けるのは....

「ぼうっと物思いにふけて、どうした？」

ソファに腰かけ目の前のラベンダー畑を放心したように見つめているヒカルに、二人分の珈琲を淹れてきた響が、そのひとつをヒカルに手渡した。

「べつに普通だよ？ぼうっと物思いにふけてるように見えた？」

ヒカルは珈琲カップを受け取りながら微笑んだ。

「見えた」

と、響は笑い、

「昔のヒカルはいつも忙しく跳ね回っててさ、ぼうっとしてる暇なんかなかったよな？たまには息抜きすりゃいいのにな、俺はいつも思ってた」

と、ピアノの上にあるビリヤード場でのツーショット写真を手にした。

「この時もさ」

自分に差し出された写真を響の手から受け取りヒカルは笑った。

「なんにも考えてなかったもん、この頃は。ただ思いついたまま行動して毎日が楽しくて楽しくて仕方なかった」

「...じゃ、今は何を考えてた？」

やや眼差しに力を込めて響はヒカルを見た。

「なんにも...考えてないよ？」

ソファの上に両足を乗せ、膝を抱えてヒカルは答えた。

「嘘が下手だな、ヒカルは」

「...嘘なんか言ってないよ」

ヒカルは自分の顔を覗きこむ響から目をそらし、首をすくめて丸くなり、珈琲カップに口をつけ、

「あ、そう言えば、今日街で面白い場所を見つけちゃった！」

いきなりソファから立ち上がった。そして、バックの中から地図とガイドパンフレットを取り出し、

「ヒビクはここ知ってる？」

それを響に差し出した。

「『ボストン案内所』？これって、もしかしてダウンタウンにある案内所か？」

「大通りから路地に入ったところにあったの。中は日本人ばかりだった。日本の留学生のための案内所みたい」

「あるのは知ってたけど俺は行ったことはない。でも....、」

響はガイドと地図を眺めながら、

「ずいぶん親切なガイドパンフだな？空港のこと地下鉄のこと、観光地や学生が利用できる施設なんかすげえ詳しく書いてある。しかも全部日本語だし」

と、感心したように言った。

ヒカルが持って来たガイドパンフはボストン市街のもので、いつも行くショッピングモールの案内も詳しく載っていた。それによると、

「へえ～、あのショッピングモールの中には日本人が経営してる美容院もあるらしいぜ？知らなかったなあ...」

と、響が驚くほどの情報までが掲載されている。

「こりゃあ、英語が出来ない留学生にとっちゃ最高のガイドだなあ」

「ほんとにそう？私がここを利用してもいいんだよね？」

「そりゃいいだろうけど...、ヒカルには俺がいるじゃないか」

響は少し不服そうな顔をヒカルに向けた。

「生の案内人がいるんだぜ？何もこの案内所を利用することを考えなくたってさ...」

確かにそうだ。

響と一緒にいる時は響に頼っていれば何も心配なことはない。

けれどー。

「明日は一日中ひとりで待っていなきゃならないし、朝からずっとここにカンヅメになってるのも...もったいないでしょ？」

余計なことを考えてしまいそうだから、という理由をヒカルは呑みこんだ。

「ごめん...、ずっと一緒にいてやれなくて。でも、ヒカルをひとりで街に行かせるのは...」

と、響は渋る。

今だって、ヒカルがたったひとりでダウンタウンまで行っていたことにはかなり驚いているのだ。ボストンは危険な街ではないが、それでもダウンタウンは路地が多く薄暗い。

「だから、ここ！」

ヒカルはガイドパンフを差した。

「せっかくボストンに来たんだもん。ヒビクがいない時間を有効に使わなきゃね。3週間...、もうないんだよ？私はヒビクが3年半住んでいるこの街をもっと知りたいの。日本に帰ったらきっと、もう来ない街だと思うから」

「もう...来ない、か...」

響は呟いた。

「だって、ヒビクは帰ってくるんだし...」

また不安が膨らむ。

ーお願いだから、間髪を入れなくて返事をして。

少しだって考えないで。

すぐに、うん、と頷いて！

ヒカルは響を見上げた。

自分でもどんな顔をしているのかがわかる。

いつも響に言われた「鼻を膨らませたチャウチャウみたいな顔、...」。

「いや...」

と、首を横に振る響にヒカルの鼻はますます膨らんだ。見開いた目が潤んでくる。もう少しで涙がこぼれそうになった時、

「ヒカルは来るさ」

響は膨らんだヒカルの鼻をキュッとつまんで言った。その弾みで涙がぽろっところぼれた。
「俺の親父が住んでるんだぜ？ってことはさ、いずれヒカルにとってもオヤジになるってこと...
、だろ？」

照れ臭そうに今度は自分の鼻をつまむ響。

「ヒビク...」

ぐすん、とヒカルは鼻をすすった。

「きっと、何度でもヒカルを連れてくるさ。ジャックに孫の顔を見せにね！」

大きく膨らんだ風船がスーッとしぼんで行った。

いったい自分はひとりで何を不安がっていたのだろう。響の心はこんなにも決まっているというのに。

「...ヒカル、心配すんな！」

響はヒカルを抱きしめた。

「俺は帰るから。ちゃんと日本に帰るから！」

「し、心配なんかしてないよお...」

「嘘だな。そんな、迷子の仔犬のような目をしているくせに、俺がわかんないとでも思ってるの？」

ずずーっと音を立てて、ヒカルは響の胸で鼻をすすった。

昔からそうだった。響だけは自分の背負う荷物をわかってくれていた。何も言わなくてもずっと見守ってくれていた。だから安心して飛び跳ねていられた、この写真の頃の自分。

「心配すんなっ！」

という声の響きは昔から変わっていない。

——あの頃と同じように、安心していいんだね。ずっと...。

「日曜日はジャックのところに行こうな」

「うん」

「ずいぶん泣き虫になったなあ、ヒカル...」

流れる涙を響が手のひらでこすると、涙が顔中に拡散してヒカルの顔はぐちゃぐちゃになった。

「あらら...、どーにもならない顔になっちゃった！ヒカルちゃんたら、ブス！」

響は、あはは、と笑う。

——ブスだってなんだっていいよ。

ヒビクがそうやって笑っててくれれば。

ずっと、一緒にいられば。

ヒカルは鼻の頭を指でクイツと上に上げて、

「ぶーっ！」

と、唸って笑った。

◇

翌朝、ヒカルは響よりも早く起き朝食の用意をした。

今日は夜中までの時間をひとりで過ごさなくてはならない。午前中は主婦の仕事と『げんき』の練習をして、午後からは街を散策するつもりでいる。昨日の『ボストン案内所』にもう一度行ってみたいし、3時半になったらチャイルズ河の遊歩道でジョーイと会う約束もしている。

「ほんとに行くの...？」

昨日届いたばかりのテーブルに着いて珈琲をすすりながら響は言う。

「うん」

「なんか心配だなあ...」

「あのね、私だって子どもじゃないんだから大丈夫だよ？」

まるで自分を子ども扱いしているような響に、ヒカルは少し膨れて言った。

「迷子になったらどうすんの？日本語は通じないぜ？」

「大丈夫！言葉がわからなくてもハートがあれば意志は通じるってことは昨日立証済みだから」

「なに、それ？」

響の顔が少しだけ不安気に翳った。ジョーイの話はまだ響にしていなかったことに気がついたヒカルだが、もう話をする時間が響にはない。

「昨日おともだちになった男の子がいるの。でも、もうヒビクは行かなきゃならない時間だからあとでゆっくり話すね？」

「オ、オトモダチになったオトコノコー?!」

響がテーブルから立ち上がって叫んだので、ヒカルはその声に驚いて持っていたマグカップを危うく落としそうになった。

「な?! どうしたの?!」

「だ、誰、それ?! どの男だ?!」

可笑しいくらいに取り乱している響に、半分は呆れ半分は嬉しくてヒカルは笑った。

「9才のジョーイくん。どこの子かは知らないけれど河の遊歩道で出会ったの。今日も会う約束をしてるんだ」

「...は.....っ、9才のジョーイくん...、子どもね...」

響はほっと胸を撫で下ろし、

「知らない街でいきなり友達を作っちゃうなんて、やっぱヒカルだな」

と笑った。

「まあ...、俺的にはここに閉じ込めておきたいけど、ヒカルにカゴの中の鳥になれってのは無理な話だな...」

「うん。絶対に無理」

響は、はあ...、とため息をついた。

「心配でたまらないけどしょーがない。でも、夕方までには帰って来いよ？んで、ちゃんとカギをかけて誰かが来ても...、」

「出なくていい、でしょ？」

「その通り。よくできました」

「ボストンってそんなに怖い街なの？」

「いや全然。ボストンの治安は東京よりいいと思うぜ」

「.....」

ならこの心配ようはいったいなに？と、ヒカルはおもむろに呆れた顔を響に向けて苦笑した。

同じことをもう一度言ってから響は出かけ、午前中にやるべきことを終えてからヒカルも街へ出かけた。昨日のガイドパンフを見ると、市街には有名な観光地がたくさんあるらしい。

ボストンコモン公園、トリニティ教会、ボストン美術館.....。

どこも行ってみたいけれどひとりで行くのは寂しい。観光地はやっぱり響に案内してもらいたいと思い、ヒカルは街並みを歩いてみることにした。

古いものと新しいものが同居しているボストンの街一一。

近代的なビルの間を歩いていても、ひとつ路地に入ると紅い煉瓦が並ぶ住宅街がひょっこりと現れる。そんな街角では子どもたちがにぎやかに遊んでいる。そこはまるで東京の下町のような。ボストンには大学もたくさんあるので若者も多い。学生らしき人たちが行き交っているからここは学生通りなのかな、とっていると、いきなりスーツ姿のビジネスマンがカツカツ歩く通りに出会ったりする。響が言ったように本当に表情がコロコロ変わる街だ。

『ボストン案内所』の前まで来て昨日と同じようにそっと窓から中を覗くと、今日は学生はひとりもいないようだった。

ドアを開けると、からんからん、と鐘が鳴った。昨日は気がつかなかったその音は水月の珈琲ショップのドアを開ける時に鳴る音と同じだった。思わず目の前で水月が笑っているような錯覚を起こした。

「こんにちは...」

フロアを見回してヒカルはカウンターにいる女性に声をかけた。昨日忙しく学生の応対をしていた女性だ。

「こんにちは」

女性は書き物をしていた手を止め、ヒカルを見てにこやかに笑った。

「あなたはどこの学生さん？」

「いえ...、私は学生じゃありません」

「じゃあ、観光で？」

「うーんと...、」

自分の立場をどう説明をしたらいいのか躊躇しているヒカルに、

「どうぞ、こちらに座ってくださいな」

女性は軽やかに言い、カウンター前の椅子を勧めてくれた。

言われた通りに座り、ヒカルはここにたどりつきたいきさつを話した。自分は学生でも観光客でもなく、夏休みを利用して知人の家に遊びに来ているということも話した。

「何か困ったことでもあった？」

と、聞かれ、

「いえ…。別にないんですけど…」

と、ヒカルが答えると女性はくすくす笑った。

「おかしいですか？」

「ここに来る若い人たちはみんなボストンに迷ってたり困ってたりする人ばかりだから、つい、ね」

「すみません…」

「別に謝らなくてもいいわよ。私は三神淳子。宜しくね」

と、名刺を渡され、

「浅倉ヒカルです」

と、ヒカルは笑った。

『ボストン案内所』は淳子がひとりで運営しているらしい。ガイドパンフレットも地図も、自分の足でボストンを歩き、見て、知りえた知識を手作りで作っている。

「結構学生さんが頼りにしてくれるのよ。それが嬉しくてついつい長くこんなことやってる」

と、淳子は笑った。

「だって、とても親切ですもんこのガイド。初めてボストンに来て知りたいって思うことが全部書いてあるって、私の知人も言っていました」

「そう？ありがとうございます。自分が初めてここに来た時にわからなかったこと、知りたかったことを、何年か経って理解した時にまとめてみただけなのよ。誰かの役に立てればいいな、と思って」

淳子はさり気なく話す但那言葉の中には温かさがある。

「15年前に私も留学でここに来たの。言葉もわからないし知ってる人もいないしで凄く不安だったから、自分の経験を元に集めた資料をまとめてね、それを私のあとから日本からやってくる後輩たちに配ってあげたのがきっかけで、何でだかわからないけどそれからずーっとボストンに住みついているのよ」

なんて素敵な人だろう、とヒカルは思った。

ここは、淳子の温かさで溢れた案内所だったのだ。遠い異国で不安を抱える留学生に、自分の経験と知識を手作りのガイドと地図で提供しているだけじゃなく、お金では買えない`安心、を与えている人一一。

「私、ここにいるのはあと2週間とちょっとなんですけど、その間に色々なボストンを見たいと思ってます。私の知人はボストンのことをよく知っているんであまり困ることはないんです

けど、またここに寄らせてもらっていいですか？」

ヒカルの言葉に淳子はまたくすくす笑った。

「ヒカルさんって言うことが面白いわね！もちろんいいに決まってるでしょ？困ったことなんかない方がいいんだから！」

「ありがとうございます！」

そろそろ3時半も近いし、また来ることを告げてヒカルが椅子から立ち上がろうとした時、からんからん、とドアの鐘が鳴り数名の学生が入って来た。

「淳子さん、こんにちは！」

学生たちそれぞれが口にする。

淳子も忙しくなりそうなので、ヒカルはそのまま学生の間をすり抜けて案内所を後にした。

15年前に留学生として来たボストンで今は日本人留学生のために手作りの案内所を運営している淳子。学生たちは淳子を慕いあの案内所に集まり、淳子はそんな学生たちの良きアドバイザーとして自分の使命をここで果たしている。ここが淳子の居場所なのだ。

素敵な生き方だと思った。ボストンでそんな日本人に出会えたことが不思議だし嬉しい。

――明日からも毎日行っちゃおう。

心を弾ませながらチャイルズ河の遊歩道をジョーイとの約束の場所に向かって歩いていると、いつもの場所にジョーイの姿が見えた。うつむき加減にフェンスにもたれ、ローラーブレードの足をぶらぶらさせている様子はいつもと変わらない。腕の時計を見るとまだ3時20分だった。

「ジョーイ！」

ヒカルは手を振りながらジョーイに向かって走った。

うつむいていた顔を上げて声がする方に顔を向けたジョーイは、驚いたようなその目をいっばいに大きく見開いてヒカルを見つめている。

――え...？

走っていたヒカルの足がゆっくりと止まる。

ローラーブレードを滑らせてジョーイが勢いよく駆けて来た。

胸の中に飛び込んで来たジョーイをヒカルがしっかりと抱き止めた瞬間、ジョーイは声を上げて泣き出した。

チャイルズ河から弱い湿った風が流れ、ジョーイの髪をサラサラと揺らした。

小さな肩をしゃくり上げながらも自然に上がってしまう声を抑えようと必死になっているジョーイの嗚咽が、抱きしめた身体を伝わってヒカルの胸に響く。

どうしたの？どうして泣いているの？

そう訊きたいヒカルだが、ジョーイが少し落ち着きを取り戻すまでこのままでいようと、手に力を込めて抱きしめた。するとジョーイもヒカルの背中に回していた小さな腕に力を込めた。ジョーイのそんな仕草に不思議な愛しさが込み上げる。

やんちゃな弟哲平を思い出す。

いたずらをして母に叱られた時、友達と喧嘩した時、半分ベソをかきながらそっと自分の部屋に入ってくる時の哲平も、今のジョーイのように小さな肩を小刻みに震わせ自分の感情を必死に隠そうとする。だが、ひとこと声をかけると頑張っていた感情の抑えが弾け、声をあげて泣き出す。そんな時は何も訊かずにただ抱きしめてあげていれば、そのうちに笑顔を取り戻して鼻をすすって去って行く小さな弟。

今、ジョーイと哲平が重なり自分のどこか深い部分が痛むヒカルだ。

「I didn't believe...」

ジョーイが呟いた。

「I didn't believe...信じてなかったってこと...？」

ヒカルが声をかけるとジョーイは泣いた顔を上げ、なにかを早口で話した。だが、泣き声で喋るジョーイの言葉はあまりにも滑らかな英語でヒカルには何ひとつ聞きとることが出来ない。

「ごめんジョーイ。わかんない...。Sorry...」

悲しそうにうつむくヒカルにジョーイは首を振る。そして、

「I like Hikaru」

と、涙を拭って笑った。

「え...？I like？」

「イエス！I like Hikaru！（ヒカル、好き！）」

どうしてジョーイが泣いたのか何を信じていなかったのか、肝心なことは何もわからない。わからなければ何もしてあげられないけれど...

「そっか。ありがと。Thank you ジョーイ。Me too.私もジョーイが大好きだよ！」

サラサラの前髪の間から覗く伏し目がちな恥ずかしそうな青い瞳がキラキラと輝いた。その素朴な輝きにヒカルはまた自分のどこかがきしむ気がした。

ジョーイは足に履いたローラーブレードをカチャカチャと鳴らし、器用に地面を蹴って歩きながらヒカルの手を引いていつもの場所に向かう。今日も背負っている背中の赤いリュックがわざわざと揺れていた。

いつもの場所まで戻るとジョーイは立ち止まってフェンスにもたれた。ヒカルはジョーイの隣

りに立ち、同じようにしてフェンスにもたれた。背中から湿った風が吹いてくる。それは透き通った匂いがした。

ジョーイは何もせずただぼんやりとそこに立ち、行き交う人たちを目で追うだけ。時々遠くを見たり、またうつむいたりして退屈な足をぶらぶらと揺らす。

――ジョーイはここでいつも何をしているのだろうか？

同じように足を揺らしてみながらヒカルは隣のジョーイを見下ろした。ジョーイはヒカルを見上げてはにかんだように笑う。もう泣いていない。

「ねえ、ジョーイ？」

「イエス？」

「いつもここで何してるのかな？ってなんていうのかなあ？単語がわからないや...」

昨日と同じように身振り手振りを交えてヒカルは知っている単語を並べて話し掛けた。ジョーイもヒカルの言葉を理解しようと真剣に耳を傾ける。

ひとつの会話が成り立つまで、頷いたり首を振ったりしながらの長い時間が経ち、河から流れてくる風も心なしかひんやりと冷たくなった頃、やっと理解できた単語は「Promise」と「Friend」と「waiting」。

「約束した友達を待っているんだね...？」

ジョーイは首をかしげながらも頷き、リュックの中からゲームのカートリッジを取り出してヒカルに見せた。

「ゲーム？名前が書いてある。Andy...？」

カートリッジの裏面にマジックで『Andy』と大きく書かれていた。

「It is friend's.（それは友達の名前なんだ）」

「あ、そうか。これはお友達のゲームなんだね？」

ジョーイはコクンと頷いた。

それは日本のメーカーが作っている、今日本の子どもたちが夢中になっているゲームで哲平も同じものを持っている。

「このゲームをアンディに返すの？ジス ゲーム...バック？アンディ？」

確か哲平はよく颯土のカートリッジを借りて遊んでいた。ジョーイとアンディも、遊び終わった互いのゲームを貸し借りして遊んでいるのだろう、とヒカルは思った。

けれど、

「ノー...」

と、ジョーイは首を振った。

「Andy has moved away（アンディは引っ越しちゃったんだ）」

「moved away、moved away...、動いた、よそに...。アンディがよそに動いたって...、引っ越したってことかな...？」

「This game is a sign promised of me and Andy.（これは、ボクとアンディの約束の印なんだ）」

「ちょっと待ってね？サインでしょ？ジョーイとアンディのサイン？プロミス...、約束だね。約束のサイン...印ってことか...」

ヒカルが理解して飲み込むまでジョーイは辛抱強くじっと見守る。ヒカルがオーライ！と笑うと、安心したようにゆっくりと続きを話し始めた。

「We promised to meet here again and exchanged our games. (ここで会おうって約束して、ゲームを取り替えたんだ)」

細かい単語はわからないが、引っ越してしまった友達のアンディと交換した `約束の印、`を持って、ここで会う約束をした、ということはヒカルにも理解できた。

「でも、ジョーイ？約束をした日はいつなの？When? promised day?」

ジョーイは小さなため息を吐き、

「It was on August 6...」

と、つぶやいた。

「6日...？だって、今日はもう10日だよ...？トゥデイ イズ 10 デイズ...」

ジョーイは寂しそうにうつむき、

「Andy may have mistaken the promised date.... (アンディは約束の日にちを間違えて覚えてるのかもしれないから)」

と、ローラーブレードの足をゆらゆらと揺らした。

「ジョーイ.....」

ジョーイはいつアンディと約束をしたのだろうか？

アンディはいつ引っ越してしまったのだろうか？

訊きたいことはたくさんあるが、単語を探して言葉を繋ぐことが出来ない。言葉がもっと解ければジョーイのことをもっと理解してあげられるのに、真実の外側の部分しか見えないことがヒカルにはもどかしくて仕方がなかった。

ここでずっと待っているの？

来るかどうかもわからないアンディを――。

「約束の印、か...」

ヒカルはゲームのカートリッジを見つめながら呟いた。

◇

緑の並木道をアカデミーからライブハウスへ向かい響は歩いていた。

地下鉄を使えばほんの5分とかからない道のりを30分かけて歩くのはいつものことだ。最初はライブまでの中途半端にあく時間を埋めるつもりで歩いていたが、今は曲作りに欠かすことので

きない時間でもある。ライブで弾いている曲のほとんどがこの並木道を歩きながら出来たものだった。

ヒカルとひとつの旋律を紡いだあの時間から聴こえているメロディーがある。

テンポはAdagio（アダージョ）。河のようなゆるやかな流れだ。まだはっきりと繋がっていないそのイメージに、4年前、『Shine』の降臨があった時と同じような匂いを感じている。

おぼろげに生まれてくる旋律をかみしめ、おだやかな緑の中に行く歩調をすこしだけ緩めて、響は木の葉の間に見える高い空を見上げた。

ぼんやりと紅く色づき始めたボストンの空。薄い雲に隠れた太陽がその周りに彩を作っている。

隠れていても鮮やかに周囲を照らす太陽の光――。

みんなの光だった太陽は自分だけの光になった。誰もが見たことがない鮮明で輝かしい光を自分だけが知った。

半年の月日をかけて『Shine』に込めた片側の想いは実を結んだ。今、新たにゆっくりと降臨するのは両側に満たされたメロディだ。繋がるまでにそう時間はかからないだろう。

――ヒカル。

その名を心の中で呼ぶだけで新しいメロディが溢れてくる。

それはふたりの、自分とヒカルふたりだけの旋律――。

ライブハウスに到着した時、響はイヤな空気を一瞬で察知した。ほんの数ヶ月前まで自分の歩く場所に当たり前のよう存在していた空気だ。

「ミスターカザマ！」

待ち受けていた複数の人間に囲まれた瞬間、カメラのフラッシュが一斉にまたいた。

「先日のライブで例の曲を披露したと聞いたのですが、今夜も演奏されるのですか？」

「芸術祭のあと、あの曲に関してはいっさい口をつぐまれていたのに、何故先日はいきなり演奏されたのでしょうか？」

「日本人の女性がいらしてたという情報があるのですが、それはあなたの恋人ですか？」

記者に囲まれるのは芸術祭以来のことだった。

芸術祭の直後は、ピアノ界の新プリンスだの期待の新星だのと少しの間騒がれたが、日本に帰るという意思表示をしてからは、自分の周囲に記者が張り付くこともなくなった。あの、しつこくてイヤミなB T Mのジェームスでさえも、他の関心事に忙しくなったようで離れていった。

それが、何故またこんなに自分のところに報道陣が集まったのか、驚きを隠せない響だ。

「ボストン中の人間がカザマ・キョウに注目してるってことだよ」

記者たちを振り切って裏口から店のバックヤードに滑りこんだ響にマネージャーは言った。

「俺に？なんでだ...？」

「当たり前だろう？ジャックの息子ってだけで注目度が高いんだぜ？芸術祭で見事に成功をおさめ、さあこれからって時に日本に帰るなんて言ってた奴が、今度は幻の曲をいきなり披露したりすればカザマ・キョウに何か変化があったのかってことで連中は集まってくるに決まってるだろう」

「そんなことで...？」

ジャックが直接関わっていない自分個人のことをこれほどの騒ぎになるということが、響にはピンとこない。

「俺が『Shine』を弾いたぐらいで...、スキャンダルならまだしも...」

「キョウは自分をわかってないよ。スキャンダルなんだよ、もう」

「...え？」

「ジャックの隠し子騒動であんたはもう世界中に名と顔が知れ渡ってるんだぜ？連中にとっちゃ美味しい釣り餌さ。ボストンじゃ有名人よりも有名な一般人なんだよ、キョウは」

「売れる記事になるとも思えないけどな...」

「何を言ってる...。デビューの話を蹴りチャンスを捨ててまで日本に帰るのはあの恋人のためなんだろ？幻の『Shine』もその恋人のためとくりゃ世間はカザマ・キョウのロマンスに飛びつくさ」

——ロマンス...

響は言葉を返さずにロッカーの中から着替えを取り出そうとして、ハッと気がついた。

「ヒカル...！」

さっきの記者の中にジェームスの姿が見えなかった。マネージャーの話が当たっているなら狡猾なジェームスはアパートのヒカルのもとに押しかけているかもしれない。

今、控え室を飛び出そうとする響の腕をマネージャーは掴み、

「どこへ行くんだよ？ライブが始まるんだぜ？」

と、怒鳴った。

「もう客は待っているんだ。プロとしての振る舞いをしてもらわなきゃ困る」

プロとしての...、と、響は呟き、

「わかった...。すまない」

再び着替えを手にした。

たとえジェームスがアパートのドアを叩いていたとしてもヒカルはドアを開けたりはしないだろう。

今すぐに飛んで帰りたいと暴れる気持ちを無理やり抑えつけ、響は着替えを始めた。

「キョウ、何度も言うけど、考え直した方がいい」

着替えをする響を背後で見守っていたマネージャーが言った。

「...考え直す？何を？」

響は振り向かずに返す。

「日本に帰るってことだよ。本当はキョウだってそう思ってるんじゃないのか？」

響はロッカーを乱暴に閉じ、

「俺は思っていないさ！」

と、怒鳴った。

「俺は何も契約のことだけで言ってんじゃない。長年ここでやってきて、ピアニストだけじゃなくいろんなアーティストを見てきた。物になる奴、ならない奴、だいたい分かる。そりゃ俺にとっちゃ契約が一番大事だけど、キョウ、あんたの未来のために言ってるんだよ」

「俺の未来は...、あいつがいてこそそのものだ」

「熱くなるところが違うぜ、キョウ。頭を冷やせ。今あんたの周りの空気はどれを見てもキョウにとって都合の良い方向に流れてるんだ。このままチャンスも才能も棒に振って、あんたはピアニストとして中途半端なままでいいのか？恋人がそれでいいって言ってるとしたら、そりゃ本物じゃない」

「...っ、あんたに何が解かる！」

響はテーブルに激しく両手をついた。

テーブルを挟んでふたりはにらみ合う。

最初に目をそらしたのはマネージャーだ。

「...まあ、今まで何度も言ってきたからもうこれ以上は言わない。けど最後にこれだけは言っておく。キョウのピアノはハッキリ言って、まだジャックの名に負ぶさってる。それは客だって見抜いてる」

響はマネージャーをにらみつけた。

「...けど、あれだけの人間がキョウを支持するのはあんたの輝きと未来に賭けてるからだ。ボストンの客の耳は肥えてるぜ。ただの流行や風評で心を動かしたりはしない。キョウにここで勝負して欲しいと願ってるんだよ」

勝負....

と、響は心で呟いた。

「キョウの本物を賭けた勝負はここ（アメリカ）でしか出来ないぜ」

響は唇をかみしめ、そのままマネージャーから顔を背けた。

「...じゃ、支度が終わったら頼むよ」

マネージャーは控え室を出て行った。

ドアがバタン、と音を立てて閉まったあとに、響はもう一度両手をテーブルに強く打ちつけた

——俺がここでピアノを弾き続けたいとヒカルに言ったとしたら、あいつはきっと笑顔で納得するだろう。そして、あいつ自身の気持ちはどこか遠くへやって、何年先かわからない約束を信じてまた俺を待ち続けてくれるだろう…。

——心配なんかしてないよ。

あんな強がりを行ったって、その心の中は手に取るようにわかる。ヒカルの目がいつも不安に揺れていることも知っている。

——アメリカに帰らないで！

あの日、ヒカルが言ったはじめてのわがまま。

それまで、どれほどの不安な気持ちを抱えていたのか——。

自分の想いのままに抱こうとしたあの時も、何も言わずに受け入れようとして一筋の涙を流したヒカル。

ボストンに來いという、後先のことも考えずに言った無謀な言葉にもその場で応じたヒカル。

ヒカルはいつも百パーセント自分を受け入れようとしてる。

ヒカルがボストンに來たのは…、

——…俺に自分を差し出して俺の全部を受け入れるため…。

ただ、それだけのためにヒカルは海を渡って来て、そして自分たちはここで先輩後輩から恋人になった。3年半の空白をここで満たして埋めた。もうヒカルにこれ以上の寂しい想いはさせたくない。させられない。

いや…、

——俺が、離したくない…。

永遠に抱きしめていたい。

だから、

勝負は…しない。

もう、決めたことなのだ。

金色の長髪をキュッと紐で結び直し、響は楽譜を手にして控え室を出た。

6時を過ぎると、ジョーイは腕の時計を見て肩を落としてため息をつき、ローラーブレードを蹴って帰って行った。

引越してしまった友達との約束を信じて待つ9才のジョーイ。その約束がどんなものだったのかはわからないが、待ち続けることによって、まだ小さなジョーイの心が傷ついていないことを祈りたいヒカルだった。

9才の時、幼馴染との約束が破れたことによって、長い間心を閉ざしていた人を知っているから――。

「約束の印か……」

約束は時に残酷なものだ。

守られなければ人と人を遠ざけてしまう。実際の距離はもちろんのこと、心の距離までも。

ジョーイはまた明日も来ると言った。

ヒカルも来ると`約束、した。

――I didn't believe....

泣きながら呟いたジョーイの声がまだ耳に残っている。

ジョーイは何を信じていなかったのだろう。どうして泣いたのだろう。

言葉なんかなくても相手を思う心は通じると信じている。けれど、ジョーイともっと話がしたい。まだ出会ったばかりなのに、それでも心が痛くて仕方がないのだ。サラサラ揺れる前髪の間隙から見えた澄んだ瞳を思い出すと胸がつぶれそうになる。

哲平と重なるから？

それとも――。

手探りの会話の中でわかったことは、引越した友達のアンディーとここで会う約束をした、ということだけ。そして伝わって来たのはジョーイの不安と信じたいと強く思う心。

もっと、ジョーイの近くに行きたい。

約束を信じて待ち続けるジョーイを放っておけない。

どうすればいいのだろう？

こんな時、留学生ならボストン案内所に飛び込むのだろうか。

ヒカルはさっき案内所でもらったばかりの淳子の名刺をバックの中から取り出した。営業時間は午後7時までとある。

辺りはもう夕暮れ色に変わりつつあった。チャイルズ河に浮かぶヨットもオレンジの光に照らされている。夕方までには部屋に戻ってカギをかけるようにと響には言われているが、自分がジョーイと関われる時間はあまりにも少ないのは確かなこと。日本に帰ったらきっと、もう二度と会えない少年――。

「今思ったことは、今やらなきゃ...っ」

ヒカルは遊歩道を再び市街地に向かって歩きだした。

◇

案内所に学生たちはもうひとりもいなかった。薄暗くなった中でひとりカウンターに座り、さっきと同じように書き物をしていた淳子がドアの鐘の音に気がついて顔を上げた。

「あら？ヒカルさん？どうしたの？」

「淳子さん、私、英語が分かるようになりたいんです！」

カウンターまでツカツカと歩き、ヒカルは言った。

「は？」

ヒカルは目の前の椅子を引きながらジョーイのことを説明した。そして、とにかく一日も早く言葉を理解できる自分になりたいと言ったが、

「それは無理だわ」

と、淳子にあっさりと言われた。

「学校で習う英語と実際に使う言葉じゃ違うしね。言葉って聴きながら使って覚えていくものだから、今すぐ全部を理解するのは不可能です」

「やっぱり.....」

ヒカルはガックリと肩を落としてため息をついた。

分かりきっていたことだが何か方法があるのではないかと期待もしていたのだ。

「でも、気持ちはすごーくよくわかるわよ！私も昔同じことを思ったし、意志の疎通をしたい相手となかなかかみ合えなくてイライラしたこともあった」

「ジョーイとかみ合えないとは感じないんです。あの子は私が理解するまで辛抱強く待ってくれる。ほんと、いじらしいんです。でも、だからこそ、もっと私に伝えたいこと、話したいことがあるんじゃないかって思うの。出会ったばかりでこんなこと思うのも変だけど、もしかしたら私が勝手にそう思ってるだけなのかもしれないけど...」

「そうじゃないと思うな。そのジョーイくんはヒカルさんを本当に信頼できる相手として認めてると思う。一生懸命な心は伝わるものよ？」

「一生懸命な心？」

「そう。言葉がわからないからこそヒカルさんは彼を理解しようと一生懸命になるでしょ？自分を理解しようとして一生懸命になってくれるってとっても嬉しいことだと思う。そういうヒカル

さんの振る舞いが彼に伝わっているから辛抱強く待ってくれるのよ」

「ああ...、じゃあやっぱりもっとジョーイの近くに行きたい！」

言葉は聴きながら覚えていくもの。確かにそうだ。小さな子どもが言葉を話すようになるのだから自然に覚えていく。ひとつひとつの単語と意味を身体にしみ込ませていく。

やっぱり響に隣の部屋からTVを借りてもらおう。言葉がわからなくたってずっと聴いていれば何か覚えられるかもしれない。ああ、でも、時間がなさすぎる.....。

と、心の中で考えを巡らすヒカルを、淳子はじっと見つめて笑っている。

「好きだなあ、そういうの！」

淳子はパン、と手を打った。

「じゃ、ボストン案内所の淳子さんがひとつアドバイスをしてあげましょう！」

「お願いしますうう！」

ヒカルは目を輝かせてカウンターに身を乗り出した。すると、淳子はやや胸を張り、

「昔、私がやったやり方は筆談」

と言って、くすっと笑った。

「.....筆談？」

「そう。会話をされていてわからない単語が出てきたらノートを差し出して相手に単語を書いてもらったの。それを辞書で調べてその場で理解しながら単語を繋げて行く」

ヒカルは呆然と口を開けた。

わからない単語だらけの自分にしたら、そのやり方は果てしなさ過ぎる。

「...日が暮れそう」

おもわず呟いたヒカルに、

「実際に日が暮れたこともあったわよ」

と、淳子は笑った。

「でも、私はこの方法が一番確実だった。相手の言葉をちゃんと理解したかったから。時間はかかったけれど、分からないのに分かったふりをして流しちゃうのは凄くイヤだったしね」

「私もそう思います。ちゃんと理解したい.....」

「でしょ？辞書は確実よ！おかげでボロボロになったけどね」

でも....、

と、ヒカルはため息をついた。

そんなヒカルを見つめて淳子はまたくすくす笑う。そして、

「でも、これは15年前のやり方ね」

カウンターから立ち上がり奥から小さな箱を持って来て、

「今は、こんな素敵な辞書がある」

と、ヒカルに差し出した。

「これ、辞書なんですか...？」

箱から中身を取り出してみると小さな電卓のようだった。数字の代わりにアルファベットが並んでいる。

「単語のアルファベットをこうやって入力すると....、」

淳子は `Dictionary` と入力した。

表示スペースに現れた日本語を見てヒカルは、

「わっ！凄い！ `辞書` って出てきた！」

と、手を叩いて叫んだ。

「ま、やり方は同じだけどひとつの単語に1分ぐらい、辞書をめくって調べる時間が短縮されるわね～」

「す・ば・ら・し・い・っ！！これ、欲しいっ！」

ヒカルは電子辞書を、もう離さないぞ！という具合に抱きしめた。

「毎度おーきに！100ドルいただきます」

「うっ、100ドル?!」

そんなにお金を持っていただろうか...、とヒカルはこっそりと財布の中身を確認した。そして、いち、に、さん、と紙幣を数え、

「ちょうどあった...！」

ほっとしたようにカウンターの上に財布の中身を全部ぶちまけた。

「もう、ヒカルさん素敵！その熱意を買って90ドルにまけちゃう！」

「きゃあ！淳子さん太っ腹！大好きっ！」

飛び跳ねて笑うヒカルをしばらくの間見つめていた淳子は微笑んで言った。

「ひとつわかったことがあるわ。ジョーイくんが言った、I didn't believe.の真意」

ヒカルは飛び跳ねるのをやめ、淳子に顔を向けた。

「彼はきっと、ヒカルさんが約束を守って来るなんて `信じていなかった` のね。出会ったばかりでしかも言葉も上手く通じない相手じゃない？それが、約束の時間よりも早く来てくれたことが信じられなくて嬉しくて、待ち続けているアンディのことと重なって感情が爆発しちゃったんじゃないかしら？私は、そう思うな」

「そうか.....」

「ヒカルさんの笑顔、とっても素敵だもん！だからジョーイくんはI like Hikaru！なのよ！」

ヒカルは照れたように笑った。

でも、淳子の言うことが正しいのなら、あの時のジョーイの涙は悲しみの涙じゃなかったということだ。

「よかった...」

ヒカルはまた笑った。

仕事を終えた淳子と一緒に案内所を出ると辺りはすっかり闇に包まれていた。空気もさらに冷たくなりブラウス一枚じゃ寒いくらいだ。

淳子に家を訊かれて答えると、買い物に付き合えばアパートまで車で送ってくれると言う。今すぐ帰ったところで響はライブでいないので、ヒカルは淳子と一緒にショッピングモールに行

った。

三神淳子は旧姓で、本名は淳子=クローブ。

市街地からは少し外れた住宅街のアパートでアメリカ人の夫と暮らしている。子どもはいないらしい。

結婚をしたのは3年前で、それまでの淳子はただひたすら『ボストン案内所』の仕事に情熱を傾けていたようだ。15年前に留学してきた当初に、一生懸命筆談で話した同級生とふとしたことで再会し、それが今の夫らしい。

「彼は、私がボストンに残ってこんなことやってるってこと、凄く驚いてた」

夕食の食材をカートに入れながら淳子は笑った。

「筆談してた頃ね、私の一生懸命さが可愛い可愛いって言ってくれてたのよ、彼。付き合っ欲しい、みたいなことも言われたんだけど、なんせ言葉が理解出来なかったから...」

「でも、淳子さんに好意を寄せてた彼の心は伝わってこなかったんですか？」

「彼はプレイボーイだったの。可愛いって言ってる相手が私だけじゃなかったから、私も大勢の中のひとりだって思った。けど、他は全部カムフラージュで、ずっと本命は私だったって！これがわかったの最近よ？」

「うわあ...。それってちょっとせつない...」

淳子は、うん、と頷き、

「そうでしょ？私は彼のこと好きだったしね。だから一生懸命筆談したんだし」

と、笑った。

「大学を卒業してから彼はフランスに10年行ってた。私も彼もいろんな恋を経て、3年前にフランスから帰って来た彼と10年振りに偶然再会して即結婚。今思えば私がボストンに残っていたのも運命だったんだなって思うわ」

「運命か...。ここが淳子さんのいるべき場所だったんですね」

「そうね。私を必要としてくれる仕事と人が在る、私の居場所かな」

レジに並ぶ淳子の後ろで一緒に立っていたヒカルは、レジ台の脇にある陳列棚にキレイに並んでいるポストカードを手を取った。チャイルズ河やトリニティ教会など、ボストンの風景写真のポストカードだ。さっき淳子がまけてくれたおかげで財布の中にはまだ10ドル残っている。

「それ、買う？」

「はい。友達に出そうと思って」

あかねや麻耶にまだ暑中見舞いを出していない。エアメールの暑中見舞いなんてちょっとお洒落、と思いながら、ヒカルは10ドルで買えるだけのポストカードを手にとり、淳子のあとにレジを済ませて空っぽになった財布とそれを大事にバックにしまった。

「じゃ、ヒカルさんの家まで送るわね！遅くなっちゃってごめんなさい」

車に荷物を乗せながら淳子は言った。

「いえ。どうせ夜中までひとりだからいいんです。宜しくお願いします」

「あら、そうなの？それじゃ寂しいわね」

淳子は車を発進させ、遊歩道の側道をアパートに向かって走り出した。

そして、アパートの前に到着した時、

「あれ？ここって音楽アカデミーの下宿じゃない？ヒカルさんの知り合いってアカデミーの学生さんなの？」

と、車から降り、やや驚いたようにアパートを見回した。

「そうです。淳子さんはアカデミーを知ってるんですか？」

「そりゃね。昔はアカデミーの子たちもウチによく来てたし。でも、今は日本人の学生さんは、確かカザ……」

と、淳子が言いかけた時、

「Excuse me,」

背後から低い男の声がして、ヒカルと淳子は同時に振り向いた。

暗闇の木立ちの間から姿を現した男は、ツカツカとふたりの前にやってきて、

「Ms. Hikaru Asakura?」

と、ヒカルの前に立ちはだかった。

ヒカルはとっさに淳子を見た。知っている人間のいないボストンで自分を訪ねてくるこの男はいったい誰なのか、心臓の鼓動が速くなる。

『あなたは誰？』

ヒカルの心情を察した淳子が代わりに言葉を発した。

『これは失礼。私はBTM（ボストントップマガジン）のジェームス=Tと申します』

ジェームスは首に下げている社員証をふたりに提示した。

「ジェームス…？」

ヒカルは名を聞き返した。

響のスキャンダルをあることないこと書き散らしていた記者の名前はジェームスじゃなかっただろうか？そう言えばこの顔は見たことがある。いつかのニュースで見た、響に罵声を浴びせていたあの憎たらしい記者だ！

「私に何の用ですか？」

ヒカルはハッキリとした日本語で言った。ジェームスは首をすくめて「なに？」というジェスチャーをしながら淳子に通訳を求めた。淳子がヒカルの言葉を伝えると、ジェームスはまた早口の英語で何かを言った。

「…え？」

淳子は絶句してヒカルを見た。そして、

「ヒカルさん、あなたは…」

と、呟いた。

「彼はこう言ってる。『カザマ・キョウが芸術祭で成功をおさめ、ジャックやその事務所が彼を売り出そうと準備を進めていたにも関わらず、デビューのチャンスを捨てて日本に帰る決意をしたのはあなたのせいですか？』」

「デビューの…チャンス…？」

ジェームスはさらに言葉を続けた。

「`先日カザマ・キョウはライブで『Shine』を弾きましたが、あの曲はあなたに贈られた曲だそうですね？今、あなたがここにいるわけを聞かせてください。カザマ・キョウがチャンスに飛びつかないように監視でもしているんですか？」

淳子はジェームスの言葉を伝えてから、

「答えることないわよ、ヒカルさん」

と、小声で言った。

ヒカルは、うん、と頷いてから、

「私は英語がわかりません。あなたがどうやって私のことを調べたのかはわかりませんが、私に話をしろというのなら日本語で聞いてきてください」

と、ジェームスを睨んだ。ジョーイのためならいくらだって英語を理解する努力をするが、さんざん響やジャックを誹謗したジェームスの一方的な取材に応じるために時間を使うのはシャクだった。

淳子がヒカルの言葉をジェームスに伝えると、ジェームスはチッ、と舌打ちして地面を蹴った。

「淳子さん、ありがとうございます。もう、通訳はしなくていいです」

「わかったわ。ヒカルさん、アップレね」

淳子は笑った。

「でも、びっくり。ヒカルさんの知り合いがカザマ・キョウだったなんて...」

「ヒビク、いえ、響のこと、知ってるんですか？」

「ボストンでカザマ・キョウを知らない人間はいないわよ。一時は大騒ぎだったから。ボストンには音楽大学もあるシエバ校長のアカデミーもあるし、なによりもここはジャック・ベリーのホームタウンでしょ？街の多くの人が音楽に関心を持っているの。カザマ・キョウにもね。この記者が言うことは半分真実。彼にはデビューの話があって、ボストンのみんなはそれを凄く期待していたのよ」

「...そんな」

響からはそんな話を一度も聞いたことがなかった。

アカデミーを卒業したら12月には日本に帰る、と響はいつもそれしか言わなかった。それでも不安が膨らんだ時は、

心配すんなっ！

と、笑い飛ばしてくれたから.....。

ライブハウスで見た響の真剣な鋭い瞳。

響のピアノを聴くために集まってくる多くの人たち。

ピアニストになるためだけの時を刻んだ響の3年半と部屋にしみ込んでいた覚悟――。

それらは全て本物だった。

――12月には日本に帰るから。

何度も聞いた言葉だが、そこに響の真実はあったのだろうか…。

「彼は、ヒカルさんには言わなかったのね…」

ヒカルは力なく頷いた。

日本語で話す二人を、ジェームスはいまいましそうに眺めていたが、

「You are the worst lover!」

と、ヒカルに言葉を吐き捨てて去って行った。

「…ちょっと翻訳できないわ、ね…」

淳子は坂道を怒った足取りで下っていくジェームスの後姿に向かって勇ましく空を蹴った。

「ワーストラヴァー…。最悪の恋人って言ったんでしょ？ボストン中の人たちが期待しているカザマ・キョウのチャンスを棒に振らせる、私は最低最悪の恋人なんですね…」

ヒカルは呟いた。

「ヒカルさん…」

「今日はありがとうございました。おやすみなさい！」

ヒカルは淳子にペコリと頭を下げると、勢いよく回れ右をして部屋の中に駆け込んだ。

ドアにカギを掛けてしばらく佇んでいると、淳子の車が発車した音が聞こえた。その音が遠くなっていくのを感じながら、そのままペタンと床に座りこみバックを投げ出してヒカルは唇をかみしめた。

――You are the worst lover.

――……ジェームスの言う通り。たとえ知っていたとしても、きっと帰って来て欲しいと願った。もう、少しだって離れていたくないって思った。

だから、私は……、ヒビクのチャンスを喜んであげられない、最悪の恋人…。

このまま目を瞑っていたい。

12月の訪れを静かに待ちたい――。

涙がポロポロとこぼれて膝の上に落ちた。

白いレースのカーテンから射し込む一筋の月明かりが静寂を守るグランドピアノの上に注がれ、その黒い光をひときわ鮮やかに輝かせていた。

真っ暗な闇と静寂に包まれた坂の道に響き渡るのは石畳を蹴る足音と荒い息遣いだった。自分が発するそれらの音に背中から追われるような気がして、響の気はさらに急（せ）く。

自分を取り囲んだ記者たちはずっと店の外で待機していた。扉の外に張り付き、『Shine』の演奏があるのかないのかをじっと伺う視線があり、そして、ライブが終了して裏口から出たところで再び取り囲まれた。いくつもの言葉の攻めにあい、同じことを繰り返し聞かれる中で、今までと同じようにノーコメントの姿勢を保ちながら記者たちの中にジェームスの姿を探したが、やはり見当たらなかった。

もしも、あの非礼極まりない男がヒカルとの接触に成功をしていたら...、と、考えたくないことが頭の中を駆け巡り全身の毛が逆立ち、いてもたってもいられない思いでライブハウスからずっと走って来たのだ。

アパートの前まで来たとき、響は足を止めて息を整えながらゆっくりと周りを見回した。

静寂――。

人の気配はしない。

数ヶ月前まで、よくジェームスが自分を待ち伏せしていたレンガの陰にも誰もいない。明かりがついている部屋もすでにまばらになっている午前零時のアパート。その静寂と闇の中、左から三番目の自分の部屋には明かりが灯っていた。

「おかえりなさい、ヒビク！」

ドアを開けた途端、ピンクのパジャマに着替えたヒカルがソファから勢いよく立ち上がって入り口まで迎えに来た。部屋中の明かりが灯され、家具が揃い、そしてヒカルがいる自分の部屋は見違えるくらいに明るく、そして何よりもいつもと何も変わっていないヒカルの弾ける笑顔があった。

「ただいま...」

言ってから、響はまだ上がっている自分の息を沈めるように大きな息を吐いた。

「...走ってきたの？」

「...ああ」

「汗かいてる」

ヒカルはそう言って笑い、響の額で光る汗の粒を手のひらでぬぐった。

「ヒカル...？」

響はヒカルをじっと見つめる。

「なに？」

変わらない笑顔。

けれど――。

「先にシャワーを使わせてもらっちゃったよ。ごはんも食べちゃった。食べて来るとは思ったけどヒビクの分も作っておいた。と言ってもお料理は得意じゃないから簡単なカレーライスだけだ」

ヒカルはペロツと舌を出して笑った。

「...サンキュ。シャワーを浴びたら食うよ。腹減った...」

ライブの日は休憩時間の中に夕食が出る。だが、今日はそれが喉を通っていかなかった。ワンステージが終わる度にすぐにでも飛んで帰りたい衝動に突き動かされ、その度に `プロとしての振る舞い、を己に言い聞かせなければならなかった。今、ヒカルの笑顔を見て、そして部屋に充満するカレーの匂いに触発されて、今まで黙っていた腹の虫が鳴きだした。

「あれ？食べてないの？」

「ああ。食べられなかった」

「こんな時間まで食べられないなんてよく我慢できるね？私じゃ絶対にダメ」

ヒカルはくすくす笑いながらキッチンに行き、カレーの入った鍋を温めた。

「用意しておくからシャワーを浴びてきて？明日も学校あるんでしょ？もうこんな時間だし早くしなきゃね」

落ちてくるぶかぶかのパジャマの袖をまくり上げながらヒカルはカレーをかき混ぜる。そして、時々目をこする。夜更かしが苦手なのはいつでもどこでも変わらないようだ。

「明日は午後からだから少しはゆっくり出来るんだ」

響はヒカルの後ろに立ち、鍋の中に入ってしまいそうなヒカルの袖を右手でクイツと持ち上げながら、上から中を覗き込んだ。

「うまそ」

響に袖を持ってもらったおかげで左手が自由になったヒカルは、空いた手で小皿を持ち、カレーを少しよそって、

「...それは、わからないよ？」

と、それを響に差し出した。

響は小皿に口をつけながら、

「腹減ってる時は何を食ってもうまく感じるものさ」

と、笑う。

「それって...」

言葉の意味を考えているヒカルの右手を、つかんだ自分の右手で動かして、小皿にもう一杯のカレーをよそった響は、

「...今夜誰か、来た...？」

と、さり気なく言いながら `味見、のおかわりに口をつけた。

ヒカルはくるっと振り向き響を見上げ、

「誰かって？」

と、聞き返した。

「いや...、俺がいない間に誰か来たかな、と思って...」

「来たっていうか、外で会ったよ？ジェームスって記者に」

何でもないことのように言うヒカルの言葉に、響は自分の中を流れている血が、一瞬逆流したような刺激を感じて固まった。

——やっぱり来たのか、ジェームス...！

でも、ヒカル...？

「...で？」

小皿をヒカルに返し、響は努めて冷静を装った。

「なんか、英語でまくし立てていたけど全然わからないから日本語で喋ってくださいって言ったら怒って帰っちゃった」

「怒って...帰った?!」

響は呆然と聞き返した。

「なんか私に聞きたいみたいだったけど、私は日本人だよ？だったら日本語で聞いてきなさいよ、でしょ？」

カレーの火を止めてヒカルは振り返って笑う。

「日本語で喋ってください...、か」

ヒカルの英語音痴はこんなところで幸いした、ということか。

「...そうだよな。ヒカルの言う通りだ」

と、響も笑った。

「もしもまたやって来たとしても無視しとけよ？」

「...うん。わかってる。そんなことより早くシャワー行ってきて？カレーがまたさめちゃうよ」

「ああ、そうだな」

響がシャワー室に入ると、ヒカルは肩を落として大きなため息をついた。

——You are the worst lover.

本当に最低な女だ。

ジェームスに言われたこと、淳子から聞いたこと、そして響の真実の想いに向き合わなくちゃいけないのに、そこから逃げようとしている自分——。

もしも、響がボストンに残ってデビューを目指したいと言ったら、自分はきつとうなづいてしまうだろう。そして、また何年もの会えない時間と不安の中で、寂しさを抱きしめながら響を待

ち続けて行くのだろう…。

ヒカルはグランドピアノを開けた。

響の夢――。

ピアニストを目指してボストンにやってきた響。

ジャックの事故、誹謗中傷、挫折…、そして芸術祭。

幾つもの苦難を乗り越えた今、ボストンの多くの人々が響の弾くピアノと作る曲を愛してくれるようになった。響にずっとここでピアノを弾き続けて欲しいと願っている。そうすれば、その音色はきっとボストンから発してアメリカ全土に広がっていき、そして響は世界のカザマ・キョウになっていく――。

響がそこまでの自分に挑戦したいと考えていないはずがない。

ピアノに込めていた想いと覚悟は真実だったはずだから――。

でも…、

それでも日本に帰る決意をしたのはきっと……。

ポロン…、

と、高音の鍵盤を鳴らすと、それはまるで覚悟の欠片のようにキラキラした音色が小さく響いた。

ピアニスト、カザマ・キョウ。

響がその未来を選べば、自分たちの距離は確実に遠くなって行く。待ち続ける想いと待たせる想いはきっとかみ合わない――。

それでも、やっぱり響にその未来を選ばせることが `恋人、としての自分の振る舞いなのかもしれない。同じ夢を見る、ということはきっとそういうことだ。

だけど…、

だけど――。

「ヒビク、ごめんね…」

ヒカルは鍵盤に向かって呟いた。

ボストン中、いや、アメリカ中の人間にThe worst lover.と罵られても、離れて生きていたくない気持ちを抑えられない。千パーセントわがままだとわかっているけど、自分からその言葉を言い

出すことは出来ない。このまま、知らなかったふりが通せるのなら通したい。そして響が帰ってくる12月を息を潜めてひたすら待っていたい。

「ごめんね...」

ヒカルはもう一度呟いて堅く目を閉じた。

◇

「ヒカル...」

シャワー室のドアをそっと閉じながら響は呟いた。

おかえりなさい、の声を聞いたときからわかっていた。

いつもと変わらない笑顔の中に、真っ赤になって腫れた目があった。夜更かしのせいじゃない。あれはさっきまで泣いていた目...

——俺が気がつかないと思っているんだよな。そんなわけないだろ？高校の時からずっとヒカルを見てきた俺だけ...？

自分がキツイ時に限ってわざと明るくふるまうヒカルの癖は知り尽くしている。

自分に無理をして抱え込むのはヒカルの専売特許だ。

だが、隠しているつもりでいて、膨らんだ鼻だったり迷子の仔犬のような瞳だったりどこかにサインが出ている。

——昔はそれに気がつかなかったけれど、今の俺にはわかるさ...。

シャワーをひねり、熱い湯水が勢いよく全身を打つ。ビリビリと感じるその痛みに近い感覚の中で、響は今聞いたばかりのヒカルの言葉、`ごめんね、`の意味を考えた。

自分にデビューの話があったことも、ジャックや事務所がそのために動き出していたこともヒカルは何も知らない。ただ、12月にアカデミーを卒業したら日本に帰ると、自分は約束しただけだった。芸術祭のステージの直後、3年半ぶりにヒカルに電話をかけたあの日に、そう約束のしなおしをしたから——。

ジェームスのことだ。

きっと何もかもヒカルに話し、さっきマネージャーが自分に言った言葉よりもさらに容赦ない言葉を浴びせたのだろう。ジェームスの言いそうなことはだいたい想像がつく。

——何もかも知ったヒカルが平気でいられるはずがないよな...。

俺が帰ってくるまでの間にひとりで考えて泣いて、そして普段と変わらない態度に努めて`ごめんね、`だ...。

ヒカルが謝ることなんかひとつもないのに。ジェームスが...、
いや、ジェームスじゃない。
俺、だよな...

日本に帰る。
ここで勝負したいー。

どちらも自分の中に存在する偽りのない心だった。それをマネージャーに突かれた時に恐れたことは、ヒカルに後者を悟られることだった。

日本に帰ってヒカルと共に生きる未来は風間響が約束をした純粋な想い。だが、ピアニスト、カザマ・キョウとして勝負と挑戦、さらに上を目指したいという不純な想いもずっと抱いていた。

ライブハウスで『Shine』を弾いたのは、そんな己の野望が無意識に顔を出したからなのかもしれない。ヒカルの席を確保する条件としてマネージャーに『Shine』の演奏を求められた時、断ろうと思えば断れたはずだ。純粋にヒカルにだけ聴かせたいのなら、ライブじゃなくこの部屋でよかったのだから。

こんな騒ぎになることを意識したわけじゃない。だが、今日記者に囲まれたことが自分の中の不純、が前面に押し出るきっかけになったことは否めない。そしてもしも今日がなかったとしても、それはいずれ...

ーヒカルー。
もしも、
もしも俺が.....、

響は激しく首を振って顔の上にシャワーの湯水を注いだ。

もう、決めたことだ。
日本に帰る。
日本でヒカルとー。

シャワーを止め、曇った鏡を手のひらでこすり、その鏡面を響はじっと見つめた。自分の顔とは思えないくらいに鋭く光る目がそこに映っていた。

◇

電子辞書を和英モードにしてヒカルは言葉を打ち込んだ。
「Truth、か...」

表示画面に現れた単語を見つめながら、ソファに、ころんと転がって呟いた時、

「Truth？」

シャワーが済んだ響が髪をタオルで拭いながら繰り返す、ヒカルが持っている電子辞書を見て

「なにそれ？どうしたの？」

と、ヒカルの手からそれを受け取った。

「あ...、それは今日、ボストン案内所で買ったの。これ、すごいんだよ？単語を入れると訳が出るの。和英も英和も兼ねてて100ドル！」

「ひゃくどる？！高っ！何でそんなの買ったんだ？」

響は呆れたように言った。

「ヒビクみたいに英語がペラペラの人には高い品物なんだろうけど、今の私にはこれが必要なの。ジョーイとコミュニケーションをとりたいから」

「ジョーイって、ヒカルが友達になったっていう9才の？」

「うん」

ヒカルはソファから立ち上がり、キッチンに用意しておいた響の夕食をテーブルに運んだ。待っている間の響は電子辞書をいじくりながら、和英にしたり英和にしたりして単語を入れて遊ぶ。

「壊さないでよ」

「壊すかよ！ヒカルじゃあるまいし」

ヒカルじゃあるまいし、の言葉には少しムツときたヒカルだが、響の食事の用意をしながらのこんな時間が、これからもずっと続いていくことを心から祈らずにはいられなかった。

「まあ、これがどれだけの実用性があるのかはかなり疑問があるけど、アイテムとしちゃ画期的だな」

「うう...、なんかその言い方トゲがある...」

自分を上目遣いに睨むヒカルと目の前に用意されたカレーとサラダ。

さっき味見をしたカレーは響にとってはかなり甘口だったが、おそらく泣きながらのヒカルがこしらえたそれを、響はかみしめながら口に入れた。

食事をする響を頬杖をついて見つめながら、ヒカルはジョーイのこと、ボストン案内所の淳子のこと、ジェームスのことを除いた今日一日の出来事を話した。

ヒカル的描写を交えながらの一から百までを聞かされた響は、ジョーイがどんな姿をしているのか、淳子がどんな人生を生きているのかまでがしっかりとイメージ出来たほどだ。

「ふうん...。約束の印にゲームか。可愛いな」

「うん。でも、真実が見えなくて何だか気になってしょうがなくて...」

「だから、この電子辞書ってわけだ？」

「そう」

響はヒカルをじっと見つめた。

「さすが、ヒカルだな」

「え？」

「子どもに優しい」

響は笑った。

「出会ったばかりのジョーイくんがほっとけなくて全財産はたいてまで電子辞書買っちゃうんだから...」

「だって...」

「ま、だから幼稚園の先生をやってるんだよな、ヒカルは。ヒカルのそういうとこ、好きだよ俺」

真顔で言う響に、

「や、やだあ。照れちゃうよ...」

ヒカルは真っ赤になった。

「けど、真実ってのは簡単には見えないもんだよな...。人のも自分のも...」

空いた食器を片付けようと手を伸ばしたヒカルは、ピクリ、と固まった。

「ヒビク.....？」

見えない真実。

それは、自分たちの一一。

響は自分の目の前で止まったままのヒカルの手を握った。

「ヒカル...、俺...、」

一一いやだ！

言わないでっ！

ヒカルはとっさに手を引き、

「さ、早く片付けて寝よう？もう遅いしね？」

と、食器を手にとって片づけをはじめた。

「ヒカル...」

響はキッチンに立つヒカルの後姿に向かって呟いた。

一一ヒカル、俺...、

言おうとした言葉が喉の下にゆっくりと沈んでいった。

ついさっきまでの自分は日本に帰る決意から動くつもりはなかったはずなのに、今、言おうとした言葉は真逆の言葉だった。

ピアニスト、カザマ・キョウ一。

この夢にとどくまで.....、

自分の真実（ピアノ）がどこに繋がっているのかをここで確かめたい。

それが、たった今、本当に見えた自分の真実（Truth）一一。

「ヒカル...」

だが、もうひとつの真実も手放せはしない。

だから、このまま、

一一日本に帰るな。

日本にある全てのものを、仕事も家族もそして、あいつも捨てて、ここで俺と一一。

喉の奥に沈んだ言葉を響は水と一緒に飲み込んだ。

キッチンで食器を洗うヒカルは、自分をじっと見つめる響の一途な視線の熱さを背中に感じ、足の震えを抑えることができなかった。

一一ヒカル、俺...、

この後に続くはずだった言葉はきっと、`ニホンニハ カエレナイ...、。

きっとこれが自分たちの進むべき真実。

でも...、こんなに急に覚悟なんてできない。

一一ごめん、ごめん、ごめん...！

私は最低の恋人...！

想いの欠片がいくつもいくつもこぼれ落ちて、流れる水道の水と一緒にシンクの底に沈んでいった。

「Is today's Hikaru depressed? (今日のヒカルは元気がないよ?)」

じっと河の流れを見つめているヒカルの隣で、同じように河を見ていたジョーイがヒカルを見上げて言った。

午後4時の遊歩道。

「ん? depressed?」

ジョーイはヒカルの手にある電子辞書を取り、英和モードに『depress』と入力して渡した。

「...低下させる...? なんだろ?」

ヒカルは表示画面に現れた訳を見て首をかしげて苦笑した。

ジョーイは電子辞書を覗き込んでからヒカルを見て、

「Hikaru?」

と、ヒカルの腕をちょんちょんとつつき、首を垂れて大げさにため息をつく仕草を何度も繰り返した。

昨日淳子から買った電子辞書を持って、約束通り今日も遊歩道のいつもの場所に来た。

ヒカルが持ってきた電子辞書を見たジョーイは、

「Great! (すごい!)」

と、叫び声をあげた。

しばらくの間、その画期的なアイテムをいじりながら『今日は涼しいね』などという他愛もない話をして二人だったが、ヒカルの髪を乱しジョーイの帽子を飛ばした一陣の強い風がふたりの会話を中断させた。

帽子は遊歩道を勢いよく転がって行ったがジョーイがローラーブレードを蹴って追いかけるとすぐに捕まった。

ずいぶん遠くまで帽子を追いかけて行ったジョーイが戻ってくるまでの間に、もう一度強い風が河の水上を滑って来た。

広い大きな運河が急に強くなった風によって波立つ。

さっきまで穏やかに流れていた水面に波紋がいくつも広がっていく。広がる波紋が新たな波紋を生み出す水面。次々と生まれる波の姿に、突然心を締め付けられたヒカルだった。

――ヒカル、俺...

昨夜の響の声が今日になっても離れない。

後に続くはずの言葉を拒絶してしまっただけからは響は何も言わなかった。何もなかったように変わらない夜と朝を過ごし、午後から学校に出かけて行った。

それがあまりにも穏やかすぎて、あまりにも普通すぎて、胸が痛かった。

穏やかな水面にたったひとつ小石を投げるだけでも確実に波紋はできる。自分と響の決まっていたかのように見えていた未来に向かって投げられた小石は、見えていなかった真実を現した。

今、突然の風が吹いて波立つ運河。

この河に広がる波紋のように、自分と響の間にどんどん広がっていく波が怖くてたまらない――。

ジョーイが繰り返す可愛いジェスチャーに、ヒカルはくすつと笑った。

「ジョーイは私が元気がないって心配してくれてるんだね？」

ヒカルが胸を押さえたその手をグーっと下の方に持っていく仕草をしながら言うと、ジョーイは、うんうん、とうなづいた。

「やっぱりポディーランゲージが一番伝わるみたいだね」

と、ヒカルは笑う。

「Are you OK?」

ジョーイはヒカルを見つめて言った。

その青い瞳は深い輝きを放つ。

――ジョーイの近くに行きたいなんて思ってるくせに、この子に心配させて何やってるんたら、私....

どこか寂しげで思いつめたような、それでいて優しい空のようなジョーイの瞳を見つめ、ヒカルは気を取り直して河に背中を向けた。

「ありがとう、ジョーイ！私は元気だよ！I'm OK」

「good!」

ジョーイは真っ白な歯を見せて笑った。

「そうだ！ジョーイに日本の歌を教えてあげるね！ジャパニーズソング！」

ヒカルはスーッと深呼吸をした。そして、

「そらとたいよう みあげれば ほら げんき～」

と、歌い出すと、ジョーイはおもむろに顔を歪めた。

「I don't understand what the song is about... (どんな歌なのかわからないよ...）」

「え？元気になる歌でしょ？ほら、ジョーイも歌ってごらん！レッツシング ア ソング！そらとたいよう みあげれば ほら げんき～」

「ソラトタイヨウ ミアゲレバ ホラ ゲンキ...」

「何かずいぶん音程が違ってるけど、まあそんな感じよ！」

「ソラトタイヨウ ミアゲレバ ホラ ゲンキ～！」

オリジナルの曲とはずいぶん違った音程で覚えてしまったジョーイは、嬉しそうに『げんき』を口ずさむ。

「ジョーイって音痴だね...？」

「？」

「ううん、何でもないよ！すごいよジョーイ！日本語上手！グット！ジャパニーズ！」

ヒカルはジョーイの手をとって繋ぎ、足ぶみをしながら行進するようにして歌った。ジョーイは周りを気にして恥ずかしそうだがヒカルはおかまいなし。完全なる幼稚園教諭をここで再現している。

「楽しいでしょ？元気が出るよね？エンジョイ？」

「Yes...」

「そうだ、ジョーイ？アンディーのことを教えて？プリーズ、テルミー、アンディーズ」

ヒカルが足踏みをしたまま言うと、ジョーイはうん、と頷いて、ほっとしたようにヒカルの手から電子辞書を取って笑った。

「Andy is the friend who lived near my house. (アンディーは、僕んちの近くに住んでいた友達なんだ)」

ジョーイはヒカルが理解するペースに合わせてゆっくりとした英語で話し始めた。

『学校でも同じクラスで席も隣。僕たちは毎日遊んでいた。僕もアンディーもゲームが好きだったんだ。でも、ゲームばかりやってたわけじゃないよ。ローラーブレードもアンディーとここで一緒に練習してうまくなったんだ。アンディーより僕のほうがちょっと上手だったけど』

『お勉強は？』

『うーん...。僕は勉強は得意じゃないけど算数は好き』

『算数が好きなんてすごいね。私は算数は大嫌いだったよ』

『あと図工も好き。今、毎日学校のサマースクールで製作をやってるんだ。大きな宇宙ロボットをみんなで作ってるの。2メートルもあるやつだよ。秋のコンクールに出すんだよ』

『へえ～。2メートルもある宇宙ロボットなんて凄いね！』

『もうすぐ出来上がるから、出来たらヒカルにも見せてあげる』

『見たいけど...、』

『見せてあげるよ！』

『.....うん。見せてね！』

『アンディーも一緒に作ってたんだけど、7月のはじめに引っ越しちゃった。場所はボストンからちょっと田舎にいったところ。でもそんなに遠くないからいつでも来られるって言ってたんだ。だから...、』

『約束したの？』

『うん。8月6日の午後にここで会おうって。アンディーは絶対に来るって言ってた。だから、僕たちはゲームを取りかえっこして約束の印にしたんだ』

『でも、アンディーは来なかったよね？ジョーイは8月6日から毎日ここに来ているけど、アンディーは来ないね...』

『...うん。アンディーはクラスでも一番のわすれんぼだったから、約束の日にちを間違えてるのかもしれない。もしもアンディーが来た時に僕がいなかったらアンディーは悲しむと思うから毎日来てるんだ。絶対に忘れないために約束の印をとりかえっこしたから、きっとアンディーが僕のゲームを見たら思い出すもん』

『じゃあ、ジョーイはアンディーが来るまでずっと毎日ここに来るの？』

『...うん。だって僕が、ここで会おうってアンディーに言ったから...』

また、風一一。

電子辞書を酷使して、手も足も使って、何度も首をひねってやっと成り立ったジョーイとのさやかな会話が途切れた時、薄ぼんやりとしたオレンジ色がどこまでも続いている空をヒカルは見上げた。

子ども同士の可愛い約束一一。

アンディーだってきっと忘れてなんかいないだろう。

だが、ジョーイやアンディーが考えているほど、`ボストンからちょっと田舎にいった場所、のアンディーの引越し先は遠かったのではないだろうか。アンディーが約束の印を見て思い出しても、来たくてもひとりじゃ来られないぐらいに。

でも、そんなことを相手に伝え合う術を知らない子どもたち一一。

「ジョーイ...」

ヒカルは風に揺れるジョーイの金色の髪を撫でた。

もしも哲平だったとしたら、やっぱりジョーイと同じ行動をしたらろう。子どもの中に社会の都合や仕組みなんて当てはまっていない。ジョーイにとって大切なのは、約束をしたという事実だけ。約束の日にちを間違えてるアンディーが来たときに、自分がないという悲しみを与えたくない、という思いだけ。自分が言い出した約束をどうしていいのかわからないから、アンディーが来るまで信じて待つしかない…。それが、ジョーイの真実なのだ。

でも、きっとジョーイだってわかっている。

アンディーは約束の日にちを間違えてるわけじゃないってこと。毎日約束の印を見ていても来ないということ。

そのせつない思いが昨日の涙になったのだ。

それでもジョーイは、自分が言った約束の言葉に責任を取ろうとしている。もしかしたら今日こそは、という希望にかけて。

子どもの頑固なこだわり。

一途でせつない信念。

真実の裏側の嘘なんて、子どもにはないのだから――。

もしも颯土がここにいたらジョーイに何と言うだろう。幼い頃に亮太と交わした約束によって絶望を知った颯土は…。

――そして、今のヒビクなら何て…。

「ジョーイは偉いね。ジョーイ イズ グレイト」

ヒカルはジョーイの両手を握った。

「約束を守るって決めて、アンディーをずっと待ってるジョーイは本当に偉い。でもね…、」
ヒカルはうつむいて言葉を飲み込んだ。

――全ての約束が守れるかっていったらそうじゃない。

どんなに頑張っても守れない、守られない約束だってあるんだよ…。

そう、言ってあげるのは簡単なこと。

でも――。

「Are you coming back here tomorrow? (明日もヒカルはここに来る?)」

ジョーイは腕の時計を見ながら言った。もう帰る時間がとくに過ぎている。

「I'm sorry…。I don't come here,But it comes here on Monday . (ごめんね。明日は来られないの。)

でも月曜日はまた来るね)」

ジョーイは少しだけ寂しそうにうつむいて、すぐに笑顔になった。

「Good-Bye」

小さな手を上げてジョーイはローラーブレードを蹴った。

ソラトタイヨウ ミアゲレバ ホラ ゲンキィ～

ヒカルが教えた歌を音程を外して歌いながら、遊歩道を帰っていくジョーイ。

「ジョーイ...」

オレンジ色の空気の中にジョーイの背中の赤いリュックがにじんで溶けていく。

守れない、守られない約束。

いつかはその真実を...、見なくちゃいけない。

「このままずっと逃げてていいはずがない、よね...」

一段と冷たくなった風が頬にあたった時、ジョーイのリュックを滲ませたオレンジ色の粒がこぼれ落ちそうになってヒカルはとっさに空と太陽を見上げた。

◇

「俺は、キョウは絶対にここでやるべきだと思う」

昨日から再び話題が報道され始めた響を心配して、サムとニコルがライブハウスの控え室に顔を出した。

ワンステージが終わった休憩時間。今日も外は報道陣でいっぱいだ。

「3年前に初めてキョウのピアノを聴いた時から、キョウはいつかこれで成功していく男だって俺は思ってたよ。あの頃は落第落第で悲惨だったけどな」

というサムの言葉に、響は3年前の自分を振り返って笑った。

「落第...か。マスター時代はそうだったな...」

「でも、あの頃があったから今のお前がいるのは確かだぜ？何のつもりであの苦しい時代を越えて来たんだ？」

響はサムの傍らのニコルに目を向けた。さっきから何かを言いたそうな目をして自分を見ている。

「あの曲はもう弾かないのか？」

「...ああ」

「でも、水曜日のライブでは弾いたんだよね...？」

ずっと黙っていたニコルが呟いた。

「あの子がボストンに来てるって本当なの？だから、弾いたの？」

ニコルはまっすぐに響を見つめて訊いた。

「...ああ」

と、響はニコルから目をそらす。

「とにかく、このままチャンスを棒に振って日本に帰るってことは、ここで音楽の勉強をしてきた意味そのものを捨てるってことだと思うぜ？」

「サム...」

響はうつむく。

自分のピアノがどこに繋がっているのかをここで確かめたいという真実。でも、その裏側にあるものも決して嘘じゃない。

「...俺はあいつと約束した」

3年半もの間待たせて、約束のしなおしまでしておいて、その後に転がってきたチャンスに飛びつく自分でいたくない。一番大事なものは.....

「なら、彼女にこっちに来てもらえ。お前は自分の夢を追ってここで彼女と...、」

「何勝手なこと言ってるのよ...」

サムの言葉を遮るようにしてニコルは言った。

「そんなの都合がよすぎるわよ」

「都合がよすぎる...？」

今、サムが言ったことは昨夜、自分がヒカルに言おうとしていた言葉だ。

——日本に帰るな。

それは自分は日本にはもう帰らない、そしてヒカルに日本での全てを捨てさせると決めた上での言葉だ。タイミングを外して呑み込んだが、もしも言っていたらヒカルは何と答えただろうか——。

「キョウは日本に帰るべきだって私は思う」

「ニコル！何言ってるんだよ！キョウのチャンスなんだぜ？お前だってずっとキョウの苦しい時代を見てきただろ？」

「見てきたから言ってるの！キョウが目指してたピアニストってそういうことだった？キョウがピアノを弾いてたのはずっとあの子のためだったじゃない。私は知ってる。芸術祭で聴いた『Shine』はあの子への愛の言葉だった」

そうだ。

自分がピアニストを目指したのは、音楽を磨いて己を磨くため。

それは、本当の意味でヒカルを抱きしめられる男になるため——。

ニコルの言葉を響は自らの命に浸透させた。

ここで迷ってる自分はやっぱりどうかしている。自分の原点はあの湖――。

『ヒビク先輩の `響、は `ヒビク、ってことだったんですね』

『ピアニストのお父さんは素敵なピアノの音色を響かせていたんだと思います。だから先輩の名前は響なんじゃないですか？』

『先輩はちゃんと先輩らしく響いています』

俺らしく――？

「約束をしたのなら守って欲しい。何も世界を目指すだけがピアニストじゃないと思う。たったひとりの人のためにピアノを弾くピアニストがいたっていいわよ。とっても素敵よ！」

たったひとりのために。

ヒカルのためだけに――。

「...ニコルの言う通りだ、な」

響は呟いた。

「待て待て！ どうして女はそうも守りたがる？ ただ手の中に抱きしめているだけが愛なのか？ 違うね。男には攻めなきゃならない時だってあるだろう？ いかにか攻めて愛も夢も手にするか、それが男にとっての成功だろ」

「信じられない！ 私はそんなの絶対にイヤ！ 大きな成功なんて欲しくない。愛する人と一緒にいられればそれが一番幸せなのよ」

「そりゃわがままってやつだ。愛する男の夢のために、女だって覚悟しなきゃならんこともあるだろ」

「...女がその覚悟を決める時はもう...、」

「おいおい、ここでお前たちが喧嘩することじゃないだろ？ これは俺の問題...、俺が決めることで、そして俺はもう決まってる」

響は言い合いになったサムとニコルの間に割って入った。

「もちろん、ここでやる、だろ？」

「...いや。日本に帰る。これからはあいつのためだけにピアノを弾いてく。俺は最初からそのつもりだったんだ。3年半前、ここに来たのだからそういう自分になる為だった」

「そうよ！ そうすべきなのよ！ 外野がいろいろ言っちゃダメなのよ。キョウとあの子の未来なんだから」

俺とヒカルの未来――。

「3年半前は3年半前、今は今だぜ？ 時間は止まっちゃいないし人間だって変わる。変わらなき

「成長も成功もないだろ？」

「いいかげんにしてよ、サム！変わっちゃいけないものだってあるのよ。キョウが決めたんだからそれでいいの。私は、キョウにあの子と幸せになって欲しいよ」

「サンキュ、ニコル...」

響は笑った。

「まったく...、どーなってるんだか...」

と、サムはため息をついた。

マネージャーが呼びに来てサムとニコルも控え室を後にした。

響は、自分のステージを心待ちにし何日も前からチケットを予約して今日ここに集まった観客たちをステージの上から見つめた。

カザマ・キョウのメロディー――。

響かせるのはヒカルにだけ。

日本に帰ってヒカルと生きることが俺らしく響くこと。

――それが、`俺らしく、`って...こと――。

日曜の朝は晴れやかに澄み渡る青空が広がっていた。日中は汗が出るほどの8月のボストンでも、朝夕はもうすっかり秋の色だ。

ヒカルは窓を全開に放ち、少し冷たい朝の空気を思いきり吸い込んだ。

東京での朝も同じ。目が覚めて一番最初にすることは、窓を開けて新鮮な空気を肺の奥まで浸透させること。朝の空気には、今日1日分の幸せがいっぱい詰まっているから。

外の木立ちでサラサラと動く葉ずれの音に耳を傾けると、それは葉っぱたちのきどった囁きに聞こえる。颯土の家に植えられた梅の葉の囁きがべらんめえの江戸弁なら、ボストンの木の葉たちは流暢なイングリッシュを喋っているようでヒカルはひとりでクスリと笑った。

響はまだベッドの中。

頭まで毛布をかぶっているが、お揃いのパジャマの右足だけが無造作に飛び出ている。こんな風に同じ朝を迎えるのは今日でまだ5日目だが、学校もライブもなく1日中一緒にいられるのは火曜日にボストンに来て以来だ。

今日は午後から二人でコンコードのジャックの自宅に行くことになっている。ジャックは二人が訪れることを心待ちにしてくれているようで、昨夜は何度も電話をよこしたようだ。ヒカルは電話には出ないからそのたびに応答メッセージがジャックに対応していたが、おかげでヒカルは響が帰ってくるまで、その低い声でボソボソと何度も録音される意味不明な英語のメッセージに怯えてなくてはならなかった。

「何時に来るんだ、どうやって来るんだ、食事は何がいいか、迎えの車を出そうか...、だって。これじゃ親父じゃなくまるでおふくろだな」

ライブから戻った響が、一回ずつの一言ずつが繋がって録音されているジャックのメッセージを聞きながら呆れたように笑った。

「私はヒビクと一緒に列車でコンコードまで行きたいな。車窓からの景色を眺めてみたい」

というヒカルの要望で、午後から列車で行くからと返事を返した響だった。

昨夜は土曜日ということもあってか、響の帰りはいつもより少し遅かった。それでなくても毎日の学校とライブで疲れている響だから、窓からそよぐひんやりした風に当たっても目が覚めないのは仕方のないこと。

ただ一緒にいたいから、知らなかった互いの3年半を埋めたかったから、そして、今すぐに自分の全てを差し出して響の全てを受け入れたいと思ったから飛んできたボストン。

5日前、空港に降りた時には響と過ごせる3週間に胸をときめかせていた。真っ黒なピアノだけがその存在感を主張している鋭い空気が漂っていたこの部屋も、5日の間には柔らかで穏やかな空間に変身した。だが、傍にいたことが当たり前だった高校時代に逆戻りしたような空気が流れ、あの頃と同じようにときめいて安心できたのはつかの間だった――。

—You are the worst lover.

知らなかった響の3年半を知った今、繋がっていたはずの未来が遠のいていく。
約束が響を縛っている。

それを知っていながら目をそむけようとしている自分は、`worst lover、——。

「ヒビク」

そっと呼んで、右足をくすぐった。

響は、ん、とひとこと唸ってそのまま目を覚ますかとも思えたが、引っ込んだ右足の代わりに左足が毛布の外に出てきただけだった。

せっかく一緒にいられる日の午前中は、朝食を早く済ませて朝の遊歩道を一緒に散歩したかったけれど、それはため息と共に諦めた。

時計を見るとまだ7時半。

先週まで、響の日曜の朝は目覚めて珈琲を淹れてからの国際電話だった。東京が夜中だったから響の目覚めは昼近かった、ということだ。

「しょうがないね...」

ヒカルはメモをテーブルに残し、一人朝の散歩に出かけた。

◇

朝日を受けてキラキラと光る河面。

ゆらゆらと揺れるヨット。

穏やかに、ゆるやかに流れる運河の水。

ジョギングマンは気軽に声をかけて来るし、サイクリングやウォーキングを楽しむ人々は微笑を投げしてくれる。この街の人々はみな開放的で優しい。

古風な顔と近代的な表情を見せている街。

それはとても素敵だけれど、せつない街——。

初めてここから新古が調和した景色を眺めた時に感じたせつなさは、きっと今の自分と響を示唆していたのかもしれない。

響がこの街にあまりにも馴染んでいて、この街は響にあまりにも似合いすぎていて、自分を取り残されたような気がした。

ライブで響が弾くメロディは、過去と未来を象徴したこの街のような優しくてせつない旋律。

それが聴衆たちの心に染み渡るのは響自身が過去と未来を映し出す街の色と溶け合っているからだと感じた。

あの時に漠然と抱いた不安はみるみるうちに形になり、今、目の前にふたつの分かれ道を作っている。どっちに行けばいいのかわかっていくせにそこに行きたくないから、迷ったふり...道を知らないふりをしている自分は、救いようのないワガママな恋人――。

後輩のままでいたら、そのわがままを通すこともできたかもしれない。

ひとりで遠くに行かないで。

ずっと一緒にいて。

もう、離れ離れは嫌だ。

そう、甘えて泣いて叫んだら、『よしよし』と頭を撫でてくれる響は、ヒビク先輩、の顔だったに違いない。

でも、恋人になることを望んだのは自分。

響の全てを受け入れたいと願ったのも自分。

そのために、母や兄や颯土の母の想いを踏み台にしてまでもここまでやって来たのだから――。

ただただ一緒にいたかった。

そして、迷いたくなかった。

それが、こんな別の迷い道に繋がっていたなんてあの時は思いもしなかった。

河岸に停泊していたヨットが一艘、ゆっくりと帆をなびかせて滑り出した。穏やかな河の流れとひとつになって進むその姿が、何気なく交わした響との会話を蘇えらせた。

――隅田川に浮かんでるのはヨットじゃなくて屋形船。

――それはそれで美しい。

「隅田川か...」

ヒカルは呟いた。

水は濁り、空気もよどんでいる東京の下町を流れる川。決して綺麗じゃないその景色でも、颯土はそこにある一瞬の生命のきらめきを形に現す。そこで空気を吸いながら、涙も笑いも染み込ませてきたあの場所の色を颯土は身で知っているから、写す街や川の表情はありのままの優しさにあふれている。

響も同じ。

ここで生きているからこそ、生まれてくるメロディたち...。

それは、水曜日の雨人の調べになり、ボストンの人々の心を魅了する。

もしも今、颯土がここにいたら、この街、この河の流れをどんな絵に映し出すのだろう…。

――俺？俺はボストンって柄じゃないかもな…。

ぼそぼそと喋る颯土の声が聞こえるような気がして、

「…そうだね。颯土くんには隅田川や墨田公園が似合ってるよね」

と、呟いてからヒカルはふと考えた。

――私は？私の居場所は何処なんだろう――。

響がいる場所が自分の居場所でありたいとずっと思い続けてきた。同じ時間を生きて、同じ空気を吸って、同じ夢を見ながら生きて行きたいと願ってきた。

だから、12月に日本に帰ると約束してくれた時は、やっとその願いが叶うと思った。

でも、その約束が響の未来を縛っているのだとしたら……。

自分が言った約束の言葉を、どうしていいのかわからずにずっとアンディーを待ち続けるジョーイのように、響も自分の約束の言葉に縛られて、望む真実の夢と未来を諦めているのだとしたら――。

――私は、どうすれば……。

「ヒカル！」

通りの向こうから響の呼ぶ声がして、ヒカルは肩をビクッと震わせた。

「ヒビク」

車の往来が途切れるのを待って、響はこちら側に走ってきた。寝起きのままの長髪は、歌舞伎ほどではなくとも結わいているにも関わらずバサバサと飛び跳ねている。

「なんで起こしてくれなかったんだよ」

と、笑った顔には無精髭が散らばっていた。

「だって、昨夜も遅かったから疲れてるかな、と思って」

「そんなこと気にするなって。貴重なヒカルと俺の時間なのに、寝過ごして棒に振るぐらい馬鹿な話はないぜ？」

響は腰をかがめた姿勢でヒカルの目を覗き込む。

「うん…」

見つめられる瞳が悲しくて、ヒカルは響から目をそらした。

「ヒカル...？」

「ねえ、深呼吸しよう？」

ヒカルは姿勢を河に向けた。

「今日1日の幸せをいっぱい吸い込まなくちゃ！」

「バキューム式深呼吸か」

「そ。私はこれで今まで幸せに生きてきた！」

「俺だって、いつかヒカルから教えてもらってからずっとこの方式の深呼吸を続けてるんだぜ？朝からため息は絶対につかないようにしてるし」

「あ、私、さっきついちゃった...」

「あ！ヒカルちゃん、なんてことすんだよ。幸せが逃げてくぜ？もったいないっ！」

「だって...、ヒビクったらグーグーいびきかいてるんだもん...」

「うそ？俺、いびきかいてた？」

「う・そ。いつも意地悪を言うお返しだよ！あはは！ヒビクの焦った顔、可愛い～！」

このっ！と響はヒカルに手を上げる。

ヒビク先輩。

そう、呼んでいた過去の自分の声が聞こえた。

憎まれ口を言う響に手を上げる自分だったり、またその反対だったり、高校時代に毎日のように繰り返していた響とのおちゃらけに胸を締め付けられて、深呼吸をしながら同時にため息が出てしまう。

「なあ、ヒカル」

深呼吸を終えた響は、隣のヒカルに顔を向けた。

「なに...？」

「俺、確かに...、いろいろ言われてる」

唐突に言い出した響の顔を、ヒカルは目を見開いて見つめた。

「ヒカルのところにジェームスが行っただろ？昨夜は俺のところにきて、あいつ、ヒカルに言ったこと全部俺に喋って行った...」

口に手を当てて息を飲み込むヒカルの肩を、響はグッと抱き寄せた。

「悪かったな。嫌な思いさせて」

「ヒビク...」

「いろんなこと言う奴がいるけど、俺は...、」

響はいったん言葉を切って、スーッと息を吸い込んだ。

「.....こうやって、ヒカルと一緒に朝の深呼吸ができる毎日を選びたい。俺は、日本に帰るよ」

「だって...っ！」

響の腕にしがみつき、ヒカルは叫んだ。

「だって、ヒビクの夢は...！」

「俺の夢はヒカルだ」

「ピアノは?! 音楽は?!」

「ピアノも音楽もおまけさ。ヒカル以上のものじゃない」

「嘘っ！」

「嘘じゃないさ」

「絶対に嘘っ！」

「嘘じゃないって！」

響は叫んでヒカルを抱きしめた。

「昨夜、ジェームスや他の記者たちにも言ったさ。日本に帰るってはっきり言った」

「ヒビク...」

「だから...、もうそんな顔をすんなよ。ヒカルが元気ないとつらいぜ...」

——私が...元気...ないと.....ヒビクは...

響の胸の中で、ヒカルは心で呟く。

「さ、帰って朝メシにしよう。そんで、せっかく早起きしたから早めに出よう。昨夜の電話だとジャックもヒカルに会うのを首を長くして待ってるみたいだったしな！」

響はヒカルの背中をポンポンと叩いた。

「うん...」

ヒカルがコックリと頷くと、響はニカッと笑って歩き出した。

両手を頭の後ろに組んで、少し上を向いて。

「...ヒビク」

響の背中に向かってヒカルは声を出した。

「ん？」

「...手、繋いで歩こう」

スッと前に差し出された細い手と、ヒカルの顔を交互に見比べていた響は、

「いいぜ」

と、笑ってその手をとった。

大きくてひんやりとした響の手。

——ヒビク先輩の手、冷たくて気持ちいい。

——ああそうかい！手が冷たい奴は心がう～んとあったかいんだぜ！

幼かった頃の自分たちの声がまた聞こえた。

ヒカルは、繋いだ手から伝わる響の`ひんやりしたそのぬくもり、を、体中に染み込ませるよ

うにかみしめた。

ボストンから列車に揺られて40分。

ヒカルと響がコンコード駅に到着した時、ホームの大時計が丁度午後の時報を鳴らした。

郊外の街には豊かな芝生が育つ瀟洒な住宅が立ち並ぶ、TVドラマでよく目にするアメリカの日常そのものがあった。

静かな街角を抜けると砂利が続く森の道が繋がり、小川にかかる小さな橋の上に立った時遠くの方に白い建物が見えた。

「あれがジャックの家」

「あれが...？」

国際的ピアニスト、ジャック・ベリーの自宅は、よく映画で見るとような芸能人が住む家のように豪華できらびやかなお屋敷なのだろうと想像していたヒカルは、そのこじんまりと質素にまとまった外観に少し驚いた。

だが、家のそばまで来たときにその驚きは別のものになった。

壮大に広がる芝の庭。流れる川。そして森。これら全てが敷地の中にある。さっき立って見た橋からの道がずっと、自然あふれるジャックの自宅だったのだ。観音開きの大きな扉の前に立ったとき、ヒカルの足がすくんでしまったのは仕方のないことだ。

「ああ...、世界のジャックに会うのに私ったらこんな普段着で来ちゃったよ...」

いつものTシャツとジーンズ姿の自分を見下ろしてヒカルは呟いた。

「全然大丈夫！」

プツと噴出して響は言った。

「だってえ」

「ジャックはこっちだ」

響はヒカルの手を引いて家の裏庭に向かって歩き出した。

家の裏側は手入れの行き届いたハーブ畑が広がり、優しい香りが風に運ばれてくる。

鮮やかなひまわり、可憐なセイジやカモミールたち、そして癒しのラベンダーがそれぞれ群を作って咲いていた。自然な森の中で育っているハーブたちはハーブ園で見るとは違った力強さと美しさを誇っているように見える。

「ジャック！」

三角の麦藁帽子を被りオーバーオールを着た壮年が、風にそよぐラベンダーの間をゆっくりと行ったり来たりしていた。

「え...？」

ヒカルは響と麦藁帽子の壮年を見比べた。

「キョウ！」

ジャックは顔を二人に向けて手を上げた。

「な？普段着で平気だろ？」

ラベンダーに埋もれた麦藁帽子の父を見つめながら響は笑う。

「うん...」

『やあ、ヒカル。よく来たね』

ラベンダーを掻き分けながらこちらに歩いて来たジャックが、麦藁帽子を外しながらヒカルに右手を差し出した。

『ずいぶん見ないうちにすっかり綺麗になって、驚いたよ』

響が通訳してくれるジャックの言葉に、ヒカルは顔を紅くして、「そんな...。私のことを覚えてくださっていただなんて感激です」と、ジャックの手を握り返した。

『忘れるはずはないよ。君は...、』

ジャックは言葉を切って首を少し傾け、『とってもチャーミングだったからね!』

と、ウィンクを投げた。その仕草は響がいつもするそれとまったく同じと言ってもいいくらいだ。

ヒカルはますます紅くなって、「ありがとうございます」

と、お辞儀を返した時、ワンワン、とほえながら庭の先からゴールデン・レトリバーが駆けてきて響に飛びついた。大きな体に思いきりのしかかられた響はそのまま芝の上に倒れ、顔中を舐められながら、

「や、やあ、リリイ...」

と、苦笑いを浮かべた。

ジャックはガーデンテラスに昼食を用意し、ヒカルたちはハーブ畑を眺めながらの食事を摂った。リリイはずっと響の傍らに座り、時々 くうん と甘えた声を出して撫でてくれと催促をする。ヒカルが響に触れると ワン と吼え、響がヒカルに言葉をかけると きゅん と鳴く。

「ここでは、リリイがヒビクの恋人だね」

完全に響の隣をリリイに奪われてるヒカルが少しムツとしながら言うと、リリイは誇らしげな顔をヒカルに向けてからまた響に甘える。

「犬にやきもちを妬くヒカルも可愛いぜ」

「ヒカルも、って、なによそれ...」

と、ヒカルはプイッと横を向いた。

だが、以前会った時と変わらないジャックの優しいまなざしと微笑み、そして明るい陽射しとハーブの香りに包まれた緑のガーデンテラスの昼下がりは、今朝までのせつない想いをどこか遠くへ飛ばしてくれた。

リリイとじゃれあいながら笑う響は、先輩でも恋人でもない、ヒカルが知らない子どものような顔。

思わずじっと見つめてしまう。

そんなヒカルをジャックは見つめている。

「ヒカル、コウチャを もう いっぱい どうかな？」

なまった日本語で言いながら、ジャックはポットをヒカルのカップに差し出した。

「ジャックさん、日本語ができるんですね？」

「これでも しばらく ニホンで暮らしてたことが あるからね」

金色の口髭をたくわえた口元が少し恥ずかしそうに笑いながらジャックは言った。

「よかった。一応これ持ってきたんですけど、使わなくてもすみそう」

ヒカルがバックに入ったままの電子辞書を見せると、

「それは しまっておいて ダイジョウブ」

と、ジャックは笑った。

さらっと風が吹いてジャックの髪を揺らした。前髪が上がったジャックの顔は響にそっくりだ。ハーブ畑の方ではラベンダーやひまわりがサラサラと音を立ててそよいでいる。

「ボストンも素敵な街だけど、ここもとっても素敵ですね」

「うん。ここは静かで私も気に入ってる」

「ジャックさんの家だからピアノの音が聴こえてくるのかな、とっていたけれど...」

まさか麦藁帽子と長靴のジャックが見られるとは、と、ヒカルはラベンダー畑の方を見て笑った。

「あのハーブたちはジャックさんが育てているんですか？」

「今はね。少し前までは私も忙しくてここへはあまり帰ってこられなかったから庭師に頼んでいたけれどね」

事故のあとのジャックは第一線から退いて、芸術交流や若手の育成に力を注いでいると、響から聞いたことをヒカルは思い出した。

「でも、ジャックさんが快くなって本当によかった...」

今、元気なジャックに再び会えた喜びをヒカルはかみしめた。目の前のジャックがあまりにも響に似すぎているから余計にそう思う。事故の当時は響の母もきっと、辛い思いをしていたに違いない。

「心配をかけて悪かったね」

ジャックはにっこりと微笑み、注いだティーカップの中の紅茶をゆらゆらとゆらした。

「でも、あの事故がきっかけで、私はキョウとやっと本当の親子になれたような気がするんだ」

リリイに引っ張られて遠くの芝の上で遊ぶ響を見つめながらジャックは言った。

「5年前、キョウが君を連れて私の楽屋を訪ねてくれてからずっと、私は彼とこんな日常を送れることを望んでいたから」

「ジャックさん...」

きゅん と、ヒカルの胸が痛んだ。

「おかしなものだけどね。それまでは、まさか自分が父親になっていたなんて考えもしなかったのに。嬉しかったよ。自分に息子がいるということが。リリイ...、いや、ユリが私の子を産んでくれていたことがね」

あの日のジャックのまなざしが蘇る。

楽屋の敷居を挟んで向かい合った響とジャックが無言で見つめあった一瞬。そのあと、響をしつかりと抱きしめたジャック。

涙があふれてとまらなかった光景――。

でも....、

――ジャックとおふくろの間は19年前に終わったことなんだ。おふくろは19年の間、ジャックを待っていたわけじゃない。

いつかバイクで行った湖で響が語った時、一度は愛し合った二人が時の流れの溝に埋もれ、それを忘れ去ってしまうことにとてつもないせつなさを感じた。

あの時、再会できたはずのジャックと響の母なのに.....。

「ジャックさん....、」

「ん？」

何故、ユリさんを日本に残してひとりアメリカに帰ってしまったの？

何故、離れ離れになる道を選んだの？

何故.....。

ヒカルはうつむいた。

「ヒカル...」

ジャックはヒカルの肩に手を乗せて立ち上がり、ラベンダー畑に向かって歩き出した。ヒカルもその後について歩く。

「このラベンダーたちはどうだい？素敵だろ？」

「はい。とっても...」

「ユリは、一緒にいるだけでほっとリラックスできる、ラベンダーのような女性だった。私は彼女を愛していたし彼女と共に生きていきたいと願っていた」

薄紫の花が揺れて癒しの香りが漂う。

美しく優しくて、少女のような響の母の面影がその花の中に見えたような気がした。

「しかし、同時に自分をもっと拓いてみたいという欲望もあった。ピアニストとしてどれだけの力が出せるのか確かめたかったんだ。ピアノを磨くことが自分を磨くことになる」と堅く信じていたから、若かったそのエネルギーは止まらなかった」

ピアノを磨くことが自分を磨くこと――。

ヒカルはリリイに舐めまわされ、あきらめて芝の上に転がりされるがままになっている響を見つめた。

「しかし、目指した夢は遠くてね…。約束を叶えられないまま長い時間が経ってしまったよ」と、ジャックも響を見つめる。

「約束...？」

「日本を発つ時にね。いつか迎えにくるからと、それだけ...」

だが、響の母はジャックを待たなかった。

ジャックが日本を発つ時はもう、覚悟を決めていた。

響を身ごもっていながら、それをジャックには伝えないまま……。

「私は、ずるくて甘い男だったよ」

さらさらと泳ぐラベンダーの香りに乗って、ジャックのメロディーが聴こえてくるような気がした。

――『スイートラブ』ってタイトルがついた優しい曲さ。これは二人にしかわからない旋律だったんだ。ジャックは遙か彼方の日本にいるおふくろにこの曲でメッセージを送った。

ふたりにしかわからない旋律――。

メロディーに込めた想いがアメリカから発信されたとき、響の母はどんな想いでそれを受け止めたのだろう。

「ジャックさんは、もしかしてずっとユリさんを...」

ジャックはヒカルを見つめ、

「今となっては、こうしてラベンダーに彼女を重ねて癒されるしかないのだけどね」

と、微笑んだ。

「そんな...っ、そんなのって...！」

リリイと戯れる響。

響とのそんな日常をずっと望んでいたというジャック。

けれど、もうひとり、ここにいて欲しい人は――。

「5年前の再会の時、私はユリに19年越しのプロポーズをしたんだ」

そう言ってジャックは笑った。

ヒカルは目を見開いてジャックを見つめた。

「...でも、ユリは首を横に振った。キョウを産んで育てた日本が自分のいるべき場所だ、ってね。`今更、って言葉を言わなかった彼女は本当に優しい女性だ。ずっと少女のようにころころと笑ってたよ」

――ヒビクのお母さん...！

愛する人を待たず、愛する息子も待たず、愛する人たちの夢を見つめて生きる覚悟の人――。

――どうしてそんなに強いのか？ どうして――。

「...、ヒビクは日本に帰ってくるって言ってます...。私は彼に帰ってきて欲しいって願ってる。でも...」

本当はわかっている。

響が昔のジャックのように、自分のピアノを確かめたいと思っている真実。

ここで3年半、ピアノだけを見つめて生きてきた覚悟。

それはまだ、夢の途中――。

「ヒカル」

ジャックはヒカルの両肩に優しく手を置いた。

「キョウが自分で決めたのならそれでいいんだよ。私は自分の野心のためにユリを残した。そして今、世界のジャックと呼ばれるところまで来た。けれど、本当にメロディを届けたい人には届かなかった」

「『スイート・ラブ』も...？」

ジャックは頷いた。

「ユリを残して日本を発った瞬間から、もう私たちの間には大きな想いのズレがあったんだね。彼女はピリオドを打ち、私はコンティニューをつけていた」

ジャックが発信したふたりにしかわからない旋律も、響の母はすでに終止符を打った過去のメロディとして受け止めたということなのか...

だが、もしもそういうユリじゃなかったら、ジャックの現在は世界中の人たちに悦びと感動を与えるメロディを響かせていたのだろうか.....。

ヒカルはまた、遠くの響を見つめた。

まだまだ響いていける未来がある響のメロディ。

「...キョウには確かにピアニストとして拓ける可能性がある。けれど、それよりもなによりもヒカルが大事だと想う心が私はすばらしいと思うんだ」

「ジャックさん.....」

「だから、日本に帰ると決めたキョウを私は応援したいと思っているよ」

――本当に、いいの？ このまま、ヒビクが帰ってくることを望んでいいの？

「ジャックさんは、これからもずっとここでひとりで...？」

ジャックは頷いた。

「それでいいんですか？」

「彼女の面影を抱きながら、`世界のジャック、のピアノを弾いていくつもりだよ」

「さみしくないんですか？」

「彼女は同じ世界に生きているからね。ユリと出逢えたことを大切に想っている」

同じ世界に生きているから――。

ジャックを見上げたヒカルの顔は、見事に鼻が膨らんでいた。

「ヒカル、君には感謝している」

ジャックはヒカルの鼻の頭をちよんとつついて笑った。

「.....え？」

「今、私がこうしてキョウと親子として生きていけるのは君のおかげだ。そして、5年前のあの日に、リリィに再会できたのも、ね」

「そんな...」

「あの時、私はやっと彼女に言葉で想いを伝えることができた。結果は寂しいものだったけれど、ね」

と、ジャックは笑う。

「ずっとこれを君に言いたかったよ。君には幸せになってもらいたい」

「ジャックさん...」

ヒカルはジャックに抱きついた。ジャックは優しいラベンダーの香りがした。

――ここがジャックさんの居場所。そして、ユリさんの居場所は海を越えた向こうの`同じ世界、...。

互いの現実を受け入れ合い、これからもゆるやかな時を重ねるかつての恋人同士。

胸が締め付けられるほどにせつないけれど、涙が出るくらいに素敵なふたり。

ジャックに抱かれるヒカルを見た響が、

「あっ！親父っ、俺のヒカルに...っ！」

と、大声を上げた。

だが、すぐにまたリリィに抱きつかれ、響は芝の上に転がされた。

「ヒカル〜！」

情けない声を上げて叫ぶ響に、

「だって、ヒビクだってさっきからずーっとリリィと抱き合ってるし...」

と、口を尖らせた。

「こ、これはリリイが...！リリイ、いかげんにしてくれないと、俺、ヒカルにふられちまうっ！」

が、リリイは困り果てている響の顔をおかまいなしに舐めまわす。

そんな息子と愛犬にサラッと視線を向けて、

「ヒカル、私たちは部屋に入ろう。風も強くなってきたしね。せっかくの再会だから君にピアノを聴かせよう」

と、ジャックがヒカルの腰に手を回すと、

「ジャックッ！息子の恋人に手を出すなよっ！」

響は苦情を言った。

「どうするヒカル？キョウはあんなことを言っているが...」

ジャックはいたずらな笑みを浮かべて言う。

ヒカルは、ラベンダーの間から響とリリイが戯れる芝まで歩き、響に負いかぶさっているリリイの目線までしゃがみこんで言った。

「リリイ、お願い。ヒビクを私に返して？」

リリイはクン、と鼻を鳴らしてヒカルから顔を背けた。

ヒカルはあっちに向いたリリイの顔を追い、その場に移動してもう一度話しかけた。

「私とヒビクはね、もうあんまり時間がないんだ...。リリイはいつだってまた会えるでしょ？」

リリイの背中を優しく撫でながら、ヒカルの目は真剣にリリイの丸く愛らしい瞳を捕らえる。

「ヒカル...？」

転がったままの響が半ば呆然としたように呟いた。

「ね？リリイ、お願いよ」

くうん....

と、鼻を鳴らしてヒカルをじっと見つめるリリイ。

「そうだぜ、リリイ。貴重な時間なんだぜ、まったく...」

くうん....

と、また鳴いて、リリイはハーブ畑の奥に走って行った。

「アメリカ人の犬にもちゃんと話せばわかってもらえるんだね...。やっぱりハートだわ」

尻尾を振りながら駆け回るリリイを見つめながらヒカルは笑った。

「さ、ヒビク、行こう。ジャックさんがピアノを弾いてくれるって」

寝転がったままの響にヒカルは両手を差し出す。

「ああ」

響はゆっくりと起き上がり、ヒカルの手を取った。

「せっかくだからふたりでセッションして欲しいな。世界のジャック・ベリーと『水曜日の雨人』の共演をこんな間近で見られるのは、きっと世界中で私だけよね？」

「...そうかもな！」

にっこりと微笑んで、ヒカルは響の手を引いて緑の芝の上を歩き出した。

その時、一瞬の強い風がハーブ畑を通り過ぎた。

さわさわと音を鳴らして背の高いひまわりが大きく揺れる姿を、響は何気なく振り返って見つめた。

鳴り止まないメロディをどこまでも奏で続ける。
触れ合うほどに呑み込まれ息ができなくなり溺れてゆく。
それは、深くせつない海の中――。

「...ヒカル？」

回した腕に横たわるヒカルの髪を、そっと撫でていた響は、微かに光ったように見えたヒカルの瞳を覗き込んだ。

ヒカルは無言で首を横に振ってから響にしがみついた。

「どうかしたか？」

ヒカルはもう一度首を振る。

ふたりで奏でる音楽が鳴り止んだ部屋は、ぼんやりとした月明かりが射すだけの静寂に包まれている。

それはいつもと何も変わらないはずなのに、その閑かさに追い立てられているような気がして怖い。

朝も昼も、そしてこんなに近くで触れ合っている夜でさえも、ヒカルの心臓は常に何かから逃れて走っている時のように速い鼓動を刻み続けている。

ジャックの家にふたりで行ってから10日が過ぎた。

響はいつも通りアカデミーとライブをこなし、ヒカルは`主婦の仕事、とピアノの練習の後に淳子やジョーイに会いに行く毎日を過ごし、ふたりの間に何があったわけではないのに、1日の終わりに奏でるメロディは日に日にせつない音色に変わっていく。

何もないから。

こんなに触れ合っているのに、触れなくてはならない真実には互いに触れようとしないから――。

「ヒビク...先輩」

ふいにヒカルは声に出した。

その小さな呟きは、素肌で触れ合う響の胸に微かな振動をもたらした。

「なんだよ、またそんな呼び方...」

「なんだか急に懐かしくなっちゃって。ちょっと呼んでみたくなったの」

闇と静寂の中に、ふたりの囁くような声が響く。

「...『Shine』のメロディを思い出すと、`ヒビク先輩、が浮かんでくるの」

「じゃあ、ヒカルは今、『Shine』を思い出していたの？」

うん、とヒカルは頷いた。

「さっきからずっと？」

「...うん」

そうか、と響はやや不満そうな声音で呟いた。

「ヒビクは違うの？」

響はヒカルに貸していた腕を戻し、体勢を変えてヒカルの上を覆う。そして大きな両手でヒカルの顔を包んだ。

「『Shine』は片想いの曲なんだぜ？」

「.....え？」

響の唇がヒカルに落ちる。

「今は、俺とヒカルのふたりのメロディが流れてる」

「...ふたりの...メロディ？」

「そう。ふたりの」

初めてヒカルと触れ合った時から流れ続けている同じメロディがある。それは一定のリズムを保ち、クレシェンドとデクレシェンドを幾度となく繰り返しながら紡がれる満たされた旋律だ。

「まだ完全に繋がってないけど、確かな俺とヒカルの旋律があるんだ」

「...ヒビクの頭の中に？」

そう、と呟いて響はまたヒカルに口付ける。

「.....私も聴きたいな。私とヒビクのふたりの旋律.....」

ヒカルはポツリとつぶやくように言った。

「少し待ってて。必ず音にするから」

「.....うん」

そして、音になる前のふたりの音楽がまたはじまる。

――ヒビク...せんぱい。

満たされたふたりの旋律を奏でているはずなのに、ヒカルが心の中で呼ぶのは『Shine』の中に見える響の名だった。

◇

「今日は、遊歩道でヒビクの帰りを待ってるね」

翌朝、家を出る響にヒカルは言った。今日は木曜で夜のライブはないから夕方からの時間をゆっくりと使える。

「彼にまた会うの？ジョーイくん」

「うん」

晴れやかな笑顔が輝くヒカルの顔を見た時、響はジャックの庭で見た風に揺れる背の高いひま

わりの姿がイメージになって浮かんだ。

ふと、頭の中でメロディが流れ響はとっさに口ずさんだ。

「どうしたの？いきなり」

「天啓。メロディの神様が降りてきた」

「こんなに突然？」

「昨夜言ったろ？俺とヒカルのメロディがあるって。なかなかひとつ繋がらなかったんだけど、今、なんとなく輪郭ができた感じ」

ピアノを弾くように指を空で動かし、嬉しそうに笑う響の顔を見てヒカルは微笑んだ。

「その曲、絶対に完成させてね。早く聴きたい」

「ああ。今夜、帰ったら弾いてみるよ」

じゃ、と、ヒカルの額にキスをして響はアパートを出た。

響が歩いていく後姿を扉の前ですっと見送りながら、ヒカルはまだ響の唇の感触が残っている額に手を当てた。

木立の木々がざわざわと騒いでいる。

木漏れ陽がまぶしくキラキラと光る。

その間を軽やかな足取りで歩く響の姿はだんだんと小さくなっていった。

「メロディーの神様、か...」

ひとりきりの部屋でピアノを開け、ヒカルはポロンと鍵盤を撫でた。窓の外から柔らかな光が射し込む穏やかな午後。

「そらとたいよう みあげれば ほら げんき～」

来月から園児たちと一緒に歌う歌『げんき』は、童謡にしては難しいその伴奏。ここに来てから何度も練習をしているがまだ弾けない。こんな調子では新学期に間に合わないかもしれないなど、ヒカルは頭を抱えた。

「ピアノの伴奏さえなければ、もっともっと仕事も楽しいんだけどね...」

まるでダメな自分のピアノに少々うんざりしてヒカルはため息をついた。

ずっと、苦労してきたピアノだ。

幼稚園の先生になりたいと進路を決めた高校3年の時から、卓上キーボードに向かいながらその時々の課題曲に挑んできた。短大では何度も追試を経験し、人の何倍もの時間をピアノに費やし、採用試験の前日はほとんど寝ずの練習をしなくてはならなくても決めた進路を諦めようとは思わなかった。

晴れて先生になってからの毎日もピアノにだけは泣かされ、自分には音楽の感覚が生まれつき欠落しているということを心底思い知らされた時もある。

それでも、1年半かけて弾けるようになったのは『Shine』。
この曲だけは、『園歌』よりもなによりも上手に弾くことができる。

甘くてせつなくて優しい旋律。

高校生だった響が、あの頃の想いを音符に繋いで贈ってくれた曲。

『げんき』はとりあえず諦め、『Shine』を弾こうとしてヒカルはふと指を止めた。

「Shineって……」

思いついたように立ち上がりバックの中から電子辞書を取り出し、「Shine」と入力した。表示画面に出てきた言葉は、

「光る。輝く。ぴかぴかする…」

ひとつひとつを声に出して読み上げてヒカルは電子辞書を閉じた。

光る。輝く。ぴかぴかする。

「光輝く…だよな。Shineはそういう曲なんだよね」

『Shine』は響が自分に贈ってくれた曲だが、響が作った曲。

まだ響の前では弾いていないが、今この曲を響に聴かせたい。

響の前で弾いて、そして――。

チクッと胃に差し込みを感じてヒカルは顔を歪めた。

2、3日前から時々胃がきしむ気がする。

ふう…、と息を吐くと痛みもすぐに治まり、電子辞書をしまおうとバックを開けた時、中のポケットにある紙の袋に目が留まり取り出してみた。

「あ、これ…」

いつか淳子と行ったショッピングモールで買ったポストカードだった。あかねや麻耶たちに暑中見舞いを書くつもりで買ってそのまま忘れていたのだ。

「もう暑中お見舞いって時期じゃないよね…」

有名な観光地や街角、そしていつも行くチャイルズ運河など、ボストンの風景写真の綺麗なポストカードたちだ。まだ午後の時間はあるからヒカルはそのままアドレス帳も引っ張り出して近況報告を兼ねた残暑見舞いを書くことにした。

あかねに選んだのはボストンコモンで戯れるリスのカード。

――お腹の赤ちゃんは順調に育ってる？無理をしないでね。田村先輩、あかねちゃんをよろしくお願いします。

麻耶にはトリニティー教会のカード。

――夏の合宿は終わったの？この間は残念だったけど、またみんなで集まってワイワイやろうね。

海や亮太、懐かしい友人たちひとりひとりにそれぞれ雰囲気合ったカードを選びながら、次に手にしたのは流れるチャイルズ運河のポストカードだった。

――このカードを送る相手はやっぱり…。

群竹颯土様――。

宛名を書いてからヒカルはふと、ピアノの上にある写真に視線を向けた。

春の墨田公園。

満開の桜の下で初出勤の記念に颯土が撮ってくれた写真。それを手にとってヒカルはじっと見つめた。

春の優しい光を受けて、はちきれそうな笑顔の自分がそこにいる。

――ほらほら、ヒカル、そこに立って！

――颯土くん、早くして～！遅刻しちゃうよ！

――オッケー！撮るぞ～！

そう、毎日が優しく平凡に過ぎていた春の日の頃。

ボストンに発つ直前からは颯土との日常も変わってしまい、変わらないままの颯土と自分でいたいと願いながらも、響に会いたくて、響と一緒にいたくて…、迷いたくなかったから、あの時はそんな自分と颯土のことを考えないようにしていたけれど――。

――颯土くんと、またたくさん話がしたいよ。秋になったら――。

それだけをしたためて、ヒカルは運河のポストカードを裏返した。

そして最後に残った一枚を手にしようとした時、ふと思い出して時計を見た。

そろそろジョーイとの約束の時間だ。書き終わったポストカードをバックに仕舞いながら、そう言えば昼食を摂っていなかったことに気がついた。胃がきしむのはきっとそのせいかな、と、立ち上がった時だ。

「！？」

突然の、腹部の激痛に襲われてヒカルは丸くなった。

さっきまでの差し込むような痛みとは違う。締め付けられるような、握りつぶされるような激しい痛みだ。一気に脂汗が吹き出て立ってられなくなりそのまま床に倒れた。テーブルの上にあった一枚のポストカードがひらりと床に落ちた。しばらくじっとしていればいずれ痛みも和らいでくだろうと思っていたが、和らぐどころかどンドン激しくなり吐き気もする。

――どうしよう…。

響が帰るまでにはまだ2時間以上ある。

あまりもの激痛に気が遠くなっていく。

――誰か、たすけて…。

体勢を横向きに変えたところに落ちていたのは運河の上から街の全景を見渡したポストカードだ。

「ジョーイ……」

こんなところで倒れてる場合じゃない。

ジョーイと約束をしているのだから。

そう、自分に気合を入れてもどうにもならない。

サラサラの前髪の間隙から覗く寂しげな瞳が瞼に浮かぶ。

その姿は幼い哲平に重なり、やがて颯土と重なる――。

――小さい頃の颯土ね、哲平ちゃんみたいだったのよ。

……この言葉がずっと心のどこかにあった。だから、哲平と重なるジョーイに颯土の影を見ていた。

颯土の、前髪の間隙から覗く優しい瞳が浮かぶ。

夏の日差しを受けてキラキラと輝いて、でも、それはみるみるうちにせつなさを帯びた輝きに変わり、やがて青色のジョーイに戻り、その金色の髪が響に重なっていく。

月明かりの中で初めて抱き合った夜――。

自分の全てを与え、響の全てを受け入れたあの夜も、長い金色の髪が輝いていた。心の中で流れていた『Shine』のメロディに合わせて、その髪は揺れて、揺れて――。

揺れていたのは優しい風と癒しの香りに包まれたジャックのラベンダー。
キョウが自分で決めたのならそれでいい、と言ったジャック。
本当にメロディを届けたかった人には届かなかったと、寂しそうに微笑んで……。

でも、届いてないはずはない。
ユリは受け止めたに決まっている。その想いはジャックの想いと違う形をしていただけのこと――。

「ユリさん……」

朦朧とした意識の中でヒカルは響の母の名を呟いた。

――ユリさんは、本当にジャックさんを愛していたんですね。
だから、ピリオドを打ったんですね。
それが愛する人の未来を想い同じ夢を見つめる恋人としての自分の振る舞いだと、自分で決めて――。

ヒカル、ヒカル、ヒカル――。

遠くで響が呼ぶ声が聴こえるような気がする。

ヒカルのところに帰るから――。

――そう約束のしなおしをした3年半振りのあの日の電話があるから、そして、ずっと3年半待っていた私がいるから、だからヒビクは私のために手が届く夢を――。

本当に決めたんじゃないよね。

決めてくれたんだよね。

私が鼻を膨らませて、迷子の仔犬のような目をしてヒビクを見てたから。

でも、今のヒビクの居場所はここだよ……。

ここがあなたの――。

そして私の居場所は――。

「淳子さん…」

ヒカルは、治まらない激痛に耐えながらソファーまで這い、上にあるバックを引きずり下ろした。

そして、震える手で取り出したのは一枚の名刺だ。

名刺にある番号をダイヤルして、ヒカルは受話器を耳に当てたまま床に転がった。

『ボストン案内所です』

日本語で電話に出た声を聞いて、ヒカルは声を絞り出すように淳子の名を呼んだ。

『ヒカルさん...？どうしたの？』

もう、苦痛に耐えるうめき声しか出せない。

『今、どこ?! カザマ・キョウのアパートにいるの?!』

ヒカルは電話口で頷いた。

体が冷たくて、汗は吹き出て、今にも意識が飛んでしまいそうだった。

『しっかりして! 今から行くからっ!』

ブチッと電話が切れた。

ヒカルはそのまま暗い闇の中に落ちていった。

◇

頭に浮かんでいるメロディーを口ずさみ、いつものようにゆるやかに流れる運河の遊歩道を歩きながら響はヒカルの姿を探した。だが、どこにも見当たらない。

「あいつ、どこで待ってるんだ？」

遊歩道で待っている、と聞いただけだったが、横に長いこの河沿いの公園の何処で、ヒカルはいつもジョーイと会っているのかを聞いていなかった。だがアパートからさほど遠くない場所であることは確かだ。

もう秋の風が吹く遊歩道を行き交うジョギングマンたちを見送り、響は立ち止まってヒカルを待つことにした。

夏を三度見送り、もうそろそろ四度目の秋がやってくる。そして秋が過ぎれば運河が凍る冬。

だが、今年はその姿を見ることはない。12月になればアカデミーのカリキュラムも終了しライブハウスとの契約も終わり、アパートを引き払って日本に帰ればそれで長かったボストンでの音楽生活が終わる。これからはヒカルのためだけにピアノを奏で、ふたりで同じ夢を見ながら生きていければそれでいい……。

――俺はここで一旦あいつへの想いに決着をつける。自分で認める俺になれば、その時にかっ攫いに行くからさ!

日本を発つ前に、自分が田村に言った言葉をふと思い出した。

時の流れるままに3年半が経って、あの太陽の笑顔を中心に抱きながら、自分で認める己になる

ことを目標にしてここで音楽をやってきて、ヒカルはそんな自分をずっと待ち続けてくれていた。

——もう、離さない。
誰にも触れさせない。
宝箱に入れて鍵をかけて——。

「悪いな、群竹……」

ふと、言葉に出してから響は我が耳を疑った。

——悪いな、群竹…？
俺は、何故そんなことを——。

自分の中の隠れていた闇が今、一瞬現れたような気がして響は軽い衝撃を受けた。

——俺はまだ、あいつに妬いていたのか？
いや、ずっとあいつと張り合っていたというのか——？

つかの間の帰国で知った颯土の穏やかでありながらも強烈な想い。
己の想いは結実しないと知っていながら、その苦しみさえも抱きしめヒカルを想う颯土の魂にとてつもないジェラシーを感じた、あの水月の珈琲ショップ。
純粋にヒカルだけを想う颯土と、そんな颯土に深い信頼を寄せてナチュラルに微笑むヒカルの、満たされた日常と絆が悔しくて…。
ヒカルが颯土の想いに気がつく前に自分の宝の箱に閉じ込めてしまいたかった。
だから、あの時、

——ボストンに來いよ。

最初から帰すつもりなんてなかった。ここで抱きしめたら、もう二度と離すつもりはなかった。

自分で認める俺になれば、その時は——。

——これが、自分で認めた俺なのか——？

自分に問いかけて響は呆然とした。心の奥に追いやっていた見えなかった真実を垣間見てしま

った衝撃から、しばらく立ち直ることが出来なかった。

「俺は……、3年前から何も変わっちゃいない…」

愕然と呟いた声は、うめきに近かった。

変わったように見せかけていただけの自分を、たった今知った。ありのままを出さず、表面だけを格好よく繕おうとする自分――。

自分の真実をヒカルに語ることが出来なかったのも、あの約束のしなおしをしたことさえも、見えるところで格好よくいたかったから、か――？

脳裏に鮮やかなひまわりがちらつく。

振り向いた時にそこにある、凜と背筋を伸ばし、まっすぐに上を見上げて立つひまわり。

さっきまでイメージできていたメロディが、全て泡になって消えていった。

「ヒカル……」

空を見上げ、薄い雲が流れていく様子を見つめ、響は瞳を堅く閉じた。

その時、自分の横をスッと風が通り過ぎた。

「…ヒカル！」

響は弾かれたように、その風を見た。

赤いリュックを背負った少年がローラーブレードで走り去る後姿があった。

「ハイ！」

響はとっさに声をかけその少年を追いかけると、少年はくるっとターンをして立ち止まった。

「君はもしかしてジョーイ？」

ジョーイはしばらく不審な目を響に向けていたが、やがて思い出したように、

「お兄ちゃんはいつもヒカルと一緒にいた人だね？」

と、言った。

「ヒカルに会わなかった？」

響の言葉に、ジョーイはうつむいて、

「ヒカル、今日は来なかった。約束してたのに……」

と、呟いた。

「何だって？だって今朝、ジョーイに会うって言ってたぜ…」

「本当？じゃあ…、」

ジョーイの言葉を最後まで聞かないうちに嫌な予感が走り、響はアパートに駆け帰った。

ヒカルがジョーイとの約束を破るなんて考えられない。

またジェームスか。

それとも……。

「ヒカルッ！」

アパートのドアを乱暴に開け叫んだ。

だが、部屋の中は静まり返りヒカルの姿はどこにもなく、その代わりに床の上に一枚落ちていたポストカードが目についた。不自然に、無造作に在るその姿に、言い知れぬ不安が押し寄せる。

再び部屋から飛び出そうと身を翻した一瞬、テーブルの上にあるメモ書きが視界に飛び込んできた。

『急病のヒカルさんを、メディカルセンターに連れて行きます。お帰りになったら来てください。』
ボストン案内所 三神淳子』

「ヒカルが、急病...?!」

響は再びアパートを飛び出した。

◇

ヒカルが目覚めた場所は見知らぬ白い部屋の中だった。

消毒液とクリーニングをしたばかりの毛布カバーの匂いが鼻について一瞬軽い吐き気をもよおしたが、大きく息を吐いたら治まった。さっきまであんなにひどかった胃痛も今は大分和らいだ鈍痛になり、それが腹部を重たい感じにしている。

起き上がろうとした時、

「まだ起きちゃダメ！」

と、頭の上から声がして、横になったまま見上げたところに淳子の顔があった。

「淳子さん」

「びっくりしたわよ...。蒼白になって倒れてるんですもの。急性胃腸炎と食あたりだって。何か悪いものでも食べた？」

淳子は笑った。

「食べたかなあ...」

と、まじめに考えるヒカルに、

「冗談よ。慣れない土地の水や食物で胃腸を悪くする観光客って結構いるから。でも、ヒカルさん...」

「...はい？」

「大丈夫なの...？」

淳子はいつかのゲームスとのことを心配してくれている、ということヒカルは察して、

「大丈夫です」

と、答えた。

「そう。よかったわ。とにかく電話してくれて本当によかった。じゃないと今頃どーなっていたか。帰ったカザマ・キョウが、倒れているヒカルさんを見つけたら、彼、卒倒しちゃったかもね」

「そうですね...」

と、ヒカルは苦笑した。

「一晩泊まれば明日は帰ってもいいってお医者様がおっしゃっていた。アパートにメモを置いてきたから彼が来るまでゆっくり寝てなさい」

「はい...。ありがとうございました」

呟いてから、ヒカルは思い出したように、

「今、何時ですか?!」

と、体を起こした。

「6時」

ヒカルは大きくため息をついた。

ジョーイとの約束を破ってしまった。

きっと心配していただろう。

でも、もうジョーイにも言わなくてはいけない。

「大丈夫?やっぱり起きてちゃダメよ」

淳子に支えられ、再び横になりながらヒカルは呟いた。

「淳子さん、お願いがあるんです...」

「なに?私に出来ることなら何でもするわよ」

優しく微笑む淳子の顔が、少しのためらいを消し去ってくれた。

ヒカルからの頼みを聞いた淳子は、

「...いいの?」

と、ひとこと言った。

「はい。お願いします」

「わかったわ。明日用意しておく」

「ありがとうございます...」

ヒカルがやや寂しそうに微笑んだ時、血相を変えた響が飛び込んで来た。

「ヒカル?!急病だって...!だ、大丈夫か?!」

自分に駆け寄り慌てる響に、

「.....食あたりだって」

と、ヒカルは笑った。

「しょ、食あたり...?」

気が抜けたようにヘナヘナと床に崩れる響を見て淳子は、

「あら...、いい男が台無しね!」

と、笑った。

明日の朝は迎えに来ようかという申し出をヒカルが大丈夫だからと断ると、淳子は安心したように帰って行った。

「ヒビクももう帰っていいよ。明日もまた学校だし、私はもう大丈夫だから」
青白い顔のままヒカルはニッコリと笑った。

ずっと前も同じようなシチュエーションがあった。
あれは卒業式の直前のこと。

部舎の二階から転落したヒカルを見舞った東京の病院で、今のように白い病室のベッドに座りどこか思いつめたような顔で自分を見て笑っていたヒカル。

あの時、ありのままに想いを伝えていたら――。

「ヒカル...」

響はベッドに腰かけ、ヒカルの肩を抱き寄せた。

心がざわざわ騒いでいる。

ゆるやかに近づいてくる何かの気配を肌にひしひしと感じる。

「今夜はずっとここにいる。俺のことなんか気にするな」

「...うれしいけど、だってここ付き添いダメでしょ？本当は今すぐにだって帰れそうだけど明日までは点滴が外れないから」

ヒカルは腕に痛々しく刺さった針を見せた。

「そうだったな...。けど、ボストンにまで来てこんな目に遭うなんて、だよな」

「まさか、入院ざたになるなんて、だね」

くすっと笑うヒカルを響は思わず抱きしめた。

「すまない...」

――今までどれだけお前に苦しい思いをさせてきてしまったのだろう。

手すり崩壊事故の時も、卒業式で抱きしめた時も、その後の3年半も、そして今も。

なのに、いつだってそうやって笑うんだ、お前は。

その笑顔に甘えたままの俺は昔から何も変わっていない。

変わっていないんだ.....。

「そんなにきつく抱きしめないで.....」

ヒカルが小さく呟いた。

「チューブが外れちゃいそうだよ...」

「...あ、ごめん」

ゆっくりとヒカルを腕の中から解放したとき、一緒にすり抜けていった何かを響は感じた。

「ヒビクが謝ることなんて何もないよ。海外旅行で胃腸を悪くする人はたくさんいるって淳子さんが言ってたし。心配かけてごめんね。私は本当に大丈夫だから」

「.....わかった」

「明日、点滴が外れたらすぐに帰るね」

「迎えに来るよ」

「ダメ。学校があるもん。私がボストンに来たことでヒビクの日常に支障を与えちゃうのはすごくイヤだから。自分のことは...、自分で出来るから大丈夫」

「...そうか。ヒカルだしな」

「...うん。私だから」

ヒカルだから――。

「じゃ、帰る。ヒカルももう休め。腹出して寝るんじゃないぞ！」

「寝ないよお...」

プーッと膨れた顔は昔のまま。

からかって怒らせて笑っていた、先輩と後輩だったあの頃の...。

「ヒカル...」

ふと、名前を呼びたくて呟いた。

「なに...？」

「.....いや、何でもなし。それじゃ、明日な」

カチャリ、と後ろでドアが閉まり響はしばらくその前に佇んでいた。

こんなに遠いボストンに呼んでおいてまで自分はヒカルを待たせてばかりの毎日。

朝から夜中までたったひとりで過ごしていたヒカルが何を想いながらいたのか、急性胃腸炎になるほど何を思いつめていたのか、そんなこと訊かなくてもわかっている。

――全ては俺.....。

俺があいつを追い詰めていたんだ。

俺が――。

唇をかみしめうつむいた時、一瞬の閃光が瞬いて響は顔を上げた。

カメラマンを携えたジェームスが、相変わらず不適な笑みを浮かべながら廊下の角に立っていた。

「……」

「久しぶりに見ましたよ、あなたのそういう顔」

響は答えずに、ただジェームスを睨みつけた。

「浅倉ヒカルさんが倒れたという情報をつかみましてね、かつてのジャックと風間ユリのようなスクープにありつけるかと駆けてみましたけど、どうやらそれは見込み違いのようでした。

ただ…、」

ジェームスはゆっくりと響に近づきながら、

「あんたにはガッカリさせられるよ。ボストン中が注目してる男だからこうやって追いかけてるけど、そうじゃなかったらあんたにはとっくに興味がなくなってるね」

と、余所行きの態度を捨てて言い放った。

「…そっちの方が俺としてもありがたい」

「そうはいかないのがこの仕事の辛いところでね、興味のない相手でも記事が売れば書かなきゃならない」

ふん、と、響は顔を背けた。

「まあいいさ。あんたの『Shine』がどうしてあんなにも人の心を惹きつけるのか、どうしてボストンの連中はあんたに夢中になってるのか、あんた自身は光の傘の下にいないと輝けないっていうのにねえ？日本のママだったり、ジャックだったり、それから……、」

ジェームスは閉まった扉の向こうを透かして見つめるようにして眺めた。

「まあ、これからのカザマ・キョウをじっくり見させてもらうしかないね」

――これからのカザマ・キョウ…。

響は心の中で呟いてジェームスを見る。

「とりあえず、BTMの次回号はこの写真をトップに飾らせてもらいますよ。いやあ～、苦悩の優男、惚れ惚れするねえ～」

嫌味な笑い声を響かせながら去っていくジェームスとカメラマンの背中を、震えるこぶしを握り締めいつまでも睨み続ける響だった。

◇

チャイルズ河のゆるやかな流れ。

古いままの時代と未来へ繋がる現在が同時に存在し、絶妙な調和を見せている街ボストン。

フェンスにもたれ、ローラーブレードの足を揺らしながら一人で立つジョーイに重ねて見ていたものは過去と未来。

日本を発つ直前までの過去と、ここで再会してからの未来が、サラサラの前髪の間隙から覗くジョーイの寂しげな瞳と鮮やかに輝く金色の髪に象徴されていたから。

だから――。

「Hikaru!」

遠くのほうから可愛い声で名前を呼ばれ、ヒカルは声がある方に顔を向けた。白いTシャツに赤いリュックを背負ったジョーイが、手を大きく振りながらローラーブレードを滑らせて来る。

「ジョーイ...」

アンディーと交わした約束の日から既に10日以上が過ぎているにもかかわらず、毎日欠かさずに約束の印を持ってやってくる少年ジョーイ。

――その、小さな胸を縛っている約束から、もう解放されなきゃね.....。

勢いよくかけてきたジョーイは、ヒカルの胸に飛び込む形で止まった。

『昨日はどうしたの？心配しちゃったよ』

『ごめんね。急にお腹がいたくなっちゃって、どうしても来られなかったの』

『ううん、いいよ。昨日ここでヒカルのお兄ちゃんに会ったよ？』

青い瞳をキラキラと輝かせながら首を傾げて笑うジョーイを、ヒカルはじっと見つめ、

『私のお兄ちゃん...？』

と、笑った。

『あ、うん...。ヒカルとらぶらぶのお兄ちゃん』

恥ずかしそうに言うジョーイを、

「こら！おませ！」

と、ヒカルは睨んだ。

ジョーイは、えへっ と首をすくめて笑ってから、

『来週、宇宙ロボットをホールに立たせるんだ！見に来てね！』

と、また青い瞳を輝かせた。

『.....来週か。見たいな、ジョーイが作った宇宙ロボット』

ジョーイは満面の笑みを見せて頷いた。

『そうだ、これから学校に見に行けない？』

『今から？ダメだよ。だってアンディーが...』

「アンディーは来ないよ...」

『...何て言ったの？』

不思議そうな目をして自分を見つめるジョーイの両肩にそっと手を置き、ヒカルは言った。

「ジョーイ、私の話を聞いてね？Listen to me,Joey.」

ジョーイは無垢なまなざしを輝かせて、コクンと頷く。

どこかで迷っていたヒカルがひとつ息を吐いたとき、岸辺で羽根を休めていた水鳥が甲高い声を上げた。

空高く昇っていくその声をきっかけにして、ヒカルは心を決めたようにゆっくりと語り出した。

『……たとえば、ジョーイはたったひとりでコンコードまで行ける？』

『…行き方がわからない』

『アンディーもそうだとしたら、コンコードじゃないかもしれない、もう少し遠い街にいたとしたらひとりでここに来られるかな？』

『来られ…ないね』

『きっと、アンディーも毎日約束の印を見てつらい思いをしていると思うんだ…。ジョーイと約束したのに守りたくても守れなくてつらいと思う。私も昨日、ジョーイと約束してたのにここに来られなくてすごくつらかった』

『……』

『……今はまだ無理かもしれないけれど、ジョーイたちがもう少し大きくなったらいつかきっと会える時が来るよ』

『いつ？』

『うーん。それはわからないな。でも…、私の友達は、ずっと後になってから会えた。その人は小さいときに約束を守って遠くに引っ越した友達に会いに行ったのに、その友達は約束を忘れてたんだよ！』

『それはひどい！』

『うん…。でも、そういうこともあるんだ。約束をしたのに忘れちゃったり、守れなかったり、いろいろね…』

『ヒカルの友達は約束の印を交換しなかったの？』

『たぶん、しなかったのかな』

『交換していれば忘れなかったのにね...』

『ジョーイはすごく偉いよ。お友達とも遊ばないで毎日ずっと夕方までここでアンディーを待ってるから。でも、これからもずっとそうやって待ち続けるわけにはいかないよね?』

『.....うん』

『ずっと待ち続けることがいい時と、忘れてしまわなければいけない時があるって私は思うんだ.....。ジョーイとアンディーには約束の印があるから、きっといつまでもお互いを忘れないよね?だから、いつか必ず会える時が来るよ』

ジョーイは目を伏せてローラーブレードの足を揺らした。

そして、

『じゃあ、ぼくはもうここでアンディーを待っていないでもいいの...?』

と、呟いた。

ヒカルは、一瞬の間静かに流れる運河を見つめ、そして、

『.....いいんだよ。ジョーイはよく頑張ったよ...』

と、微笑んだ。

ジョーイは、ぐすっ、と鼻を鳴らしてヒカルに抱きついた。

そんなジョーイの小さくて柔らかい感触に哲平が重なる。そして、それは幼い頃の颯士のイメージと重なる。

それから――。

約束――。

悪意のない純粋なものによって傷ついたり傷つけたり、そんな悲しいことからもう解放してあげたい。ジョーイも、そして響も.....。

『でもぼく、最初は悲しかったけど途中から楽しくなったんだよ。ヒカルに会えるから』

ジョーイはヒカルを見上げて笑った。

『ありがとう。私も毎日ジョーイに会えるのが楽しかった。本当に、ここでジョーイと友達になれてすごく嬉しい。でも...、』

伏せた目をジョーイからそらして、ヒカルは岸辺の水鳥を見つめた。

『ヒカル...?』

ジョーイの前髪がサラサラと揺れた。

その間から覗いた優しい瞳が一瞬の間に翳った。

すがりつくような目で自分を見つめるジョーイに、ヒカルは大きく息を吐いてから、

『日本に帰るの。ジョーイとも、もうさよならなんだ』

と、言った。

『日本に帰るの...?』

『うん』

ヒカルは頷いて微笑んだ。

『もう、会えないの...?』

――迷子の仔犬のような瞳。そんな目で見つめられたら...、本当のことが言えないよ。
でも...

『...うん』

大きく見開かれたジョーイの目から、やがて大粒の涙がぼろぼろとこぼれた。

ジョーイは、くるっと後ろを向いてその涙を拭う。

『ごめんね、ジョーイ...』

そう言って震えるジョーイの肩にそっと手を置くと、ジョーイは涙を手で拭いながら、

『いつか、また会える?』

と、泣き声のまま振り向いて言った。

会えるよ。

そう、言葉で言うのは簡単。

でも、それは.....

『ううん。たぶんもう、会えない...』

ヒカルはこみ上げる痛みを飲み込みながら言った。

『いやだ!』

ジョーイは叫んでヒカルにしがみついた。

『帰っちゃ嫌だよ!ずっと、ボストンにいてよ!』

金色の頭をヒカルの胸にグイグイと擦り付けながらジョーイは叫ぶ。

—ずっといたいよ。ここにずっといたいけど……、

『日本でやらなきゃいけないことがあるんだ。だから帰らなきゃならないの。でも、ジョーイとはずっと友達だよ。会えなくてもずっと』

『…ぼくの宇宙ロボットは？見てくれないの？』

『見たいよ、とっても…。でも…、』

ヒカルの中から、はらり…、とこぼれた一粒の涙をジョーイは小さな指でそっと拭った。その可愛らしく愛しい行為にヒカルの涙腺が一気に緩んだ。

もう止まらない。

嗚咽と共に溢れ出る生温かい胸の痛みと苦しみ。

決めたのに、決めたはずなのに、

……昨夜、響に抱きしめられた時の震える感触をまだ体中が感じている。

顔を覆って肩を震わせるヒカルを、自分も涙が乾かないままの顔で見つめていたジョーイは、その涙の筋を腕でキュッと拭ってから精一杯の背伸びをしてヒカルをぎゅっと抱きしめた。

「ジョーイ…」

声にならない声でヒカルは呟く。

『…出来上がってホールに立たせたロボットの写真を日本のヒカルに郵便で送る。だから僕に住所を教えてね』

うん、うん、とヒカルはジョーイを抱きしめながら頷いた。

『これは約束じゃないよ。ぼくがやりたいからするんだ』

「ジョーイ……」

『約束の印はないけど、ヒカルが大好きだから！』

—約束の印はないけれど…、大好きだから…。

『ありがとう。私も手紙を書くね。それまでには英語ももっと勉強しておくから』

流れるままにまかせた涙の顔でヒカルが言ったとき、岸辺の水鳥がバタバタと羽根を羽ばたかせて飛び立った。

その行方を、見えなくなるまでふたりで見送ったあと、ジョーイは、

「I should have asked his adress,too...（アンディーにも住所を聞いておけばよかったな...）」

と、呟いた。

『ねえ、ジョーイ』

『なに？』

『私、今日はこれから街に行くんだ。一緒に行かない？アイスクリームを食べたりハンバーガーを食べたりしようよ』

『いいけど...、ヒカルはお腹が痛いんでしょ？』

ジョーイに言われ、そうだった、と気がついたヒカルだ。食あたりが再発してあんな思いをするのは二度とごめんだ。

『僕の家付近にはいろいろ面白いところがあるんだ。ヒカルを案内してあげる！だから食べ物はやめよう？』

『...そうだね』

ヒカルは、ぺろっと舌を出して笑った。

そして。

トリニティー教会、ボストンコモン---

響に案内してもらおうつもりでとっておいた観光地をジョーイと巡り、やがて日も暮れかけた頃には車が行き交う大通りに面した郵便局の前にふたりは立っていた。

『それ、出すの？』

ジョーイはヒカルの手にある複数のポストカードを見て言う。

『うん。日本の...友達に、ね』

『僕も、ここからヒカルに出すね...』

ヒカルは頷き、住所を書いた手帳のメモをちぎってジョーイに差し出した。

『じゃ、ジョーイ。ここでさよならだね』

『...うん』

ヒカルの手からメモを受け取りジョーイはうつむく。

『もう会えないけど、いつまでも友...、』

『会えないって決めるのはやめようよ』

ヒカルの言葉の途中で、ジョーイは顔を上げて言った。

『もしかしたら、僕が大人になったときに日本に行くかもしれないしヒカルがまたボストンに来るかもしれないでしょ？絶対に会えないって決まったわけじゃないから、だから...』

『ジョーイ...』

『だから、どうやって言えばいいのかわからないけど...』

ジョーイは首を傾げて考える。

『.....今はさよならだけど、...またいつか、のさよならだよね？』

『...またいつか、のさよならか...。うん、そうだね！』

『じゃ、ヒカル...、またいつか、の...、さよなら！』

ジョーイは笑顔で言うと、いつものさよならと同じように手を上げてローラーブレードを滑らせた。

時々振り返りながらのジョーイの姿が、夕闇と街の雑踏の中に溶け込んで見えなくなるまでヒカルは手を振り続けた。

またいつかのさよなら――。

当てのない未来の気休めじゃなくジョーイの言葉の中には本当の希望が溢れていた。
約束なんかじゃない、本当の希望――。

「いつかきっと、また会えるね……」

ヒカルはポストカードを一枚一枚投函する。

あかね、麻耶――。

懐かしい友人たちの顔が選んだカードに重なりながら目に浮かぶ。

そして手の中に残った一枚。

運河の上から望む街の全景が写されたカードをヒカルは見つめ…、

また、いつか――。

を、心にかみしめながら最後のカードを投函した。

◇

昨日淳子に頼んだものをボストン案内所で受け取ったヒカルはそのままライブハウスへと向かった。

響に招待をしてもらい特別席でピアノを聴いたのは2週間前のことだ。

雨がしとしとと胸の中に降ってくるようなせつない旋律と聴衆たちのため息が迫り、手を伸ばしても届かない捕まえられない響の遠さを知ったようで苦しみさえ感じた2週間前のステージだったが、今、響の真実の響きを感じたい。今夜はチケットがないから会場には入れないが、扉の外でもいいから響の傍で、響が奏でるメロディを感じたいヒカルだった。

もう既に今夜の三ステージ目が始まり、店の外には入れ替えを待っている客がチケットを手に列を作って並んでいた。

毎日これほどの聴衆たちを集めているピアニストカザマ・キョウだ。

「これじゃ、無理だね…」

列の中に入ることも扉の前に近づくこともできずに、少し離れた歩道の隅でヒカルはただライブハウスを見つめていた。

「Are you Hikaru? (あなたはヒカルさん?)」

背後から小さく声をかけられヒカルが振り向くと、バービー人形のように美しく整った女性が立っていた。

また響を取材している記者かレポーターか、と、ヒカルはやや牽制しながら、

「イエス……」

と答えた。

『私はニコル。音楽アカデミーでキョウと一緒にいたの』

「ヒビクの…」

『キョウのピアノを聴きに来たの?』

「イエス…、でも…」

ヒカルはニコルに両手を広げて見せて笑った。

「Oh… (あら…)」

ニコルは呟くと、自分のチケットをヒカルにスッと差し出した。

「え…?」

『これをあなたにあげる』

「そんな…。もらえません…」

ヒカルは首を振ってニコルの手を差し戻した。

『いいの。お詫びの印だから』

「……え?」

単語の意味がわからずに首を傾げるヒカルに、

『…ああ、とにかく、ここで会えたのも何かの縁よ! ラッキーだったと思ってそのチケットは受け取って!』

ニコルは早口で言うと、チケットをヒカルに押し付けて、

『絶対にキョウを離しちゃダメよ!』

と、身を翻し通りの向こう側に駆けて行った。

「あ、あの、ニコルさん…?!」

一瞬の出会いと出来事だった。ヒカルには何が何だかわからなかったが、今、手の中にはチケットがある。

「神様だったのかな…」

ヒカルはチケットを抱きしめて呟いた。

チケットを手にしたとはいえ最後部に並んだヒカルにテーブルはなく、通路で立ったままライブを聴くことになった。だがスタンドリスナーはヒカルだけじゃない。テーブルの間、壁の脇、空いているスペースがないくらいに立つ人で埋め尽くされているフロア。

それでも、ここでカザマ・キョウのピアノを聴くことができるから、ここでしか聴けないから人々は集まり、暗いスポットに照らされた無人のグランドピアノを見つめ、ピアニストカザマ

・キョウの入場を顔を嬉々と輝かせながら待っている。

フロアの照明がゆっくりとダウンすると、正装した響が楽譜を手にしてピアノの前に入場した。
2週間前と同じように、背筋を伸ばし真っ直ぐ前の聴衆に礼をする――。

ピアノの真正面、壁の前に立つヒカルと、ステージの響の視線が空中で重なった。

「ヒカル……？」

響の声が、ざわめきの中を泳いでヒカルのもとに届いた。

「ヒビク…」

響はしばらくの間呆然としたようにヒカルを見つめていたが、やがて我に返ったようにスタンバイを取り、ピアニストカザマ・キョウのステージをはじめた。

目を閉じてヒカルは全神経を直線上の響に向ける。

――響かせて、カザマ・キョウのメロディー。

どこまでも、どこまでも……。

ピアノの音色は優しく力強く、ヒカルの全身を包む。

そして、同じように周囲の人々も響のピアノを心の中に染み込ませている。

目を閉じる人、じっとステージを見つめている人、それぞれのスタイルで響の奏でるメロディーを自分のメロディーに変換しながら……。

ステージが進み、やがて始まった最後の曲は『Shine』だった。

「驚いたぜ…。来るなら来るって言ってくれれば特別席を用意させたのに…」

夜の遊歩道をゆっくりと歩きながら響は言った。

降り始めの雨のような、透き通った匂いが漂う夜の運河。

街の明るい光を映しゆるやかに流れる河の水が、ヒカルの白い肌の上に反射してゆらゆらと踊りながら輝いている。

「ううん。普通のお客さんみたいにして聴きたかったから」

「…でも、無茶するよな。今朝まで点滴をさしてたってのに…」

響はヒカルの腕を持ち上げて針の跡を指差した。

「だって、ただの食あたりだもん。もう大丈夫だよ」

ヒカルは笑った。

「チケットはどうしたの？」

「あ…、ヒビクの友達…ニコルっていう人が譲ってくれたの」

「ニコルが？」

ヒカルは頷いた。

「あとでヒビクからお礼を言っておいてね。あっと言う間だったから言いそびれちゃって…」

「だったら明日にでもニコルとサム…、二人にヒカルを紹介するよ」

ヒカルは首を横に振りながら微笑む。

「…ヒカル？」

ヒカルは響に背中を向けてまたゆっくりと足を前に進めた。

互いに無言で歩き、坂の道をのぼればもうすぐアパートが見えるところまで来た時、

「今日、また弾いてくれたね。『Shine』」

ヒカルは唐突に言った。

「…ああ。今夜は何故か弾かなきゃって思った…」

薄暗いフロアで壁の前に立つヒカルを見た時、『Shine』のラストが脳裏で響いた。

ピアノシモの四小節。

当てはめた詞は『I love you…』。

何か、胸に迫るものを感じて今夜はどうしても弾きたかった。弾かずにはいられなかった。

「お客さん喜んでたなあ…。本当にあの曲はみんなに愛されているんだね」

響は言葉を返さずにヒカルを見つめる。

ゆるやかに近づいてくる何かの気配。

また、ざわざわと心が騒ぐ。

踏み出す足の一步一步が鉛のように重いのは何故なのか…。

前を歩くヒカルの背中、幼い頃に毎日見ていた母の背中に似ている。

一瞬、月の明かりがぼんやりと輝く闇の中でヒカルと母の姿が重なって見えた。

「ヒカル...！」

抑えきれない不安が思わず声に出た。

坂を駆け上がってヒカルに追いつき、後ろから抱きしめた。

「...何処へも行くな.....っ.....?!」

——何を言ってるんだ、俺...？

何処へも行くなって、まるでヒカルが.....。

「ヒビク.....」

自分を見上げたヒカルの目の中にひとつの覚悟が見えて、響は驚愕した。

「ヒカル...？」

いつからか、微かに感じていた気配。

それが——。

「明日、日本に帰る...」

頭の前からつま先まで電流の嵐が走った。

何かを言いたくても言葉が出てこない。

声が出ない——。

「.....だから、ボストンも今夜が最後」

「...明日.....って...？」

響はようやく声を搾り出した。

もっと言いたいことはあるはずなのに、こんなひとことしか言えない自分がもどかしい。

「...淳子さんをお願いして航空券を手配してもらったの」

「.....どうして...?!」

ヒカルがボストンで過ごす3週間の予定のうちの、まだ2週間しか経っていないとか、秋になるまで一緒に暮らすはずだとか、そんなことじゃない。

何故ヒカルが、今日本に帰ることを決めたのか、その理由が、感じていた気配だとしたら——。

「ヒカル.....俺たち.....、」

サーッと木の葉が風に揺れた。

「.....さよなら、しよう」

抱きしめた両腕にヒカルの声の振動が微かに響く。それが全身を伝い、また戻ってくるまでに

はずいぶんの時間がかかった。

「さよ...なら.....？」

喉に詰まった掠れた声で響はつぶやく。

ヒカルは力の抜けた響の腕をそっと外しながら頷いた。

「どうし....、」

棒のように立ち尽くす響を振り返り、ヒカルは、

「ヒビクの居場所はここだから...」

と、呟いた。

「俺の...ためか...?! またお前は、俺のために自分に無理をするって言うのか...！」

響の叫び声が夜の静寂を貫く。

「俺の居場所は俺が決める。俺が日本に帰るって決めたんだからそれでいいんだ！」

「ヒビクは決めてないよ。決めたふりをしてるだけ...」

「.....っ?!」

変わってない自分。

変わったふりをしていただけの自分。

——俺が決めた未来は.....っ。

冷たい風がまた木の葉を鳴らした。

「寒くなってきたから入ろう？」

ヒカルは自分の両腕を抱えながら言った。

「.....」

響は無言でアパートの鍵を回す。

そして、部屋に一步入り愕然とした。

ピアノの譜面台にずっと出したままになっていた『げんき』の楽譜、壁のハンガーに掛けてあったカーディガン、ヒカルの持ち物が全て綺麗に片付けられ、スーツケースがひとつソファの横に置かれていた。

「ヒカル.....！」

響は後ろに立つヒカルを振り返り抱きしめる。

「帰るなっ! ずっと、ここにいろよ！」

——帰っちゃいやだよ! ずっとボストンにいてよっ!

響の悲痛な叫びとジョーイの涙声が重なって聴こえた。

「...いられないよ」

「どうして...！」

「だって...、ここは私の居場所じゃないもの」

「...居場所にしろよ！ポストンをヒカルの.....っ」

ヒカルはゆっくりと首を横に振った。

「ヒカル...ッ」

「...ヒビク、さっきと言ってることが違うよ。やっぱりここが、あなたのいるべきところ——」

ヒカルは微笑んだ。

「.....っ！」

響は抱きしめていたヒカルをそっと離れた。

「...帰って来ちゃ...ダメ。ヒビクはここで夢を叶えて」

「.....俺を待てない、と...？」

「もう、約束はしなくていいの...」

——あいつがいる日本が...ヒカルの居場所なのか...？

そこに俺の場所はないの...か——？

天井を見上げ、響は唇をかみしめた。

ヒカルの肩に置いたままの手が微かに震えている。

——もう...、もう、俺たちは...

俺とヒカルの旋律は.....。

「.....分かったよ」

低く呟いた響は、力強く掴んでいたヒカルの両肩からゆっくりと手を下ろす。

「ヒビク.....ッ」

肩から離れてゆく温もりを追いかけたい衝動を沈めたら喉元に熱い塊が込み上げた。

それをごくんと呑み込みヒカルはピアノの前に立った。

そして真っ直ぐに伸びた堅い指先で和音を鳴らし、

「私のShine....、聴いてくれる？」

と、精一杯笑った。

夢ならいますぐ覚めて欲しい——。

今すぐに——。

「.....ああ。聴く...。聴かせてくれ...」

響は瞼を閉じた。

大きく深呼吸をしてからヒカルは指を鍵盤に乗せた。

けれど、小刻みに震える堅い指先は前奏の途中でつまづき止まった。

気持ちを落ち着かせ、少しだけ間をあけてからヒカルは再び演奏を始めた。

決して滑らかとはいえないその指の運び方。

指を置けばいつでも同じ強さの音が鳴る電子キーボードに慣れた指が、重いグランドピアノのタッチに戸惑っているのもよくわかる。

だが、そのたどたどしいメロディに込められたヒカル自身がアダージョ（Adagio）の情緒に溶けて響き渡る。

ゆるやかなメロディーの中に感じるのは覚悟。

ヒカルの覚悟――。

・
・
・

――ヒカル、だな.....。

決めたら、何があっても前に進み上に昇るライジングサン....。

昔から、お前にヒビク先輩、って呼ばれるたびに体の中に一本の筋を打ち込まれたように背筋が伸びた。

お前の前ではいつだって頼れる先輩でいたかった。

ついこの間までそう思っていたさ。お前が安心してわがままが言える唯一の男でいたいと....。

でも、違うな....。

Shine。お前に贈ったこの曲。

俺に会いたい一心で、会えない3年半の間に練習したって言ってたな。

あんな童謡も弾けないお前が、楽譜も見ずに難しいこの曲をここまで弾いているのは奇跡だ。

俺自身がこの曲を弾けないでいた間も、お前はずっとこれを弾いていたんだな...。楽譜と鍵盤に向かって必死に格闘してるお前の姿が目には浮かぶようだよ。

迷子の仔犬のような目をして俺を見ていても、その奥には昔から変わってないヒカルの筋があった。

この曲を弾いてるお前がその全てを物語っている。

俺はといえば、

日本に帰るって言いながら、やっぱり俺の中にも一本の筋があったんだ。

でもそれは、前面に出したら俺たちを分断してしまうものだったから後方に隠し、そのうえで一番欲しかった宝を先に手に入れてしまいたかった。

ヒカルさえ抱きしめてしまえばその後のことは...って、思ってた俺がずっとどこかにいた。

お前を俺に縛りつけて、毎日宝の箱を眺めて満足していたかった――。

これが俺の宝だ。見たけりゃ見せてはやるけど誰にも触らせねえぞって...。はっ。あさましすぎるな...。

だから、ここにお前を呼んだ時から帰さないつもりでいた。

ここで俺は、ヒカルを傍らに置きカザマ・キョウのピアノを弾き続けていく未来を心のどこかで決めていた。

俺が腹の底で本当に決めていたのは日本に帰ることじゃなく、そっちだったんだ...。

決めたふりをしてるだけ――。

お前が言った意味は違うだろう。

ヒカルのために決めたふりをしたって...。

でも違う。

これが俺の真実。

嘘つきでずるい男...。

こんな俺が、昔からずっとお前を苦しめていた。

ヒカル――。

こんな形でお前の『Shine』を聴くことになるとは思わなかったよ。

お前が奏でるメロディーの後ろに、おふくろが見えるようだ.....。

・
・
・

――今まではなんてせつない曲なんだろうって思ってた。

ヒビクが弾く『Shine』は、私を想ってくれる気持ちだけが痛いくらいに胸に響いて。

これは私だけの曲、ヒビクが私だけに弾いてくれる曲なんだって思った。

でも、違うよね。

ボストンに来てひとりでヒビクを待っている夜に思い出すのは、いつも高校の時の私たちだった。

初めて出会った学校の廊下の水飲み場...、顔を洗ってたヒビクに声をかけたら、そのまま振り向かれてそこらじゅうがびしょびしょになって、変な人って思った。でもあの時、空中に舞った

水のしぶきと金色の髪がぴかぴか光って輝いて映画のような光景が見えた。

響ってという名前をヒビクって読んでしまったのも今から思えば当たり前だったのかもしれない。
だって、名前が私に向かって響いていたんだもん……。

ヒビク先輩。

毎日そう呼びながら、自分の胸にあなたを響かせていたんだね。
みんなの前ではしっかりものの顔をしていても、`ヒビク先輩、にだけは最初から素顔の私でいられたの。
今思えばそれは、水飲み場の出会いで感じたヒビクの輝きが私の生命に浸透して大きく大きく響いてたから。

ヒビクの笑い声が好きだった。
ヒビクの歌声で安心できた。
ヒビクが傍にいてくれるだけで私らしくいられた。

生意気な後輩だったかもしれないけれどあれが私の『ありのまま』。飾らないで力を入れな
いで…、

だから、あの頃の私はいつも心の底から笑えたんだよ。
`太陽の笑顔、の製造元はヒビク、あなた――。
私の中はいつもいつもヒビク先輩が鳴らす鐘の響きでいっぱいだったから……。

――ライジングサンって言葉、凄くいい言葉ですよ。昇りつめていく太陽、でしょ？
――ああ。まるでお前だな。
――私？私、昇りつめていく太陽かなあ。
――だろ？絶対に後戻りをしないで真っ直ぐに昇っていくじゃないか、いつだってさ。周り
をうんと照らしながらね。だから安心してライジングサンやってろ。

そう言ってくれた `ヒビク先輩、。
この言葉を抱きしめて、それからの私は私らしく飛び跳ねられた。
廃部寸前の演劇部だったけれど、ひとりでも周りを照らしながら昇って行こうって心から思
えたから出来た人形劇。

初めて書いた台本をヒビクに見てもらって、「頑張れ、ヒカル！」って励ましてもらって、リ
ビングでの初公演から幼稚園で公演出来る夢が叶って…、あの時に見えたのが今の私の路――。

ピアノができなくなっただって音痴だって幼稚園の先生になる夢は絶対に諦めなかった。
そして、諦めないで練習し続けたから、今こんなに難しい『Shine』でも楽譜を見ないで弾ける…。

だから私は、あなたがいてくれたおかげで掴めた自分の夢がある場所で生きていく。
そして、あなたはあなたの音楽を響かせ、ピアノを奏でていく夢と使命がここにある。
ピアノだけを見つめてここで生きてきた月日と覚悟がある。
捨てちゃ、ダメだよ…。

夢を追い続けるあなたを、私の夢にするから。
一緒に生きることよりも――。
ヒビクがいなくても、きっと私は…ダイジョウブ…だから。

Shine――。
光。輝く。ぴかぴかする。
優しいけれど、力強くて凛々しいのが光。

――ヒビクこそ私のShine。

ヒビク自身が光り輝く発光体だから…、今、あなたがいるここが、あなたの場所――。

だから……、
そのあなたが生み、奏で、人々の心を震わせる『Shine』と共に、どこまでもヒビクらしくヒビクの音楽を響かせて。
それが、私が愛した風間響という人。
世界中の誰よりも愛してる、たったひとりのヒビクだから――。

ヒカルが去ったひとりきりの部屋で、響はたった今配達されたばかりのポストカードを見つめたまま立ち尽くしていた。

チャイルズ運河からボストンの街全景を望んだカードの裏に、ヒカルからのメッセージが綴られている。

ヒビクこそ私のShine。

だから……、

そのあなたが生み、奏で、人々の心を震わせる『Shine』と共に、どこまでもヒビクらしくヒビクの音楽を響かせて。

それが、私が愛した風間響という人。

世界中の誰よりも愛してる、たったひとりのヒビクだから――。

「ヒカル……」

ポストカードの上に一粒の雨が落ちた。

運河の上から見る街は、ビルが並ぶ近代都市と煉瓦と石畳の街角とが止まっていない時代の流れと懐かしい情緒をひとつのスクエアの中で融合させていた。

――先輩は、ボストンがとてもよく似合いますね。

初めてチャイルズ運河の遊歩道をふたりで歩いた時、ヒカルが言った言葉を思い出す。

昨夜聴いたヒカルの『Shine』――。

たどたどしい音の流れの中にも、強烈な光が輝いている光景がずっと脳裏に浮かんでいた。

閉じた目の奥が熱くなるぐらいのその光の中に母の姿が重なって見えたような気がして、かつての母の覚悟と今のヒカルの覚悟が同じものだと知って、もう自分とヒカルが共に生きる未来はないことを悟った。

だから――。

「こんなことなら、お前をここに呼ぶんじゃなかったな」

演奏を終えたヒカルに、そんな言葉が喉を通過して出てきてしまった。

だが同時に、呼ばなければ12月に自分は日本に帰ったのだろうか...と、胸に問いながら。

「私は...、ここでヒビクと一緒に暮らせて、ヒビクと恋人になれてよかった」

ヒカルは微笑んでいた。

ヒカルの笑顔があんなにもつらく見えたのは初めてだった。

自分の中を幾多の矛盾が駆け巡り、ヒカルの顔を見ることが出来なかった。

だから、ひとりで日本まで帰れなくなってしまいそうだから見送りはいらぬ、というヒカルの言葉に最後は従ってしまった。

最後に太陽の笑顔のひとつだけ落としたヒカルが、スーツケースを手にして出て行ったのはほんの数時間前――。

――ヒビクこそ私のShine。

「こんな言葉をヒカルに言ってもらえる俺じゃないのに.....」

響はポストカードを見つめながら呟いた。

――俺と同じ、いや、それ以上にもっとヒカルは心を痛めていたに決まっている。今ここで帰ると決めたことも、一緒に未来を断ち切る決意をしたことも、この短い時間にどれだけの涙と苦しみと痛みをひとりで呑み込んでいたか計り知れない。

昨日の日付が押されたポストカード。

覚悟を決めたヒカルがメディカルセンターから戻った後にたったひとりの部屋でしたため、投函し、チケットも持たずにライブに来て、そして最後に弾いた『Shine』。

――世界中の誰よりも愛してる、たったひとりのヒビクだから。

母と同じ覚悟の中には、母と同じ愛があったのか。

ユリがジャックを想った恋人の愛。

母が自分を想う母親の愛。

――俺がヒカルに贈った『Shine』を、昨夜のあいつは俺のために奏でてくれたのか。

Shine...光輝きそのものを...!

こんなにもヒカルの愛を独り占めしていたというのに俺は.....!

離陸までもう時間がない。響は部屋を飛び出し、坂の道を一気に駆け下りる。

――ヒカル、今わかったよ。

お前が言った、`居場所、ってこと。

俺がやらなきゃならないことは、ここで、この場所で一から、まっさらな俺からのスタートを切り出すこと――。

もう約束はしない。

待てとも言わない。

けれど、最後にもう一度……！

大通りに出たところでけたたましいクラクションが鳴った。

「カザマ・キョウ！」

車の窓から身を乗り出していたのは淳子だった。

「今、あなたを迎えに行こうと思ってたところよ！早く乗って！時間がないから！」

――天の助け！

「ありがたい！」

響は淳子の車に飛び込んだ。

◇

スーツケースを転がし、人で溢れる空港のロビーをひとりヒカルは歩いていた。

ボストン案内所の淳子に別れを告げに立ち寄ると、空港まで送ると言ってくれた。だが、もしも甘えてしまったら本当にひとりで日本まで帰れなくなりそうだった。今はもう、飛行機に乗るまでしっかりと足を踏ん張って立っていなければたちまち崩れてしまいそうだった。

――こんなことなら、お前をここに呼ぶんじゃなかったな…。

ボストンに来なければ、黙って12月を待っていれば、日本に帰ってきた響とふたりで生きる未来があったかもしれない。

でも、ボストンに呼ばなきゃよかったと今後悔している以上の後悔を、夢を途中にしたことを悔やむ日が来ないとも限らない。

どっちがいいかなんてもうわからない。

ボストンに来たのは響に呼ばれたからじゃなく、自らの意志だ。

ここで響と恋人になったことも、見たこと知ったこと感じたもの全てが自分で望んだこと。

——だから、悔やまないで…。

響の後悔がせつない。今にも溢れそうな涙をヒカルは気丈に呑み込む。

搭乗時間まであと20分。

手続きを終え、ヒカルはロビーのベンチに腰掛けた。

——もっと、いろんなことが書けると思ったけど、ペンを持ったら頭の中が真っ白になった…

。本当に伝えたいことってそんなにたくさんあるわけじゃないんだね…。

「世界中の誰よりも愛してるたったひとりのヒビク……」

声に出して呟いた。

途端に涙が溢れてきた。

けれど、今ここで泣いてしまったら座ったまま立ち上がれなくなる。

飛行機に乗ってしまうまでは、踏ん張って、踏ん張って……。

あと5分——。

響と出会い愛した今までの全ての月日がフラッシュバックする。

ふたりで奏でた2週間のメロディーが、身体が覚えているままにまだ全身に響き渡っている。そのゆるやかに繰り返される、ひとつに繋がった響きを両手で抱きしめた時、

「この……？」

音ではない、リズムでもない、けれど確かに聴こえるメロディーの感触がヒカルの中を駆け巡った。

言葉には出来ないがわかるもの。

一定の強弱の中、深い海の中で抱き合いながら泳いでいるような感じを覚える旋律——。

「ヒビク……」

——確かな俺とヒカルの旋律があるんだ。

「これが、私とヒビクのメロディーなの…？」

掲示板に搭乗開始のメッセージが掲示され、ヒカルは立ち上がった。
踏み出す一步一步はさっきまでと違い、しっかりと前に行く。
搭乗ゲートをくぐろうとしたその時、

「ヒカルッ！」

ロビーのざわめきが一瞬で止むほどの声が響き、ヒカルは振り返った。

「ヒビク……」

肩で息をする響が玄関前に立っていた。

——見送られたら、ひとりで日本に帰れないかもしれないって思った。顔を見て肌に触れてしまったら、また離れられなくなるって思った。

だけど——。

ヒカルは響をめぐめて駆け出した。
響もヒカルをめぐめて駆けて来る。

——粉雪の卒業式と同じ。
向こうから駆けて来る `ヒビク先輩、。
あの時は『Shine』があったから。
そして、今は——、

言葉もなく抱き合う。
互いの温もりをかみしめるように強く強く、力の限りを尽くして。

抱き合った体と体を離し代わりに目と目とで見つめ合う。
「ヒカル…、俺…、ごめ…、」
言いかけた響の唇を手のひらで覆いながらヒカルは首を振り、自分の手を乗せた響の両肩を背伸びの支えにして唇を重ねた。

深く深く、長く長く——。

——今は、ふたりの旋律があるから……！

——またいつか、の……、

「さよなら、ヒビク」

「...さよなら、ヒカル」

微笑んだヒカルはクルッと踵を返し、搭乗ゲートをくぐった。
背筋を伸ばし、肩の上で髪をふわふわと躍らせながら振り返らずに。

その後姿を目に焼き付けるようにしてじっと見送る響の背後に、離れて二人を見守っていた淳子が近づいた。

「よかった。別れるのはやめたのね？」

響は、いいえ...、と首を振った。

「...別れました。もう、ヒカルと俺に共に生きる未来はありません」

「そんな...。だって、今.....」

もうヒカルの姿は消えてなくなったゲートを淳子は呆然と見つめた。

——一緒に生きる未来はなくなった。

けど、またいつか.....。

空を見上げ、飛び去る飛行機を彼方まで見送る響の耳には、ゆるやかなひとつのメロディーが確かに聴こえていた。

『きみにとどくまで ~Adagio』 完

『きみにとどくまで~Gracile』につづく

昼休みが終わったあとの5時間目はただでさえ眠いのによりによって日本史。

一番たいくつで一番眠くなる授業。

いったい、松平って名字の大名が何人いるんだよ。ひとりでいいじゃないか、まぎらわしい。

しかも、日本中のあちこちにいるから誰がどの松平かわかりゃしない。

おまけに幼少の頃の名前は何かだかんだ、って、名前なんかひとつでいいだろ。

俺なんかガキの頃も今も風間響だ。じーさんになってもずっと風間響だ。

日本史はキライだ。

格式とか形式とか、そんなことばかりを重く考えていた時代のことを教えてもらってもちっとも面白くない。

ポッターにさえつかまらなければ、今ごろは田村たちとビリヤード場でキューを握ってるはずだったのに、俺だけバツが悪く...

「捕まえたぞ、風間あ！！」

いきなり首根っこつかまれて箒でケツを思いきりはたかれた。

用務員にポッターというあだ名をつけたのは、もうずっと前に卒業した先輩だと聞いたことがある。

学校内のあちこちに出没し、生徒達の挙動を教師に代わって監視している、いつも箒を持っているオヤジがポッター。

「挙動不審、の生徒を見つけると、ピーッと笛を吹きながら何処からでもやってくる。」

確かに目をつけられてたさ。俺たちがいつも上手く抜け出すからあいつも意地になって俺たちを見張ってたし。

今日だって追いかけてくるとは思っていた。けど逃げ切る自信はあった。

直前にヒカルに会ったりしなければ...

「ヒビク先輩！」

昇降口で突然後ろから声をかけられた時は一瞬立ちすくんだ。

振り向いた時に待っている笑顔を不自然なく見るために、少しだけ心の準備をする時間が必

要だったからだ。

「...よお、ヒカル」

ジャージ姿のヒカルが立っていた。

あいつの変わらない笑顔を見ると言葉がすんなり出て来ない。

目を合わせるのもためらって、手首に二重に巻きつけてある8分音符のペンダントを腕ごとポケットに突っ込んだ。

「今、田村先輩たちも外に走って行ったけど、もしかして先輩たちい...？」

ヒカルは、いけないんだあ～、と言ったように上目づかいに俺を見た。

俺と大島がつきあっていると学校中の噂になってからも、ヒカルの俺に対する態度は何も変わらない。

会えば、いつでもあいつから声をかけてくる。このとびっきりの笑顔を携えて...

俺はどうしたらいいかわからなくなるんだ。ほっとしている反面、胸のどこかを締め付けられて、言葉も声も喉につまる。

わかっていることだけど、やっぱり俺はヒカルにとっては、ただのヒビク先輩。田村や他の連中と同じ、ただの先輩...

矛盾が俺の中を駆け巡る――。

「しっ！ポッターに見つかったらヤバイ！」

勝手な心のうちをヒカルに悟られないように、わざと大きなりアクションをした。

べつにポッターに見つかったってヤバイなんて、この時はちっとも思ってなかった。

「じゃあな、ヒカル！」

ヒカルに背を向け、昇降口を出ようとしたそこまではよかった。

「あ、ヒビク先輩、うしろっ！」

ヒカルの叫び声と、

「捕まえたぞ、風間あ！！」

の音が同時だった。

ヒカルの目の前で、汚い箒でケツをはたかれちゃった...

いつもなら絶対に逃げきれなのに、ポケットに手を突っ込んでいたせいで一瞬の反応が鈍ったんだ。

俺を捕まえようというポッターの執念に反射神経が負けてしまった。あいつ、思いっきりはたきやがって、きっと今ごろサルのケツになってるんじゃないかと思うくらいにヒリヒリしてる。

3年ちかくポッターと闘ってきて負けたのははじめてだった。しかもヒカルの目の前で...

ポッターは勝ち誇ったような顔をしてニヤニヤ笑ってた。それがまた憎たらしい笑顔で、今さっき見たばかりのとびきりの笑顔が汚されるようでムカついた。

ポッターが早速担任に言いつけたから、さっきまで職員室でしぼられて、ついでに長髪と服装のことまでくどくど言われ、一番嫌いな日本史の授業を聞かなくちゃならなくて...

田村たちも冷たいよな。俺が捕まってる間にさっさと角を曲がっていきやがった。

オトリかよ、俺は...

でも、今、気がついた。

校庭で体育の授業をしているのは2年の女子。ヒカルのC組だってこと。

そう言えば、ヒカルはさっきジャージを着てたもんな...

来週は体育祭。

ヒカルはまたリレーの選手のように。頭の黄色いハチマキが青空の下で鮮やかに映えてなびいている。

いつでもどこでも元気で明るくて真夏の太陽みたく輝いて。

あの笑顔を見つめていられるのもあとわずか...

だから、今日はこうやってあいつのことを見つめてるのもいいかもな。

どうせ日本史なんか聞いてても聞いてなくても、わからないのは同じなんだから。

「風間さんと浅倉さんの関係って？」

2週間前、大島に言われた時、

「つきあってる」

と言えたらどんなによかっただろう。そうじゃなくてもヒカルに俺の想いを伝えることができたなら、って思う時もある。

でも、あの笑顔を見ちゃ言えないぜ。

あんなふうに誰にでも同じ光を注ぐ笑顔を見たらさ...

あいつを抱きしめることが出来るのは、太陽より大きな懐を持った男だけだ。

くやしいけど今の俺はあいつの輝きに抱きしめられてるから...

だから、卒業したらアメリカに行くー。

ヒカルを抱きしめられる男になるために、なんて言うとかッコつけてるみたいだな。

でも、マジ。

誰かにとられてしまわないうちに、あいつにとっての一番になるために急いで自分を磨いてくるさ。

そして、いつかヒカルに想いを伝えたい…。

ヒカルをまるごと包める、懐の大きな男になった時に。

必ず――。

「やだ風間くんったら、さっきから女子の体育をじっと見つめちゃってさあ…」

隣りの女子がいやらしいものを見るような目で俺を見た。

「授業、ちゃんと聞いてた方がいいんじゃないの？ 今度日本史落としたら卒業も危ないよ」

まさか、そこまではいかないだろ。

でも、確かにずっと校庭の女子を見つめてるといっても、挙動不審、に映るよな。

風間あ！と、ポッターが飛んできそうな悪寒が走ったし、とりあえず窓の外を見るのはやめた

。

かといって日本史をマジメに聞こうとも思わないから、シャーペンを持つ手はノートではなく机の右上に伸びていた。

空は青い。

真っ青に澄み渡っている。

走るランナーに声援を送る女子の甲高い声が、真っ直ぐに伸びて青空に吸い込まれていく――

。

ヒカル――。

せめて、この机の端にこっそりと刻んでおくよ。

きみへの想い。

いつかきっと、とどくように――。

LOVE HIKARU――。

了

ボストン市街の表通りを、響はやや足早に歩いていた。

急いだところで何が変わるわけではないのだが、逸る気持ちを抑えられない、子どものように浮かれている今の自分を滑稽に思う。

昨日、田村のウェディングパーティーで3年半ぶりに帰国した日本から再びこのボストンへ戻ってきた。本当はその足で真っ直ぐに向かいたかった場所へ、今、足を向けているわけだ。だから、この気持ちの高揚は昨日からずっと続いている。

――カッコわりいったらありゃしない。

ただ、ヒカルに送る約束をした航空チケットを買いに、トラベラーズショップに行くだけのことだ。早く行ったからといって早くヒカルを此処に迎えられるわけでもないのに、ヒカルと自分を確実に繋げる「ソレ」を、一分、一秒でも早く手にしたい、それだけの気持ちが響を早足にしていた。

――ボストンに帰らないで！このままずっと一緒にいて！

ヒカルのある叫びを聞いた後にひとり飛行機に乗り込まなくてはならなかった時は、どれだけ心を鬼にしたことか。あのまま一緒に連れて来られるものならそうしたかった。3年半ぶりに再会し、ヒカルを抱きしめたとき、もう、ほんの少しだって手放しておけないと思った。なのに、今は自分もヒカルも高校時代とは違い、それぞれの場所での責任のため、別の時間を生きなくてはならない。少なくとも、あと5ヶ月の間は。

5ヶ月の後、響は今の生活と自分を取り巻く様々な環境を捨て、日本に帰る予定でいる。だから、あと5ヶ月の間、自分を待っていてくれとヒカルに告げ、もちろんヒカルは承諾してくれている。

会わなかったのは3年半。

それに比べたら5ヶ月なんてすぐだ。

だが、ほんとうに――。

ようやくショップに到着し、響は8月7日の午後、日本からワシントン経由でボストンに着く便のチケットを求めた。

「今回のご入用は片道だけでいいのですか？」

ショップの若い店員が微笑みながら訊ねてきた。

5日ほど前もこの同じショップで日本ボストン間の往復航空券を買った響を、店員は覚えていたようだ。

「あ...」

今の今までヒカルが帰る時の航空券のことが頭に存在していなかったことに、響は自分で驚いた。

「いや...」

ヒカルは8月7日にボストンに着き幼稚園の新学期に間に合うギリギリの8月31日に日本に帰ると、その滞在期間はもう決まっている。だから今ここで往復チケットを買ってしまえばいい。

「じゃあ、8月31日の便の...、」

言いかけて、響は途中で口をつぐんだ。

「8月31日、ボストン発の便ですね？」

「いや、やっぱり31日のチケットはいい。6日成田発の分だけ手配してくれないか？」

響は店員にそう告げ、なんとなく店員から顔を背けた。今の自分の顔を人に見られるのが何故か後ろめたい気がしたのだ。

「かしこまりました」

店員はそんな響の思惑などに察するはずもなく、言われたとおりに片道だけのチケットを手配する。

――帰りのチケットは、後でヒカルと一緒に買いに来ればいい。

ほんとうにそう思っただけだ、と響は心の中で誰に対してか分からない言い訳をした。

◇

トラベラーズショップを出た後、響はそのまま郵便局へ向かった。

購入したばかりのチケットを書留にして封をしようとしたが、そこでしばし考えた。

――あいつ、飛行機に乗ったことないって言ってたな...。

ヒカルはひとりで旅をしたこともなければ、飛行機に乗ったこともなかったことを思い出すと、急に心配になってきた。

ヒカルにとって、初めての一人旅が海外旅行なのだ。飛行機に乗るのは電車に乗るのとはわけが違う。空港では荷物を預けたり、パスポートを提示したりの面倒な手続きもあるし、広すぎるターミナル内で迷うこともあるだろう。どこへ行けばいいのか分からなくて、迷子になって泣きべそをかいているヒカルの顔が浮かんでしまい、その想像はどうしても頭の中から消えてはくれない。封筒に封をすることが出来ない。チケットを送ったはいいけれど、ヒカルが無事にボスト

ンまで来られなければ意味がないのだ。

響はカウンターに備えられたメモ用紙を手にした。

『これから俺が書くことをよく頭の中に叩き込めよ』

そう書き出してから、響は成田空港の搭乗からボストン空港で降乗するまでの手順、道順をこと細かく記した。

書き終えてから、まるでマニュアルのようになってしまった、と思ったが、ヒカルにはこれぐらいのことをしてやってもいいだろうとも思う。しっかりしているようで、実はヒカルは人に甘えることが下手なだけだ。本当は迎えに行ってもいいぐらいだ。

――ボストンに帰らないで！このままずっと一緒にいて！

あの叫びは、ヒカルの心から溢れ出した真実の言葉だった。

不安でたまらないくせに無理に笑い、すべてを受け入れようとするヒカルが、自分に対して初めて口に出したわがままだった。

それが、響はたまらなく嬉しかった。ヒカルが自分の気持ちを隠さずに、無理をせずに、わがままをぶつけてくれたことで、空いてしまっていた3年半の時間が少し縮められたような気がした。

これからはいつだって、ヒカルのわがままを聞いてやりたいと思う。

その、唯一の男に自分になる、と決めている。

ヒカルの望むことをなんだって叶えられる、叶えてやる絶対に頼れるたったひとりの男に。

――ボストンに来いよ。

あの時、自分がヒカルに言った意味は、本当に夏休みを利用して遊びに来い、というものだったのだろうか。

ここにヒカルを呼んでただ3週間ちょっとの時間を一緒に過ごす、本当にそれだけで済むのだろうか。

5ヶ月後、自分は、ヒカルは――。

――片道だけのこのチケット…。

それだけを握り締めて俺のところに来い。

あとは、俺が何とでもするから――。

メモに追伸を書き添えようとしたとき、心に浮かんだのはそんな言葉だった。

だが、それを文字にすることをためらい、結局は『気をつけて来いよ』と書いていた。

だが響はもう知っていた。

ヒカルを帰すためのチケットなど、最初から用意するつもりはなかった、ということ。

了

もう、戻れない

「頼めるのはあなたしかいないの！あたしを助けると思って！」

お願い、と颯土に手を合わせたのは日向瑠璃。

かつて、大阪支社でほんの少しの間、同僚として共に仕事をしたことがあり、色々な意味で振り回された人物だ。

その瑠璃が春の移動で東京本社に転属してきた。大阪では通してもらえなかった企画を、本社でなら実現可能、ということになったからだという。

瑠璃が立ち上げた企画は、世界のさまざまな国でその土地と人と共存しながら自分の道を生きている日本人を、年齢性別職業を問わずグローバルに取材し、雑誌で紹介するというものだ。

構想、構成に2年の月日を費やし、何度もプレゼンを行い、ようやく本社でならオッケーというゴーサインが出た、瑠璃にとってはライフワークと言ってもいいほどの仕事、らしい。

8月。

日向チームは明後日から企画第二回目の取材でシンガポールに赴くことになっている。チームと言っても同行するのはカメラマンひとり。そしてそのカメラマンは前回と同じ、颯土の同僚である織田と決まっていた。

その織田が昨日、急性虫垂炎で入院してしまったのだ。

取材のスケジュールは変更が出来ないため、瑠璃は織田のピンチヒッター役に颯土を選んだ。まだ赴任してきて日が浅い本社で、気心が知れているのは颯土しかいない、というのが瑠璃の言い分だった。

「明後日からですか...」

半ば、呆然としながら颯土は呟いた。

仕方のないこととはいえ、あまりにも急な話だ。しかも、自分はまだ見習いの立場であり、ピンで写真を撮る仕事などしたことがないし、瑠璃を「気心が知れている、相手と認識したことも無い。

「急で悪いとは思わよ。でも、織田くんが盲腸になったらどうしよう、なんて予想を立ててスケジュールを組んでなんかないもの。やっと始まったばかりの企画に穴を空けることもできないし。だから群竹くんだけが頼りなの」

「.....」

颯土はため息をひとつ吐いた。

通常ならこんな無謀な話は迷わず断る。だが今は――。

「なによ。あたしがこれだけ頼んでいるのに、そんなふうに...、」

「行きますよ」

「...深いため息を吐かなくていいじゃない！.....って、え？今、行かって言った？」

「俺でよければ...行きます」

ありがとう！と瑠璃は颯土の手を取り、早速渡航の準備に取り掛かかってちょうだい、と指示

を出した。

◇

スケジュールの調整にやや手間取り、颯土が帰宅したのはもう日付が変わる時間になってからだった。

玄関の扉を開ける前に毎日習慣のようにやってしまうことは、ヒカルの部屋を見上げることだ。いつもこの時間にはもう部屋の明かりは消えているが、この3日間はピンク色のカーテンが鮮やかに発色している。あかねのウェディングパーティーがあったのは、その3日前のことだった。

颯土は物音を立てないようにドアを開けた。

休んでいる母を起こさないための気遣いではない。隣家のヒカルに帰宅したことを悟られないための注意だ。自室にたどり着いてからも明かりはつけない。

ヒカルがビービー弾を飛ばしてこないように。

3日前、ウェディングパーティーがあった翌朝、ヒカルとその道の角で別れてから颯土は毎日こんな夜を過ごしていた。

あれからヒカルと響がどうしたのか、何をしたのか、あの日以来、ヒカルと会わないようにしている颯土には知る由も無い。

ただ、夜更かしが苦手なヒカルが、毎夜、夜中過ぎまで部屋に明かりを点けているのも、時々カーテンの隙間からこの部屋の明かりを期待して様子を伺っているのも、自分とコンタクトを取ろうとしているためだということは、長い付き合いによって察する気配から気がついてきた。

おそらくヒカルは、3日前の別れ際に自分が取った態度を気に病んでいるのだろう。あの時、一瞬で安堵から絶望に変わってしまった自分は、その感情をおもむろに表してしまっただろうから。毎日飛ばしあうビービー弾もそこから途絶え、だからヒカルは、当たり前の日常を取り戻そうとして自分の帰りを待っている。

だがもう、颯土にはこれまでと同じ自分でヒカルの笑顔や言葉を受け止める自信がなかった。ひと目顔を見てしまったら、声を聴いてしまえば、己の感情を抑えることは出来ないだろうと。

今も、体の芯がピンピンと音が鳴るほど響き、高ぶっている。

窓を開けて、ヒカルの名を大声で叫んで、2メートルの距離を飛び越えてしまいたい衝動が突き上げてくる。

――今なら、まだ…。

ヒカルを此処に繋ぎ止めてしまう方法がある。

でも、それをやってしまったら、ヒカルとの穏かな日々は永遠に失われてしまうだろう。

――永遠に...か。

颯土は、ハッと、自嘲的な笑いをこぼした。

どっちにしても、失われる日々だ。

ヒカルとのこれまでと同じ日常はもうない。

明かりを点けないまま、颯土はベッドに沈み込んだ。そして、沸騰するような感情を抑えるため、さらに暗闇を欲して目を閉じる。

だが、真っ暗な目の奥に、窓の向こうで輝く笑顔ばかりが浮かび上がってくる。

「仲良くなろうぜ祭り、を勝手に開催されていた高校時代の、まだあどけなかった幼い笑顔。

暇つぶしに消しゴムを投げつけてきた時の、ちょっとバツが悪そうな笑顔。

消しゴムがビービー弾に変わってからの、「親友、に対してナチュラルに微笑む顔。

時間の流れの中で自分に向けるヒカルの笑顔が色を変えてきたように、ヒカルに向き合う想いも自然に変化してきた。

鬱陶しく思っていたハツラツとした輝きはいつの間にか憧れに変わり、そして今、自分にとってはなくてはならないものへと。

とっくに気がついてたのに目を瞑っていた感情に、今になってこんなにもジタバタしている。

とにかく逃げ出したい。

まだ自分をコントロールできるうちに、ここから逃げてしまいたい。

「だから...、」

颯土はのそりと体を起こした。

真っ暗な部屋の中に射し込んでくるものは、向かいの窓の奥にある明かりだ。どんなに遠ざけようとしても、ヒカルがそこにいるその存在が、そのまま光になって自分の下へ届いてしまう。

だから、織田のピンチヒッターの話は今の颯土にとってはひとつの救いだった。たとえ急でも、無謀な仕事であったとしても、一時でもこの場所から逃げる口実になってくれる。

出発は明後日の早朝らしい。今夜と明日さえしのげば、わずかな間でも違う環境に逃げることで、この想いを沈めることが出来るかもしれない。その後は、もう二度と戻ることの出来ないヒカルとの日常を諦める覚悟が出来るかもしれない。

颯土は部屋のカーテンをそっと開いた。

と、同時にヒカルの部屋の明かりが消えた。

「ヒカル、ごめん...」

もう、ビービー弾を飛ばし合い、
窓を開けて『おはよう』『おやすみ』と言い合い、
休日に水月の珈琲を飲みに行き、
墨田公園をぶらぶら歩く、
`親友、という関係の自分とヒカルには戻れない。

これからの自分のポジションを確立するためにも、今は潰れてしまいそうなこの想いに整理をつけるための猶予が欲しい。

――だからしばらく会わないでいるよ...。

「...おやすみ、ヒカル...」

窓の向こうにそっとつぶやき、颯土はカーテンを閉じた。

了

きみにとどくまで 4 Adagio

<http://p.booklog.jp/book/78422>

著者：笹竹颯夜

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/souya610/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78422>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78422>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ